ぼくの中国だらけの旅　(1999～2019)

1999.　　初めての中国―北京・西安・桂林ツアー（兄、松間、もう一人）　　60歳

2001.6.13～9日間　　新疆シルクロードの旅(兄・松間・高ちゃん)莫高窟・天地・ウイグル　烏魯木斉・トルファン

2002.1.14から　　雲南の旅　昆明・大理・麗江・石林(兄・松間)

2002.3.29～8日間　　三峡下りと三国志の旅（グローバル企画　菊池さん、平岡さん）　　成都・重慶・武漢

2002.11.25　　黄山（通代・和香）杭州　　（グローバル企画）　李黎と知り合う。

2003.10.26　　上海水郷紀行（蘇州・周庄・西塘・ほか）

2003.11.1　　新天地徘徊と李黎とのメール交換記録

2004.3.2　　初めての長沙(1年間の日本語教師)　　64歳

4.3　　岳陽・洞庭湖

4.9　　張家界（武陵源）

4.13　　長沙市内烈士公園にてバーベキュー（学生と）　シャケンと知り合う

4.21　　株州市

4.24　　南岳

5.1～5　　（ゴールデンウィーク）杭州・紹興・寧波・普陀山

5.8～12　　成都・九寨溝・黄龍・峨眉山・楽山

5.16～26　　『ケイジの中原一人旅』鄭州から少林寺・白馬寺・西寧・華山～西安だらけの旅

5.28～30　　鳳凰の旅

6.1～4　　貴陽ひとりの旅（瀑布・鍾乳洞・）

6.5　　chen zou(1泊)

2005.10.17～9日間　　済南市から泰山～曲阜〈孔子廟〉～青島～労山～同理　　65歳

2006.9.7～10日間　　呼和浩特～包頭～

9012～14　　大同市～雲崗石窟から五台山

9.15～18　　北京から厦門～客家～コロンス島

2007.3　　義烏市・杭州・烏鎮　（鹿児島市日中友好協会視察旅行）

2009.11.21～10日間　　永留君と長沙市を中心に江西省を旅する。　　68歳

景徳鎮・南昌市・廬山・理工・三清山・黄興故居（範先生と）

2012.　江南古鎮

Youtube に UP した『中国からの旅』の動画・アルバム集

●新疆シルクロードの旅の動画（2001）下　https://www.youtube.com/watch?v=iny3X-_R6CV4

●麗江　https://www.youtube.com/watch?v=7KVgPIOu_gY　●雲南・石林　https://www.youtube.com/watch?v=vbLx9bcdsxs

●桂林　https://www.youtube.com/watch?v=h2zaxKlSn10　●同里　https://www.youtube.com/watch?v=gDEnDJ38OG0

●古鎮シリーズ（烏鎮）https://www.youtube.com/watch?v=csu7KMYGop4&t=57s●西塘https://www.youtube.com/watch?v=eWiqD1IfqK0

●岳陽・洞庭湖・普陀山の旅（2004）　https://www.youtube.com/watch?v=F_bNmydQeSc

●長沙日本語学校①　https://www.youtube.com/watch?v=Wt0w8IOwfnE

●長沙日本語教師の頃②https://www.youtube.com/watch?v=Ycl9v9WgYAg&t=91s

●武陵源(長沙)にのぼる（2004）https://www.youtube.com/watch?v=kJ_Kr4WPs-_Y　●張家界　https://www.youtube.com/watch?v=oSER6rMhjxg

●モンゴルの大草原を翔る　https://www.youtube.com/watch?v=07XUwDA1Ofo

●五台山は中国四大聖地のひとつ(文殊菩薩)（2006）https://www.youtube.com/watch?v=Hq6wxZIIXmQ

●九寨溝 https://www.youtube.com/watch?v=8pEsRw02BY8　峨眉山のお猿　https://www.youtube.com/watch?v=QcBpUA2PfiQ

●西湖・紹興・寧波・普陀山ゴールデンウイークに　https://www.youtube.com/watch?v=hEQ8WZX30y4

●鄭州から少林寺へ https://www.youtube.com/watch?v=97KkIa0Curw●　●華山　https://www.youtube.com/watch?v=zweKS1PaZoA

●楽山大仏　https://www.youtube.com/watch?v=J6iZeffXMTE　●青海湖の鳥島　https://www.youtube.com/watch?v=em3TUfd9Z_4

●黄興の故居を訪ねる　https://www.youtube.com/watch?v=ma2scrEFcy0&t=12s

●永留先生長沙富士橋日本語学校で「歌の教室」（2009）https://www.youtube.com/watch?v=v0XlOInXuxA

●長沙日本節【ジャパンウイーク】①（2009）　https://www.youtube.com/watch?v=SZS4O6l8_c0

●鹿女短ヤング踊り連・長沙に舞う。（2009）　https://www.youtube.com/watch?v=SZS4O6l8_c0

●長沙ジャパンウイーク②（2009）　https://www.youtube.com/watch?v=mTX0wcpPoZ8

●景徳鎮（焼き物の町）を訪れました。（2009）　https://www.youtube.com/watch?v=1IRSea86Ny8

●三清山（世界遺産）はすごい！（2009）　https://www.youtube.com/watch?v=lv20VLo9ILE&t=120s

●廬山は毛沢東や要人たちの避暑地(2009)　https://www.youtube.com/watch?v=ZKiXBq3JeqY

●理坑は中国でいちばん美しい村（2009）https://www.youtube.com/watch?v=6LboEyk0W_g

令和元年5月15日に縦書A42段の書式で完成しました。

―僕の中国ぶらり旅(1999年～2012年)の軌跡―

西暦2000年に母校玉龍の仲間たちと結成した『玉龍八期会』だが、その還暦の年に『還暦記念旅行―アメリカ西海岸の旅1週間』を催行した。

あれから間もなく20年目を迎えることになった。今年の5月、新しい年号『令和』になった。「時間過的全快ァ」である。この20年間の八期の集まり、同時に20回以上行ってきた八期仲間との旅行と、僕のプライベートな『中国ぶらり旅』は重なってくる。

1999年(平成11年兎年)に兄たちと中国ツアー(近畿日本ツーリスト)に行ったのが初めての中国だった。

還暦旅行(60歳)アメリカ西海岸の旅と、初めての中国の旅が重なる。そして、10年といくらかを中国をほぼ一人でツアーにはあまり参加しないで旅をした。

就労ビザですごした2004年を除いて旅の期間はビザ無しで滞在できる14日間を越えない旅をした。

20回くらいの旅の日記はその都度、協会HPや(ブログも)への投稿を通して書き残してきたけど

長い記憶の中で時系列に思い出せなくなってきたのが最近分かる。この20年間の「中国ぶらり旅」を年月日順にまとめてみることにする。

中国ぶらり旅（新疆シルクロードを辿る）　2001・6・13（10日間）

（主要訪問地）北京・西安・トルファン・ウルムチ・莫高窟・天地他

ぼくにとって「3度目の中国」ということになる新疆地方はこのあと3年後の2004年に長沙市で日本語教師をしていた5月に『中原ひとり旅』のタイトルで鄭州市の黄河河岸を皮切りに黄河に沿って、また、三国志の舞台をたどりながら10日間たどった旅の後半に「蘭州から西寧市そして青海湖の草原地帯の旅」と記憶の引き出しの中ではダブっている。

さて2001年6月13日～20日迄の8泊9日のシルクロードをたどる旅について記憶を紐解いていくことにしたい。

ぼくの実家（鹿児島市上本町―通称小坂通りー）は小さな酒屋さんをしていた。家の隣は「樹心寺」という東本願寺の寺院である。　そこのご住職が松間さんである。兄は古くからの麻雀仲間でもあり、年齢も近く(兄の方が5歳ほど年上)、そのせいか二人は仲が良い。父母の法要はいつも松間和尚の樹心寺である。今までに何度もある法要だけど、その際に、まともな「お説話」を聞いた記憶はない。

亡くなった父母の法事の度に、松間和尚が語るのは説教ではなく、（敦煌へ行きましょうよ）で始まる雑談だった（氏は2年前に病気で亡くなった）

1999年5月の頃と記憶しているが母か父かどちらかの法事の後にいつもの中国旅行の雑談になった。「まずいきなり敦煌はないでしょう」と兄、「中国は広いんだから、順序というものがあるでしょうが・・・」とぼくも同調して、まずは中国をひし形でポイントをたどると北京―西安―桂林―上海でしょう、ということになり丁度そのコースが企画されたツアーが近畿日本ツーリストにあったので便乗することに決まってしまった。

ということで、北京・西安・桂林・上海という実に欲張った旅が、「中国の旅」の始まりだった。

父が同盟通信社の新聞記者だったので、ぼくが生まれたのは京城（今のソウル）だった。多分3歳～6歳頃までは北京に住んでいた。初めての中国それが北京ということはぼくにとっては物心ついた幼少期の原風景に触れる大事な旅でもあった。こういう場合、北京は二度目というのだろうか？

この第1回目の中国の旅がその後の10年間に及ぶ「中国大陸地図塗りつぶし旅行」のきっかけになった。

今思うと1999年の「北京・西安・桂林・上海ツアー」と2000年5月に訪れ

た「昆明・大理・麗江・石林」雲南の旅はぼくの中国旅行の基礎だったと思う。出来ればあと1回「中国東北地方(満州)」の項を加えたかった。

それにしても中国の大きなマップ(地図)を俯瞰するとき最初の2度の旅行社企画のグループツアーの想い出効果は大きい。

今から書こうとしている『新疆シルクロード編』を含めて一緒に旅をした松間さんの顔が目の前に浮かんでくる。今は便利なものでネットの Youtube にアップした動画を通して松間さんの人なっこそうな顔が目の前に動いて見える。

その後に訪れた北京や西安(には4，5回訪問)上海などの観光地は最初に訪れた時の感動ほど記憶の中に鮮明には残っていない。この2年間に思い出すのは中国語会話の勉強である。

最初の2度の旅行中もカタコト中国語の本を買って少しは勉強したつもりだったが現地で喋ってみたもののほとんどが通じなかった。

そこで兄、松間さんの三人でお寺の2階の部屋で陳漫漫さんという若い中国人女子大生に週1回、四声を中心に学んだ。その後もラジオやテレビで講座を聴いて学んだ。

ほんの少し会話がカタコト出来るようになって、待ちに待ったシルクロードへの旅が実現した。

三度目の中国だった。まだまだ、単独旅行するには自信がないし、名所巡りはツアーの方が安上がりと思った。ただツアーの訪問地をよく見ると西安観光が行きと帰りに2日も入っていた。訪問する観光地も前回訪れたところと重複してた。「何処ドコドコは一日別行動します。食事もいりません。」と、旅行前に旅行社と掛け合って了解を得て申し込んだ。

上海の1日もフリーにしてもらった。

それでは、**記憶をたどりながら、シルクロード浪漫を紹介します。**

土地の説明など一部他のホームページより、拝借してるところもあります。

・・・・・・朝、福岡空港を発ち上海浦東空港経由で西安へ・・・・・・

昨夕、西安に着いた翌朝。ホテルで陳さんのご両親に会う。

初対面の挨拶を誰が言うのか、ひともんちゃく。結局、準備していた言葉も、ヤァやぁ、ニコニコ、ジェスチィアで済ませ、早速その夜は楽しみのマッサージをしてもらう。今回の旅には従兄の高幸くん（阿久根市）が加わった。兄と高幸、松間さんとぼくのツインに決まった。そして、さっそく飛び切りのルンルン小姐のお出ましに相部屋の松間和尚と顔を見合わせにっこり。そして、しばし夢心地・・・・・・・・そして、翌日。

西安から飛行機で約 1 時間半、敦煌の空港に着く。・・「暑い」・・聞いてはいたが、寂しい空港だ。といっても、何処の空港も似た感じだけどここは人が少ない。

敦煌は、昔から、中国から中央アジアへの繋ぎの地とされ、トルファン、ウルムチ、カシュガルへの出発点とされてきた。

ちなみに、シルクロードという名はドイツの地理学者リヒト・ホフマンが 1877 年の著書「中国」で始めて使ったと言われている。空港から街までは結構ある、バスで 2 時間以上かかる。

街は綺麗で、ロータリーの中央にシンボルの反弾琵琶を弾く天女の像が立っている。そういえば、中国西北航空の尾翼にも似たような飛天のマークがついていた。

太陽大酒店が私たちの宿である。これまた結構なホテルで満足。昼、4人で街をさまよっただけ。夕方といっても、こちらではまだまだ昼のうち。

待望の、**月の砂漠のモデル?鳴砂山・月牙泉**を訪れた。

初めて鳴沙山を見たときの感動は筆で表すことは出来ない。

観光客とラクダの大群と、客寄せの声がなかったら、もし、静寂の中でこの砂漠を見たら、感動は百倍といったら、中国風に言うな、といわれかねない。　それほどすばらしい光景だった。

松間氏はラクダの上で「月の砂漠」をどら声で唄っていた。

右手に手綱、左手にビデオで

「月の……砂漠を・・・・・・は・・る・・・ばると　・・・・・??のらくだは・・・・・行き・・ました・・・・・」、その後

「砂山のてっぺんから、夕焼けを見よう!」ということになり上の稜線伝いに砂山登

山が始まった。

最初のうちは、松間和尚は石原裕次郎の「錆びたナイフ」を口ずさんでいたが、だんだん、「す・なや・・・まの・・・・・・砂・・・・・を・・」あえぎなのか、唄なのか分からなくなってきた。

後ろから「カオリちゃん」（添乗員）に押してもらいながらの登山になった。　なかなか陽が沈まない、近くにいた中国人の学生たちが、あと１時間はかかりますヨ」との話で諦めた。

降りは直降下・砂すべりで降りた。女のくせに、カオリおてんば娘も加わった。おもしろかった。

１５元だった。

もろぶたのようなのに乗ってブレーキもなければ、勿論かじもとれない。途中、転びそうになったが、なんとか下まで降りた。僕の後にすべったカオリが一番上手だった。しゃくだったけどほめてあげた

らくだと月牙泉

月牙泉は、敦煌の町から約５キロぐらいの距離にある。

鳴沙山にはいるには関門があって切符を買って中に入る。東西４０キロ、南北２０キロの砂の世界が目の前にひろがる。

らくだに乗るにはコツがある。らくだは馬と違って初めは座っている。

まず、乗ってこぶをしっかりつかむ。ぬくもりが伝わってくる。思ったより小さいこぶだ。

らくだはまず後ろ足から立つ、従って、最初、身体を後ろにそっていた方がよい。前に倒していると、落ちてしまう。（と言われた）。１５元だった。

引き手のおばちゃんが「鈴を買え　千円　せんえん」とうるさい。多分これだけしか知らない日本語でわめく、といった感じである。

大きなマスクを買ったけど、変な匂いがしてはずした。記念にもって帰った。新品のソニーのデジカメ、サイバーショットが砂が入りそうでこわかったけど、「ここで写さず、どこで写す」と、バチバチやってたら、案の定、スィッチを消しても引っ込まなくなった。

「コリャ、ヤバイ」と思ったけど、そのうちに、直った。ホッとした

莫高窟は、敦煌の南東２０ｋの所にあり、鳴砂山と三危山の合流する断崖に約２キロにわたって、窟院が掘られている。

沖縄の守礼の門に似た門をくぐると、正面にでる。

崖には、幾十もの穴が掘られ、ひとつひとつの入り口には、アルミサッシがついている。

それぞれのドアには大理石の番号札がついている。

私達の案内人は、ガイドの董さんによれば、「運がよかったです。この方（小太りの女性）は有名な方で発掘関係の学術員の中でも幹部のかたで説明が上手でガイドの中で定評があります。」とのことでした。

名前は忘れたけど、確かに、説明には熱がこもっていた。もっとも、グループの熱意も高く、皆、学校の授業を聞く生徒のようで、メモをとる人、難しそうな質問を投げる人、・・・・びっくしたかの学術員は、あとで販売所迄ついて来て、土産品の説明にも、熱がこもっていた。

松間さんが、しきりに関心して、「中国はこういうところがスゴイよな、学者が売り子になるんだから。」といいながら、僕も松間さんも、飛天の掛け軸を買ってしまった。

前世紀末、前漢、西域貿易地として、シルクロードの隊商たちが旅の安全と、砂漠を渡れた感謝を込めて、この石窟に仏像や壁画を奉納したのだろうか。

一説によると、紀元前３６６年（日本の縄文時代）楽尊和尚が対岸の崖下に立ったとき、向かいの**三危山が黄金に輝き**何千もの仏の姿が見えたという。和尚はここを聖地と定め、窟を堀り、修行をしたのが始まりだという。

石窟の中は思ったより広く、（狭いのもあったが）ひとつの物語が壁画に描かれたものや、西域にいたる地図もあった。天井には、どの石窟にも20センチ四方ぐらいの仏の画像が描かれている。

1900年に地元の王という道士がここで塑像を彫ろうとして、タバコを一服しようとしたら、煙が壁の割れ目に吸い込まれていくのを見て、不思議に思い、壁を崩した所、そこから、膨大な文書が発見された、と言う。、もっとも、「…と言う。」という話は正確がどうか定かでない。

別な本では、（1900年5月26日、と日まで正確に、王道士が雇った男に写経をさせていた所煙草の吸殻をいつもの癖で洞窟の割れ目に差し込むと、何処までも入るので不思議に思いその壁を壊して見ると……云々。

・・・まァ似てるからどうでもいいか。

敦煌からトルファンへは、列車の旅だった。敦煌駅（と言うのか判らないが）とてもとても遠い所にある。

中国の広さをバスの中から実感した次第だ。

駅に着いてからも2時間位、待ちった。駅近くのお店（土産品店）で、売り子のシャウジョをからかったりして時間をつぶした。

やっと改札があり、ホームへ向かうころは暗くなっていた。

なかなかの室内で日本のコンパートメント寝台車といったところだろうか。

ホームに出たら、群青色の空に、黄色の月がかがやいていた。

余りの美しさに、しばし呆然・・・・・・（息を呑んでるところ）・・・・。

トルファンは新疆ウイグル自治区の東方に位置する。天山山脈の東がわにすり鉢状に落ち込んだトルファン盆地は、南北60キロ、東西120キロあり、昔から「火の州」ト呼ばれた程の灼熱の地である。

トルファンは中国で最も海抜の低い一帯で、盆地の底にあるアイディン湖は海抜－154mで、中東の死海に次いで世界で2番目の低さである。夏の平均気温は40℃を超え、夜になっても30℃をくだらない。一方、冬は－20度前後で、時には－40度を超える寒さである。

年間の降雨量はわずか16mmという、極度の乾燥地帯である。

ガイドの董さんの説明によると、敦煌の降雨量は「カラスのなみだ」で、トルファンは　「雀の涙」というらしい。

5世紀には、漢族の王朝である高昌国が築かれ、640年に唐に降伏するまで栄華を誇った。トルファン市街の南東45km、火焔山のすぐ南に位置するアスターナ古墳群からさらに4kmほど南に行くと周囲5kmという壮大な故城に着く。　**高昌故城**である。

499年に漢民族の趨文泰が興した高昌国の時代は、最も栄えた時代だった。

ここから校正する。

経典を求て天竺への旅を続けていた玄奘三蔵が、高昌王に懇願され、この地に滞在し、一ヶ月に渡って仏教の講義をしたことは余りにも有名である。

高昌王から、黄金100両と銀3万枚、馬30頭法服30具など20年分の旅費を与えられて天竺へと向かった玄奘だったが、10年後に帰国の報告をする為に立ち寄った時には、高昌国はすでに唐に滅ぼされた後。町はただ荒れ果てた無残な姿をさらしていただけだったという。

私たちが訪れた時は35度以上はあったと思う。猛暑で、写真のようなロバ馬車に乗って行った。

何と、肩から刺繍の袋バッグを20から30ぐらい下げた女の子（10歳～15歳ぐらいか）が馬車について走ってくる。

「5枚、せんえん。・・5枚、せんえん・・」とわめきながら。皆、なかなかの美人だ、一番年上の少女は特に日本語が上手い。ひとなつっこくて、それが手なの

か、商売も上手い。遺跡の見学、説明聞くどころじゃない。「アナタ、クニ、博多?ソレトモ名古屋?」ときたときには、一瞬、感動?してしまった。
結局、１０枚千円で、２０枚買った。相棒たちもつられて買った。全部で６０袋は買ったのかナ
私達の高昌国めぐりの思い出は**酷暑と物売り少女たちと刺繍袋だった。**

トルファンの街歩きは長距離バスターミナル前のバザールから、ということでいざ出発！
　古いビルを壊した後のような砂ぼこりの中を歩いていくと古びたモスク風の建物が現れる。　色とりどりの衣類や絨毯やウイグル族の帽子、カザフ族の刺繍などの店が続くでも何かおかしい　、「いつも見慣れた中国の屋台街とは何か違う」と思ったら、人の顔が中国の顔じゃない。
ウイグル人の顔を初めて見た。
こういう顔をイスラム系というのか、美男美女といえばそうとも言えるし、彫りの深い、目が魅力的、そんな感じですか。
しばらくの間、店に並んでいる品より、周囲の人の顔をビデオやデジカメにおさめるのに熱中した。
品揃えはバリ島のテンパザールのバザールに似てる感じカナ。違うと言えば干し葡萄を売ってる店が多いこと。
僕はハニ瓜なるものを買った。乾燥果物なんだろうが、甘くて美味しかった。

実は、日本に帰ってから判ったのだけど、ハニ瓜が原因であの後お腹をこわして、激しい腹痛と下痢に見舞われた。黄色い半乾燥のあんず、といった感じで、売り子のおじさんに試食を勧められて１個食べただけなので、まさか、これが原因とは、判らなかった。　干し葡萄を６袋とハニ瓜を２袋、ここで買って帰った。　店のスタッフに上げたところ、皆、気味悪がって食べないので、「これは、トルファン名物のハニ瓜といって、有名なものなんだよ。」と自分で１個食べて見せた。それでも誰も食べなかった。そして、
僕のお腹はあの時と同じ状態におちいったのである。

ついでに翌日のウルムチのバザールでのことをひとつ。
左の写真だけど、店員同士の喧嘩が始まった。自分の客を取ったの、とらなかったのが原因らしいが、このエリアはナイフや刀剣類が何軒も並んでいた。
最初は、取っ組み合いの喧嘩だったが、突然、上から下げて陳列してた。サーベルを抜いて相手に切りかかろうとした。二人とも激情してたので「ヤバイ！」と一瞬思ったが、後ろから誰かがパッと止めて惨事にならずに済んだ。　抜いた瞬間のチャリーンという金属音がしばらく耳に残った。

烏魯木斉

シルクロード天山北路に位置する「民族の十字路」

トルファンの街歩きは長距離バスターミナル前のバザールから、ということでいざ出発！
　古いビルを壊した後のような砂ぼこりの中を歩いていくと古びたモスク風の建物が現れる。
　色とりどりの衣類や絨毯やウイグル族の帽子、カザフ族の刺繍などの店が続くでも何かおかしい　、「いつも見慣れた中国の屋台街とは何か違う」と思ったら、人の顔が中国の顔じゃない。
ウイグル人の顔を初めて見た。こういう顔をイスラム系というのか、美男美女といえばそうとも言えるし、彫りの深い、目が魅力的、そんな感じですか。
しばらくの間、店に並んでいる品より、周囲の人の顔をビデオやデジカメにおさめるのに熱中した。品揃えはバリ島のテンパザールのバザールに似てる感じカナ。
違うと言えば干し葡萄を売ってる店が多いこと。僕はハニ瓜なるものを買った。乾燥果物なんだろうが、甘くて美味しかった。

実は、日本に帰ってから判ったのだけど、ハニ瓜が原因であの後お腹をこわして、激しい腹痛と下痢に見舞われた。黄色い半乾燥のあんず、といった感じで、売り子のおじさんに試食を勧められて１個食べただけなので、まさか、これが原因とは、判らなかった。　干し葡萄を６袋とハニ瓜を２袋、ここで買って帰った。　店のスタッフに上げたところ、皆、気味悪がって食べないので、「これは、トルファン名物のハニ瓜といって、有名なものなんだよ。」と自分で１個食べて見せた。それでも誰も食べなかった。そして、
僕のお腹はあの時と同じ状態におちいったのである。

ついでに翌日のウルムチのバザールでのことをひとつ。
左の写真だけど、店員同士の喧嘩が始まった。自分の客を取ったの、とらなかったのが原因らしいが、このエリアはナイフや刀剣類が何軒も並んでいた。最初は、取っ組み合いの喧嘩だったが、突然、上から下げて陳列してた。サーベルを抜いて相手に切りかかろうとした。二人とも激情してたので「ヤバイ!」と一瞬思ったが、後ろから誰かがパッと止めて惨事にならずに済んだ。抜いた瞬間のチャリーンという金属音がしばらく耳に残った。
夜のいろいろといえばワクワク話しと思われるかも知れませんが、実はその通りです。

一度はエキゾチックなローラン王国の美女にスキンシップを体験したいとの夢と憧れを抱いておりました。
カイドの董さんがニヤニヤしながら、「今夜、案内しましょうか?」
「ホント?」ということで、ワクワクドキドキ出かけました。
「まず、足つぼマッサージから始めましょう。」
「夕べも良子（中国の健全エステ）でしましたヨ」
と答える。
９時頃だろうか、葡萄棚の延々と続く床はカラータイルの道を董サンのあとを続く。「良子より少し落ちるけど、変な所では有ません」董さんが応える。
２０分ぐらい歩いただろうか、８階建ぐらいの建物に案内された。
「ここはホテルです」董さん。
もう、かなり　かなり薄暗い。董さんがいなければ、ゼッタイ行きたくないところ。恐さと好奇心が階段を押しゃる。
ドアを開ける。なんてことはない普通の現地人用マッサージ室１０台ほどベッドが並び５人ほど客がマッサージ中。
皆で靴下を脱いで足つぼをしてもらう、結構上手い。値段は良子の半額位、それでも、日本人料金だと思う。５０元（７５０円）
は高い。麗江の街のマッサージが９０分８０元だったから、
そんなものかも知れない。
「気に入らなかったら止めてもいいです」
足つぼマッサージが終わり、靴を履いてると、董さんのニヤニヤ顔があった。どうしょう。周りと顔を見回す。「まあ、見るだけ見て　みるか」案内された個室のドアを開ける。
ローラン王国の美女が６人ほど、我々の目と彼女らの目と一瞬ぶつかる。しばし、時間がとまる。・・・

のでした。
緑州賓館はトルファンーの高級ホテルでした。
ここのカラオケルームのほうがよほどよかった。
明日もウルムチでウイグル美女とスキンシップできるかも知れない。
そんな夢でも見ることにします。

天地天地

いつも旅に出る前は、しっかり予習をしてから出かけることにしているのだけど、今回のシルクロードの場合は何故か、行く先の観光地リサーチを殆どしなかった。その結果が昨日のペセグリク千仏洞のキャンセルだったりで後悔しきりである。

ウルムチの場合もしかり、可愛いガイドの馬さんの案内（といっても、一生懸命説明してるのだが、バスの中でもこの４人、何も聞いていない。４人だけの会話に熱中している。何の会話なら、そんなに夢中になるの？聞かれても返事に窮するのだが・・・・）バスがどんどん上に登っていく、スキーリフトみたいなのが見えてきて砂漠を過ぎてきたのが嘘のような
霧島の妙見を数倍高級にした、スケールのでかい観光地に来た。
　雪解け水のような渓流と言うか、川があり、河原には大きなレジャー用のテントがいくつか群落を形成し、しばらく登っていくとまた同じよう＿光景にぶつかる。てっきり、高級ハイカー達のレジャーだと思っていたが帰ってから本をみてたら：族の生活集落らしかった。まじめに馬さんの話を聞いてたら多分説明があったに違いない。
大きな湖に出た。初めてここが天地だと知った。
　具体的に説明すると、途中でバスは止めて、電気自動車（歩くのと大差ない、何故？）に幾らかお金を払って乗る。そして、天地に着くのである。
はるか（東西南北）のかなたに雪を戴いた天山山脈が尾根を連ねている。巨大な絵をみているようだ。

タダの記念写真ではつまらないので、変装（コスプレ）をして馬上写真を撮ることにした。僕はウイグル娘の衣装を着た。和尚に隣の健さんが「松間さん、立たないね」と訊いた、答えは「イヤダヨー」だった。
４人の中でサングラスをしたウイグルの首領に変身した松間先生が一番受けた。実は僕の写真にするか先生ののにするか迷った。
　ここで馬さんと写真を沢山撮った。天地をバックに良く映える被写体だった。
カオリ姫は何処に行ったのかナ。
イスラムのごちそうについてひとこと。
そろそろ、左に奇妙な魚が登場してきた。
なまずの仲間だろう。目と口をあけているので、とても食べる気にならない。
　よくよく話題の主になる松間先生がついに言った。
「わたしはもうイスラム料理は食べない。胃が受け付けないと言ってる。」
「弟さん、さっき、どこやらに寿司屋があるって、言ったよネ。そこへ行こう。馬さん　知らないだろうか？」
腕組みをしたまま料理を見ようともしなくなったのである。

寿司屋行きが決まったら皆もたべなくなった。
大体ツアーの時は、８人掛けのテーブルで、同席のときは年配の方が多いので我々４人がテーブルのほとんどを平らげる。　だから　４人が食べないと結構凄い光景になる。
おまけにイスラム料理の量の多いこと、皿が減らないから店の女たちも遠巻きにしたままお互い顔を見合わせている。

　なにやら調理場の方からは　次の料理が来てるらしい雰囲気。　歓迎してくれてるのか　こんな時に限ってメイドの数がやたら多い。
腕組みをしたまま、そっぽを向く先生。箸は持ってるがフリーズしたまま動かない健

さん。デジカメの何やらを始めた孝ちゃん、・・・現場から、お送りしています。

ウルムチの日本料理屋「平政」はなかなかの本格日本料理店だった。

馬さんに案内され、ウルムチの目抜き通りを歩くこと15分ぐらいで

平政に着いた。玄関入り口といい、よく外国であるジャパニーズレストランとは違い、ここなら美味いかも・・・そんな、予感を感じる店だった。

素敵なオカミ村山さんと楽しい会話の中で食べたすしも予想を裏切らなかった。

冷奴、焼き魚、納豆、刺身、味噌汁、すべてグーでした。

馬さんは「うどん」を食べた。・・・・満足のディナーでした

次は西安そして雲南へ

西安の町は上海と並んでいろいろな旅の中継点である。

西安の街は広い。鐘楼（チョンロウ）を中心に東西3．8ｋｍ、南北2．8ｋｍ、一周約14ｋｍ。旧市街なら、たいがい歩いて回れる。しかも、タクシーが中国一安い。余りいい車ではないが、安くて安全、たいていの所なら5元から10元の範囲でＯＫだ。

繁華街で一番賑やかなのは駅から南下する解放路と鐘楼を中心に東門へ抜ける東大街、南にむけての南大街も大きなデパートやショッピング街が連なるオシャレな通りだ。

キャッスルホテル（全日空系）に泊まると、南門城外の超広い公園広場から南門をくぐると、なかなか車が多くて渡りにくいロータリーがある。右に向かうと**古文化街**がある。なかなか面白いところだ。筆、印鑑、数珠、掛け軸骨とう品と古い時代の品が軒を連ねている。どんどん小道を歩いていくと、中国最古の博物館、**碑林（ペイリン）博物館**にでる。**陝西歴史博物館**はよくツアーコースに入っているが碑林は入ってない場合が多いらしい。

もともと**孔子廟**だったところで、漢代から清代までの３０００あまりの石碑が保存されており、拓本の販売もある。

とても美しく静かな庭園博物館で、どちらかといえば、こじんまりした感じだけど、きっと又来たくなる場所（僕自身の好みかもしれないけど）だ。横にある孔子の廟？は撮影禁止になっている。（知らずに写して怒られた）ご注意！

鐘楼の鐘を突いて見たい。・・・2年前の願いを果すべく、陳さんご両親に案内されて、鐘楼へ急いだ。

歩道から地下道をくぐっていくと切符売り場がある。今回は陳夫妻に奢られっ放しで申し訳ない。入場料金は分からなかった。

丁度時間がよかったのか古典音楽のライブ5人で演奏を見学できた。東西南北の各門をバックに記念写真やムービーを回した。そして、一人一人想いを込めて鐘を突いた。西安の街に鳴り響いたことだろう。いい気持ちだった。

実は今、（2,005 年 3 月）6 年前に行ったシルクロード浪漫と表題の付いた近畿日本ツーリストのツアーのホームページをリニューアル中である。　この旅の前にも一度、西安を訪れたことがある。

いわゆる西安の観光はその時殆んど済ませてあった。

その後は皆個人旅行だったので、行きたいところだけ出かけた。

このときはツアーの皆さんとは別に、鹿児島で知り合いの留学生・陳さんのご両親と行動を共にした。

それでも夕食の徳発長の名物ギョーザ料理は顔を合わせた。

われわれの夕食分もツアーに含まれていたので、ちょっとだけ、「シマッタ」と思ったけど。

西安の街は広い。鐘楼（チョンロウ）を中心に東西3．8ｋｍ、南北2．8ｋｍ、一周約14ｋｍ。旧市街なら、たいがい歩いて回れる。しかも、タクシーが中国一安い。余りいい車ではないが、安くて安全、たいていの所なら5元から10元の範囲でＯＫだ。

繁華街で一番賑やかなのは駅から南下する解放路と鐘楼を中心に東門へ抜ける東

大街、南にむけての南大街も大きなデパートやショッピング街が連なるオシャレな通りだ。

キャッスルホテル（全日空系）に泊まると、南門城外の超広い公園広場から南門をくぐると、なかなか車が多くて渡りにくいロータリーがある。右に向かうと**古文化街**がある。なかなか面白いところだ。

確か、この時は皇城飯店（日航系統）だったと思う。

筆、印鑑、数珠、掛け軸骨とう品と古い時代の品が軒を連ねている。どんどん小道を歩いていくと、中国最古の博物館、碑林（ペイリン）博物館にでる。陝西歴史博物館はよくツアーコースに入っているが碑林は入ってない場合が多いらしい。

もともと孔子廟だったところで、漢代から清代までの３０００あまりの石碑が保存されており、拓本の販売もある。

とても美しく静かな庭園博物館で、どちらかといえば、こじんまりした感じだけど、きっと又来たくなる場所（僕自身の好みかもしれないけど）だ。

横にある孔子の廟？は撮影禁止になっている。（知らずに写して怒られた）ご注意！

鐘楼の鐘を突いて見たい。・・・2年前の願いを果すべく、陳さんご両親に案内されて、鐘楼へ急いだ。

歩道から地下道をくぐっていくと切符売り場がある。今回は陳夫妻に奢られっ放しで申し訳ない。入場料金は分からなかった。

丁度時間がよかったのか古典音楽のライブ５人で演奏を見学できた。

西南北の各門をバックに記念写真やムービーを回した。そして、一人一人想いを込めて鐘を突いた。西安の街に鳴り響いたことだろう。いい気持ちだった。

写真は全てサムネイルです。お好きなのはクリックしてみてください。2枚目と3枚目は、香茶を買いに陳ご夫妻に連れて行ってもらった店で、店の小姐に一服また一服と・・計１０回ぐらいの試飲を楽しみました。

2年前は日本と同じかかとの高い底上げシューズでしたが、今はみなローシューズです。４番目は、東大街の路上スナップです。この日は、この路を4，5回往復しました。この付近から右へ、夕方になるとスケールの大きい、長い屋台街になります。安へ

掛け軸、印鑑、鳥かご、印肉、筆・・・みやげ物をご夫妻に選んでもらう。半日かかりいました。主に・古文化街で買いました。

すべてが極安・それはもうビックリねだんです。ちなみに、掛け軸、高いので１００００円、文字だけだと８００円ぐらい、友誼商店だと、おそらく、１万から2万だろうか？　筆も印も右に倣えでした。

大雁塔は、西安に残る最大の唐代の遺物である。

高さ６４メートルの塔は６４８年に高宗が亡き母のために建立した慈恩寺の中にある。

三蔵法師がインドから持ち帰った経典を保存する為に石と青レンガで作ったと言われている。

螺旋階段を上がると北側には西安の市内が見える。

下のほうには新羅の円測・窺基の舎利塔が見える。パリのエッフル塔のように、西安市内のどこからでもよく見える。まさに、シンボルと言える。

最初の西安訪問時に４人で、最上階まで登った。日本の城、長野の松本城や大阪城など、上に行くに従い段々狭くなっていく、あの体感はいずこも同じであった。

ただ、さすがに頂きより西の方を眺めると、果てしなく続く一直線の道路の地平線の遥かかなたはシルクロードへ続いているのか・・と、つかのま、感傷にに浸った。

西安路地裏物語

西安に行ったらツアーから離れて単独行動をとりたい、と旅行社側に申し込み段階で言って置いた。

大雁等～陝西博物館と市内タクシーに乗り単独ツアーは始まった。　未だまともな中国語は使ったこともなく、通じると思っていた多少銭（ドーシャオチェン）こ

れ幾らですか?も北京の朝の公園で売ってたパンを買うとき、言ってみたら、全く通用せずじまいで
、すっかり自信をなくしていた。
後で分かったのだが四声つまり中国語独特のイントネーションが全くなってなかった。 そんなわけでタクシーに乗ったはいいが行き先を到と去ををうまく発音できるか心配だった。
なんてことはなく通じたので喜んでいたけど、考えてみればタクシーだと地名さえ通じればあとは言わなくてもいいことがわかった。
　助手席に乗っててビデオムービーを右や左や向けながら時々後ろの仲間に声を掛けて、うるさい客だと思ったことだろう。夕方5時前に城外コースを終わり、ひとまず長城／全日空ホテルで服装を変え碑林から古文化街へ向かった。
安物と言ってもなかなか上等に見える筆をみやげに買ったり、博物館では玄奘三蔵の馬に乗った拓本を買う仲間もいて結構楽しい時を過ごした。
晩御飯はなるべくこちらの人たちが普段食べてるような所で食べてみよう、と路地裏を選んで歩いた。店前に大きな釜を出し、ゆげがモウモウと立ってる店があった。
　宮尾さんが「僕、こんなシーンテレビで見たことあります」ということで「よし、ここにするか。」と中に入ることにした。1時間ぐらい筆談まじえで、店の従業員に加え近所の店からもギャラリー会話の助っ人がきてもうムチャクチャなシチュエィションとなった。

　まあ出てくるものは、食べられさえ出来れば何でも良かったし、結構美味しかった。「ハオチー」を連発して店を出た。ちなみに料金は4人でビールを3本ほど飲み40元位だったような気がする。日本円で600円位かな。
疲れ果てて、部屋でマッサージをしてもらった。ミニスカートの可愛い女だった。気に入ったので次の日も頼んだ。
2500円だった。1時間たっぷり。
ホテルで頼むと、大体、こんな相場らしい
外ですると、1500円ぐらい。連れがコーヒー飲みに行ってて、ウッカリ外に出たら中からカギが掛かってしまい中へ40分ぐらい入れず、ユカタのままで30階位の中廊下から下を眺めていた。左端に見えるピアノから「北国の春」が悲しく聞こえてきた。遠くにボーイが見えたので、大きく手招きしたのだが、勘違いをしたのか、笑い顔で手を振って返した。悲しかった。

折角按摩でほぐれた中国ぶらり旅（雲南紀行）

2000年5月

麗江・天理・昆明・石林・桂林

雲南へ行こうと思い立ったのには三つの理由があった。
　まず，世界花博覧会が昆明という所(その頃は未だそんな程度の認識だった）であり・昆明は別名を春都と言われるぐらい美しい街だということ。二番目にNHKが五日間連続で雲南地方の特集番組を組んだこと，勿論VTRで数回見た。「よぅし、少数民族に逢いに行こう」と。最後に高校の仲間の新聞「八期通信」に上山絢子さんからの寄稿に「玉龍雪山」を読んで決まったと言ってよい。

　抜粋紹介しましょう・・・・訪れたのが玉龍雪山だった。雪をかぶった連峰が空から見ると龍の形をしている。前人未踏の最高峰は5994m。中腹の雲杉坪（3400m)までリフトで上がり近々と雪山を見た時，素晴らしさに息を呑んだ。そして、「私はこの山に呼ばれたのかもしれない」と思った。

街は五十年前の鹿児島を思い出すような感じで荷車をひいた驢馬や自転車・豚の親子と同じ道を観光バスは走った。・・・・・・・・・

白族が客人をもてなす際に供されるのが**三道茶**。苦味から始まり、甘味、軽くしびれるあじわいへと、三種類のお茶で一通りになっている。

すこぶる美人ぞろいで踊りの合間に我々に回ってきてお茶を振舞ってくれる、ニコッとほほえみながら、こちらもついニコッと返したくなる。　男も一緒に踊るが目はいかない。

下にいるペー族の衣装を着た女性は私たちのガイドで、名前は忘れた。ペー族にしては色が黒かった。けど、とても優しかった。

ペー族の部落があり、中の藍染の家、というより工場兼販売所に連れて行かれた。相棒の二人は娘や、奥様のみやげに、といって懸命に選んでいた。

現地のガイドをしてくれた小姐?さんが屑今を降りた近くにある自分の住んでいる部落を案内してくれた。狭いところに石造りの家がある。殆ど人は見かけなかった。

聞いたら田植えに行ってるとのことだった。月収は日本円で大体１０００円から３０００円位だそうだ。

納西古樂

ナシ族の伝統的な音楽を、古代の象形文字や神様の絵を施した内装の会場にて鑑賞できる。演奏は老トンパガヤクの角を持ってお経を唱えてのち、厳かに始まります。琵琶や低胡琴や、古代ペルシャの楽器、モンゴル族の弦楽器・蘇古篤（そくど）などを用い、独特の雰囲気をかもしだす。

僕と兄はガイドの小姐がなにやら、老トンパの親戚とかで、それこそ一番前の席で見させてもらった。右から二番目の楽師が亡き父・実るさんに似ていて、兄と「アレッこんな所に生まれ変わったんだろうか」と笑いながら語ることだった。ちなみに、老トンパは左から二番目の人。

兄はいたく気に入った様子だった。僕は少し眠たかったけど、何しろ。一番前だったので

楽師等と目が合うことしばしばで、我慢していた。目の保養になりそうな可愛い小姐の出番はなく殆どが年配だったことも原因してたかも知れない。

玉泉公園

１７３７年に造られた。橋の向こうに天気の良い日には雪をいただいた玉龍雪山がそびえ、それが湖面に映り、素晴らしい光景となる。

大理から麗江へはバスで行った。約３時間ぐらいだったか。こちらの田園風景と殆ど代わりがない。途中、田植えの光景に出会った。バスを止めると，気づいて、おばさんが手を振ってくれた。よくあるシーンなのだろう。走っているとどんどん高く上っていくのが分かる多分、標高３０００メートル近くだろう。桜島の３倍の高さと思うと驚く。でも、山の中腹のゴルフ場にでも行く途中のような気がしないでもない。

何回か部落（村）に出くわす。家々の造りで「アッ今雲南地方を走っているのだ」と思う。建物が専門の第一工大の田良島教ら。「部落の建物」をデジカメでせっせと写されていたにちがいない。

教授のためというわけではないが麗江の建物について言うと、当地は、木造建築を良く見かけた。

中国を毎年歩いていると建物の工事現場に良く出くわすが、殆どが鉄筋かブロックかまだレンガ造りにもお目にかかる。ところが、麗江では木造を良く見かけた。なぜかは分からない。１９９６年の大震災で木造家屋の方が壊れにくかったのかも知れない。

もっとも、麗江の街の歴史が、木造家屋と石畳で成り立っている。その昔、麗江を支配していた、木?と言う名前の人が、自分の名前が「木」だから街を城壁で囲むと「困」になってしまうので城壁も造らなかったらしい、それから考えると建物も木造を推奨したのかもしれない。ともかく、麗江の街が何故かしら、しっとり落ち着いて居心地がよいのは、**木造家屋・石畳・綺麗な水があふれるように流れてい**

る水路・暖かい気候・そのハーモニーが絶妙に旅人を和ませてくれるからではないか。まあ今流に言うと「癒しの街といったところか。

四方町

東大街をまっすぐ行き橋を渡ると、そこは世界文化遺産・四方街だ、納西族の部落が広がる。

二軒ほど、ガイドに案内してもらって、屋敷内を案内してもらった。こちらで言うと、知覧の武家屋敷で

住まいながら、観光客に開放している、と言った感じかもしれない。真ん中の写真もそうだが、住人が近所の

友達と麻雀に興じていた。私たちが覗いても、

殆ど無関心な所を見ると、日常茶飯事に見学されているのかもしれない

新華街と東大街は水路を挟んである。

半日ぐらいの滞在で、後はあちこちの観光地めぐりだった。出来ることならせめて、二、三日は逗留してこの付近に馴染んでみたいと心から思った。

今まで回ってきた中国のどの界隈にもない雰囲気をもった街だった。

例によって、松間和尚が真鋳のなべ釜・急須・

薬缶・箸もろもろに目がテンになって30分は値段の交渉にかかった。・　いつもの光景だが、これもまた私たちの旅の楽しみと言える。

生きた中国語会話の最高の現場なのかも知れない。

編集後記

２００２年1月１４日成人の日が過ぎてから大理・麗江紀行「雲南の春を行くはスタートしました。

1月１３日は近辺商店街の合同イベント「ゆめの市」がありそれのホームページ作り、そして又、１５日には新しい超低床電車「ユートラム」の出発式のホームページ作成。と続きとても忙しい1週間でした。

百枚以上のデジカメ写真と、ムービーからとったスチル写真をどう組み入れていくか、楽しみと苦しみの1週間でもありました。

出来れば、もっとゆっくり文章を打ち込みたかったのですが、毎度のことで写真の説明文で終わっています。フン切りの悪い文章で、そのうち形態を変えなければと思っています。例えば、文章をメモ書きして、その文章を打ち込み、修正しながら写真を選ぶ・・とか。

このあと、石林や昆明などを作って記録に残していきたいと思っています。

２００２・１・１９・　　おおいしけいじ

ちょうど石林の、今から公園の中に入ろうかと言う時でした。太陽の周りに円い虹が架かっているのです。

案内の高牧女史が「コレッテ、スゴーク珍しい現象なんですヨー」と大声で皆に教えてくれた。どういういいことがあるのかは聞きそこなったけど、あわててカメラを向けた。

結構綺麗に写っていた。

昆明市から１２０ｋｍ　車で約1時間３０分で石林に着く。ガイドをしてくれるのはサニ族の女性。

小石林区」と大石林区そして外石林区とある。

見渡す限りの岩峰はかなりの迫力で迫ってくる。

岩と岩との間をぬうように小道が続く。観光客の流れが切れ間なく続く。　言葉は中国語のようだけど聞きなれた中国語とは少し違う。台湾語か広東語かもしれない。

とても賑やかで、まるで、花見にでもきてるよう

最初はビックリしたけど人の目は不思議なもので段々慣れてくると、疲れだけが気

になって、素晴らしい筈の奇岩を見ていないのに気づく。
天を突くような、鋭くとがった剣が連なったような光景が延々と続く。
左の写真の岩を見たとき、一瞬、屋久島の宮之浦岳の頂上付近の岩を思い出した。
綺麗にスライスされた状態がとても似ていた。
どういう現象なのか分からないけど・・・・
・・と、考えながら歩いていたら、またまた同じような岩に出くわした。
ガイドに聞いてみたら蓮花峰とかで、いただきに
蓮の花のような巨岩が寝てるように見えるから名が付いているとのことだった。
約2億8000年前まで、ココは深い海の底だった。
海底の石灰岩層が海水や炭酸ガスによって侵食されさらに地殻変動によって露出したあと、長い時間をかけ風化していき鋭く尖った剣が無数に大地から突き出たような景観になったと考えられる。

昆明の街の風景

街の雰囲気、スケールは博多と言った感じ、とても綺麗な街である。中国特有の雰囲気が感じられない街である。舗道が実に良く整備されてる感じ、交通ルールも良く、信号でしっかり人が待っている、そんな当たり前の我々の感覚がそのまま通用している。
東風東路から東風西路の約5キロ四方の街なので徒歩とタクシーで回れる。
ホテルの外にあるテラスでコーヒーを飲んでいる僕ら。
昆明は年平均気温が15度と言う穏やかな気候に恵まれ、年間を通して花と緑が絶えないため「花の都」とも言われている。
昆明には今でも20以上もの少数民族が暮らしている。
14世紀ごろの元の時代に省都を大理から移って以来、雲南省の中心地として栄えている。
西南地方とも雲南とも又その昔紀元230年頃は蜀の国、あの劉備と諸葛孔明の地であった。
そのあたりをひとまず旅してきた。記憶に留めておく程度の旅といえる。
何時の日か、それほど遠くない頃必ず訪れるつもりである。そのときは、文の内容も、きっと変わっていることと思う。
固有名詞がいっぱい出てきてることと思う。物語が生まれ、路地裏の人々との会話が増えることを期待している。願わくば、可愛い小姐（シャゥジョ）の友達でも出来て、もしかしたら、友達以上の関係になっていたり・・・・
そんな夢を見ながら僕の雲南の春は終わる。

2002年1月23日　　おおいしけいじ

桂林の紀行記を書こうと思いながら何時までたっても、いっこうにキーボードを叩く気にならない。
何人かの人が「桂林の景色を撮ってきたのでしょう?何時載せるの?」と催促を受けた。
「ウゥ～ン。」返事にならない。　何を書いていいのか、正直なところ分らないのである。
・・・・・ということで、ページの公開が出来ない。
桂林での夜、見学に出掛けた「少数民族の舞台・パーク」は圧巻だった。
銅鑼や鐘、笛の中を歩きながら入口に入ると、そこは幻想的な別世界が広がった。
大袈裟でなく、あの夜の何時間かは、今思い出すと　ぼんやり、夢の中の出来事のような気がする。
あれから、中国で見聞きした珍しい民族音楽や演劇舞踊に接した中でも、桂林での「少数民族村」体験は夢のような思い出だ。
すばらしかったとか、感動した。とか・・・とは、別の何か、だった。
広場のセンターにそびえる城のような建物。一階はフロア（広場）になってた。
劇場では10いくつかの少数民族の部族による舞踊が可愛い小姐の、それはそれは

美しいハイトーンの中国語で語る司会で、つぎつぎと繰り広げられる。観客、ほとんどが漢民族と舞台の少数民族が一体となって、楽しい雰囲気に全体が包まれていた。
筋肉が又固まって行くような気がした。
―2019年3月13日　編集しました。79歳の春　大石

中国ぶらり旅（三峡を下る）

三国志の世界をたどる旅　　2002・3・29より8日間

（主要コース）成都・大足・重慶・三峡・ダム・武漢・上海・
2016・8・20改訂

青海チベット高原のタンダラ山脈に源を発し、全長6380キロの長江は、中国第一、世界第三位の長さを誇る大河です。
日本では明治以来『揚子江』の名で親しまれてきました。
重慶から武漢まで、上流から瞿塘峡・巫峡・西陵峡と続く全長189キロが三峡遊覧船のコースで、遊覧船は閻魔大王伝説が残る『鬼城』がある豊都、「三国志」に登場する張飛の霊廟、白帝城で知られる奉節をめぐります。
2009年完成予定のダム建設で三峡の景観の殆どが失われてしまうと言われています。

三峡ダムとは現在の葛州覇ダムの少し上流に185メートル幅2キロの堰堤を築いて洪水調整機能と1820万kwの発電能力を有する水力発電所を設置する世紀の大プロジェクトです。
　1820万キロとは日本の最新原発18基分に相当します。
三峡ダムが出来ることによりダム地点で水位が185m高くなり、この影響で600km上流の重慶市まで及ぶと言うことで当然のことながら途中の三峡の地点でも100～150m前後の水位上昇となって流れもなくなり峡谷美が失われることとなります。
　沿岸の人々120万人が立ち退き、多くの史跡も水没することとなり惜しまれます。
写真は撮影禁止になっていました従ってここに載せてある写真はdvムービーで撮影した（隠して）
ものを、スチルにしてあります。中国では禁止を犯すことにまだ共産軍のイメージが強く、没収されかねないので怖い所がある。実際は多分それほどでもない、と思うけど。カタコトの中国語は殆ど通じないので結局は筆談と相成った次第。小姐が英語が少し出来たので英。中・日三ヶ国語での料理の説明となり、それはそれで、結構楽しい時間でもあった。
18：31分やっと虹橋空港を離陸。
　さて、今回の旅のもう一つの楽しみは、実は2年前から留学生の陳小姐に習ってきた中国語会話がどの程度ネイティブな言葉として中国人に通じるか、ということでした。
　僕の記念すべき最初の会話は悲惨な結果に終わったのでありました。

帰らざる三峡の風景を旅する。
・・・・機中が少し寒くなりました。福岡～上海間は最初からとても立派な膝掛けが用意されてましたが、国内線にはなかったので、意を決して傍に来たスチュワデスに言いました「われ（我）欲す（要）膝掛け（毛布）」ウォ　ヤオ　マオジン！」
とてもよく理解した。そんな顔でスチュワデスの小姐（中国では若い女性のことは

容貌に関係なくこう呼ぶシャゥジョー!と）が去った。「成功！」とほっとしているところに小姐が持ってきたのは何と、３～４部の新聞であった。新聞は確かバオジィと言った筈だ！今更　ブヤオ!（要入らない）とも言えず。シェシェ（謝謝）と言ってしまった。

僕は膝をさすりながら、全然分らない中国語新聞をしばらく見続けるはめになった。隣の席にピーカン氏が居なかったのがせめての救いだった。

上海虹橋国際空港着　１３：３５（時差１時間なので航行時間は一時間三十分）

空港での待ち時間が２時間もあるので、近くの上海動物園にでも行こうということで、孫悟空のモデルになってる金色の猿を見に行った。入園料は１５元でした。

中国東方航空　５１８便

成　都

成都には何年も前から思い入れがあった。今回の旅も計画段階から三峡ツアーということで重慶からスタートしても良かったのだけど、成都をもっと知りたくて２日間の滞在を計画した。

中国国内を旅する場合、成都市は昆明・大理にも、そして西安にも列車で移動出来る。チベットのラサもここから飛び立つことになっている。近くには中国一の人気スポット九寨溝，黄龍があり、峨眉山がある。

そんな訳で楽しみにしていた街である。

人口１億３千万人を抱える四川省の省都である。古来より天府の国と呼ばれてきた。

又、古代から巴（今の重慶）の国と蜀の国に分かれていた。

益州（今の四川省）の劉璋（りゅうしょう）を攻めた蜀の国の劉備が蜀漢を建国し、天下三分の計の一つとして名軍師・諸葛孔明と共に中国統一を目指したのは、今から１８００年も前のことであった。

今，成都は市街地人口３００万の大都市である。　イメージとして抱いていた空はどんよりとし花曇りのような状態で太陽は見えないけど、その代わり街は緑あふれる、歴史のまち、そんなイメージだったが、実際はとは違っていた。街中、地震の跡のように瓦礫がいっぱいなのに驚いた。

市街地全体がスクラップ　and　ビルドの最中なのだ。一瞬、「黄砂がここまできてるんだ。」と、思ってしまった。旅人としては悪い時に来た。と言うのが実感だった。

武漢にもあったけど毛沢東のデカイ

銅像が公園の中心に建っていた。文革後、殆ど取り壊され残っているのが珍しいそうだ。

明日は朝から成都の北約４０キロのところにある博物館。三星堆博物館に行くことになっている。

予定としては、武候祠や杜甫草堂にも行くことになっているが、望江楼と竹子公園の竹も見たいし、百花潭公園の蘭も時間があれば行って見たいところである。

ツアーと別行動をとってピーカン氏と二人なら、タクシーを使えば何とかなるかも知れない。

今夜は旅の楽しみの按摩でも・・・とピーカン氏と意が通じた。

早速、５楼の花園（エレベーターの中のカラー案内で見ていた）へ行ってみた。

飛びっきりの小姐按摩たちがニッコリ迎えてくれた。部屋にも来てくれる

（何とか通じた）と言うので「１１時にシィ　イィ　ディェンジョン　リャンガァ　二人来て」と言って部屋の戻った。

そもそも僕が本格的に中国語会話を勉強しょうと思い立ったのは実は按摩がきっかけだった。

中国を旅したことのある人はもうご承知の通りツアーから離れない限り、周囲は日本なのだ。
中国人ガイドに始まって、行く先々のみやげ店から昼、晩のレストランまでかかりの給仕が流暢は日本語を話してくる。勿論、営業のためである。
初めての中国の時、僕は２０ぐらいの基本的中国会話文を必死で暗記した。そして初めてネイティブ相手に発した言葉は多少銭ドーシャオチェン「これ幾らですか?」だった。
見事に無視されたのだ、北京で早朝に友人二人で公園に太極拳をしに行った時に、露店で売っていたパンを買った時だった。
声が前に出ず四声も全く無視した発音だったのである。
次の旅の時は　ＮＨＫテレビ中国語を数回見て　四声を少し学んだ。
例によってツアーグループと円いテーブルを囲んでの夕食の時だった。
そろそろ最初のビールがなくなる頃、僕は給仕娘に声をかけた。「シャウジェ！」
今度は声が前に出た。
小姐が笑顔で来る。すかさず次のフレーズが出る「ザイ　イービン　ビィジョウ！！」（ビールをもう一本持ってきて！）小姐が短く何か喋る
、この時は大体「ビールは何ビールにしますか?」と銘柄を訊いているのだ。
分った顔ですぐ答えるとよい「チンタオ!青島ビールください。」時にあるケースとして、このあと小姐が
「・・・

・・・・・僕が会話の勉強を始めた最大の理由は按摩をしながら小姐と会話を愉しむことだったのである。

初めの頃に、やりとりしたメモの公開（先頃、鈴木宗男と外務省で話題になったが）してみると、面白い文字が結構残っている。

「君世界一美女　君傾国美人　君値億万円　我独身　年四十。」〔君年齢？〕

「我熱愛汝　我欲汝現在」すかさず小姐が書き返す。

「恁是一只大色狼！！　」たまには英語の文も混じる。

「Don't be afraid・I am not a wolf・I am gentleman」

さて、話は成都喜来登（シェラトン）飯店の1803号室へ戻る。

11時が2分も過ぎないうちにドアのチャイムが鳴った。

按摩中の写真は差し控えさせてもらうけど2人ともなかなかの美人娘だった。

僕の会話はかなり上達しているのか横で一緒にして貰っていたピーカン氏が「聞いてると中国人同士で話してるみたいだよ」といってくれた。

嬉しかった。けど、ヒアリングに欠点がわかるだけに嬉しさ少々。

按摩はとても上手で、隣のピーカン氏は途中の段階でいびきが聞こえてきた。

そのうち、僕の意識も朦朧としてきた。

このまま二人とも眠ったら大変なので、習ってる限りの中文を思い出しては口に出して、通じるか試した。

「ジンティエン　ウォ　ヘン　レイラ（今日はとても疲れたヨ）

「スィジャ～ラ！！（眠い　眠いヨ）」

「イィ　チィ　チュイ　スィジャ～ラ！！（一緒に眠りたいなぁ～）」

小姐が口を尖らせて「不　好　不　好　ブハォ　ブハォ（駄目　駄目）」と答えたのでしっかり通じていたようだ。

こうして、僕の生きた中国語会話第一日目は終わった。

三星堆博物館

広漢市の郊外に昔から3つの巨大黄土堆があり、三星堆と地元で呼ばれていた。

1986年、ここから約3000年前の祭祀跡が発見され、青銅器、玉石器、金製品

象牙など、千点以上の文物が出土した。

縦目の**青銅器仮面に代表**される様式は、漢民族と系統を異にする古代少数民族がこの地で独自の高度文明の花を咲かせていたことが証明された。

この一風変わった造形の青銅器は古蜀国の政権構造や社会形態を物語るものとして注目を集めた。三星堆の出土文物は万物には霊が宿ると信じた古蜀国の人々の精神世界と、豊かな世界観を現代人に静かに語りかけている。

武候祠　と三国志（蜀）

関羽は張飛と共に三国志に於けるヒーローである。

西暦200年、劉備が曹操の攻撃を受け，袁紹を頼って落ち延びた時、下ヒの守りを任されていた関羽は、そのため曹操軍に降伏したけど、曹操は関羽を丁重に迎えいれ、「私と共に行動しないか？」と申しいれたが、劉備との「義」を重んじて、これを断った。その上で、曹操と共に白馬の戦いに出陣し、顔良（袁紹軍の大将）を斬り、曹操への「義」を果たして劉備のもとへ帰った。

ここから生まれた「義の人」関羽のイメージが、のちに小説や戯曲によって中国人の人気を集め、神として祀られることになる。

211年、要請を受けて、蜀に向かった劉備は四年後成都の制圧に成功するが、魏・呉・蜀三国の係争の地・荊州を、関羽は一人で守りぬいた。

張飛とともに「兵一万に相当する」と称されたが、陳寿が「剛勇にすぎて人を見下し、身の破滅を招いた」と評したごとく、魏・呉側に性格的短所を突かれて、墓穴をほった。

最後は魏の司馬い、呉の呂蒙、陸遜らの策謀によって、息子関平ともども捕らえられ殺された。

一方の張飛は、「暴にして恩なし」と陳寿に評されたごとく、221年、関羽の仇を討つべく呉討抜軍が出撃する間際、部下の張達らに寝首をかかれた。

眼が大きかったので閉じて眠っているのに、未だ開いていて、張達が己の行動を「詫びた」ら返事が無い。よく見たら眠っていた。・・と

ガイドの蔡さんがマイクでしゃべっていた。

武候祠の一番奥まったばしょにある 孔明殿、諸葛孔明像は高さ2メートル

ここは「静遠堂」とも呼ばれている。 右の像は孔明の子

文字は郭沫若の筆

成都市内の武候大街にある。西晋末年，成漢李雄が三国時代の蜀の名宰相諸葛孔明を記念して建てたもの。

唐代にはすでに名所旧跡として広く知られていた。明代初期の改築の際、劉備を祭る「漢昭烈廟の中に移され、君臣二人を一緒に祭る祠となった。

三絶碑と呼ばれる唐碑は特に有名。

武候祠の構成は、大門をはいって第二門までの空間が「柏森森」の森である。

林の間をまっすぐ行くと、第二門があり、**第二の空間**ななっている。

正面に劉備をまつる劉備殿がある。その左右は廻廊になっている。

劉備と「桃園結義」

字は玄徳、年二十七歳、州郡の城に出て，有士募集の高札を見た。

長歎して去ろうとすると、後ろから大声で声をかけた者がある。 その人、身の丈八尺、豹頭環眼、燕頑虎鬚、すなわち張飛である、字は翼徳。次いで関羽、字は雲長があらわれる。身の丈、九尺五寸、鬚の長さ一尺八寸、丹鳳の眼、臥蚕の眉。

ここで、互いに義兄弟になろうと言い合うが、飛飛の提案であす桃園で行おうということになった。

飛曰く、吾荘ノ後ニ桃園アリ 花ヒラキテ正ニ盛リナリ、明日 、マサニ園中ニ於イテ天地ニ祭告シ、我ガ三人、結ンデ兄弟ト為ルベシ。

互いに姓を異にするが、兄弟になった以上は、同心協力、救困扶危しょう。同年同月同日に生まれなかったことを、いま望んでも仕方がない。しかし同年同月同日に死のう」と誓い合った。

こうして、三国志物語の三人の主役は誕生した。

三国志の物語は魏の国の曹操とその係累（敢えて部下としないのは曹操死後も魏は続く）、呉の国の孫権とその係累、そして蜀の国の劉備・諸葛孔明とその仲間達、それぞれの登場人物たちの魅力と、三つの国がそれぞれに知恵を絞って、生き残りの競争に鎬をけずる物語である。

我々は日本の作家の解釈で読むわけだけど、その下敷きになっているのは「三国志演義」なのである。いくつかのハイライト・シーンもさることながら作家の主観でとらえた登場人物に我々読者も贔屓や嫌いが生じるのは止む得ないことではある。

僕は次々と登場しては消えていく多くの英傑の中で、異民族の血を引いた騎馬の長・馬超（176～222）字・孟起にとても惹かれるものがある。

涼州（今の敦煌を中心とした砂漠地帯）の錦馬超のストーリーは、ときに三国志の世界とは別の世界にいるような壮大な気持ちになるのである。

西域という、からっとした大地が舞台のせいか、それとも、主人公が権謀術数の世界から、かけ離れた乾燥した?性格から来るからなのか分らないが、馬超はぼくにとって、胸のスカットとする豪傑なのである。

絡みの相手漢中の五斗米道の張衛も同じく好きなキャラクターだ。

・・・

・・・

出師　未ダカタザル二身先ズ死シ
長二　英雄ヲシテ涙　襟二満タシム

出来れば、あと2ヶ所ほど廻りたいところがあった。、特に望高楼公園の竹公園は是非見たいところだったけど、あいにく「道路が混んでいて、時間がかかる。」との運転手の弁でとりやめた。

「この運転手、もしかして、成都をよく知らないんじゃない。」「同じ所を何回も廻っているよ」記憶力抜群のピーカン氏が言った。時計はやがて5時をさそうとしていた

とりあえずホテルに帰ってゆっくりしてから）皆で夕食に行きましょう。ということになった。

ピーカン氏と話して「そうだ、昨日の彼女たちと成都の街を案内してもらい、夕食でもご馳走して、そのあと、カラオケなどゼンモヤン!(如何なもんだろう）」僕が携帯で話をする。ということになった。幸いケイタイ番号は昨夜訊いていた。・・・・通じるだろうか？　初めての電話会話・・・教材で習った時もっとしっかり勉強しておくのだった。確か「ウェイ!（もしもし）」で始まるんだっけ・・・・（つぶやき）１８０３号室の電話の前でしばしシュミレーションにふける。そして静かに受話器をとった。

旅低貢　蛎　弌純　宅?

ウェイ　ニシィ　チン　シャウジェ　マ　ウォ　シィ　ダァシィ。　ドン　ラ　。　ツォン　リベン　ライダ。　ニィ　ヨゥ　シィジェン　マ。

面倒なので後はヘンな翻訳できます。

「ジンティエン　ワンシャン　ヨウ　コン　マ?(今夜、暇ないの?）」　ウォ　シャン　チン　ニ　ジャオ　チィ　ジェ　コゥ　イィマ?　（よければ、今夜、成都の街、案内して欲しいんだけど。）

イチィ　チィハン　チュイ　ゼンモヤン!

一起　?飯　去　???(正式には・・奕　担　劔　)と書く。

ウォ　チン　クォ・・（僕がおごるよ。）　我　?　客

・・・・・　とても、とても長い電話だった・・・・・。

僕の貧しいヒャリングの力によれば、陳　小姐の応えは次のようなことだった。

「アラ!!　ゴメンナサイ。ワタシモ　トテモ　トテモ　イキタイ　アナタタチワタシ　ダイ

スキ　デモ　（真　遺憾!!ジェン　イーハン）トテモ　ザンネン　アリマス。

コンバン　ヤクソク　アリマス　パパ　ト　ショクジ　スル　コトワレナイ（僕が断れ、

大事な用が出来た。と言え、と言った）　ホーティエン（あさって）アタシ　ヒマアリマス

（バカヤロー!!あさってはは川の上だぞ。）　イーハン!　イーハン!!」

いつの間にか、横に来ていたピーカン氏がニコニコ笑いながら言った。

「なんチよ・・、イーハンって、麻雀をしたいって、と言ってるの?」

かくて、予定が外れてしまったピーカン氏は夕食まで「僕はネルョ」と言ったか言わないうちにもう、いびきをかいていた。

僕はひとり、夕食までの1時間ほど、成都の街の散策に出かけた。

僕等のホテル天府喜来登酒店（成都シェラトンホテル）は成都市のまさにど真ん中、人民中路の一段・市体育中心の横にある。

道幅が広いので大きな歩道橋をわたりデパートの多い在春照路をぶらつき、ほどなく行くと太平洋百貨が目に入った。

以前、どなたかのホームページで、ここの玩具コーナーにとても怪しい（面白い、と言った程度の意味です。）玩具が沢山あった。と書いてあったのを思い出したので、行ってみることにした。エスカレーターで一楼から5楼（階のこと）まで、つぶさに見たつもりだが見つからなかった。

玩具という単語が中国語でどうしても考え付かず（はっきり言えば知らなかった）訊くことが出来なかった。

Tシャツで出てきてしまったので、いつも離さない筆記具もなく、果たさずにデパートを出た。

彼女は豆腐を作って売っていたが、簡単な惣菜も売っていた。当時、成都の街の　労働者は、昼時になると、麻婆の店で

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・そして、夜になり晩餐会と相成った。・・・・・・・・・

どこのレストランで食事をしたのか、何故か?覚えていない。　多分、「陳麻婆豆腐本店（ホテルのすぐ近くにあるのだが）」に彼女らと行けなかったのが、悔やまれたからだろう。

結局、この夜は皆さんと一緒に麻婆豆腐の唐辛子にヒィヒィ汗をかきながらそれでも結構楽しい、笑い、笑いの晩餐会でありました。

添乗員のFさんが出される毎に一品一品、菜（中国語で料理のこと）を説明してくれ、一同、頷きながらも、最初の箸つけは、勇気のいることです。

いつのまにか趣向が分かれてきて、グループ化するのは不思議なものです。Fさんは一年ほど北京に留学滞在の経験があるとかで、日常会話はもうチャイナピープルでした。

かくして、2日目の夜はカラオケで日中交換が出来ず、密かに練習してきた「昴」も「北国の春」もおくらでした。

現地テレビを観ながらの静かな夜が更けていきました。

2日間の短い成都だった。多分又、近い未来、この街を訪れると思う。

この街を離れる前に現地ガイドの蔡サンが説明してくれた成都の関連コメントをメモから思い出し書きしてみよう。

なかにはオンボロバスの揺れがひどく。キーワード1個、やっとメモれたのもあり読み返してみても判別困難なのもけっこうあった。

●この街の人々は芙蓉の花がトテモ好きで、7月に満開になる。城を蓉城と呼ぶ。

●本当はシルクはこの街でとれる。西安に集められて加工され、西国に運ばれて行った。だから昔からこの成都の街を別名　錦市（シルクの町）と呼んでいた。

●中国の漢方薬の70％は四川省でとれる。周囲をやまで囲まれているから、又、漢方薬専門の大学が五つもある。

●1890年ごろ、この町の安順橋のそばに，姓は陳、愛称が麻婆（あばたのお婆さん　という意味）というあだなの婆さんが住んでいた。

昼飯を食った。その婆さんが発明した豆腐料理は美味しく評判になり、ごく自然に「麻婆豆腐」と呼ばれるようになった。

大　足

窓からまぶしい陽が差し込んでいた。

「蜀犬、　日に吠ゆ」のことわざが浮かんだ。いい天気だった。

四川の犬は、太陽を見て吠えるんだそうだ。生まれてから、地球のすべてが曇天であると信じて生涯を終える。まれに雲間から太陽がのぞくと怪しんで、吠えるというらしい。

司馬氏の「街道をゆく」によれば、・・・・・すでに唐の中期の文章家「韓愈（768～824）が使っていることを知った。

見聞や見識のせまい者が優れた言行に接したとき、それが理解できず、疑って怪しみ、攻撃することをいう。韓愈は蜀に来たことがなかった。彼がそういう喩えを使っている以上、蜀の雲霧のはなはだしさが、知識としてひろく知られていたにちがいない。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「今回、唯一の世界遺産ですから」とFさんが力説してたが　個人的には仏像はあきあきしている。タイで、ジョグジャカルタで、敦煌で、シルクロードで、西安で観てきた。信心が足りないのか?。

大足の名の由来は、宝頂山の崖の池底にあるとい２ｍもの足跡から。釈迦が西方浄土に上る時に残したものとか。

石刻が全部で１３カ所あり、大仏湾の摩崖物が代表的。南宋の名僧、趙智鳳が１１７９年から約７０年を費やして完成させたと言われ、５００メートルに及ぶ岩壁に３１の石窟がある。

釈迦涅槃像（３１ｍ・上、写真）は有名。六道輪廻像や１０００本の手が彫られた千手観音、など仏教説話が系統的に造像されている。

ガイドの蔡さん(重慶市）の話だとこの寺は大乗仏教だそうだ。随分長い時間、大乗と小乗仏教についての説明があった。また、仏教と道教についての、違いなどを延々と語っていた。

はっきりと自信はないが、道教は、現世のうちに長生きしよう。そして、懸命に修行をすると、道士（坊）から仙人になれるのだそうだ　仙人になったら、空をとべ、海の上も歩ける。不老不死となり、死ぬことがなくなる。

・・・・・・・とかなんとか。

大乗・小乗の乗とは乗り物つまり「教え」のことだそうです。

小乗仏教とは「煩悩をなくす」ためには「出家」つまり、妻子、職業、身分すべてをを捨てて、修行の道に入らなければいけない。

（世捨て人になる）　人間は個人的な悟りに満足している小乗の修行の完成者を羅漢（らかん）といいこれは自覚というのだそです。

一方、大乗は他覚で菩薩になりそして死ぬと仏になる・・・チョット意味が不明。坊様に聞かないと・・・・・

ともかく

大乗仏教は「煩悩は持ったままで幸福になれる」という教えです。つまり、世俗の中で生活していながら幸福を得られる。さて、どのような方法でそれは得られるのか？

それは、「空」・・・・・こだわりを捨てること。と、「中道」を極めることである。

さて、それでは大乗仏教の根本精神である「中道」とは一体なんだろう。

ひろさちや氏の仏教百科から引用するとこうなります。

・・・・・・釈迦は入滅の直前、弟子たちに次のように遺言しています。

「わたしが亡くなったあと、あなたがたは自分自身を灯明として、わたしの教えた法（真理）を灯明として、怠らず精進しなさい」と。

これが、有名な　「自灯明・法灯明」・・・の遺言です。

釈迦の生前、釈迦がこの世照らす光明でした。しかし、釈迦の入滅後の暗闇の世界を歩くには、わたしたちには灯明が要ります。

その灯明が「自灯明・法灯明」なのです。釈迦の教えた真理（法）を灯明にするだけではなしに、自分自身を灯明にせよ。と遺言したのです。

換言すれば、それは、各自の「いい加減」を見つけなさい。ということです。

中道とは・・・・いい加減なのです。

中道は・・・・・ゆったりとした真理の大道です。

中道は・・・・・結果にこだわらない歩みです。

私達は悟りをめざして歩みますが、悟りそのものにこだわると、中道は歩めません　登山するのに、頂上にこだわってがむしゃらに登るのは中道ではありません。

本当の登山は、一歩一歩あたりの景色を楽しみつつ登る、登り方です。

仏道（中道）を歩むのも同じで、到達点（頂上）は忘れ去っていいのです。

こだわらずに一歩一歩楽しみながら登ること・・・・

それが大乗仏教の生き方です。

自分にふさわしい登り方、それが「中道の精神」だそうです。

２１世紀は「こころの時代」といわれている。自灯明とはまさに自分の「こころ」の持ち方が大切だといっているのだろう。

「中道」とは、普通と解釈してもいいのではないか？

「優れず、劣らず」「富裕すぎず、貧すぎず」早すぎでもなく、遅れるでもなく」

生きる、ということは、「がむしゃら」ではつまらない。

せっかく、この世に生を受けたのだから、「たのしみ」ながら生きようではないか。

まあ、こんな風に大乗仏教の根本精神を、自分の都合のいいように解釈したきらいがあるが、これも、年輪を重ねた今，言えることで、若いうちから、「目標、や結果など、こだわらずに、人生、いいかげんに生きるべし」では若者のフリーター志向を増長させるばかりのような気がする。

思うに・・・・中道とは「こころ」の持ち方であって、「自灯明」とは、自分の力で灯をつけて、暗闇（人生と言う荒波を）生きていくこと、他人に頼らないで生きなさい、と言っているのではないだろうか。

そして、その場合でも、それに１００％かけるのではなく、「こころ」はいつも、余裕をもちなさい、「きびしさ」も「たのしみ」に思えるように「いいかげん」の気持ちぐらいがいいんじゃないか、と、解釈すればどうだろう。

自分自身を、もっと、客観的に眺められるように、余裕を持って生きなさい。そんなことではないでしょうか。

僕としては、仏教のコトバや、お釈迦様の教え、そして、歴史上の有名な教祖たち（わが国も含め）の「教えや、遺した言葉」を自分流に解釈して、納得したり、反論したり、それはそれで、結構面白い。

そう思えばアジアの遺跡やお寺を訪れ、ガイドのうんちくを聞くのも、楽しいことである。最も、その場合こそ、「中道」の精神で聞くことを忘れてはならない。

成都～重慶市ノ間は約４００キロある。先ほど立ち寄ってきた大足は重慶市に入る。４００キロというと、鹿児島から九州を出て山口県まで走る距離である。高速を走るわけだが日本の高速とは訳が違う　まあ、信号が無いというのと、制限速度が１００キロを超えると言うぐらいで、快適性は保障出来ない。結構揺れる。冷房でも効かなかったら怖いものがある。

トイレ駐車のドライブインも充実してない。いきおいガソリンスタンド停車になる。

従ってトイレ事情が悪い。

僕らは大足を午後3時に発ち、高速にのった。予定では重慶（チョンチン）着は午後5時ぐらいである。

好事魔多しの譬えは当たった。交通事故に遭遇したのだ。

大型トラックが見事に反転していた。あたり一面布袋が散乱していた。大型のクレーン車が横にいたから、道路脇に運んだのだろう。何とか一車線だけは通れるようになるまで、およそ1時間は待っただろうか延々何キロの渋滞だったのか。まあ、1時間程度で「よかった。よかった」と蔡サンが言ってたから、まだ長い時間停車もあるのだろう。

トイレに行きたい人はどうするのだろう?・・・・ふと、想像してしまった。

重慶に来る前に抱いていたイメージがあった。

「地球の歩き方」他のガイド雑誌から受けたイメージでだったけど。それは、街としてはプラスのそれではなかった。

一つ、山城と別名される狭い、坂の街である。

一つ、人口１５００万人の中国一の人口密集地。

一つ、いつもどんよりしてて、空気が悪い

一つ、観光としてみるべき所がない。

一つ、自転車は殆ど無く、足としてはロープウェーである。

・・・・・確かに重慶は坂の街だった。

僕等の泊まるホテル・マリオット（万豪酒店）は重慶一の五つ星ホテルだそうだ。

しかし、部屋がそうなのであって、名物の火鍋はホテル・ホリデー・インがナンバーワンなのだそうだ。「今日はそこの火鍋が夕食です。」と蔡サンが自慢げに話していた。

時計はもう8時近くを指していた。

ホテルの前に「まず、夕食」ということになった。

途中の高速での事故のため予約時間が来てしまったのだろう。

「確かに火鍋は美味しかった。し、トテモ辛かった。特に真ん中の円筒の中は、辛さに弱い僕にとっては、もう絶対無理な味でした。それより、今夜の按摩(会話レッスン）はどうしょうか?時間があれば、夜の街の散策ウォーキングもしたいし、・・・そんなことを考えながら、名物の火鍋に舌鼓を打つことでした。

食事はナンバーワン「火鍋」

ホテル・ホリデーイン。

街歩きはピーカン氏と共に、私達の街づくりのための参考に必要なので、出来る限り二人で繁華街をブラつこう、というのが今回の目的のひとつでもありました。

いまのところは、今度の旅は何故かついていない感じです。

それでも、何とかホテルについたら、荷物だけ片付けて、F氏、K夫妻、ピーカン氏五人で街に出かけた。十時少し前だった。//これは正確である。

実は、中国の古典曲のCDを2，3枚買いたいと、思っていた。眠る前に聴くと、とても気持ちよく眠れる。アルファー波が出るのか、喜多郎のシルクロードより効果がある。

飛び込んだデパートに客が殆どいないので入り口の服務員に訊いてみた。あわてて時計を見たら10時前でした。

それにしても重慶の繁華街にはビックリした。

広い、綺麗、賑やか、華やか、落ち着き，楽しさのすべてを備えた街に見えた。

中央の十字路（シーズールゥコウ）の広さはどうだ。

南京路より広いんじゃないだろうか。

あちこちにモニュメントがあり路上にテーブルでは、若い女性たち、家族連れ、いろいろなグループが、この時間でもいっぱい居た。

特に道路幅の広さ、（ゆとりともとれる、）には天文館と比較して羨ましい限りだった。でも、もしかしたら、この感動は本物ではないのかも、と、今、冷静に思い出してみると感じてもいる。余りにも、先入観がマイナス側だったからじゃないだろうか?

思いのほか重慶の街は綺麗で賑やかな街だった。というのが本当かも知れない、しかし、街というのは、どうだろう?住んで楽しい街がいいのか?訪れたとき感動を与える街がいいのか、両方なのか?マァ、ゆっくり考えるとしても、この時間に（10時）この賑やかさは**やはり、尋常ではない。**

天文館は八時にはもう暗いソ。

「アンモア　ザイ　ナール　ジィ　ロウ?」(按摩は何処(何階）ですか?」

「チィロウ（7階）」と言ったようだった。

でも、どの案内板にもエレベーターは1～3階までで，8階（部屋）からしか書いてなかった。

目指す七階は一体、どこへ消えたのか。一瞬、??

魔法学校へのホームがなかなか見つからないハリーポッターの心境になっていた。

実は、全く別の建物(繋がってはいるけど）にあった。ドアを二つ開けて行くと目指すエレベーターはあった。　七階でエレベーターは止まった。

男の服務員（マネージャーのこと）は言った。

「200元　45分」「アァル　バィ　クァィ　スゥシィ　ウゥ　フェン」

僕は尋ねた「ファンジェン　クォウイィ　マ?　ドゥシャオ　チェン?」

部屋でお願い出来ますか?

そして、いくらですか?」とファンジェン　、ウゥバィ　クワィ（部屋は500元・8000日本円）

「何ッ!!按摩が8000円!!」今夜は会話レッスンは中止だ。

五つ星にしなければよかった。日本でも一緒である。冷蔵庫の中も、ミニバーも高級ホテルは高い。

タイ　グィ　ラ！！なのだ。・・・・重慶には名物（重慶火鍋）はあっても、みやげものがない。

人口1，５００万人を越す中国一の大都市に観光客の買って帰るみやげものがなにもない。もっとも、成都市にも名物（麻婆豆腐）はあってもみやげとしては、漢方薬しかない。

シェラトンホテルの広い玄関フロアにもルイビトンのショーフロアはあっても他は何も無い。大きなビジネス・チャンスが眠っている。

味の素のテレビ・コマーシャル、和田アキ子の麻婆豆腐の唄が聞こえてきた。

・・・そんな中、重慶で皆が買いたいものがあった。

ガイドの蔡サンが自慢していた井塩である。

井塩は成都と重慶の中間にある町自貢（ズーゴンの名産である。）　白酒と世界の三大恐竜博物館が有名だけど本当は井塩がもっと有名なのである。自貢ではすでに紀元前２５０年頃には塩の生産が行われていた。

井塩と呼ばれ、地中にある塩分を多量に含む石灰岩を掘り出し、精製するものだ。清の時代には年間３０万tという井塩を生産し、塩都とも呼ばれていた。現在でも生産量では全国の４０％を占めるそうである。

蔡さンが「トテモ美味しい。」と言うのと、石灰岩から精製する。という説明に惹かれ、皆密かに「出来れば買いたい。」と、思っていたらしい。誰かが「蔡さん。塩を買いたい。」**とバスの中で言ったから、突然、コーラスになった。**

「塩ダ，塩だ、・・・塩を、私しも・・塩ダ！！・」と。

食事が済んで９時が過ぎていた。

坂の途中のスーパーに案内してもらった。客は一組か、二組しかいなかった。

蔡さんがそこのマスターと何やら話していた。「塩は無いそうだ。皆、ガッカリしていた。

しばらく、他の品を見てるうち、店の店員が念願の塩を籠に入れて運んでいた。たちまち、レジに行列ができた。一個、１０元（１６５円）だそうだ。５個、７個と、買っていた。当然、僕も3個かった。安いので、もっと買いたかったが、重くなるので我慢した。ピーカン氏は買わなかった。

二人は早めに外へ出た。すると、何人かの女性が例の塩の入った手かごを走りながら向こうから来る所だった。

突然、ピーカン氏が「幾らで売ってるか、僕が見てくる。！」韋駄天のように女達の元店に走った。・・・・しばらくすると、彼が笑いながら、手に例の塩を3個持って帰ってきた。

「幾らだったと思うネ?.?」「・・・・・」「3元（４８日本円）だったヨ。」三倍ふっかけている。という原則はここでも証明された。

沢山買い込んだ皆さんには言えず、バスの後ろで、二人して大笑いだった。

長　江

三峡クルーズの旅は嘉陵江と長江の交わる朝天門の港から始まる。朝、８時、朝もやにけぶる港にバスは着いた。

僕等の乗る船は武漢市の通称『揚子江号」正式名　総統四号

President　Cruses　NO。４

ほぼ左の船に近い四つ星豪華客船である。

乗客・１４９名

アメリカ・カナダ客　６５名・台湾客　７４名・日本人客　１０名

（本人は僕達だけ）船内は四階建になっている。

一楼　波機械、クルー・二楼（二階）は餐所（食道）・三楼(三階）は舞所（ホール）

四楼・は売店／美容・五楼　　デッキ(展望室)

僕の船室３０３号室から１０メートルも歩くと、三階楼の船首にある、この応接室兼喫茶室がある。結構広く２０畳（４０平米）ぐらいはある。

ここのドアを開けて外へ出ると、船首デッキ（イスが１５名分はある）に出る。

この写真は左が蔡さん。中がジョウさん。そして、にこやかに笑ってる小姐が宗丹（ソン　ダン）船上での愛称・**ジェニィー**（２０才）だ。

救命胴衣の扱い方を説明中である。ジェニーはこの船では一番の新米らしく、この場所専門だった。他の娘はあちこち

掛け持ちで滞在中いろいろなシチュエィションででくわすが、ジェニィとはここでしか会わなかった。僕の格好の中文会話の相手だった。

キャビンを紹介しょう。

６畳ぐらいといったところか。

日本のシティホテルのツィンといった感じである。勿論、シャワールームと言ってもトイレと同じキャビンにある。

お湯の出は申し分ない。

テレビもグッド。窓の外は長江がまさに動くパノラマである。

ときどき、人が通るけど、別に気にならない。いつでも眠れると言うのは、最高だ。さて、船では、毎日、その日の[船のスケデュール表]が配布される。

４月１日・一日目の予定は次のようになっている。

９：００　乗船

１０：３０　ホールにて手で絵を描くショー（掛け軸用の）　営業販売では？

１２：００　昼食

３：００　豊都（鬼城）見学。　２時間かかる。

６：３０　ホールにて、船長とカクテルパーティ。

７：００　夕食（２楼）

８：３０　ショータイム・カラオケ・最後はダンスパーティ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・以上が公式・・・・・・・・・・・・

こちらのオプションとしては、１０：００から４楼にて足つぼマッサージを予約。

１：３０から２：３０までをピーカン氏と話して、お昼寝タイムとした。

（何故だろう?船の BGM から、森　進一の「港町ブルース」が流れていた。）

豊　都

三峡ツアーで最初に着く観光地は、ここ、豊都、別名を鬼城という、NHK の特集番組で、何だかチャチっぽいテーマパーク?だな、と思っていた。

船着場からバスに乗って名山公園に着く。そこから、結構、長いリフトに乗る。降りると眼下に豊都の街と長江がパノラマのように広がる。

豊都の街は古いけど、何やらトテモ歴史を感じさせる街に感じた。そして、リフトに乗って鬼城に上がり、眼下に広がる豊都

の街を眺めた。一瞬、２年前、雑誌「ニュートン」の緊急大特集・帰らざる三峡４月号８９ページの写真を思い出した。

残されたビルや家屋もやがて湖底に沈む。

・・・三峡ダムの完成で、鬼城のすぐ下まで水面はせまるとされている。それによって、川岸の街は完全に水没してしまう。

三峡ダムでできる巨大ダム湖によって、１１３万人もの人々が移転をせまられる。移転は始まっており、すでにゴーストタウン化した街もあるという。

残されたビルや家屋は、やがて湖底に沈むことになる。

『１１３万人と言う数字は通常の貯水水位（標高１７５メートル）の場合である。

完成後、土砂の堆積などで、さらに上昇すると、新たな移転が始まる。
その結果、移転者はのべ１７０万人から１８０万人にまで増える可能性がある。
（新潟大学教授・鷲見一夫）

鬼城ノリフト頂上より豊都の街を望む。
対岸の見えるビル街は出来上がりつつある新しい豊都の街。下に見える船は僕等の「揚子江４号」。来年はこの景色は消えて鬼城でスナップを一挙公開します。結構，楽しませるところがあります。皆、はしゃいでいる例によって販売が待っている。
なぜか皆地図売りである。長い歴史のこの街は今年で消えるこの橋を３歩で渡ると幸せになると言われている。

豊都の観光が終わって揚子江号に戻ると、残念なニュースが飛び込んできた。
三峡クルーズのビッグイベント「白帝城ツアー」中止が決まったらしい。
水位が低すぎて船が接岸出来ない。と言うことらしい。
『明日は８００段の石段を如何にしてクリアするか?四国の金毘羅さんは駈けて上がった位だから平気、平気。・・・でも、今、風邪気味だし、」と考えてたところだった。今夜はパーティで小姐たちと踊るか?ジェニィーでも誘っ。・・・・・・・
頭の切り替えに時間がかかった。

６時半に予定の船長主催のウェルカム・パーティは1時間おくれて7時半に始まった。
やはり、こういうパーティには西洋人は絵になるものである
伝統なのか?歴史なのか?
格好がいい。ファッションも我々アジア人とは違う。
お年のほうは皆、白髪で、アジアの方が若く見えるのに、この華やかさの違いは何なんだろう。一日目のディナーの風景です。僕の横の小姐は長　勤（チャン　ジン）と言う名前で僕たちの食事テーブルの係りです。
朝と昼は制服ですが、ディナーになると、まぶしいようなチャイナドレスに変身します。こんな時「馬子にも衣装は」当たりませんが視線が却って行けなく
なるのは何故でしょう。

本当は上から下までスローモーションでパン（専門用語でカメラがなめるように移動）したいのに・・・・
彼女に教えてもらった中国語単語は以下のようなものだった。
未だ僕のものになっていないけど、そのうち覚えることだろう。
食　巾　紙（紙ナフキン）　チャン　ジン　ジィー　chng　jīn　zhi
牙　禰　（妻ようじ）　ヤー　チャン　ya qian
弱　痔　軌　（目玉焼き）　ジェン　ジー　ダン　jian ji dan
後は料理が出る度に彼女の方からチャンジン　ジィーの上にガンビー（ボールペンで描いてくれた。
右のローマ字はピンインと言って、日本語で言えばフリカナみたいなものです。
更にその上に英語でいえばアクセント記号のような
四つのアクセント記号が付く（高く平らに伸ばす記号・急に高く上がる記号・ゆっくり低く抑える記号・高い所から急に下がる記号、）この四つを声調・四声という。
その記号を描けないので、お分かりにくい事だと思う。

一生のうち再び、踏むことの出来ない白帝城への石段を今夜は長江を下りながら制服姿の小（シャオ）長中国では、若い女性のことを姓で呼ぶとき、姓の前に、小の字をつけて呼ぶ自分でも、手紙の後など
に、小馬とか、小王とか書く。
読むときはシャオ・・・と呼ぶ。チャイナドレスのチャンこの日がバースデーだったカナダからの二人。
この写真は船から船へわたる時のステップです。

キャビンに

二日目の予定表が届いていた。早朝に白帝城に着く予定だったが・・・・。
それでも、二日目は三峡クルーズのハイライトだ。

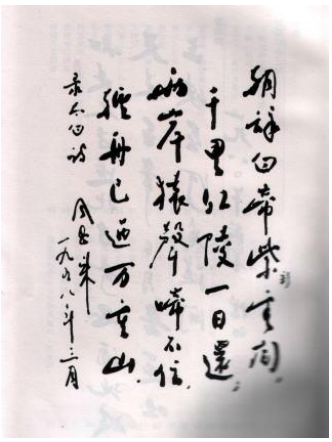
09：00	小木船漂流	**神農渓**
12：00	回船、総統遊船起航	
12:15	午後飯	二楼餐庁
14：00	進入第三峡谷ー西陵峡	
15：00	**三峡ダム工事現場見学、**150元毎人、	
18：00	歓送晩宴	二楼餐庁
20：00	聯歓晩会	三楼

早に白帝城を発す

李白

朝に辞す白帝彩雲の間、千里の江陵一日にして還る。
両岸の猿声啼いて住まざるに。　軽舟已に過ぐ万重の山。
揚子江総統四号甲板より西陵峡を望む。（船上を擬似体験し。）

蔡さんの説明によると、「舟をこいでる（引く方が多い）人は４人、他に舵取り、前で進行役など
合計１０人ぐらいで、一艘を担当してるそうだ。皆、土家族といい、少数民族だそうである。
ロープで舟を曳いて（底が浅いので）行く。結構、力がいる仕事である。
ロープは竹で編んで作るそうで「濡れてもすぐ乾き、かつ軽いんだ」そうだ。
赤い服の女性ガイドに彼等の報酬を訊いてみた。「大体、４０元から５０元ぐらいです。あたし
達も同じぐらい」との話だった。中国の平均的労働者報酬が月平均・３５０元から４００元
（日本円で６０００円程度）だとしたら、彼等の収入は倍ぐらいで、結構いい仕事じゃないか？
といったら、ピーカン氏曰く「実際に、
一ヶ月に働く日数は１０日から１５日ぐらいじゃないの？１５日掛ける４００元だと、６００元、
そんな所でしょう、か？」との計算をだしてくれた。商売人は常に、頭は計算機なんだ
、と感心した。
往復だいたい二時間かかる。とのこと、途中、絶壁の中ほどに石棺の置いた穴が見える。
蔡さんの説明が「あそこです。アレは違います。・・・」と結構、しっこい。聞く方がしっっこいのか、よく分らない
僕にすれば、どれでもいいって感じでした。
それより、水や眺めの方が感動。
ビックリしたのは終着点（？）の瀬に、例によって、露天みやげ物屋が３０店（机だけだが）は並んでいた。



ことだった。早速、会話のレッスンと好奇心
から、石ころ（川底の）を選び、数個５元で買った。
今、店の金魚ケースの底にある。ピーカン氏も、なにやら、玉のペンダントを買お

うとしてたら、落としてしまって、割れた途端、買うのを止めた。売り子の小姐が、一生懸命であっただけに可哀想だった。

ピーカン氏も「そう、思ったらしく」小銭を探したが、ポケットに無く、やむなく離れた。

後を小姐が、なにやら叫びながら、声だけがいつまでも追ってきた。

かくて、僕達の新農渓ツアーは終わった。

帰りの小舟の中でガイドの小姐の民謡の披露があった。アカペラで哀愁をあびた声が今も僕のパソコンの中にある。もし、聞きたい人あれば、メールで送ってさしあげます。勿論、サービスです。

船は予定より遅れて午前１０時過ぎに新農渓に着いた。揚子江号からホバークラフト?のような船に乗り換えて浅瀬まで行く。そして、そこで小舟（１５人ぐらいの）に乗って河上まであがるツアーである。

蔡サンの話によると、最近は小三峡ツアーより、小さい小舟で行くので、人気があるそうだ。　僕はこれはこれで満足したけど、小三峡も行きたかった。というのが本音だった。

「人手のいるツアーなので、雇用促進対策もあるんじゃないか?」と穿った考え方もしてみた。帰ってからビデオを家族に見せたら「アレッ!!人が引っ張るノ?かわいそう」と言う声が返ってきた。実際は乗り手と引き手のコミニュケーションがあったりで、結構お互い楽しんでいたけど、ビデオだけ観てると、人が牛馬に見えるのかも知れない。

ホバークラフトのシーンから、サムネイル画像で新農渓川のぼりを体験しましょう。

・・・・・・・・・　　行った人は思い出してください。

巫山十二峰　神女峰

は、幽静秀麗なすがたで知られている。四十五キロにわたるこの峡谷は、三峡のなかでもいちばん長く、一番ととのった姿をもち、大峡と呼ばれている。

ここでとりわけ名高いのは、奇峰が美を競い合う

巫山十二峰である。

なかでも秀麗なのは神女峰だ。

たちこめる霧のなかに浮かぶ山々は淡い色彩の水墨画をみるようだ。

雲の間に姿を見せる切り立つ岩肌は、濃い色彩の油絵をみるようだ。

三峡の中段に位置する

巫　峡

李白三度三峡を訪れる。

「詩仙」と言われる李白は、旅が好きで三峡を三回訪れ、多くの詩を残している。

李白がはじめて三峡を訪れたのは、唐の開元十三年（７２５年）のことだった。

家はかなり裕福で、詩書を学んだだけでなく、剣戟にも興味を持ち、旅が好きだった。

四川を離れたのは２５歳のときで、都に出て大いに活躍したいという抱負を胸に、故郷を旅立ったのだ。こうした気持ちで目にした三峡を歌う李白の詩は明るく弾んでいた。

昨夜巫山の下
猿声夢のうちに長し
桃花緑水に飛び
三月瞿塘を下る
雨色風に吹き去り
南行楚王を払う

高立に宋玉を想い
古を訪れしに裳を沾す

この詩からも，舟を乗り捨てて岸に登り、落花流水をながめ、先哲前賢に思いをはせ旅を心ゆくまで楽しんでいる李白の姿がおもわれる。

李白の二度目の三峡のたびは７５９年のことだった。このとき、李白はすでに五十八歳だった。李白は政変に連座して、流刑になる。激しい憤りと悲しみを胸に、再び、三峡を目にした。

巫山青天を夾み、
巴水流れて茲の若し
青天到るとき無し

だが、白帝城に着いた李白は突然赦免の知らせを受ける。

李白は、舟をやとって三峡をくだる。そして、その喜びを詩に綴り

朝に辞す白帝彩雲の間
千里の江陵一日にして還る
両岸の猿声鳴いて住まざるに、
軽舟すでに過ぐ万重の山。

に保存されている。

長江を愛する周恩来主席は求めに応じて筆をとり、長江を歌った詩の中で、もっともよく知られている李白のこの詩を書いた。

もう一人りの巨人・**毛沢東**氏が長江を泳いだ時の一首も添えてみる。

長江の水　いま飲みしに　武昌の魚　はや食べぬ
万里の長江泳ぎ渡れば　見わたす限り楚の空ひろがる。
風邪吹き波打つとも、　静けき庭のそぞろ歩きにまさる
きょうの日　寛ぐを得たり。

川のほとりにて、子いわく　逝くものは斯くの如きか。
風邪に帆柱動き、　亀山と蛇山静かにて、
大いなる計画は立ちぬ。　天然の濠を途と変えん。
南北に飛ぶが如き橋をかけ　巫山の雲雨を絶ちきり、
上流になお石壁築きて、
高き山峡に平らなる湖を出さん。
神女恙なからんも、　さぞ世の異なれるに驚くべし。

葛洲覇ダム

貯水池の流域面積・　百万平方キロ
ダムの頂部の高さ　７０ｍ
１９８１年一月四日　せき止め
６月から発電と船舶の航行始まる。

船はどのようにしてダムを通過するのか?

上流、下流水位の差が二十メートルほどあり、船舶航行のため、両岸に三つの船舶用ロックを作っている。

ロック室の長さ・・・２８０メートル
広さ・・・・・・・・・・・・３４メートル。

一万トン級の船が通過できる。

ロック室内は深い大プールのようで、上流ｙ下流の両端にゲートを設け、ロック内にフロチング係船柱が設けてある。

例えば、三峡から来た船が二号ロックを通過するとする

先ず、下流のゲートが自動的に閉まる。ロック室底部の送水バルブが開き、水は縦横に走るカルバートを通り、１５分で２８万立方ｍほど入る。

ロック室内の水位が貯水池の水位と同じになった時、閉まっていた上流の水門は自動的に開き、汽船がロック内に入ると自動的に閉まる。

ロック内の水はカルバートから下流に排出され、水位が下がると共に船の高度もさがり、ロック内の水位が下流の水位と同じになると下流のゲートが自動的に開いて船は下流にすすむ。ダムを通過するのに一時間とかからない。
ロックとバルブの開閉は電気装置でコントロールされている。

０７：００　音楽放送開始
０７：２０　朝食　二楼食堂
０８：００　総統四号・葛洲覇ダム入り（トトカルチョあり。）
１０：００　真珠の特別販売　三楼
１２：００　午飯　二楼
１２：００～１６：００　自由購買時間・全商品１０％引き
１４：００　トランク類を部屋の入口に出してください。
１６：００　沙市到着、惜別再見

三日目の予定表が届いていた。
僕の後でピーカン氏は彼女とチークを踊っていた。

三峡ダム工事を肌で感じる公園ツアーの感想。
船からおりて、オンボロバスに乗り、工事現場を見下ろす観光公園へ向かう。
壮大なダム工事なので、さぞ、スケールのでかいことだろう?そんな程度の思いだったので見終わってからもさほどの感動というか、印象はない。
現場自体がはるか遠方でかつ下の方にあったせいかもしれない。
それとも、自然の壮観に魅了されすぎたせいもあろう。
　ただ、ダム関係専用の大型トラック（特殊なナンバープレートをつけている赤枠のついた）のが砂塵を巻き上げながら、次から次へと行き交うのが印象に残る。
資料館の殆どを占めるかのごとくデカイ、ダムの模型を取り囲んで、ガイドたちが、それぞれの案内客の国籍に合わせた言語が飛び交っていた。
　結局、俯瞰模型は全然見なかった。

　１時間３０分ぐらいのツアーだった。一人１５０元らしいけど、白帝城がキャンセルになったので、料金はいいとのことらしい。（添乗員Ｆ氏の説明）
今夜は最後（といっても２日目だけど）のパーティが八時から三楼会場にて、壮大に行われます。との、アナウンスが船に戻ったら入った。

夕食後、お別れパーティは始まった。

楽しい、国際交流の場だったが、ここに載せて紹介しても、場に居なかった人には結構つまらないものである。だから、簡単にプログラムのみ紹介する。と・・・

●主催の船側からの、歓迎の民族踊り。
●カナダ・アメリカ客の「コーラス」全員紙を見て歌っていた。準備はさすが。
●我々、日本人１２名・カラオケで「星影のワルツ」を合唱。
　本当は、「さくらさくら」にしたい、いや「スキヤキソング」の方が晴れがすると　　か、他、数曲、候補が上がったが結局こちらでも人気があるということで「北国　　の春」かこれか?ということになった。
台湾グループは格好いい夫婦客が「デュェット曲」を絶唱した。
●主催側のコント。爆笑！！
●全員参加の相手の肩に両手をのせ坂本　九ちゃんの歌に合わせて踊る。
●椅子とりゲームではわが日本代表・菊地夫人が優勝！！大和なでしこは伝説　に過ぎなかったことを証明してくれた。
●照明が落ちて「ダンスタイム」になった。
　ルーシーこと小陳が目に入ったので、ウインクして誘った。ジルバを踊った。
船の旅は思ったよりずーつと楽しいものだ
。１０時頃、ピーカン氏と二人で４楼の按摩室前にある印鑑を作ってくれるコーナーに行く。　朝、頼んでいた刻印をとりに。
チョットしたトラブルが発生した。ピーカン氏が出来上がった印鑑を見て、突然、言ったのである。「ジス　イズ　シャチハータ！！　ノー　グッド。」そして、突然、後ろに下がって、相撲の四股をして見せたのである。
僕もよく経験する、センスのない彫り師なかかると名前が印鑑の中に収まり、

それはまさにシャチハタ印そっくりになるのだ。
相手の言い分はこうだ「書体は聞いたけど、縁に文字が付くことまでは聞いていない。この石は水晶で硬く、の時間彫るのにかかった。」と・・・
・・・結局、彫り直すことで収まった。これが、船の中じゃなかったら、争いの嵐はしばらく収まらなかったに違いない。思いで多いリングならぬ印鑑はピーカン氏の話だと「息子へのプレゼント」だとか？
いつか、見せてもらいたいとおもっている。この日の思い出と共に・・・

荊州

荊州は以前は荊州市と沙市とに分れていた。
１９００年に合併して荊沙市になったがまた次に荊州市に戻り、沙市は沙市区になった。
今はもう一つ加わって3つの区から荊州はなりたっている。（会津若松市と姉妹都市）
「三国志」の時代、この付近は江陵とよばれ、魏、呉、蜀の争いの中心であった。

荊州の北西にある当陽市の南にある長坂（チョウハン）での曹操軍と劉備軍との戦いは有名である。
２０８年、荊州の主劉表が死に、あとを継いだ若年の劉宗は戦わずして降伏し、劉備は呉の孫権と連合すべく江陵に走った。
猛スピードで迫ってくる曹操軍についに追いつかれてしまう。
劉備は妻子を捨てて逃走するが、趙雲が劉備の子、阿斗を抱えて戦い
劉備の妻子を救い、突破する。
張飛は大喝一声、曹操軍を撃退した。
劉備軍はかろうじて江陵に到着、孔明の説得によって戦いを決意した呉と連合、赤壁の戦いに備えた。

短い(2泊3日)割には素晴らしく、充実した「三峡クルーズの旅」であった。
揚子江総統四号・おそらく二度と乗ることはないと思うけど、けっして忘れることもない名前であろう。

船から下りても、ぜんぜん体が揺れないことに気が付いた。
船が揺れていなかった、ということなのか？雨、風のときは揺れるはずだと思うと、天候に恵まれていた、ということだろう。
荊州は「三国志」ファンの僕にとって、とても思いの深い場所である。
しかし、今夜というか、夕方には武漢に着かなければならないため、ここ、荊州の滞在時間は1時間半ぐらいになのだそうだ。
蜀の武将・**関羽**の眠っている関陵も当陽市の西３ｋｍにある。（２１９年、孫権に殺された）　とても行ける距離ではなかった。
しかし、関羽が建設し7年もの長い期間、一人で、主人、劉備そして仲間の趙雲・張飛・諸葛孔明たちと離れ、守ってきた　荊州古城はコースとして設定されていた。
沙市港に待っていた現地ガイドとバスに乗り込み荊州ツアーの出発である。
二人の日本語ガイド見習生が同乗研加わった。
高さ９ｍ、幅１０ｍの堂々とした城壁が、楕円状に約１０ｋｍもはりめぐらされている。城門は、北門、東門など６つあり、城壁の外側は濠がめぐらされている。
石段を上がり終わった先のほうに、石製の白馬が堂々と構築されていた。
Ｆさんが「あれ、**赤兎**（セキトバ）じゃないですか？」僕はてっきり本当と思い、写真撮りに走った。違って、ただの馬像だったけど、赤兎を思い出させてくれたＦに感謝した。
城壁の上から城外を眺めていたら、見習ガイドの男性が殆ど聞き取りにくい日本語で先に見える川を指して懸命に何か説明してくれた。
人の固有名詞が理解出来ず困ったけど、やっと書いてもらって分った。
屈原だった。紀元前３００年・秦の時代の詩人である。
５月に彼を記念する何か？があることを一生懸命に説明しているのだ。
僕は、さも、「貴方の日本語の説明は理解できましたヨ」とそんな顔で芝居をして

見せた。実は、屈原その人があまり知っていなかったのだが。
その後も、武漢の黄鶴楼でも屈原は登場した。憂国の詩人・屈原は中国ではとても誉れ高き有名人なのであろう。
　今回の旅は僕にとって
如何に僕は中国を知らないか。を知らされた旅でもあつた。
そして、僕の中国へのさらへの探求を駆り立ててくれた。

武漢

　三峡クルーズの旅三国志の舞台を訪ねる８日間～成都・重慶・武漢・上海　の旅も、アッというまに過ぎてしまった。
、昨日で６日目の宿泊が終わった。今日で７日目ということになる。
今夕は空路・上海に飛ぶ。明日の朝は上海を発ち、日本へ戻る。８日目はないのだ。
成都に着いた時と同じ感慨に一瞬、浸る。正直言って、未だ帰りたくない。
・・・といつも思う。ゆっくり、中国を歩けるのは今日一日か、と思うと気が滅入る、否、入る思いである。
白帝城も行けなかったし、荊州も物足りなかった。欲をいえばきりがない。
しかし、いろんなことを思い出してみると今回のグローバル深栖企画は他のツアーとは一味も二味も違ったグッドツアーだった。と思う。ｍｒ・深栖に早々とお礼を申し上げておく。
武漢編でどうしても書いておきたいことが三つ。二つは伝説である。そのひとつ、

屈原伝説から、お話しよう

　屈原（約紀元前３４０年～２７８年ごろ）は中国で最も早くあらわれた偉大な愛国詩人である。
彼は楚の国、（戦国時代）において太夫（役員）を勤めていたけど、権奸の排斥をうけて放逐されてしまった。
晋（韓・趙・魏）を手中におさめた秦は、つづいて南方に矛先を向け、春秋時代（孔子・孟子・荘子・老子の活躍したいわゆる「百家争鳴の時代」）には、中原を脅かしたこともある楚を攻めた。
ほどなく楚の都が秦の兵に攻め落とされたとき、彼は身をもって国に殉じ、汨羅江に身を投じた。
彼の「離騒」「九章」「九歌」などは、古今に伝わり、世界の文化史上高い地位をうけている。
さて、毎年五月五日の端午節には、中国各地ではチマキを食べ、竜船のレースの習わしがある。屈原の古里には面白い物語が伝わっている。
　屈原が汨羅江に身を投げてからの　ある夜のことだった。
屈原の故里の人々は、屈原が戻って来たのを夢の中で見た。
屈原は冠を被り、帯をしめ、生前のままの姿で、ただ、　表情だけが、やや憂いをおび、やつれて見えた。　人々は喜び、かけよって屈原におじぎをした。
屈原も礼を返しながら、笑って言った。
　「あなたがたの心ざしはありがたい。楚の人たちは愛すべきものを愛し、憎むべきものを憎み、私を忘れては居なかった。死んでも心残りは無い」
　人々は屈原の身体が以前のように丈夫でないのに気づき
　「屈大夫、わたしたちがとどけたご飯は、食べられましたか?」と聞いた。
屈原はため息をついていった。
「残念ながら、魚やエビに食べられてしまった。」
　人々はそれを聞いてたづねた。
　「どのようにしたら魚たちに食べられなくてすむでしょうか?」屈原はいった。
　「ご飯を葉に包んでとがった角のある形にすれば、魚達はそれを見て菱の実だとおもい、食べることはないとおもう」　　翌年の端午節に、ひとびとはご飯をそのとおりにして河に投げた。しかし、端午節が過ぎてから、屈原が又、夢に現れていった。
　「かなり食べることが出来たけど、魚達にも随分食べられてしまった。」と
　「何か良い方法はありませんか?」と人々はたづねた。

「ある。チマキを投げ込む船に竜の印をつけておけばいい。魚たちは竜の手下だから、そのときに鼓を鳴らし角笛を吹き、櫂を動かせば、竜王が送ってよこしたものだろうと、思って横取りはしないだろう」。

この時から端午節にちまきを作り、竜船をこぐ習しが生まれ、これが屈原の故里・楽平里から、全国に、古代から今日に伝わっている。

屈原は楚においては、鹿児島人が西郷隆盛に抱くような人物であろうか。従って多くの伝説が他にも残っている。屈原が誕生した**阮帰**に伝わる伝説をもう一つ紹介しよう。屈原が汨羅江に身をなげると、一匹の大魚が洞庭湖をでて河をさかのぼり、屈原死体を**阮帰**に背負い帰った。又、**阮帰**の名前も屈原に由来するとの伝説もある。

屈原は讒言により楚王に放逐されたが、その時、屈原の阮がわざわざ屈原に会いにきたので**阮帰**という名前がついた、と

憂国の詩人・屈原の詩とはどんな詩なんだろう?李白や杜甫の詩はよく書面でもお馴染みだけど、屈原の詩は余り見ない。詩自体を紹介しても、難しくて字体から意味がわかり難いので意訳した有名な詩を紹介したい。

九章の中の「橘頌」について。「橘頌」は強い思想性を備えているだけでなく、その擬人化した芸術的手法は新鮮であり、中国における詠物詩中の範といわれている。

・・・・・・橘は葉が緑で、花が白い、実は丸く香しい。

形は美しく、人々に恵みをもたらす。しかし、枝には棘があり、頑強な気性をもっている。侮ることを許さず。　他人の言いなりにはならない。

楚は今にも秦に滅ぼされようとしている。

今、楚が必要なのは、純真なこと柑橘のごとき新風である。

徳を重んじ、無私になり、寄せる荒波に押し流されず。秦と最後まで戦う精神こそ必要である。と　　その憤りをこめて「橘頌」を書いた。

黄　鶴　楼

黄鶴楼については、同行した菊地氏から詳しいエッセイが届いた。若干の訂正を勝手に加えさせてもらい紹介させて頂く。

武漢（ウーハン）は長江と、そこに注ぎ込む漢水の二つの川の合流地点に開けた湖北省の省都である。もともとは武昌、漢口、漢陽の三つの街、いわゆる武漢三鎮であり、現在の市の中心は漢口になる。

武漢市は古くから交通の要衝として栄え、そのためたびたび戦場となった歴史がある。三国時代に建設されたと言われ唐代の詩人・李白をはじめ多くの詩人に詠われた黄鶴楼は武漢市の長江を望む丘の上に五層の威容を誇っている。李白の詩「故人西のかた・・・・」にも詠まれた名高い楼閣で、南昌の滕王閣岳陽の岳陽楼と並び「江南三大名楼」と呼ばれて、訪れる観光客の絶え間がない。

三国時代に呉の孫権に創建されたと言われているこの楼閣も、度重なる戦火に焼失し、現代のものは宗代の姿をモデルに１９８５年に再建された。鉄筋コンクリート（エレベーター付き）になってしまった。

李白の時代に思いを馳せるため、あえてエレベーターには乗らず、階段を上ることにした。

実の所は、エレベーターが故障だったことも幸いしたが、足に自信のない方には残念だったに違いない。一気にてっぺんまでというわけにはいかず、途中のフロアの李白の詩(額に納められてある）などを読みながらビルの立ち並ぶ外の風景を眺める。

時代の大きな流れを一瞬のうちに変えたような錯覚に襲われた。

楼閣の一番高い所まで上ると市内を一望でき、北側のまわると長江が緩やかに流れ

ていた。　現地案内人の蔡さんが、「黄鶴楼」にまつわる次のような伝説を披露してくれた。

黄鶴楼伝説

昔々、長江のほとりに貧しい一人の青年が、酒場を開き、細々と暮らしていた。

その酒場はほとんど客もなく、一日に一人か二人の客があれば上々で、清貧を絵に書いたような毎日を送っていた。

と、ある日、ボロボロの衣服をまとった老人が現れ、「自分は、全く金を持ち合わせていない。お腹が空いているので、一杯のお酒と、食物を恵んで欲しい。」と頼んだところ、気のいい青年は快くお酒を提供し、料理を作って老人にふるまった。

老人は、さも美味そうに料理を味わい、青年のすすめる酒を飲み干し、満足して帰っていった。　ところが、翌日も、その翌日も「お金が全くない、酒と食事を恵んで欲しい」と頼んだ。　青年は請われるままに、毎日毎日、酒と食物を提供し続けた。

やがて一年が過ぎる頃、いつものように酒と食物を食べ終えると、老人は言った。「永い間大変お世話になりました。このたび遠くへ行くことになったので、そのお礼に、ささやかな物を差し上げたい。」そう言うと、やおら他の客が捨てたゴミ袋の中からミカンを拾い、その汁で壁に鶴の絵を描いた。そして言った。

「もし貴方が、何か困ったことがあったら、この鶴に三度手をたたきなさい。」「この鶴がきっと貴方を助けてくれるだろう。」そう言って老人は立ち去った。

青年は、ときどき壁に落書きされた鶴をながめながら、老人の話など、さして気にもせず、相変わらず、ほそぼそと、少ない客を相手に酒場を続ける日々が続いた。ある雨の降る夕暮れ、全く客もなく沈んでいたとき、ふと壁に描いた鶴のことを思い出した。青年は鶴に向かって三度手をたたいてみた。するとどうだろう、

金色の鶴が壁から抜け出して、羽を広げて見事に舞をはじめ、しばらく舞うとまた壁の落書きに収まった。　驚いた青年は

「あの老人はやはり只者ではない，仙人かもしれない。」「よし、これからこの鶴を使って酒場を繁盛させよう」と思った。　やがて、このことは大評判になり、青年は巨万の富を築いてしまった。

ある日、老人が再びやってきて「あのときのお礼は十分した。もういいだろう。私は天に戻らなければならない。」そう言うと、金色の鶴に乗って飛び去ってしまった。

青年はこれを記念して、出来るだけ仙人に近づけるよう小高い蛇山に「黄鶴楼」を築いたという。

東　湖はピーカン氏がいみじくも言ったように湖と言うより海に見えた。はるか向こうに桜島のような山がかすんで見えた。

暇があるとマイボートで釣りに出かけるピーカン氏が「これは錦江湾だ」と言ったのがよく分る。

東湖を見ていると、今から35年前の、あの武漢事件を思い出す。文化大革命の嵐の真っ只中だった。

１９６７年７月１４日未明、毛沢東を乗せた専用列車は武漢駅へ向かっていた。武漢では、毛沢東の文化大革命を担う「真の革命派」をめぐって二つの勢力が流血の対決を続けていた。六日後、武漢一帯はこの二つの組織の内乱状態に陥った。７：２０事件と呼ばれる武漢事件の勃発である。

８２０１部隊と林彪派の「工人総部」との銃撃戦となり血で血を洗う衝突が夜を徹して展開された。という。戦闘は毛主席の滞在している東湖賓館に迫った。

急遽、周恩来は毛沢東を救い出す為に飛行機で武漢へ飛んだ。・・・・とまあ、こんなノンフィクション小説・産経新聞社の出した「毛沢東秘録」を思い出した。

何故か，この地は僕の歴史好きを駆り立ててくれる地である。

およそ９０年前に遡るとこの地はこんな歴史のターニングポイントでもあった。

１９１１年(辛亥)１０月１０日、武昌に司令部をおく清朝の新軍の下士官や兵士が決起した武昌蜂起が発端となった辛亥事件により、翌１２年一月一日に孫文を臨時大統領とする中華民国が成立、清朝の崩壊につながった。

そんな歴史の世界を思い出しながら僕等は恐らく今回の旅では最後の箱物見学となる「湖北省博物館」をたづねた

終　章

上海に着いたのは予定の時刻を過ぎていたように思う。
上海はたびたび来ているというより中国旅行のたびに立ち寄る街なのであまり書きたいことは無い。でも、いつかじっくり上海の魅力を味わってみたいと思う。
今回は「三峡・二度と見ることの出来ない風景を訪ねる旅」ということで綴って見た。
最初のトーンからすれば武漢編はかなり硬派の文章になり、泊まった五つ星ホテル・シャングリラでのシャウジョ按摩との中文会話ストーリーもカットしてしまったけど、会話レッスンは健在だったことは報告しておこう。
　旅は連れというか、相棒（今回はピーカン氏）との共有する思い出、それに自分自身の秘めた想い（肌でどう感じるか）、の二つである。といつも思う。
　今回の旅も、ただの一度として、嫌な思い、心の波の騒いだこと、思い出したくないこと、・・・それら、すべての負の思いがなかった。
楽しい旅だった。
さて、A4 紙にすると４０ページからなる、だらだら書き綴った「三峡クルーズ紀行」の最後に８日間僕達に同行してくれたガイドの蔡さんの説明してくれたこれからの

「三峡・長江の未来」を記して終わりとしたい。

・・・・・・杜甫が二年近く住み、李白が三度訪れた三峡の未来（７年先）は・・・・・・
下流から船でさかのぼってくれば、白雲たなびく万山のなかに、コンクリートの大ダムがたちはだかるだろう。峰峰が屏風のように並び、広大な水面は何処までも青い。今までに無い湖の島々や岬があらわれるだろう。
初夏には百花咲き乱れ、岸辺は緑の木々で美しい。観光客のための多くの竜船が浮かび、人々は湖辺のホテルに泊まり、湖の夜景をながめる。西の空が赤く染まり、さざなみがきらめき、素晴らしい眺めとなるだろう
。夏が来ると、ここは絶好の避暑地となる。湖辺には水泳場が出来、湖面には遊覧船、岸辺には花々が咲き乱れるだろう。車を駆って発電所を見学するなら、高速エレベーターが人々を水面下の「竜宮」にいざなうだろう。水位が高まった為、湖面が開けた感じで、雲のかかった神女峰は百メートル以上ある石段を降りて観光客を迎えに来たかのようである。
雄・険・奇・幽の四文字でだいひょうされる三峡の風光は更に美しくなり、世界の人々の憧れの地となるだろう・

中国ぶらり旅　２００２年

世界遺産　黄山へ（ファミリー旅行）

大体、宗という時代が中国の歴史の中で弱い（知識不足）のである。

紀元前の春秋（孔子）秦（始皇帝）の時代から始まって、紀元前後の１世紀から２世紀のころの前・後漢王朝そして有名な三国（志）時代、少しとんで隋・唐（都・西安）時代、それから北・南宗をとばして、元、明、清と、何となく、分るのだが、宗は弱かった。この際少し勉強してみるか・・・とＡ型好奇心の塊である僕のＤＮＡがそぞろ眼を醒ましたようである。

地図と年表（日本史との比較）と当時の様子、この三つへの異常なまでの執着心。

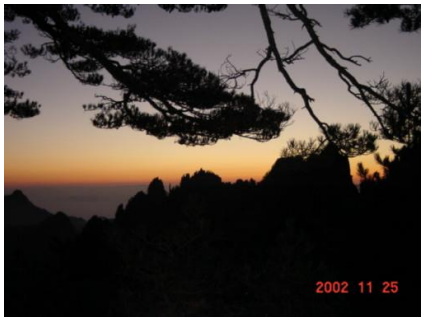
ここ数日の間に僕の頭の中は１２世紀から１４世紀の中国にタイムスリップしてしまった。

西安からシルクロードを旅したときは唐の時代に思いを馳せ、三峡を下った時は三国志の豪傑たちと共にＡＣ１～２世紀の大地を駈けめぐった。

司馬遼太郎のおかげで中国の歴史も地理も結構、勉強させられたと、思っていたが、近年、こうして現実に大陸を旅してみると、まだまだ知らないことが多すぎる。

今回も、行く街の歴史について可能な限りネットサーフィンを試みてみた。

司馬遼太郎の「江南のみち」を始め、寺田隆信の「物語中国の歴史」など、中国史を知る上でとても分り易い資料だった。



帰ってきてからのプロローグ

駆け足というよりスポットを記憶してきたという程度の旅だったので、彼の地で、想いに耽るなど、とてもありえないことではあったけど、わが足跡を残してきたことだけは紛れも無い事実なのである。絵描きさんが自分で写してきた写真をみながら画を起こすのと同じ気持ちといえる。

そんな中で　今回の旅のキーワードはなんだろう、と考えてみた。

勿論、山歩きは、当日の山頂付近がまさに雲海の真っ只中だったので、出来なかったけど、それでも、翌朝の日の出を拝めた黄山はまず第一として、次は南宋の英雄岳飛の廟を訪ねたことである。

最後は黄山への上り下りの道中にバスの中から眺めた変わった民家の造りである。

中国を旅していて楽しいことの一つが、バスの中から見る風景である。

その点たとえ少々デコボコ道でも高速道路より一般道のほうが楽しい。

特に頭に焼き付いてるシーンは、老いも若きも、中国人は何故か、表(道路の方)へ向かって、しゃがんでどんぶりに入った食物を食べてる。

今回も、沌渓から杭州まではバスの旅だったけどこれが結構飽きなかった。小さな

町が次々と現れ、人々の営みを間近に見ることが出来るのはたのしい。

1日目

雲谷寺駅（８９０ｍ）で一本3元の杖を買った。ロープウェー（日本製）は５０人乗りとか、結構、でかいロープウェィと思ったけど、ガイドの話によると、もう一箇所の新しいのは１００人乗りなんだとか、いったいどんな大きさのだろう?.か。

メーカーはきっと日立か三菱なんだろう。

上までの高さは７７０ｍで、約８分で着く。勿論、登山道はついている。

徒歩で登ると、４時間（７．５キロ）はゆうにかかるそうだ。

１９７９年に鄧小平が登山した時、登山道はきれいになったとのことだった。

いずれの国も同じなんだ。

１０年ほど前、屋久島の宮之浦岳に登った時、踏み木がえらく新しいのでガイド(友人）に訊いてみたところ、去年、皇太子ご夫妻が登られることになっていたが、陛下のご容態がおもわしくない、ということで、中止になったそうで道だけきれいに出来上がったんだそだ。

理由はともかく、登山者にとってはいいことである。

黄山の登山道はすべて石畳の階段になっている。

幅は大体2m 前後で、けあげは15センチ、踏み面は３０センチ、日本の石段からすると、こころもち、踏み面が長いかナといった感じである。

写真は2日目の快晴の写真だが、下の写真は初日の、見えないことをことを承知で出かけた飛来石への途中の階段登りのシーンである。

あとで、写真を見ると、結構いけている。**雲海の中を行く**。といったタイトルを付けたくなる。白いダウンコートのモデルは娘の和香である。和香との海外の旅は３回目である。

１度目はインドネシアのバリ島で2度目は婚礼部の皆と行ったタイのプーケット島である。旅好きで頭のさえている?.娘は何でも仕切るのが上手で彼女と行くとついつい怠けてお任せ旅行になってしまう。今回の旅は親しくしているグローバルユースビューロー社の深栖さんにお願いしたので和香ものんびりしている。

山の中のホテルに泊まるということで、結構リュックが重くなっていたので強力（と呼ばれる土地の運搬屋）にホテルまで運んでもらった。

１個の運び賃は５０元（日本円で８００円ぐらい）である。

人間も軽々と運ぶ、江戸時代の駕籠やと思えばよい。

駕籠は竹で出来ていて、ぶら下げるというよりか、神輿風な感じである。

結構、乗ってる人は、怖いのではと思った。

ロープウエーの駅から泊まるホテル・西海飯店は歩いて４０~５０分かかる。

途中、北海飯店までは、登り階段で、それからは、下りになる。

当然、帰りは逆になるわけだ。

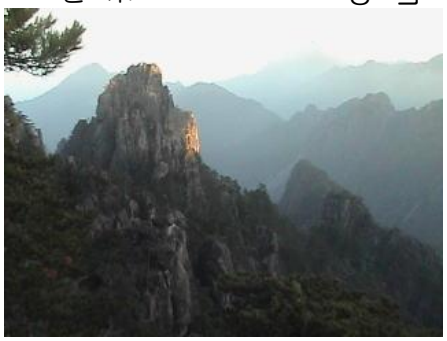
結構、厳しいものがある。左写真は途中であったヨーロッパ系の登山者の一群だが、年のころ、７０~８０才、このあとに5人ほど続いた。

結構、異様な光景に感じた。

2日目

いったい、黄山とはどんな山なんだろうか?

黄山をどう説明すればよいか、多くの旅行専門書やホームページ上に多く書かれた人々の概況や概要などを読んでみた。



正直言って、夢を見ているような2日間で、春に訪ねた三峡とは二次元と三次元ほどの差がある。

まさに雲の上にふわふわしていた。そんな感じである。

そんな中で、やはり、一番感じがつかめたのは「地球の歩き方」ダイアモンド社の概要だった。

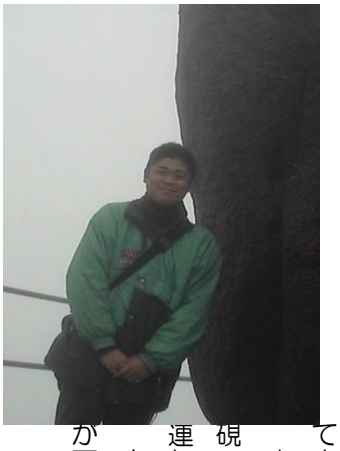
しばし、説明文を拝借しながら、自分の雲の上の体験をまじえて書いてみたい。

山は.安徽省の南部、世界地図を眺めると、上海の左下（随分乱暴な教え方?.）緯度でいうと

日本の屋久島の少し南といったところか？
そう言えば、黄山は我が世界遺産の山・屋久島とどこか共通点が多いみたいである。早速、横道にそれるけど、屋久島も黄山（は72の奇峰から成っているが）多くの山々で成っていて、黄山が蓮花峰（1873m）光明頂（1841m）天都峰（1810m）の三つの主峰からなっているのに対して屋久島は宮之浦岳（1936m）,永田岳（1886m）黒味岳（1831m）の主峰から成っている。
　そして、奇岩といえば高盤岳（1711m）のトーフ岩のような、黄山の飛来石と同じ仲間のような石もある。
　さて、黄山に戻る、黄山は世界遺産といっても世界に19しかない世界文化及び自然遺産である。
黄山は、奇松・快石・雲海・温泉の「四絶（四つの絶景）」で名高い。
「五岳に登ったら他のやまなど見る気にならないが、黄山に登ったら　その五岳すら見る気にならない」と讃えられている。　従って、中国の観光名所としてはトップ10にはいる。毎年100万人の人々が訪問する名所である。
森林占有率が86，6％を占め、黄山を含んで、人口143万人、面積980km、2300年を越えた歴史をもつ。
中国における山水絵画の題材の50％は黄山といわれている。黄山には登山ルートが二つある。
僕は前山・雲谷ロープウエイを利用して一気に　後山を目指したわけだけど、「地球の歩き方」を読むと、どうも逆の方がいいらしい。
主な見所が前山に集中しているらしい。もっとも、本に書かれているように、ロープウエイを使わずに登るとなると、高度差753mの山は登るだけで2～3時間かかってしまうのでは、
・・・いずれにしても、今回は初日は朝から終日、ガス（霧）の中だったので眺望は望むべくも無かったけれど。
計算してみると、雲谷寺（ロープウェイ下）の標高が900mで、上の始信峰到着との高度差が773mということは、始信峰の標高が1673mということになり、

我々の泊まった**雲の上のホテル**の標高はおよそ1700m前後ということだろうか。（写真は飛来石にもたれる深栖さん）
飛来石には光明頂（標高1840m）から30分のところに立っている高さ12mの奇岩には紛れもなく登ったのだが、果たして、**光明頂**にはどうだったのだろう？
三本目の足代わりに買った杖の力を借りながら、フーフー言いながら霧の中を歩いていたのでさっぱり記憶が無い。
黄山登山の**三種の神器**といったら何だろう？
厚着のコートはホテルに備え付けてあった。これは、各ホテル毎にはっきり色分けがしてあり、自分の仲間がガスや暗闇でも判るようになっているらしい。　思うところ、一番目は、レインコート　二番目は懐中電灯　三番目は一本、5元ぐらいの杖（下のおみやげ屋で買わずに、ロープウェイの登り近くで買う）をお勧めしたい。
もう一度、訪れる機会があったら、季節は春から初夏の頃、天都峰に是非、登ってみたいものだ。
西海飯店(左）はまずまずのホテルだった。雲の上のホテルだから、山小屋を考えれば極楽といえる。
　部屋も寒いのと、少々かび臭いのを我慢すれば　風呂もあるし、2時間もすれば　部屋はポカポカになるし、上等である。
特に、食事は他に比べ遜色はない、というより美味しかった。
疲れたので按摩を、と思ったけど、交渉しても、全身280元（日本円にして4500円ぐらいは）高すぎる。どうせ、更に、チップでも要求されれば5000円は下らない。昨日、沌渓の黄山国際大酒店でしてもらった按摩が100元・足つぼ按摩は50元なのと比べ高すぎる。太貴了！！である。
黄山・清涼台からご来光を拝む。

夜明けの5時頃、モーニングコールで起こされた。
日の出を見に行く約束をしていたのだ。天気はどうか?と聞くと快晴!という返事が返ってきた。
　玄関には、オヤオヤ、こんなに沢山、泊り客が居たんだ、とビックリする位　集まっていた。　暗い中を　凍りついた石段を北海飯店へと向かう、隣の人の懐中電灯の灯りを当てに登る。
　　昨夜、下った分だけ　上りがきつい。
昨日、見えなかった北海飯店はなかなか立派なホテルである。
　スケールからいえば　我が雲の上・西海飯店を越えている。
　次回は北海にしょう。　そう、思った。
途中、3つ以上のホテルを通り過ぎる度に、日の出ツアーの見物客の数が増えていく。まるで　元旦の富士登山の観である。なんとなく東（明るい方向）の空が明るく感じる。ちょっと焦りが芽生える。「途中で上がったらどうしょう??」
そして、そして、最高の場所(と、思ったけど）で日出を見た。
横に巨大な鐘が堂の中に納まっていた。ガイドに聞いたら、去年、出来たそうだ。
「名前は分からない」との返事だった。
お猿さんが遠くを眺めている姿に似た岩、**猴子観海**まで5分位下の登山道を少し枝道に入った所だったけど・・・
屯渓・老街雲の上の2日間が過ぎ僕はもう昨日の朝着いた雲の上駅に戻っていた。
「何だったんだろう?」という**?**と、「霧の中の行軍とあの感動の日の出を見た」充足感が入り混じって、「宿題が残るから旅は楽しいんだ。」と納得することでした。
高度差773mの雲谷ロープウェイを一気に、といっても結構ゆっくりと、下りながら、この山での体験は　案外、僕の**走馬灯の中の一シーン**に入るに違いないとも思った。
2時間のバスからの光景は，明、清の時代の古い民家が残っているといういわゆる安徽古民家群なのか?世界遺産に登録されているというから、ここから見える建物群ではないのだろう。一人旅だったら、もっとゆっくり、見ていければ、「ここまで来てるのに荷物を残してきた黄山国際大酒店は、悠久の香りを漂わせて　ゆったりと流れている新安江の岸辺に建っている。
僕等は一昨日行けなかった老街へ向かった。
老街は旅の前から訪れてみたいと思っていたところである。もっとも、老街という名前は、中国、いたるところにある。
字の通り　昔の街という意味で新街との比較にすぎない。
今、中国はスクラップ・アンド・ビルドの荒波の中に全市が巻き込まれているので、もしかしたら、余程、歴史的価値のある老街以外は取り壊される恐れがあるのでは。　黄山の老街は宋や明代の古い町並みが残されている。
　約1200mの通りは文物商店が軒を連ねている。
・・・・白い壁と黒瓦が特徴の江南建築が連なる老街の石畳を歩くと、まるで100年まえにタイムスリップしたような感じになる
　僕はこの旅からおよそ10数年後に僕にとっておそらく長い旅（1週間以上の）では最後になるかもしれない中国ぶらり旅を（ここ黄山のすぐそば）廬山・景徳鎮・三清山などを高校時代の友人永留弘之くんと巡ることになる。
・・・　　「地球の歩き方」から　時間が早かったせいか、人通りはまばらだった。
　1時間ほどしか自由時間が無かったので、とりあえず端まで歩いてみようと思って歩き続けた。
　やはり、聞いていた通りお茶・骨董品・墨・硯・筆・茶道具それにいわゆるみやげ物店が軒を連ねている。
　店の中は暗い。店員は余り居ない。　骨董品屋が面白い。　歴史民芸博物館に入ったようだ。
いわゆる骨董品もあるが玩具類も多い。それも



昔の玩具が。
一軒だけで持ち時間が過ぎそうである。

大体、看板からして立派なのが多い。西安の老街・「古文化街」と、大理・老街の中間か否、一軒のスケールはこちらの方が立派に見える。
店先で印鑑を彫り売りしているのを見かけたので、ちょっと立ち寄ってみた。こんな場所が意外と上手だと思って。
娘が主人に頼まれたらしい。明日、杭州の西冷印社で買おうと思っていたけど。
人なつこい、それでいて結構、芸術家風の男に訊いて見た
一個、３０元でいいか?答えは「可以」
１０分で出来ますか? 答えは「可以」
二個,４０元でどうでしうか? 「可以」
人が良さそうで、おまけに上手そうだったので、それ以上は値切りたくなかった。
印鑑はいくら台石が良くても、彫る字が良くないと腹がたつものだが、彼の文字は本物だった。
もっとも、彼女の夫が気に入ったかどうか?定かではないが僕の見たところ優をつけたい。
少なくとも、春、三峡下りの船の中で、友人のピーカン氏が息子に奮発した水晶の印鑑「シャチハータ」よりは比較にならなかった。
あっという間の一時間でした。まるで、昔、あったクラシックレコードのサンプル盤、最初の1～2小節で次に移る。そんな感じの時の流れでした。
come back again!中国語も出ません。この後の杭州までの田舎道を走るバスの旅は良かったです。
珍しく隣の客も、とても興味深げに窓外を見続けていました。

初めての杭州

観光旅行としての杭州から上海は、何を紹介すればいいのかちょっと困る。いつものことだが、一日か
二日の駆け足旅行で紹介などという言葉を使うほうがおかしいのである。先にも書いたけど足あとだけ残してきた。慌てて写した写真と一緒に・・そんなわけで、写真集として、あちこちの観光地を紹介?してみることにしたい。
杭州の観光地としてはまず、西湖だろう。可是、僕は湖はさほど興奮しないほうだ。まして、遊覧船に乗って、岸辺を眺めるなんてのは、感嘆の声を発する乗客には悪いが、今ひとつなのである。
隣にいたツアー会社専属のカメラマンの女の子と中国語でやりとりしながら西湖について質問することで、自分の中国語の進歩が如何ほどか試してみた。こちらのほうが、結構面白く、隣の客が、紙きれになにやら字を書き合いながらやり取りしている僕らを見て、「この人達、一体何やってんの?」といぶかしげに、顔は向けずに感覚だけの視線を向けていた。
まあ、西湖のことも少しは質問してみたが、個人的な質問の方が多かった。
何故なら、僕の中国語能力はまだまだ初級もいいほうだから 訊きたくても言語の変換がきかないのである。
君は何回位ここに来たことがあるの?
数えられないワ私の名前は李です。 李黎と言います。

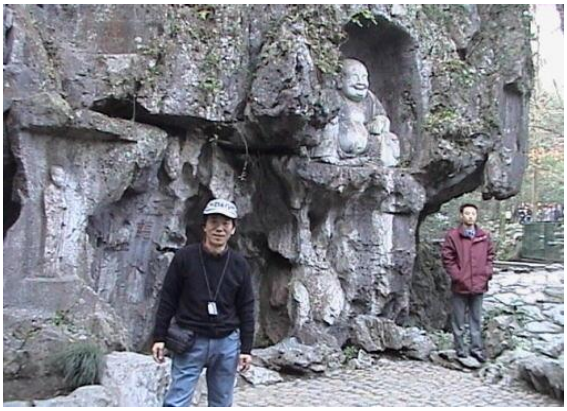
景色は素晴らしかった。残念なことに、夕日を見ることはできなかったけれど、そのかわり黄山で一番美しいと言われる日の出を拝むことが出来た。
黄山や上海の他では何処がよかったですか?
三峡はとても素晴らしかった。絶対訪れるだけの価値はあると思うよ。
桂林も結構いいけど、比較すれば、僕は三峡のほうだナ。

その他では?
そうだね、シルクロードに前、行ったことがあるけど、あそこは、もう一度行きたいネ。
書爺繁辛寔謹?
どうしてこんなに人がおおいの　脅貢勣肇紡注杏?
　みんなおてらにいくひとなの　そうです、
西湖から後は単独行動をとった岳飛廟を除いて、たいていの観光地は写真写しと李小姐との中国語会話教室となった。
その後、彼女とは帰国後もメールや手紙のやり取りをしている。
よく言うメル友というやつである。
　相手を知っている、といっても知己というほどではないけど、見知らぬ人との交信ではないので、メールのやりとりも楽しみがある。
中国語を知らない人には面白くないと思うが、中国で、このホームページを見てくれてる数少ない中国の朋友たちはフムフムと分かって頂けるのでは、と思うのでチョット載せてみることにする。大石さま
わたし　李黎です。
あなたからの手紙と写真が届きました。とても嬉しかったです!
　あなたの書いた中国語はとてもよかったです。
　今日、あなたからの手紙が届いた。
わたし、すぐにEmail送ります。ですが、一回目送ったのですが送れませんでした。二回目で送れることが出来ました。
Eメールは見ましたか?見たか、見てないか分からなかったので、こうして手紙を送りました。
　実は、わたしは手紙を書くことはめったにありません。
　私の書いた字が綺麗ではありませんので（あなたに見せるのが恥ずかしいです）
　とても寒くなってきましたね。
わたしは冬がきらいなんです。
なかでも、寒いのが嫌いです。厚着も嫌いです。
　出来たら、冬がすぐなくなって、直接、夏になればいいです。
ダケド、クリスマスは好きです。もうじきクリスマスです。
　上海はクリスマス前だというのに、もう飾りがいっぱいで気分にひたっています。
いろんなところに、ツリー、花、プレゼント・・・・・・たのしみです。
鹿児島も上海と同じじゃないんですか?
わたしから、あなたにたのしいクリスマスを過ごされますように・・・・
残念なことを言わなければなりません!
先生の誕生日に撮った写真、フィルムに傷がついてて駄目でした。
　キズがなかったら必ず送ってましたのに、
又、上海に来たときは必ず教えてください。モット良い写真を撮ります。
わたしが先生の案内役になります。
上海は国際大都市です。発展がとても早いです。
　あなたが今度来る時は、又前とちがう風景があると思います。
わたしが遊びを楽しくします!OK!!
　早々、先生作<黄山記>早く見たいです。先生の写した写真、とてもよかったです。
　私も先生と同じくらい写真撮るのがすきです。
先生より下手なのでもっと上達したいです。先生も応援してください。
先生のホームページを見ました。くやしいけど、余り日本語がわからないです。そうそう、ホームページと手紙に書いてあった漫画似顔絵は先生が書いたのですか?とても可愛いでした(笑いの声)
　先生はどこへでも旅行が出来て羨ましいです。　世界はとても美しいし、だから、生活も豊かです。
　今のわたしは仕事や勉強をがんばって将来は、いろいろな資格をとって、世界や生活を楽しみたい。
あぁもういっぱい書きすぎました!

このへんでやめないとあなたの仕事と休息時間の邪魔をすることになります。ここで筆をおきます。

李　黎

こうしてぼくと李黎の付き合いは始まった。
もうひとりのガールフレンド、長沙市のガイド小燕はもともとぼくの日本語学校の生徒だった。二人とも僕にとって中国語教師であり。旅のパートナーでもあった。
そして二人ともぼくに恋心を持っていたのは確かだと思う。
なぜなら彼女たちは第三者にぼくを紹介するとき先生とも、知り合いとも言わずはっきり「男朋友」（中国では彼氏のことを指す。）と言った。
数えきれない中国の歴史を訪ねる旅をこの二人で（もちろん別々であるが、ふたりはお互いの存在を知らない）
知ったら嫉妬深い中国人娘はぼくにどういう関係か迫ってくるに違いない。
ぼくが「どういう関係って、ぼくと貴女の関係と同じだよ」と言ったら「ウソ！うそ！絶対、あなたたちは深い関係あるね！」と言うに違いない。
少なくとも李黎に関しては一度もベッドの距離は縮まらなかった。
いや、一度だけとても寒い旅の時、部屋の暖房が故障していて「寒くない？こっちへおいでよ」と誘ったら「あなたがこっちに来るのがマナーじゃない？」と返事が返ってきたことがある。でもその時も温め合っただけで終わった。
こんな旅をしていると理性も、本能も、どっかに行ってしまうのかしらね。



『中国ぶらり旅のプロローグ』

長沙からの旅。　２００４・４・３～６・８

旅の方法にもにもいろいろなかたちがありますね。

すべてお任せの団体ツアーから全くのひとり旅まで、そして、その中間も含めると、いろんなパターンに分けられます。

ツアー旅行を重ねていると、何故か?自分がかごの中に入れられたままの旅をしているような気がします。もうちょっと籠からはみだしてみたい。　そんな思いがつのります。

折角、ここまで来ているのだから、すぐ傍にある、あそこにも行きたい。

もう一日、此処に滞在できればナァ。・・・・・もう、いろいろな思いや、願いがつのるのが団体旅行への不満です。

でも、どうすれば自分の希望の旅が実現出来るのか?

言葉の障害、プランの建て方、そのプランを現地のどこにお願いすれば安心なのか?現地でのこまかいコース設定の際の意思の疎通の解決は、最小の経費でまあまあの快適な旅を実現させるには?・・・・・・・・・と、考えると、あまりのクリアすべき問題の多さに、結局は断念。夢で終わってしまいます。

最小単位一人ないし二人（が経費上は最高。４割は安い経費ですむ）での旅をしたい。

つまり、結論としては、

時間をかけて（というより時間に追っかけられず）の気儘な旅。行きたい所を自由に選べる旅、ほどほどの予算と、まあまあの環境でのゆとり旅。

ぼくの今回の『ぶらり旅』は上のすべてをクリアしながら、尚且つ無駄骨はしない、極端なハプニングはない、敷かれたレールの上を自分で走る旅、といったらお分かり戴けるでしょうか?

レールとは?立てて貰ったコースのことで、交通手段とダオャン（道案内役）は事前に設定してもらう。

それらがオート走行だとしたら、いつでもマニアル走行に可能な限りチェンジ出きる。

まあ、なんとも訳の分らない説明で申し訳ありませんね。

参考として、ぼくが**中原（鄭州～西安）への旅**で湖南華天旅行社に敷いてもらったレール表を紹介してぼくの旅の日記を見て頂いたら、そんな思いで書いて見ました。

教師中の小旅行

4月　3日	岳陽
4月　4日	洞庭湖
4月9日から11日	張家界
4月21日	株洲
4月24日	南岳衡山
5月1日から5日	杭州･紹興・寧波・普陀山
5月8日から12日	峨眉山・楽山・九寨溝・黄龍

中原の旅　（鄭州、洛陽、蘭州、西寧、青海湖、西安。）

5月16日　一天	・・・長沙/鄭州火車（17：10/6：30）	宿火車
17日　二天	遊覧黄河・河南博物館（含住房，小車）	宿鄭州
18日　三天	鄭州・小林寺・洛陽・白馬寺　中嶽廟（含住房，）	宿洛陽
19日　四天	遊覧竜門石窟（60）　関林（含住房，小車）	宿洛陽
20日　五天	洛陽/鄭州、（14：20/06：45）	宿火車
21日　六天	遊覧黄河水車、白塔山、後乗（15：15/18：35） 赴西寧　（含計程車）	宿西寧
22日　七天	高原青海湖鳥島一日旅、（，大車、導遊、門票）	宿西寧
23日　八天	西安TU207（18：10/19：20）・・・・	宿西安
24日　九天	以下省略	

２５日　十天
２６日　十一天　　鳳凰
２８日～３０日　　貴陽
６月１日～４日　　ジョウ州
６月５日～６日　　朱家角
６月８日

全旅行日数……37日間でした。

２００４年６月２６日

大石ケイジ。

そして、旅のおわりに・・・　　２００４・９・１０

祝有一段愉快的旅程！

ケイジの日本語教師奮闘記

２００１年のＷＴＯへの加盟により益々、世界経済のトップへの道をひた走る中国。

自動車国内販売台数439万台はアメリカ、日本に次ぎ現在世界第三位。来年には600万台に達し日本に並ぶといわれている。

４年後の北京オリンピック、その2年後には上海世界万国博が開かれる。

全世界の脚光を一身に集める中国。その一方では市場経済の歪とも言うべき都市と農村との貧富の差の拡大。共産党一党支配による政治不信。麻薬の密売、ＳＡＲＳ等の社会問題。

サッカーの国際大会に於ける日本パッシングのようなグローバル感覚の欠如など、現代中国の抱える**光と影**を自分の目で確かめてみたく現地へ飛んだ。

行く前は**「そげん、中国のどこがよかけ?」**、帰ってからは**「中国はいけんやったか?」**と、いかにも広大な中国大陸にふさわしい、漠然とした質問が友人達から飛ぶ。その度に僕はリハビリ中の麻痺患者のように一瞬コトバにつまった。

・・初めて体験した日本語学校での授業風景が鮮明に頭をよぎる。僕の教室はいつも賑やかだった。真っ赤なりんご顔の陳姐チャンの大きな声「センセーイ、声ガ　ヨク　聞こえマセーンョ!」。四川省の呉琳さんは「センセーイ!浄土ってどういう意味ですか?ゼンゼンワカリマセーン」。岳陽から来た王俊クンの口癖は「キョノ授業、雑談　イイデスカ?」。その度に教室中がどっと沸く。日本語で冗談を言うのが楽しいらしい。だから僕の授業は日中入り混じりの漫才状態だ。《日本人が日本語で話をする》それが僕の役目らしく、出来るだけ僕の口からは中国語が出ない方が望ましいんだという。「それじゃ中国に会話の勉強しに来た意味がないじゃんか?」思わずもれる僕のぼやき。

授業の話がも少し続く。もとより僕はにわか教師だから日本語の文法については**?**である。でも生徒がヘンな日本語をしゃべるとすぐに分かる。

しかし、ここで教えている日本語教材をみると、日本人ならごく普通に使っている日本語を2つあげて、「どちらの遣い方が正しいですか?」と問う。教師用虎の巻には文法上の違いが理路整然と書いてあり、それを学生達はしっかり勉強している。　尤も、それを覚えなければ日本語検定試験に合格しなのだから皆必死なのだ。今日も１人の生徒が質問してきた。

「先生!《学校に行か（ないで、なくて）映画見に行くつもりです。》どっち正しいですか?教えて下さい。」僕は数回、口の中で反芻しているうちに分からなくなってしまい　「こんな場合、日本では“学校に行かずに映画にいくつもりです”と言います。」と答えてしまった。するとすかさず「《行かず》という言葉は**書き言葉**じゃないんですか?」ときた。

そんな区別なんか僕が知るかい、と開き直りたくなったけど、グッとこらえて「でも僕らは普通に使いますよ」とひきつった笑顔で逃げた。口の中で模擬会話をしてるうちに自信がなくなってきた。「書き言葉、話し言葉なんて区別、普通しないもんネ」コレ、つぶやき。

いつかもこんな質問があった。「この時と、あの時とその時の使い分けがよく分かりません」という。「この」は現在で「あの」は両者が共有した過去というのはわかるけど《その時》は説明出来なかった。僕の好きな番組、ＮＨＫＴＶ「そのとき歴史が動いた」司会の松平アナの顔が浮かんだり消えたりするのだった。

中国の学生は実に勤勉だ。将来への目標もしっかり持っている。彼等の就職先へ提出する履歴書を見て驚いた。５センチ四方位の枡のなかに原稿用紙２枚分ほどの文字がびっしりと書かれている。すべての空白が小さな文字で埋まる。こりゃ、読む方が大変だ、と思ってしまう。

ひきかえ、日本の若者事情はかというと、若年無業者、つまり卒業した後、進学も、求職活動も、結婚もしない若者が５２万人、企業に縛られないアルバイト・フリーターが２１７万人で前年比８万人増しだと新聞に出ていた。これでは日本の将来は一体どうなる?と暗澹たる気持ちになる。

「中国は方言がウェ（多い）たちご（のじゃないの）?」も多い質問である。

方言とは別な答えになるが湖南人はラ行とナ行の区別が出来ない人が多い。「いろいろ」を「いのいの」と言い「犬」を「いる」と発音する。ペットショップの前で趙麗さんが叫んだ!

「アイヤ!センセー、アソコ　イノイノナ　イルが　イヌ　ナ」（わぁー!先生、いろいろな犬がいますね）本人は真面目に発音してるのです。

《お母さんは知らないんじゃないの?》と言わしてみたかったけどやめた。

いろいろな場面が頭をよぎる。青海湖の大草原に群れる羊や毛牛を眺めている自分。水平線に沈む真っ赤な太陽を車中からぼんやり眺めている自分。うんざりするほどのお寺をたずね。霊山奇山、名山に登り。河川、湖、滝をめぐる。たった一日限りの、数え切れない中国人仲間たちの笑顔が浮かぶ。それぞれの項目が僕のセルにはあふれんばかりに詰まっている。

ところで、食事はいけんやった?中華ばっかいけ?」

やっと出た具体的な質問にぼくのセル(頭の中にある思い出の引出しのこと)が開く。質問者の好奇心を埋めるべく回答を探す。準備しているキーワードの中から《辛い・・とりわけ湖南料理の辛さは中国一》が抽出される。「昼は近くにある食堂に行って炒飯かラーメンを食べます。値段は5元〔７０円〕ぐらいかな。」「時には近所の銀行や商社の社員食堂で辛い定食を食べます」

日本で食べない食材に蛙、亀、ヘビなどがある。特に蛙はポピュラーな食材でスーパーの海鮮売り場のガラスケースの中の人気者だ。亀（ウグィ）も水槽に中でごそごそしている。買い物に付いて来た子供が亀の頭を突いて遊ぶ。

ところで蛙（チンワ）は政府の保護動物とかで**本当は**食べてはいけないらしいが飲酒運転や交通違反と同じで、決まりや規則は守る方が**本当に**珍しい国なのである。なのに街中にはパトカーがうじゃうじゃといる。「何してるんだろう?」公安は?日本の魚屋には採れたて、切り身、冷凍、どれも活魚じゃないけど、中国の海鮮売場では魚は水槽で泳いでいる。もちろん海鮮といっても日本でいう海で獲れる魚と同じではない。川魚だろうと池のタニシだろうと魚介類は全て海鮮なのだ。中華料理には刺身も無ければ焼き魚もない。食事の時、自分の前に取り皿や薬味を入れる小皿がないのは淋しいかぎりである。

また、中国人は食事中にはあまり水分を取らない。僕は茶水代わりにいつもビールを飲んでいた。飲まないと料理が辛すぎて食べられないからだ。　ぬるいビールが４元ぐらいだから水と思えばよい。冷えたビールを飲みたい時は給仕にビンダ!（氷的）と付け加えなければならない。でも、返って来る答えはいつもメイヨ〔ありません〕である。冷たいものだ。この「没有」と言う中国語は会話の常用語なのだ。いろいろなシチュエーションでメイヨー（ないよ!）は多用される。

日本だとこういう場合、たとえ無くても断定的に「無い」とは言わない。かならず親切の尾びれがつく。よく、中国人はおせっかいで親切というが、あれは好奇心から来るもので実際はそうでもない。公共心とか寛容とかいうものは持ち合わせていないようだ。まさに自己中心といえる。だから先日の愛国心の塊のようなサッカーの応援は不思議な気がした。

ある日、機嫌がよかったのか「没有」のあと「冷やしたビールはないけど、氷ならあるヨ。」と食堂の小姐が言った。「オウ!謝謝!! オンザロック ビジョーイイネ 」と大きな氷をいっぱい入れてもらい飲んだのはよかったけど、その夜は五分置きのトイレ通いで散々な目にあった。水道水で作った氷だったのだ。

中国人は遊び好きが多い。娯楽の世界でも発展はめざましく長沙市にも酒バーやカラオケなどに加えこの頃は超大型温泉センターが増えてきた。習慣なのか彼らは浴場を歩く時全くすっぽんぽんである。日本人はタオルをそえる習慣があるが彼らにはない。羞恥心と関係があるのかと思い、「女性も一緒ですか?」と発展的女子学生の袁静に訊いてみた。「行ったことがない」プイと横を向かれた。多分スケベな日本人と思ったことだろう。シマッタ!

そうそう**ホテルで困ったことがあった。**

蘭州のホテルの部屋で用を足して、サテ、紙は何処かな?と探すけど見つからない。 なんと、便座の真後ろにあるではないですか。これにはビックリしたナ。

「いったいどうやって紙をちぎるんだろう?」僕の左腕は五十肩真っ只中。

片手では絶対切れない事を初めて知った。是非、試一試?(シーイシー)

「イッバン(一番)心に残った風景は・・?」鳳凰(ホンファン)という古い(300年前の)街で見た風景だった。僕のHPの**永遠の鳳凰(ほんふぁん)**、より。

・画帳をひらくと一条の河流が古い城をたずさえて真正面から顔に当たってくる。横からみると一幅の絵に見える。縦から観ると詩一首に見える。・・・鳳凰大橋から虹橋を臨む景色を言葉で表現するのは難しい。

見る人、それぞれの感性にかかっているからだろう。僕に鳳凰行を薦めてくれた多くの友人がその理由を言わなかった訳が橋に立って初めて分かった。とてつもなく巨大なセットの前に自分がいるような錯覚。

時が一瞬とまる。目の奥に浮かぶ見たこともない筈の遠い支那の田舎の街並が現れる。そこへタイムスリップして幻覚体験をしている自分。・・じっと目を閉じると岸辺でパタパタと衣服を叩く洗濯棒の音、談笑している女たち声。裸で水遊びをしている子供達の歓声が頭の中の幻想世界に取り込まれていく。

現実に戻った僕も友人達に言いたい「上手く言えないけど、一度、鳳凰に行ってみませんか?」僕に鳳凰を教えた友人たちと同じように・・・。

まだまだあるセルの中、一番「怖かったこと」「惜しかったこと」「恥ずかしかったこと」「パニックになったこと」そして「誰にも言えない秘密のこと」など目白押しだが紙面がない。ところで皆さんも自分だけのセル作りに励んでいますか?僕は、とりあえずの賞味期限をあと五年に設定しました。五年は微妙な数字だと思いませんか?未だ、少しは先のようでもあり、いやいや.すぐそこのような気もします。五年前を振り返れば昨日のよう!!が実感だったりして。(PS)勝手ながら僕の五年は毎年更新されます。

本当の最後に一言。こちらに来ていつも胸が痛むのが物乞いの子供たちの多いことだ。街の中、地下鉄の車内、公園と、どの都市に行ってもやたら目に付く光景である。歩く事の出来ない奇形児らを正視する勇気は僕にはない。

食事中に、そっと擦り寄ってくる乞食の子供なら、せめて一角の小銭でもあげるけど、地べたに身を投げ出している不具な子供を見かけると横を向いたまま足早に過ぎるしか術がない。

繁栄への道をひた走る大中国のまず一番にしなければならないこと、それはこんなことからからではないだろうか?

再見。

私の中国6　２００４年2月

プロローグ『ケイジの日本語教師日記』　２００４・２・２８

鹿児島空港を飛び立ったのは2月28日の午後1時３０分だった。
２０キロをはるかにオーバーするトランク、それに１０キロを、ゆうに越すノートパソコンの入ったリュックを、バスで空港まで運ぶのは、チョッときついなぁと思っていたら、我が頼りになる婿殿（僕にはとりわけ気遣いがいい）が「私がくるまで送ります」とのやさしいコトバに一安心。
2日前から喉に違和感、と言っても大げさなものではなく、単に、いがいがした風邪の前兆らしきものがあったので、熱でも出て上海空港で入国拒否でもされたら大変、と心配していた。
この前の時もそうだったが、又３０分出発が遅れて飛び立った。
上海空港に迎えに来てくれてるはずのメルトモ李黎がやきもきする顔が浮かぶ。
空港で先日天文館、のスナック「夢ふたり」で知り合った竹之内氏と出会う。
なんでも上海と寧波に工場を持っているらしく、世界を又に交易をしてるとのこと。
よく、お喋りする方で、せっかく見送りに来ていた妻と、ゆっくり、しばしの別れの会話などするまもなく上海へ飛び立った。　きっと、妻はご不満であられたことと思う・・・。
竹之内氏と、飛行中もずっと話し続けた。鶴丸高校の八回卒と言ってたから、もしかしたら、僕と同年輩かもしれない。
家族は大阪においてる。と言ったのに、
「実は、こないだは同級生に見合いをさせられたんよ。」とわけの分らない話をしていた。

寧波には何十人もの中国人の社員がいるそうだが、まあ
「すごいですね、世界を股にして・・・。」と深入りは避けた。
上海は今日は雨だった。
４ヶ月ぶりの上海は霧雨のような雨が降っていた。
いかにも寒そうである。
メールで1号出口で待ってるよ。との李黎の返事だった。
トランクを台車に載せて1号出口をさがす。着いた出口が１４位だった。
本当に1号出口なのだろうか?と不安になるほどの距離である。
何も、スター同士のおしのびでもあるまいし、もっと到着出口（多くの人が出迎える場所）でもよさそうなものを、と思いながら台車を走らす。
にっこり笑った李黎の久し振りの笑顔を見た時はほっとした。
メルトモ李黎は２３歳のＯＬ
しばらく再会の会話を日中交じりで交わし、構内の銀行で3万円を人民元に換えると大きすぎる荷物をタクシーに載せ、まずホテルへ向かう。
外はしとしとと雨が降り、かなり気温も低そうである。
「今天上海下雨了?　昨天又那?」
「そうそう、シャンハイ、ズット　アメ・・」
会話が逆である。李黎との会話は電話の時もいつもそうである。
李黎の一番多い日本語は「アア、ワタシ　ワカラナイ・・・。」である。
南京東路のソフィティルホテルの２８階の部屋から外湾をのぞむ
ともかく、この天気は　風邪気味の僕にとって最悪の環境である。
「これでは、明日の水郷めぐりはダメかもしれない。残念・・・・」
ホテルでお互いの土産の交換をした後、とりあえず外へ出かけることにした。
メールでもやりとりしていたあの思い出の新天地に行くことにした。
しかし、　この雨ではあの新天地散歩の雰囲気は望めない。
タクシーを捕まえることすらむずかしかった。
思ったとおり、新天地の人出はまばらだった。外のカフェテラス使えないのでとても新天地らしさがなかった。
それでも歩き回って、例のフランスのムーランルージュ風のカフェレストランで

食事をした。
上の李黎のスナップはそこでのものである。
外はとても寒く横殴りに，雨は降っていた。李黎とふたりタクシーを捕まえるのに何分かかっただろうか？
李黎はそれでも嬉しそうだった。
結局、愉しみにしていた上海での一日目はこんな風で終わった。
食事は南京路の吉野家の日本にはない「牛丼」を食べた。
次の日、もし、天気がよければ朱家角に行こうと話していたが、次の日も朝から今にも降りださんばかりの空模様だった。
結局、この日は僕のこちらで使う携帯電話を探しに、この前行った
徐家匯（Ｘｕｊｉａｈｕｉ）にふたりで出かけた。
徐家匯（Ｘｕｊｉａｈｕｉ）に地下鉄で着いた頃には、やはり雨が降り出してきた。
李黎がお姉さんの誕生日のプレゼントを買いたいというので、デパートを２軒ほど付き合い。
徐家匯（Ｘｕｊｉａｈｕｉ）の天橋から見た街
夕方、デパートの６階から上が映画館になっているところで、フランス映画の面白くない、１８世紀ごろのフランス人がなんと、すべて中国語で話をする映画を観た。
映画館は１０軒ぐらいがワンフロアにあって売り場は一か一所。今度、中央駅に出来るアミュプラザの映画館もここまでの規模はいかないだろう。と思う。
大きなレストランが下の階にいっぱいあり、日本料理もあれば回転すしも流行っていた。
上海は、もう、日本人にとって、日本の都市となんら変わらない街になってしまったような気がする。
まだ時間があったので、あまり行きたくなさそうだった李黎を連れてこちらのカラオケ屋をたずねてみた。　ここも、若者で一杯だった。
テレビの画面の上の方に帯状にテロップが流れていた。
・・・外面是下雨清滞在慢慢・・・雨が降ってます。ゆっくりしてください。
そんな、案内コメントだった。
小部屋の中は、日本とほとんど変わりない。衛星カラオケはまだないのか、
でも、リモコンで操作する同じようなタイプでマイクは２本　外の廊下とは透明ガラスで仕切られているので、明るい感じである。
突然、ボーイがとても巧妙に盛り付けたどでかいフルーツをもって入ってきた。２０元だという。日本円で３００円ぐらい。　折角、作ってきたのだからと、もらうことにした。　帰りに出口の横に同じフルーツがケースの中に６個ぐらいあった。あまり乗り気でなかった割には李黎はひとりでよく唄っていた。　李黎の唄う歌は若すぎて上手いのか下手なのか分らなかった。
日本の演歌も結構たくさんあったが、こんなところで「細雪」も場違いな感じで、前奏を聴いただけでキャンセルしてしまった。
鹿児島で留学生に習ったテレサテンの「月亮代表我的心」がすっかり僕の十八番になってしまった。そのほか２，３曲唄ったか？
沖縄の「花」は唄っててしっくりきた。
外はまだ雨が降りしきり、タクシーはなかなか拾えず、これは身体にまずいぞ、とちょっと心配になった。
明日はいよいよ待望の長沙入りである。
李黎にもらった中国茶器が大きすぎてとても長沙までもって行けそうにないので、李黎に、今度日本に帰る時もらうね、貴女の家まで、一緒に持って行ってあげよう。とタクシーで出

かけた。
李黎の新しい住居は古いビルの3階にあった。
ビルの中におおきな扉があって、そのなかに部屋が3つぐらいあり、それぞれに又、扉があり、そこのひとつが李黎の部屋だった。
とても小さな部屋だったが、お姉さんの家から独立し、ひとりで頑張っていこうとする李黎のたくましさを感じた。
古ぼけたたんすの上にB5サイズの写真立てがあった。
なかに白い犬が二匹遊んでいる写真だった。
「このなかに今度、ケイジサンと写した写真を入れたいです。」
我想限慶二先生一起照片・・・・・・

《ケイジの日本語教師日記》　2004/03/04

中国湖南省長沙市

今日が何日で、何曜日なのか、未だ自分の中ではっきりしていません。
いくつかの理由があるのですが、まず第一は体調が優れないことです。来る前に風邪を引いてしまいました。
実は2年前から僕の体の中に性質の悪い咳ウイルスが棲みついていて風邪を引くと出てくるのです。一番活発になるのが就寝中です。
二年前、三峡下りの遊覧船の中で同伴した平岡氏が「大石さん、大丈夫ナ、息が止まるかと思ったガ。」と言うほど、ひどい咳がでます。
今、毎晩これに悩まされています。特に1日目と二日目は長沙は雨で、とても寒かったのです。妻がホッカイロを五、六個入れてくれてたので助かりましたが、部屋には勿論暖房はなく、夜具も薄く、体温は上がらず、散々でした。
二番目は歓迎の宴が二晩、続きました。実は、今日もありそうなのです。かなり白酒（56度）も飲まされました。これも頭が朦朧としている理由のひとつかもしれません。
昨日から早速、授業が始まりました。10時10分から12時まで途中10分の休憩があります。「日本事情」という学科を、二年目の生徒に教えます。
かなりの日本語を理解しているので楽です。（続きは又後で書きます。今から範先生と昼食に行ってきます）
続きます。僕の授業はないのですが1年生の生徒たちが僕と話をしたい。「日本の話を聞きたい」というので学校に戻りました。
20名ほどの生徒達と僕のこと、日本のこと、鹿児島のこと、いろいろ話し合いました。日本語を聞き取れない生徒が多いので、僕にとってもカタコト中国語の出番が多く、とても勉強になります。
花見の話、得意の釣りの話、映画の話、ファッションの話と、尽きることがありません。
・・・突然、範先生が23人の方と教室を訪れ、皆に言いました。
「大石先生はこれから長沙市人民政府外事室の方とお話があるのでこれでお仕舞いです。」
ということで、今度は市の外事担当の温上達さん他、女性二人のインタビューを受けました。
17日にNHKから長沙市と鹿児島市との間でネットワークによる交流が始まるので日本から取材に来られるらしく、僕に対するいくつかの取材に協力してもらえないか?との申し出でした。
「僕でお役に立つのでしたら」と返事をしました。そのあと、僕の住まいを是非、見せて欲しいとの要望があり、案内し終えたところです。

2004/03/05　はじめての授業

すっかり暖かくなってきたのと、こちらでは正午から2時半までは休みなので午睡の癖がついて、やや体調が戻ってきました。 今日は授業は朝８時から９：50分まで（途中10分の休憩）の100分です。作文を担当しました。いくつかの日本語の言い回しを使いながら自己紹介をする内容です。原稿用紙という習慣がないのか、又、ほとんど横書きの習慣がついているらしく、教科書にある原稿用紙の使い方を説明してもぴんとこないようです。

何故、枡の中に字を入れなければならないのかから説明が必要です。

結局、原稿用紙の使い方・・・4文字開けてタイトルを、とか、途中で文が切れたら次の行は頭のひと枡を空けるとか句読点や括弧も一枡とするとか云々・・・多分必要がないと思うので教えるのをやめました。

実は、白状しますと1日から未だシャワーを浴びていないのです。勿論、洗髪もです。風邪気味なのと部屋のシャワーの湯圧も湯量も悪く、裸になったら震えが来そうで怖かったのです。

範院長に聞いてみましたら。「サウナが有ります。とても気持ちがいいですよ。「僕も大好きです。今夜、行きますか?」「長沙には10軒ぐらいあります。僕の行くところは、最近出来ました。日本の温泉サウナを真似しています。とても、人気あります。」聞いてるうちに僕の頭の中は、もう湯気で濛々として来ました。

久しぶりの温泉（湯）はまさに「千と千尋の神隠し」そのものでした。ロッカーで裸になり、大きな浴槽、バブル風呂、薬草風呂、露天風呂、５つ位の大きな浴槽に中国人たちがお喋りしながら入っています。

特に、薬草が人気のようです。

日本の温泉センターとすこし違うのは、否、かなり違いますのは、タオルが全く供用されないことです。もう、全くのスッピン状態です。

それは、皆同じスタイルなので、手で隠すわけにもいかず（目立ちますから）いいとして、入る前に、まず、髪や体を洗うのに手しかないことです。

これには、ちょっととまどいました。手で汚れがとれるのか??

結局、湯船に浸かった後で「あかすり」をしましたから充分汚れはとれましたけど。

入浴後、備えのシャツとパンツに着替え、二階に上がり大きな休憩室（男女とも）でセルフスタイルの食事（夕食）を食べながら、ステージショーを楽しみます。

シンガーの歌を聞いたり、ゲームに参加したり、雑技ショーを見たりしてくつろぎます。ビールを飲んでいるうち眠くなりました。朝方の3時までここは開いてるそうです。風呂は24時間だそうです。

ちなみに料金は入浴代48元、あかすり22元計70元、日本円にして1000円ぐらいです。食事はサービスとのことでした。こちら、長沙市の平均月収が一万円に満たないそうですから、サウナはかなりの贅沢だと思います。でも、長沙人は自分が楽しむことにはお金を惜しまないんだそうです。

といっても、後の半分は寝て暮らす、と言うわけにも行かないと思うんだけど。

どうなっているんでしょう???長沙人の感覚は?

2004/03/06　　天心閣

今日は休日。早速、１年生の生徒達からデートの申し出が来た。

図書館と天心公園に一緒しませんか?と言う誘いである。むろん、断るわけもなく、市内見学と相互学習の始まりである。男一人・武漢出身の屈君は大学出の日本歴史に詳しい青年である。松本清張と司馬遼太郎のファンだそうで、いろいろな勤皇の志士に詳しいのにはちょっとびっくりした。あと、４名の少姐たち。長沙弁の僕の老師になった黄玲さん、日本人美人タイプの陳さんは南昌出身。歩いて２０分のところに図書館はある。近道を行きましょうと、民家の中や路地を通る。表通りと裏通りの格差にはいつも驚かされる。

西安でも北京でもそうだったが、裏通りを歩くときは何故か身構えるきもちになるものだけど、この街を歩いていて、そんな気持ちにならないのである。

べつに治安の問題でもなさそうである。もしかしたら、今の自分に旅人意識がないせいかもしれない。住人になっている生徒達と気持ちが一緒なのかも、と思う。

図書館を出て又みんなでがやがやと街を歩くこと２０分ぐらいで目的地の天心公園に着いた。

歴史にうるさい屈クンがしきりに僕に語りかけて来た。『太平天国』を先生は知っているか?と聞いてるらしい。「不知道」とこたえると、有名な話である。こここそがその蜂起した場所なんだ。と言いたいらしかった。僕の電子辞典にも書いてあった。　太平天国：１８５１年から１８６４年・洪秀全らによる中国史上最大の農民反乱で建てられた国家政権、キリスト教信仰に基づき“拝上帝会”を組織、広西で蜂起したのち北上して首都を南京に定め、“天京”と称した。天心閣の説明を湖南省の旅行案内によれば・・・長沙市南東の高い一角に位置し登れば長沙市全容を鳥瞰できます。高さ１７・５ｍ全部で花崗岩の彫刻品で装飾され、湖南省唯一の古色蒼然としている奇抜な形の古城です。

・・・・と、あまり上手い説明とは言えませんが、来て見ると、なかなかいいところです。下の公園内ではおびただしい数の人がなんと凧揚げをしていました。

竹岡健一氏のホームページ『見知らぬ街で』でなんとなく長沙の凧上げ好きは感じていましたけど今回、目の前で実体験しました。

帰りは学生たちと街中の食堂で面条（うどん）を食べて帰ってきました。

今日は日曜日。１１時半ごろに、二年生の李湯竜くんが迎えに来た。李湯竜くんは洞庭湖の近くにある岳陽という街の出身である。男子生徒のリーダー格といった感じである。

校門の前で、「４人の学生が僕をまっています。湘江・桔子洲に一緒に行きませんか?」との誘いである。

学校の前付近は市街地の中にある。

授業中に僕がそこに行きたいと言った、と言うのだ。

そう言えば授業中によく生徒から質問が飛ぶ。

「先生は長沙の何処が好きですか?」

「先生は未だ来たばかりなのでどこへも行っていません」と答えると、

「それでは先生はこれから何処に行きたいですか?」

「先生は何を見たいですか?」「見たいのがありますか?」とくる。

そんな質問の答えに「湘江・桔子洲」と言ったのかも知れない。もつとも、行ってみたい候補の一つではある。

「湘江・桔子洲」は長沙の市街地を二分する大きな川、湘江の中洲である。鹿児島の甲突川といったところか、と言っても規模は比較も出来ない。
とにかく広い中洲。蜜柑の木が多いので付いた名前なんでしょうか？
写真は川で捕れる魚と何買ってますか？端から端まで何百メートルと言った規模である。
生徒たちの質問の意図の一つは、学習した日本語会話の力を試してみたいのだろう。日本人を相手に、日本語でやりとりをする。そのこと自体が目的なのかもしれない。
　質問の中身は「WHAT 何が？」「WHERE 何処に？」が一番多いのも未だ「HOW どのように？」とか「WHY なぜ？」といった会話まで至ってないのかも知れない。
　もっとも偉そうなことを言って、こちらは単語の羅列と繋ぎは日本語まじりで、まともな中文にもなっていない始末。答えが返ってきたら何を言われたかちんぷんかんぷん。　彼らにとって、僕と行動することは会話学習なのだろう。もっとも、それはお互い様なのだが。だからぼくはこの頃気をつけているのは、なるべくみんなと公平に会話をするよう心がけている。のかも知れないけど。
　学院のある人民路を少し行くと詔山路という通りと交差する有名な通程国際大酒店のある通りである。
その近くからバスに乗って五一大路を山手に曲がると目的の一橋に着く。
　一橋から「湘江・桔子洲」までの生徒たちとのハイキングはとても楽しいものだった。
ただ川辺や草むらのなかを３０分ほど歩くだけの行軍にすぎなかったけど、僕にとっては何とも言い表しようの無い懐かしいものだった。
授業の話を少し、してみます。
もとより僕はにわか教師、でも日本語の一般論については、日本人であるから分かるし、正しい使い方かどうかは別にして、外国人が間違って使う遣い方はすぐに分かる。　しかし、こちらで教えている「日本語の使い方」教科書を見てみると、我々日本人がどちらでもごく日常遣っている日本語を二つあげて、どちらの遣い方が正しいか？との問いである。
解答にはその文法的違いまで丁寧に書いてあり、学生たちはそれをしっかり勉強する。
こちらでは、と書いたが日本の日本語学校でもこれは同じである。
　それを覚えなければ日本語検定試験１級や２級に合格しないから皆必死なのだ。
　今日も一人の生徒が質問してきた。
　「先生！会社に行か（なくて、ないで）映画を観に行くつもりです。の（なくて、と、ないで）の使い分けを説明してください。
　僕は数回、口の中で反芻してみるうちに分からなくなってしまい、うっかり誤魔化してもまずいと思い。とっさに、
　「こんな場合、われわれは、会社に行かずに映画に行きます。」と言います。と言ったら、すかさず、
　「“行かず。”は写文、つまり書き言葉なんじゃないんですか？」と返してきた。　そんなこと僕が知るかい、と開き直りたくなったけど
　「みなさんはそう習ったかも知れないけど普通に使いますよ」と言ったまではよかったが、自分でも段々自信が無くなってきました。
　日本語をマスターすることと、日本語の日常会話を習得することとは同じではないんだ。われわれが英語を習うころ英文法の時間とリーダーはあっても英会話の時間は高校時代に無かった。
　大学受験の時、英語の試験にデクテーションという外人教師による聞き取り試験があり、英文に直せず苦労したのを思い出した。
　それと気づいたことですが、彼らは日本語を話す時と母国語である中国語を話す時の姿勢が違うことです。
中国語のときはしまりの無い姿勢で話しますが、日本語を話す時はなにやら姿勢が良く見えます。
　余裕と緊張だけの問題ではない。他国語を話す時はその人の性格まで少し変わるのではないでしょうか。
あとで範先生や寺坂先生（ハーフ）とも少し教師としての日本語指導について話し合いましたが、お二人とも　「日本語

の類義表現の使い分けはとてもおもしろい」といっておられました。

2004・3/・9　　温泉浴場

今流行っている日本で言うところの（・・・温泉センター）と同じである。

浴場内を紹介出来ないのが残念だが、まあ、産業道路の何処やらに出来た、でっかい温泉センターと同じと思っていただけたらよい。

3階建てで、1階に各種の湯があって、日本式薬浴が一番の人気である。必ず日本にある、あの電気風呂はない。うたせもない。あとはたいている。

露天風呂は室外温泉と書いてある。二度目だけどまだ一度も人が入っているのを見たことがない。

温泉と書いてあり、壁にそれぞれの湯のpH値も記してあるので、温泉とは思うが、果たして本当に、地下から掘りあげた天然温泉とは疑わしいものだ。

一階には室内泳池、つまりプールもある。二階は、前も紹介したが、大ホール美食広場である。いろいろなステージショーを楽しむことが出来る。他に子供の遊び場や大人の遊び場、つまりマージャンやトラプをする部屋、卓球場も備えてある。

三階は大きな休憩室（仮眠の出来るベッド風椅子が並んでいる）何と言っても3階の魅力は全身マッサージから指圧そして足浴（マッサージ）である。

ちなみに料金はかというと、最高の油全身が60分138元と言うから2000日本円。指圧は中国式が最初の45分が58元で続けてすると38元に下がる。

タイ式マッサージは少し高く50分で78元である。まあそれでも日本円にすると1000円程度である。

この頃、中国も料金設定が日本やアメリカのスーパーもどきになって来たのか、8は何だろう?

日本人のお好みの足つぼマッサージは1時間45元である。700日本円といったところか。耳掃除は20分で28元。まだ一度も体験したことがない。こわいから。

今日は（白天）昼間に行ったので、さすがに客は少なかった。値段が高い（入浴基本料金48元、あかすりが付くと68元）は日本では多い熟年客では手が届かないだろうから。

ちなみに長沙の平均給与が8000円（日本円）とすると、ここの入浴代は1000円。ちょっと考えてしまう。

今、午後8時10分、竹岡健一氏（長沙大学日本語教師）が彼のホームページに書いてあったが、花火か爆竹か数分間なり続いている。サマーナイト夏祭りを思い出させる。何なんでしょう?

アッ!もしかしたら、今日は「働く女性の日」とか、リュ先生が言ってたようでした。

それかもしれません。

温泉浴場のことでもうひとつ。

この前、二階の食事は全部、無料と言いましたが、本当は時間で違うらいいのです

昼は有料。6時から11時までは無料。11時から夜中の2時までは点心（お菓子類は）無料。

ということらしい。

これって、ちょっとおかしくない。お客さんが一番多い時こそ有料にすればいいのに。日本だったら「土日祝日はご遠慮ください。」と無料客には但し書きが付きます。・・ここだけの経営方針と受け止めたい。

今日は範先生と区の公安局に外国人居住届けを出してきました。

2004/03/10

昨年の話。鄭さんと国際電話をしました。彼曰く

「今、範さんは大石さんの住居を探しています。静かなところ、探しています」

僕は応えた。

「鄭さん、範さんに言っててください。街の中がいいよ。その辺にお店がいっぱ

いあるような」・・・

そして今年の3月、初めての長沙、空港にて、範さん曰く

「大石先生、先生の家、とても古いです。でも一番のいいところは、学校に近い。すぐ隣です。街の中です。」

初めて見た我が家は45年前、初めて東京に行った時新しい学生生活を始めた時と、どう比較していいか?

いい言葉を見つけ出せないところです。　部屋は天井は高いし狭苦しさはないのですが、部屋に辿り着くまでの階段付近や窓の建て付けが悪い。鍵も日本では住宅ではあまり見かけません。

もう殆んど窓の錠は錆付いて化石化している状態です。

まあ綺麗好きな人が見たら口を覆うかもしれません。僕は平気です。

今日始めて、実は洗濯をしました。長沙の気温はなんと26度だったそうです。結構溜まっていた洗濯物を洗濯機を使って洗いました。わが家でしたことが無いので

ダイヤル操作が分かりませんでした。

でも、何とか脱水まで上手くいきました。干そうと思って脱水機をあけましたが入れるかごがありません。ナイロン買い物袋に入れて干し場に行きました。・・・なんと、干すロープが2メートルの高いところにあるじゃないですか。

「いったいどうするの?」答えは、ハンガーにかけて鍵棒で持ち上げるのでした。

でも、シャツはいいとして10足もある靴下は「どうすればいいんだろう?」

ちなみに洗濯の排水はトイレのタイル場に流します。従って、いつも洗濯の度にタイル場は洗浄されるというわけです。

この家で一番困るのが台所の洗い場です。狭すぎて顔を洗うのに苦労します。中国の洗面所は・・・と言うわけではなく、これは、あくまで僕の今の生活環境のはなしです。今、長沙市も目覚しい発展の途中です。近辺にも日本に劣らない高層マンション群が一杯建築中です。

リカバリーこそが目的の僕ですから、バックトゥーザパーストこそ願ってもないことで範先生には感謝しているところです。

午後7時頃、角のパン屋に明日の朝のパンを買いに行ったら王俊クンに会った。

「先生、何処へ行くのですか?晩御飯は食べましたか?」僕は昼が遅かったので夜は抜こうと思っていたが彼とは一度話しをしてみたかったので、

「何処か美味しいところへ連れて行ってくれる?」と言うと、「いいですよ。」と言う返事だった。

彼の連れて行ってくれた食堂はテーブルが5つほどのお世辞にも綺麗とはいえないその辺の庶民の食べ物屋だった。

ビールを1本注文し、落花生をつまみにいろいろ語った。彼は湖南の出身でこの4月に本当は横浜の大学に留学するつもりだったらしい。

昨年から急に中国からの留学に厳しい制限がついた。バイトをしないでもある程度生活出来るだけの国からの仕送りが出来る生徒でないとビザが下りないと言うのである。彼は言う。

「中国人が日本で悪いことをするから仕方ない。中国人がわるいのだから・・・・」と、あの福岡での事件を知らない人は居ない。だから、と言って、この制裁?みたいな措置はどうかと、僕は思う。

もっと、条件外の人それぞれの選考方法があってもいいのではないかと思う。お金がなければ留学できない。これでいいのだろうか?

日本語学校に来ている生徒はそれなりの経費を親や自分で働いて貯めたお金で通っている

年間6000元の学費に食事代月に200元、寮費が1年間700元というから、親の所得からいったら結構な金額である。

そこまで頑張って日本語の習得に励んでいる若者を蓄えが無いからという理由だけで留学を許可しない。

夢を描き励んでいるこれらの学生たちは、いつの日か

、必ず日本にとっても、良い人材として貢献する人達だと僕は思うのだが・・・・。

王俊くんはとても真面目そうな学生だ。日本留学を諦めて、5月に韓国の大学に留学するそうだ。そして、卒業したら、必ず日本に行くと語ってくれた。

彼と、いつの日か日本で会いたい。と僕は思う。
余談だが、彼の書く文字は素晴らしい、お父さんは書の先生で、近所の人は何か有ると彼の父に字を書いてもらいに来るそうだ。厳格な家庭に育った彼の性格はひと目で分かるのである。
　この他に８畳くらいの居間が有ります。ＴＶに応接セ　ット、団欒室といったところでしょうか。
　トイレはちょっと紹介出来ません。

2004/03/11　黄興路の歩行者天国

靴を買いに黄興路の歩行者天国に行って来た。
「黄興路」とは鹿児島に例をとれば、さしずめ「西郷隆盛通り」とでも言おうか。
　彼の長沙出身の辛亥革命の志士「黄興」を讃えて付けた道路である。交差する長沙一の大通り「五一大路」はさしずめ「毛沢東路」といったところか。
　近、現代の中国の二大英雄を生んだ湖南、長沙の風土とはどんなものだったのだろう？
　若者や家族連れで賑わう歩行者天国「黄興路」を初めて訪れ、今からおよそ１００年前、ここ長沙で生まれ、活躍した一人の男を想う。身長は１６０センチ小太りで西郷を小ぶりにした感じから、中国の西郷隆盛と呼ばれていたという。・・・（中村　義氏・資料より）すなわち湖南省系出版組織の一つに「湖南編訳社」がある。・・湖南は尚武を好み、薩摩の風がある。日本建国は薩摩に依存した。将来の支那も湖南に頼らんとするものである。日本は小さく、また薩摩は湖南にくらべて小さい。しかし、日本は変わってしまった。
　中国は大邦であり、故に湖南は大薩摩である湖南には屈原、王船山等の人物が排出している。湖南が変われば中国はこれに続くと信じる。それ故、同士は団結してたちあがろう。・・・

　湖南出身の当時の日本留学生たちの意気は高い。

・・・中村先生講演より・・・
　２０００年続いた中国の王朝体制を倒した辛亥（１９１１年）革命の指導者を一人上げれば孫文「孫中山」です。
　こんにちでも中国革命の先駆者と呼ばれています。
台湾では国父です。
　確かにそれは、彼の三民主義つまり、彼の政治思想といいましょうか、理念といいましょうか、それは、中国の誇るべき、いや、アジアの誇るべきものでしょう。
　そういう孫文の輝かしいことは、言うまでもありませんが、同時に、辛亥革命は孫文ひとりでなし得たことではありません。一心同体といいましょうか、かけがえのない盟友、
　そういう存在が黄興でありましょう。　まぎれもなくナンバー２です。お国柄と言いましょうか、二番目というと、影が薄くなってしまいます。
　又、孫文はいろいろな文書を残しています。それに対し、黄興のほうは　大変少しです。　しかし、最近の研究と資料によれば、孫文は黄興に
「２年間自分に任せ、あなたは静養し、もし私が失敗したら、次はあなたがやって欲しい」と頼んだ。と言われている。

・・・講演：「辛亥革命の志士・黄興と西郷南洲」
中村　義東京学芸大学名誉教授
2002/12kagoshima/reimeikan

　先日、こちらに来る前に中村先生に頂いた、湖南師範大学の「黄興」研究者・李主任宛の僕への紹介状と共に、去る1月に黄興の生存しておられた最後のご子息が亡くなられ、北京の革命墓地に埋葬された記されてあった。
　ゆうべ、約束していた王俊クンに案内されての街ぶらぶら（中国語でガンガンジェ）だった。
こちらに来て初めてマクドナルド（平和堂１Ｆ）でハンバーグを食べた。日本製に

比べやはり辛い。長沙バージョンというのだろう。
歩行者天国の端にはドデカイモニュメントが置いてあった。帰りはタクシーで１０元でした。

2004/03/12　今日も黄興路　今日の長沙は寒い。朝の授業が終わる頃（１０時）雨も降ってきた。寺崎先生の風邪も未だ治らないようで苦しそうである。実は今日も黄興路に行かなければならない。
昨日、買った靴が少し小さかった。店で試しに履いた時はちょうどいいと思ったのだけど、帰ってから靴敷きを入れてみたら入らないのだ。よくよく見ると２４と書いてあった。店でもっとよく見ればよかった。
今日泡雪さんが一緒に行ってくれるそうで助かった。何とか一人で行けないこともないが交換なので細かい交渉になると未だ言葉が気になる。
でも、こうして頼ってばかりいたら進歩が遅れそうな気がする。最初、僕が話して、上手く行かなかったら手助けをもらおうか。
泡雪さんは張家界でしばらくガイドをしていた女性で日本語はもうかなりの程度である。まだ２０歳というけど、とてもしっかりしている。
あの、授業の時「先生、ず、は書き言葉じゃないんですか?」と質問してきた女性である。気が強そうだけど頼りになる感じだ。
付いて来て貰ってよかった。なにやらまくしたてられた。長沙の言葉はくせがあるのか僕の習った中国語に聞こえない。人にもよるが。
「家に帰ってから履いたら少し大きかったので。」と言ったら、
「ここで試した時、丁度良かったのにどうしてか?」敷き皮が入らない。が言えず、泡雪さんに替わった。定価は１万円（日本円で）の８０％引きで2千円ちょっとでした。こちらでは高級品（中国ブランド）です。

彼女はまだ2時から授業があるとか、昼ごはんをご馳走?してあげよう。と言ったら、日本料理「火の国ラーメン」に連れて行ってくれた。
メニューの豊富さに吃驚!昼から寿司もと思い、牛丼２３元、と彼女はカツ丼２５元、ちなみにラーメンの種類も多く（１５種ぐらい）値段は２０元前後だから、こちらで学生達と行く麺類比べると５倍ぐらいの値段である。
さんまの塩焼きも美味しかった。大根おろしも醤油も日本と同じで、スライスレモンまでちゃんと付いている
当たり前が感動するから不思議である。
昼から青島ビールを1本とって彼女との初デートは終わった。話して見ると思ったよりやさしかった。日本人の友人（日本企業）が2人居るそうで、日本の現状にも結構詳しいのには驚いた。
面白い中国のことわざを教えましょうか?と泡雪が言った。
「男性は金持ちになると悪いことをします。女性は金持ちになるために悪いことをします。」
いずこの国も同じこと、「だからお金に惑わされないように、」ということなのか?今日の昼ご飯代９０元は久し振りの贅沢でした。帰りに１０元の次回サービス券をくれたので８０元（日本円で千円ちょっと、というところでした。）写真は余さん（ちょっとお店の重信さんタイプ）と食べてから思い出して写したサンマと店から眺めた黄興路の入り口付近。

2004/03/13
今日は長沙に来て2度目の土曜日。長沙と言えばまずここ岳麓書院が有名である。毛沢東ゆかりの愛晩亭や黄興の墓もあるという。
今日はそこに行って見ようかと、歴史家の屈クンに電話するが返答が無い。そう

こうするうちに電話が鳴った。
「もしもし～先生ですか？　わたし、呉義林と申します。先生、今日、植物園に行きませんか??桜花（イン　ファー）綺麗ですよ～。」
２年の安徽から来ている女子である。
１０時校門前で待ち合わすことになった。
呉さんを始め、黄雪蓉さん、李思玉さん、李碧雲さんがニコニコ顔で迎えてくれた。　「今天天気変好了！」良い天気になるのかナ?そんな空模様である。
近くでバスに乗り、詔山路を南へ向かう。３０分ぐらい経つとバスは市街地を抜け道路沿いは瓦礫の山である。道幅を広げる計画なのか、街路樹を引っこ抜く作業が続く。
バスは、もうでこぼこ道を飛び跳ねるように、そして、突然の急ブレーキ、一番後ろの客が二回転して転んだ。一席あいた席に生徒達は僕へ勧める。
「先生、どうぞ！」年寄り扱いなのか?単に、年長者を敬う、中国の習慣と思い，いつも当たり前の顔で座ることにする。変に遠慮するのが日本の変（と思うらしい）習慣と心得ることとした。　１時間ぐらい南へ下る?それとも上る?かで植物園前に着いた。コンビニで飲料水とお菓子を買って植物園入口に来た。４人が言った。
「ここは一般の人の入口ですよ。ひとり１０元です。私たちは学生だからここからは入りません。」
なに!それって「ただ入り！」じゃないの??
ニコニコ顔で４人は公園横の道路をどんどん歩く。３０分ぐらい歩くと、そこはたどん工場や汚い民家が現れる。１０元ぐらい、僕が払うから・・生徒たちは僕の話は無視。「私たちは学生」・・・と。
こんどは右の山道を登る。「先生、疲れましたか?」
「不累！　不累！」疲れてないけどさ、君たちは学生だけど、捕まったら、大人で、しかも外国人の僕はどうなるの?しばらく行くと、一人の女性がつきまとってくる。呉さんに訊いてみると、　「一人、１元払うと、抜け道を教えてやる。」
と言っているらしい。結局、５元払って，案内してもらうことになった。抜け穴の紹介料、もしかしたら、そこに穴を開けたのは誰!?
脱走者のような気持ちで植物園に入った。木々の間を１０分ぐらい駆け上ると「ワーツ、先生、きれいよ、桜で～す。」の歓声にホッと胸をなでおろした僕でした。
へえ～っ!本当に、千本桜が長沙にもあるんだ。まあ、何本かあるぐらいに思っていましたけど、充分、花見が出来る広さでした。
これなら、日本だったら「桜の名所・??公園」と宣伝文句にうたっていいほどです。
もともとは竹がうたい文句のようで、モニュメントの柱も竹を模して作ってありました。
森林公園と言うだけあって、広い植物園です。変わったことと言えば公園内に自家用車で入って来れるようで、あちこちにマイカーが乗り入れてありました。
数年後は車社会も目前の中国、おそらく禁止されるでしょう。でも、もしかしたら、日本の常識が通らない中国のこと、公園内に大きな駐車場が出来るか?
それとも、平気でそこらへんは車だらけ、なんてことにならないよう願うばかりです。
公園内のスナップ写真は下記をクリック。

http://www.keiji.tenmonkan.com/chosaalbum3.htm

（想）今日１３日は、鹿児島では新幹線開通でさぞ賑わっていることと思います。「おめでとう！新幹線」

2004/03/14

銀園食堂は詔山路を北へ１００メートルぐらいのところにあります。も少し行くと湖南図書館があり、その隣は五つ星ホテル「通程大酒店」です。

今日は絶好の行楽日和、昨日、呉さんたちと岳麓書院に行こうと約束をしていたのですが、李湯さんからの電話で、彼女らは疲れたので来週にしたい。とのことでした。仕方が無いけどこの絶好の日和に暗い部屋にこもっていることも無かろうと屈クンに電話したら

「先生、図書館に行きませんか？」とのこと、

「何も、この天気に図書館も無いでしょう。博物館に行こう」

と言いましたが、

「とても遠い、僕は勉強したい」と言うので「仕方ないか。」と、図書館へ出かけました。

案の定、図書館は面白くなく、屈クンも折れて、昼ごはんを食べたら博物館に行くのを承諾しました。銀園食堂はこの近くの銀行の社員食堂と聞いたような気がしますがはっきりしたことは分りません。

大きな門があって検問もある横から入り１５０メートルぐらい先の７階建てのビルの二階にあります。

食堂の小姐も、もうすっかり慣れた様子で、僕が取りに行くと、ご飯の盛を少しにしてくれます。

僕がいつも　「我的米飯是一点点」ご飯は少しでいいです。というからです。７品ぐらいのおかずの中で僕の好みも分ったらしく上手く分けてくれます。それにしても中国のご飯はまずいです。ここのは特にポロッポロしてます。今日は一つの発見をしました。

中国の食卓がなぜあんなに高いのか？　ッあれはご飯を、あの取りにくい先の直角になった箸ですくう時に、顔を近づけ易いために高くなっているのです。

屈クンを見ていると、箸は添えてるだけで口が皿に直付けです。悪い表現をすると犬式食べ方です。思い切って僕も真似してみましたら結構食べ易かったです。日本のレストランではとんでもない光景です。

何度も写真を撮ろう、と思いましたが我慢しました。

定食が４元（６０円）缶ビールが５元の食事です。

結局、今日は博物館と烈士公園から４時に帰ってきて６時に又ここで夕食をとりました。ですから、今日一日の食事代はビール２本いれて２７０円ということになりました。

2004/03/15　　**中国の普通の美容室**少し髪がうるさくなったのと白いのが多くなったので美容室に行って来ました。その辺の普通の美容室です。１０人ぐらいの男女の美容師がいました。中国は男女兼用なので正確には理美容師と言った方が正しいかもしれません。

３，４日、髪を洗っていなかったので洗髪を楽しみにしていたのですが裏切られました。

「そうか、染める前だから汚れを取る程度になんだろう。」納得、納得、良心的。５分ぐらいで終わりカラーブースへ。

なにやら分けの分らない着衣を二枚ほど着せられ、最初２０グラム位のカラー液を頭のあちこちに付ける。１０分ほど放置して今度は２０分ほど置く。

ほとんどマニキュア的塗布法と言える。各椅子の前にはテレビが置いてあって退屈はしないが隣のテレビの声がうるさい。

やがてスチーマーを被せられる。とても熱い。皮膚が心配になって身体を下にずらしたら美容師が来てスチーマーをまた下げた。

客は昼だけど混んでいた。でも、びっくりしたのは男性美容師の一人がヘアダイカップを持っているのかと思っていたら昼飯のどんぶりを持っているのだった。口に運んだので仰天した。立ったまま、しかも、店内・・・

やがて、店が空いてくると、スタッフの一人が、客待ちのソファで昼寝を始めた。二度びっくり。三度目、別なセット椅子で二人の美容師がテレビを見ながら按摩を始めた。のにはもう僕も慣れてしまっていた。

そう言えば以前、大きなレストランで受付の小姐が二人、キップを売りながら、どんぶりから麺を口に運んでいたっけ。驚くことは無い、ここは何事にもおおらかな中国大陸なんだ。

カラー施術が終わってシャンプー椅子に案内される。

「さあ、今度はマッサージ専門の中国のこと、たっぷり洗ってもらえるぞ。」

一度目は軽く、二度目こそゴシゴシと、と思っていたら、何やらタオルで頭を拭きだしたのだ。

シャンプーは5分足らずで終わった。ガッカリ。

ニッコリ笑って、手招きする男性スタイリスト。

カットも20分足らず。又、シャンプー小姐が手招きする。三度目の正直か?また、ガッカリ三度目。今度は2分。切った髪の毛を流しただけでした。

範先生と二人分のカラーとカットの料金は〆て75元でした。　二人で1000円!!安い!　ほんと!

(夜バージョン)NHKの記者・増田様からお電話を受け通程国際大酒店でお会いしました。しばらくこのようなデラックスホテルに入ってないので、馬鹿でかい玄関で少々気後れがしました。わずかばかりの間にすっかり現地人化してしまったのでしょうか?

いいコーヒーの匂いがしてきます。マクドナルドの匂いとは違う久方ぶりの香りです。横じゃなくて前が殆ど腰まで割れたチーパオを着た8頭身(死語)小姐が流暢なイングリッシュで問う。

「ハウ　アバウト　ブルーマウンティン?」中国なんだから「ゼンモヤン!!」のほうがいいのに、英語の方が上品に聞こえるのか?

だから、中国に来ている英語教師が絶対、中国語を覚えようとしない。とわが仲間、合肥市の日語教師・加治佐氏が怒っていたつけ。

初対面の増田氏だったけど、電話で何度も話していたので、旧知のように思えた。未だ来て少しも経たない僕なのに知ったかぶっていろいろ話した。

こんな僕の性格をいつも妻に叱られる。いつも、あとで後悔する。

増田氏を僕の学校の見える所まで案内して別れる。

横断歩道を渡ろうとしたら、教科書を脇に、噂をしていた屈　武クンが例の笑顔でこっちへ歩いてくるところだった。も少し早かったら増田氏に紹介出来たのに。

2004/03/15　湖南博物館

実は昨日、図書館に行った後、湖南博物館に2000年前のミイラ美女に会うためにと春爛漫の烈士公園の散歩を愉しもうと、しぶる、屈クンを無理やり誘って行って来た。

一人、五十元と聞いた屈くんは僕の腕を引っ張る。

「高過ぎる、先生、止めよう、公園だけでいい。」

確かに高い、こちらの感覚では、でも、この美女がもし国立博物館に来たら恐らく5000円はするかも知れない。たかが750円ぐらいじゃないか。

「ここで見なけりゃ、何処で見る。」

というわけで二人分100元を奮発した。屈クンは今度は　「ミイラは怖いです。」とまだ何やらつぶやいていた。

もったいぶった館内は、あちこちに制服の監視人が立っていて、ものものしくさえもした。下ったり上がったり、２０００年前の美女に会うまでは時間がかかった。

初めて彼女にお会いした時は

「このミイラは彼女ではなく一緒に発掘されたお連れの方でしょう」と、屈クンに言った。僕の想像が出来すぎていたのだ。

何年か前、東京で見た、あのシルクロードの「楼蘭王国の美少女」も、ウルムチで見た何体かのミイラたちも、何かしら、ひからびてはいたけど悠久の昔の姿を想像させてくれた。

けれど、そういえば、彼女はミイラではない。身体もずっと大きい。まとった衣服から出ている手足も、そして口もはるかにリアルだった。にもかかわらず興奮しないのは何故なんだろう。

僕はこの人は彼女じゃないと思っていたからなのか？

他にミイラはなくやはり彼が彼女だと知り、僕はもう一度引き返したい思いにかられた。結局、それは果たさなかったけど、またいつか、今度は彼女と思って眺めて見たい。

烈士公園では、思いがけず革命の志士たちの中に黄興の写真と、彼の書いた書を発見した。写真に写した。

上手く撮れているといいが、中村教授がこのＨＰを見てくれるといいのに。

黄興はまだこれからいろいろ発見したいと思う。

でも、何故かこちらの人は自分の国の歴史上の人物より、今の方に関心が強いような気がしてならない。

写真をいっぱい撮ったので別バージョン（烈士公園写真集）で見てください。サムネイルもあります。

2004/03/16　「僕の夢」

・・と言う題で作文の宿題を出しました。今回、三人の生徒・李湯竜クンと王俊クンと陳慧君さんの作品をノーカットで転載します。実は三人とも後で書こうと思っている僕の考えに沿った作文だったからです。

「僕の夢」

李湯竜（リトーリュウ）

あなたの夢はなんですかと聞かれたとき、僕ははっとしました。そうだ、僕の夢はなんだろう　考えたことがないとはいえないけど、なんか最後までのかわらない目標はないんだ　子供のとき　警察についてのテレビ番目を見ていて、とても僕はそのなかにでてきた警察のことにかんしんしましたのでそのときからもし僕は警察でしたら、犯人をたくさん捕まえたいというゆめがありました。

またもっとおおくなって僕の夢は変かつた

今度は　お医者になりたいという夢でした、もし僕お医者さんでしたら自分の仕事に身を入れて病人のためいっしょうけんめ　がんばって　多くの患者さんをつらい生活から救い出したいと思いました。

しかし夢は夢だ、時間の経つにつれて変わることがあるかもしれません。たとえば、僕のいまの夢はなんだなあ！やっぱり変わった。たしか翻訳家らしい。

翻訳家になるのはほんとうの夢だが　この夢がかなうことができるのか、今　の調子からみてちょっと不可能かもしれない。　でも僕はあきらめると言う気持ちがない。自分の夢のため、もっとかんばりたい。

私の夢

王俊

人間はひとつ美しい夢があります。夢は現実になるために毎日そいう目標を努力しています。ひとつ名人はこいうことわざを言ったことがあります。

人生は船のようです。夢は船の航路標識です。もし航路標識がありませんでは船は大海の中に迷っています。最後は大海にしんしょくされてしまいました。

もしあなたは教師だから、きっといい先生になりたいです。沢山いい学生をそだてたいですが、もしあなたは建築設計師だから、きっと世界では一番高い建物を設

計したいんです。

私もたくさん美しい夢があります。こどものとき、本を見るのが大好きです。いつでも、時間が会ったら、本を読んでいます。本の中にいろいろな知識を得ました。

各国の歴史文化、風土を了解しました。そのとき、作家になりたいですで、いい作品を書きたいんです。

でも、時が経つにつれて、私はだんだん成熟になりました。　小学校から中学校まで私はずっとがんばっていました。しかし、重点高中学試験に失敗しまいました。

失敗の味を初めて味わいました。とても哀傷です。

やがて、私の夢はいい大学を通りたいんです。

でも２００１年に高中を参加しました。もう一度浪人になりました。そのあとは私の前途は迷っています。どうすればいいでしょうか、わかりません。

両親と友達はがんばって諦めるなといいました。力付いてきました。

今私の夢は小さいです。将来いい仕事しかさがしたくないんです。家族のみんなたのしくくらしたいんです。それだけです。人生の進路は長いですから、困難沢山あります。でも私は自信がありますから大丈夫です。　きっと成功になると思います。

私の夢　　陳慧君　チンケイクン

私は湘譚から来た女の子です。子供から好奇心が強くいろいろなことを体験してみたいと思うので、夢は世界の各国へ勉強に行きたいと思う。

私が初めて日本に興味を持ったのは中学校の二年生時でした。教科書に出ている日本の有名な山富士山の写真を見て、日本経済に関心を持ちました。また日本には歌舞伎や相撲など伝統的なものが沢山あることをテレビで知りました。

発達した経済と古くからの伝統が同時に存在している日本と言う国はどんな国なのか知りたくて、卒業してから日本語を勉強することにしました。現在私の夢は日本へ勉強しに行きたいです。

将来機会があったら日本へ行って日本経済学を勉強するつもりです。２１世紀中国はＷＴＯに入ってから中国と日本は経済での交流するのである日私は中日経済での交流学者になりたいです。そしたら、これから私はこの大きな夢が実現するために一生懸命勉強しています。

2004/03/17　　司馬遼太郎

僕は司馬遼太郎が亡くなった時思った。

「もう今後、僕が歴史小説を読む事はないかもしれない。」と、本屋にも、もう行かないのでは、とさえ思った。

これは僕だけではない。戦後に教育を受けたサラリーマン、知識人、のほとんどが「貴方の趣味は?」ときかれて読書と答えた９割の人は愛読書の中に司馬遼太郎の作品が無い人があるだろうか?

三月号の文芸春秋のなかでもどなたかが書いてあった。すなわち、「日本ではこの２００年に三人だけ、「歴史を作る歴史」を書く人物を生んでいる。すなわち、

・・・『日本外史』の頼山陽、『近世日本国民史』の徳富蘇峰、そして司馬遼太郎　である。と

話は変わるが、ここでの僕の授業だが「作文」と「日本事情」である。日本事情の教科書はもう１０年ぐらい前の教科書なので「ここにはこう書いていますが、今はもう違います。」「今は、この問題は既に解決して、今度はこんな新たな問題が発生しましたネ」

・・・といった感じで授業はすすむ、マイホーム事情にしても、一向に授業が進まない。もっとも、そんな話をするのが現代日本事情と心がけているのだが。

昨日、作文の宿題を見ていて思った。それぞれ、考えてみれば、わずか1，2年の間に、これだけの外国語表現力がよくもついたものだと。僕など中国語も、英語も文章の繋げかたさえもまだまだで、助詞などの文法や、まして、気持ちの表現などはお恥ずかしいかぎりなのである。そんな僕が

「日本人ならこんな言い方が普通ですよ。」
なんて生意気に言っていいのかなと思うことでした。
さて、また話は変わる。実は、今こういうことを考えている。時間があまっているので学生たちに司馬遼太郎の講演の話を聞かせてあげたらどうだろうか?と、たまたま、来る前に朝日文庫の司馬遼太郎講演集1を持ってきていた。
日本事情を読んで聞かせるぐらいなら「日本の行く末」「日本のありよう」を本を通して語られている司馬氏の講演を読んで聞かしたい。独断と偏見であるかもしれないけど、僕流の解釈もつけてみたいと思った。
勿論、出席などとらない、僕の講話室である。
今朝、早速、範院長に提案してみた。彼はニッコリ笑って快諾してくれた。
「それはいいことですネエ。さっそく今夜から始めませんか?」と。
7時半から9時まで、生徒の自習時間なのである。
さあ、どんな結果になるのか?今夜は楽しみである
本好きの王くんや1年級の作家志望の屈くんなどと本を通して語り合うことは楽しい。
この小さな中国の塾から明治維新を成し遂げた偉大な明治の賢君たちを輩出した松下村塾のほんの真似事でもしてみようか?
何か力になってあげたい。と思う。
またまた話が三転する。 今日、日本の東京で悪い会社が中国人留学生をまた騙して金を何億とか、稼いだ人もいる。・・・と、学校に文書が回ってきた。実は僕は赤塚氏からの昨日のメールで概略は知らされていたのだが悪い日本人もいるものだ。
悲しい現実の狭間で多くの善良な人々が犠牲になる。
今、9時半である。念願の夜の講話を今、終わってきた。１００分の講義だった。
「文化と文明は一枚の紙の表と裏」と言う話をしてきた。昼間に無い学生たちの目の輝きに満足してきた。自己満足に浸る。
「難しいけどとても面白かったよ。」そう言ってくれました。きっといつの日か生徒達は必ず司馬作品に出会うことだろう。そして、学生時代に日本人のおじさんが語ってくれた司馬遼太郎の話を思い出してくれるに違いない。

2004/03/18　鹿児島市の道路に『長沙大路

今日は「鹿児島市日中友好協会」の立場で考えていることを話してみたいと思う。
一つ目は鹿児島市の道路に『長沙大路』愛称：チャンシャールなんて名前のついた道路は如何だろう。

『ナポリ通り』を筆頭に『パース通り』に『マイアミ通り』とある。姉妹都市で無いのは長沙市だけである。
まさか語呂が悪い、とかしゃれた感じがしないとか、有るとも思えない。それとも、誰か、付けるのに反対する有力者がいるからだろうか?
今回の市町村合併を記念して赤崎市長に是非提案したい。長沙市の場合、天保山に『愛晩亭』があるじゃないか、と言う人もいるけど、『愛晩亭』が長沙市のシンボルであり、毛沢東が此処で書を読んだり、友人と議論を戦わせた。といっても余りピンとはこない。
もう一つは、此処に来て思いついたのだが、長沙市の図書館に『鹿児島文庫』なるものを設置出来ないか、と思う。詔山通りのある「湖南図書館」の3階には日本の小説、歴史書、文化、経済から最近の流行誌、ファッション誌まで取り揃えたコーナーがある。
入口の上には立派な文字で『滋賀県友好文庫』みたいな文字が書いてある。友好県である滋賀県からの寄贈に違いない。多分、一般からの寄贈もあるのだろう。古い小説などページをめくってみると、鉛筆で傍線が引いてあったりする。
もっとも、こんなことも本当は鹿児島市の国際交流課あたりが中心になってやってもらいたいところだが、なかなか忙しい課であるから無理はいえない。
「鹿児島市日中友好協会」呼びかけて、・・・・とても、難儀なことである。
滋賀県はどうしたんだろう。まさか、長沙市に一番大きなデパートを出してる
「平和堂」がスポンサーでもあるまい。
ともかく、中国の地方に小学校を寄付する人の話を聞くけど、高度成長を続ける

中国にそこまでするのはどうかと思うけど、図書の寄贈などは、文化の交流にふさわしいアイディアと自分では思うのだが如何でしょうか？

2004/03/20

昨日は悪天候の為、また体調をくずしました。

竹岡さんの仰った通りの天気です。三月に雨が多いなんて日本ではあまり考えられないことですから。

今度は正真正銘の中国風邪です。少し頭痛もします。昨夜はもう6時頃から床に就きました。晩御飯は銀園に屈クンと行きました。

実はもう少し生徒の作文を紹介したいと思います。

私の夢　　竜習

人人が自分の夢がもっています。夢のため一生懸命がんばります。夢は時間のかわりについてかわることがあります。

私は子供の時ひとつ夢があおつたときがありました。一対羽根が欲しいです。そらで自由にとび、世界をみえる。だんだん成長しましたがはねが付くことが全然できないことです。

すると新しい夢がうまれた。

私の夢がいろいろあります。ことしも私がちいさい夢がもっています。一級日本語能力試験を合格することです。

またたとえば卒業してからいい仕事をつきたいです。かねもちになることなどです。

みんな孤独感がすることがありますが夢があればさびしくなくなりました。

みんな一生懸命ゆめを実現しましょうか。

私の夢　　呉魏林

私の夢は福祉院を建設することです。これは私の専門学校からずっと夢です。専門生のときまちに遊びに行くたびにいつもまちを？していて人人にお金をあいがんしたの子供がみえます。その時私の心が痛いです。

どうしてそんな小さい子供が家がない、どうしてそんな小さい子供が学校に通わない。

小さいことの時、お父親さんとお母親さんの愛育させられないとすればこの子供の心はぜひ温かいものを貰いたと思います。

子供が勉強ないで大人になるとどうしたらいいですか。子供はたいぶん明盲です。

私は沢山お金をためて福祉院を建設したいんです。家がないの子供が私の福祉院に住みできます。ここでみんな愛育して成長してから社会にでます。

みんなは自分のよく未来があります。これは私のさいしゅうの目的です。

近くの将来私の夢は必ず実現できると思います。

私の夢　　李碧雲

誰でも夢をもっていると思いますけど人によって夢は違います。今まで私はたくさんの夢を持ったことがありました。

農村で生まれた私は小さい時から金持ちになりたいと思っていました。あのとき家はとても貧困だからいろいろなものを買いたくても買えませんでした。

父の仕事がつらくて給料も低くて本当にこまっていました。だからずっとこんな夢を持っていました。でも、年齢の違いにつれて持っている夢も変わりました。

小さい時の夢は段々消えていき新しい夢が出てきました。新聞に載った金持ちとかテレビに出た金持ちとか彼らは困っている問題がたくさんあります。

これらを見て「金だけあれば必ず幸せになりますか』と言う質問が自分によく聞きました。人間にとって金が大切なものですが人間の一切ではないと考えています。むなしい自分を埋めるためにしたいことをたくさんしていろいろな知識を勉強して充実の人間になりたいです。これは今私の夢です。人の一生はさまざるなることを沢山おこるかもしれませんからなんでも順調にいきません。

困難にあったときどうすれば言いか自分で決まります。我慢してもっと頑張ってぜひ困難に打ち勝つと思います。ですからなんでもチャレンジする気持ちが大切なことです。

みなさん　自分の夢に実現されるように努力してください。

2004/03/21　「世界の窓」というテーマパークです。

社会の窓という言葉はズボンのジッパーのことで子供の頃先生に「オイ、社会の窓が開いてるぞ。」と言われたものですが、長沙市にもこんな変わった名前のテーマパークがあるというので行ってきました。

天気は相変わらずパッとしません。実はこの日は今日21日ではなく先週の火曜日かの昼からでした。生徒の1人が「世界の窓　今から　行ってみませんか?」と言う誘いにまんまと乗ってしまったのです。

火曜日は僕は授業がありません。天気も悪くなく、身体をもてあましていました好都合でした。ただ、女子学生一人との付き合いは他の生徒たちに余りいいことないんじゃないかな、とも思ったけど気にすることもあるまいと行くことにした。

長沙駅まで歩き、そこからバスで40分ぐらいかかる所にある。先週行った湖南植物園と反対方向つまり北側ということになるのか。

彼女はガイドカードを持っているので50元の入場料は無料だそうだ。

中は平日の午後ということで空いていた。中学生らのグループがわいわい騒いでいる程度である。園内を回る6人ぐらい乗れるゴーカートがあつたのでそれに乗ろうとしたら5人50元一人10元という、つまり、5人集まるまで待て。とのことである。

こんな時間からなかなか人は集まりそうもない。5分ほど待ったけど結局あと30元追加して二人でスタートした。『世界の窓』とはつまり公園の場所ごとに各国のテーマパークを配置しているだけのことである。

勿論、各国のパーク内ではそれぞれの国のスーベニールや中国風にアレンジした各国料理などが販売されている。日本は桂離宮や法隆寺などがあり、結構、すてきな公園に仕上がっていた。

疲れてベンチでコーラを飲んでいたらなにやらステージで踊りや歌のライブが始まった。中学生たちがきゃーきゃー騒いでいる。とつぜん舞台に飛び乗り若い歌手の横に並ぶと、すかさず別な娘がカメラで撮る。それを見て仲間が騒ぐ。どこでもよくある光景である。

時計を見たらもう5時半。余り面白くもなかった『世界の窓』ツアーは終わった。

2004/03/21　範院長先生

昨夜は完全に酔いつぶれました。白酒は50何度あるらしいです。

「天気が悪いので今夜は私の家で食事しましょう。」範先生からお誘いの電話が入った。

「鄭さんも呼びましょうか」そういえば彼とも暫く会っていない。

午後3時ごろ範先生が迎えに来られた。鄭さんの家に行き、それからお宅へと向かった。鄭さんは今、仕事がとても忙しいらしくて先週も又出張だったらしい。4月になったら少し暇が出来るので魚釣りに行こうと言う。

範先生は現在、椎間板ヘルニアで苦しんでいる。腰に手をやって顔をしかめることが多い。範さんは若い頃、東京に8年ほど住んでいたそうだ。学生生活だったろうと思うがまだ詳しいことは聞いていない。もともとは上海の人だと鄭さんから聞いた。

東京近郊以外は何処にも行ったことがないと言う。折角来たのだから何処へでも、という僕などとは思考機能が違うのかもしれない。

それでも日光の鬼怒川温泉には2回行ったと懐かしそうに語った。そのうち彼の日本体験談など、書いてみたいと思う。

それにしても彼は良く頑張る。月曜から金曜まで朝8時から夕方4時半まで、その他に夜7時半からの夜授業もこなす。スーパー先生である。一度、授業を覗かせてもらったけどその授業ぶりは徹底している。

生徒たちに妥協を許さない。徹底することが子供たちへの義務であり愛情と考えているのだろう。

さて、家はマンションの5階にあった。真新しいドアが付いていた。すぐ奥さんのリュー先生が迎えてくださった。子供さんは8歳の男の子で名前は典という。

お父さん似のきりりとした顔つきをしている。
「ようこそいらっしゃいました。私は範典と申します。」
恥ずかしそうに、でもしっかりした日本語で迎えてくれた。
鄭旗さんの坊やはもう2回目である。お名前を禹東くんと言う。
禹と言う字はいわれがあるらしく昔、紀元前６００年ぐらい前夏という時代の初代の皇帝の名前らしい、この人は治水に貢献したと言われている。
禹東くんが生まれた年に中国は大洪水に見舞われたという。それを忘れない為にこの名を付けたと言う。
このように中国では人の名前を付けるときは、何かにちなむ場合が多いという。
最近の日本はかというと、流行なのか、わざと当て字で読ませることが多く、ルビ無しではとても読めない始末である。
「字はこうなんだけど、読み方はこうなのよ。」
なにか勿体ぶった言い方で若い母親が答える光景が多い。
書いたとおり素直に読ませなさい。と思ってる人も多かろう。
範さんは手料理が本当は得意らしく
「私の腰が痛くなかったら焼き餃子をはじめ日本人好みの中華を作ってあげたかったのに。」残念と言われた。
近くに出来たという大きな海鮮レストランで宴が始まった。白酒の応酬が続き、だんだん朦朧としてきた。
正直いって僕は生まれてこの方本当に酔ったことは無かった。
ある限度でストップするからである。でも、今夜は違った。小さなグラスでの一気飲みである。5杯位まではまだ笑みも、意識もあったけど、そのあとは余り覚えていない。
夜中にとつぜん電話が鳴った。自分が家のベッドに寝ているのが不思議だった。上海の李黎からだった。
「ケイジさん。風邪はどんなですか?」

「我酔酒了!頭疼!痛苦!」答えるのがやっとだった。
電話を切ると急にムカムカしてきてトイレに急行した。

2004/03/21　もう少し私の夢を続けます。

１５名の生徒の語る夢を読んだ。勿論、作文の宿題なんだから正しい表現方法やその作文にふさわしいアレンジなども指導しながら読んだ。
とても翻訳の難しいそれでいて言ってることが痛いほどわかる文章にぶつかるとしばし僕の思考経路が狂ってしまいフリーズ状態になる。
彼らにしてももっといい表現方法を中国語のボカを使えばあるに違いない。日本語に転換できないので仕方無しに書いた文章だろう。
彼らの真面目さを思い、ひるがえって今の日本の学生たちを考えると気分が滅入ってくる。

私の夢　劉江阿いん

子供時代から沢山の夢を持っていました。でもつぎつぎにやぶれてしまいました。原因はそれらの夢は不現実です。今から考えるとちょっとおかしいなだと思います。
今の夢は母のようないい主婦になりたいと思っています。この夢は見るのは小さな夢かもしれませんが実は難しいです。
母は料理が上手いしかたずけるのも上手いし、なんでも上手です。私は今着ているセーターも母が手で編んだものです。同じ住宅地の子供にうらやましいです。
この夢はかなうかどうかはまだ分りません。でも母が心配しています。私に「亜韻ちゃん、あなたはうちでなんにもしなくて、自分の本もちゃんと片付けなかった。あなたの将来は心配してるよ」と言いました。
本当にひどい母親ですね。母は私のような年齢の時、何にもしなかったそうですね。おばあちゃんからきいたのです。

私の夢　張　麗

世の中で大部な人は夢がいろいろあります。私もそうです。わたしはいろんな美しい夢があります。たとえばすばらしい通訳になりたいんです。

中学時、いろんな日本のドラマを見ました。その時、日本人の女性は綺麗だし、やさしいし、日本の風景が美しいと思っていました。

もし日本へ行けばいいなあと思っていました。日本語を勉強するつもりです。いままで私は一年間ぐらい勉強しています。卒業してから日本語を使う仕事につきたいいんです。

すばらしい通訳になりたいんです。でも今は私のレベルがまだまだです。ときどき話したいことが日本語で話せない。困るなあ。自分の能力を疑う時もあります。

勉強の仕方が違うかもしれませんと思っていました。

早く自分の夢をかなう為に毎日勉強しています。自信があれば何でも出来ると私は思います。

通訳は上手な言語を身につけるだけではなく質もかならずいいです。上司から任せた仕事はまじめにしなければなりません。また上司の立場に立って問題を考えます私はそういう通訳はすばらしい通訳だと思います。

私の夢　　しゃ娟

私は現実主義です。夢というものは　一体どんなものなのか、私ははっきり分りません　ですが　小さい頃からよく大人になったことを想像しました。

多分これは夢か?とすれば、夢は年齢によって、変わっていくのと思います。小学校には、私、早く大きくなって兄さん、姉さんみたいに大学に入って、いろんな知識を勉強して、将来自分の会社を作って経済界の実力者になりたかったのです。

しかし、少しづつ大きくなってから、新しいものを習って様々な形の人と知り合い、みんなと経験を交流するに従って、思いかたも段々変わっていきました。

それはきびしい現実をみて私は早く幻想からさめされました。生活のために、人間は一生懸命仕事をして、人格、尊厳でうりだすこともあります。

そんなことは、以前は理解出来ませんでしたが、いまはもう段々分るようになりました。

人間の一生はもともと短くて夢のようであり、夢を追うのはいいことですけれども、夢は描きながら、実際の行動をした方が良いと思います

2004/03/22　　陽はまた昇る　　谷村新司

カラオケで谷村新司の歌を2曲なんとか唄うことができる。一曲はだれでも中年なら唄う『昴』である。

もう一曲は『陽はまた昇る』である。歌詞がいいのと曲調が自分の琴線に響いてくるからである。

むかし大塚博堂が好きだった頃がある。『ピアノコンチェルトはもう聞こえない』という曲が好きだった。

博堂は若くしてとつぜん亡くなったが、二人のライブは割りと見に行った。どういう訳か、この二人に関しては僕と家内は共有のファンだったので、何度か一緒に出かけたものだ。

ＬＰからＣＤにソフトが変わる頃、博堂は世を去った。なんとも声のきれいな、というよりやはり自分の琴線にふれる歌手だった。今日は博堂の話をするのではない。『陽はまた昇る』である。

２年級の学生たちの宿題『私の夢』を読みながら僕はある一つのフレーズが付きまとっていたのだ。

そう、あの谷村の唄う『陽はまた昇る』の最初の部分である。

《ゆめをけずりながら～年老いて行くことに、気がついた時、はじめて気づく空の青さに～》

今日の５，６時間目は作文の時間、僕は早速、一番の歌詞とその訳を電子辞典で調べ、学生たちに公開した。

一行一行書いていく、そして歌詞のイメージを下手な中国語で説明する。皆が熱

心に僕の書く歌詞を書き写しはじめた。

《あの人に教えられた無言のやさしさに
今さらながら涙こぼれて
酔いつぶれたそんな夜》

《陽はまた昇る　どんな人の心にも
あぁ生きてるとは燃えながら暮らすこと
冬晴れの空　流れる煙　風は北風・・・》

僕がフレーズごとにハミングしたらすかさず

「先生！　唄ってください」の合唱になった。

「まあいいか、狂ってもみんな知らないんだから・・・」と唄い始めたら、何とカラオケで唄った時より乗りが良いのである。とうとう気分よく最後まで唄ってしまった。

すると次にまた催促が来た

「教えてください！！！」

というわけで今日の授業は谷村新司歌謡教室で始まったのである。

長沙の空は今日も冬空、そして、風は北風の吹き荒れる冷たい日でした。

2004/03/23　、竹岡健一氏

ヤフーの《今日から一週間の長沙の天気》を見てみるとすべて雨である。最高気温１５度、最低８度が今日からの一週間の予想である。時々は晴れ間もあるが、逆に寒風も吹く。夢も希望もない３月の長沙市。

と教えてくれた滋賀の方、竹岡健一氏に今日はお会いする日である。彼は奥様と共に今月で、一年間の長沙市での新婚生活を終え帰国される。長沙行きが決まってから、僕のこの町のイメージ作りに一番参考にさせてもらったホームページの持ち主である。

http://www.geocities.jp/t_a_k_e_o_k_a/

これで、途絶えてしまうと思うと寂しい。今時珍しい熱血教師だったようで長沙大学もいい先生を一人失う。

どんな話が聞けるか楽しみである。

それはそうと、この頃困ったことが起きた。というのは、僕が自慢げに

「皆さんの作文《私の夢》を僕のＨＰで僕の友人達に紹介しましたよ」

と言ったら、皆がワンバー（インタネットカフェ）に行って見始めたらしい。写真入りだから、「誰は綺麗に写っている。」とか、ガヤガヤ声が聞こえはじめてきた。

なにしろ彼らは日本語が読めるのである。先日も、火曜日にシャケンと《世界の窓》に行ったのは他の学生には内緒だったのである。これから、隠し事が出来なくなる。誰が好きだなんて、ここで書いたら大変！

そうか、隠さなければいいのか、なんでも、おおらかな大陸のこと、先生は「来るものは拒まず来ないものは追わず」書きたいことは書けばいい。テクニックなんて言葉は捨ててきた筈じゃなかったの？　そうですネ。

雑文ついでにもう一つ。余り好きでない食べ物の一つに野菜サラダがある。いつも、家の者に「生野菜をどんどん摂らないと・・」と言われる度に「ウサギじゃないのょ

ボク～は。」と軽～く、あしらっていたものだ。
その野菜がこの頃目の前に浮かぶのである。フレンチドレッシングなどをたっぷりかけてバリッバリッと兎ならぬ牛にでもなりたい気持ちだ。
こちらのスーパーでも生野菜は新鮮なのがいっぱいでている。ただ、こちらの人は、生では食べないのである。必ず、煮るか、焼くか、揚げるか、炒めるかなのである。
美味しそうなキュウリ、真っ赤なトマト類、これにドレッシングかマヨネーズを付けてかぶりついたらと思うけど、農薬いっぱいだと聞けば躊躇する。
何年もの間、中国を旅行して来たが、考えてみると、食に関しては日本の国内旅行みたいなものだったのかもしれない。中国各地の五つ星の外国資本ホテルでの朝飯はもうれっきとした西洋バイキングなのだから。
昨日、ふと手の甲を眺めてビックリ仰天した。先日見た２０００年前の美女ミイラの手じゃないか！これは。
しわだらけの甲に血管が黒く這って見えた。瞬間、思いもしなかったフレーズが飛び込んできた。

《ビタミン不足・ビタミンC・かっけ》
《ビタミンA・B　鳥目・くる病・》
《チオビタ・グロンサン・ユベラ・アリナミン》

今まで自分の？人生の中で不要と位地づけていた語句の数々である。そのすべてを「現在我要！」なのである。
今夜は久し振りに楽しい晩餐をさせて頂いた。最初に書いた竹岡健一さんご夫妻との長沙＆中国よもやま話に花が咲いた。教えて頂くばかりで先方にとっては迷惑だったかもしれないが。インターネットの功罪のまさに功の典型のように思えた。
ついでに写真上は昨日鹿児島から届いた荷の中に入っていたチオビタドリンク１２本である。中は、朝粥にみそ汁、カイロ（現在必需品）

2004/03/27

長沙市といっても日本の旅行案内で目に付く観光地としたら、２０００年前の女性のミイラが形が少しも崩れていないばかりか、皮膚がつやつやし一部の間接を曲げることさえ出来て、靭帯も弾力があり、死んだばかりの人の体と変わらない、と世界にセンセーションを巻き起こしたあの《馬王堆漢墓》と《愛晩亭》ぐらいである。
日本で魅力ある旅行地として認知されない理由のひとつでもある。事実、この二ヶ所にして見ても、行ってみると、《馬王堆漢墓》に２０００年前のミイラが居るかと言えばそこにはいないのだ。たい侯夫人のミイラとその副葬品の殆どは尖子公園の隣にある《湖南省博物館》に飾られてある。
一方、毛沢東が若い日に参謀たちと国家の展望について語り合ったという庵？《愛晩亭》は何の変哲もない屋根つきの門といったところである。観光客が訪れたとしてもあの三峡下りの際、立ち寄る鬼城にも及ばない。
西郷銅像前で写真を撮るようなものである。
やはり、長沙の最大の売りは《岳麓書院》でなければならない。地味な存在かもしれないが、岳麓書院は訪れるだけの価値と、訪れた後の満足感も充分得られる観光地？といえる。
宋の時代，四大書院の筆頭に数えられた。世界で最古の大学に数えられている。北宋の９７６年の創建以来、千年以上もの間栄え続けてこれたのは、有名な学者がここに集まって講義をし歴代の帝王が題字を贈ったことと大きな関係がある。
書院は湖南大学の広大な敷地の奥、岳麓山の麓にあり、入場料は１８元である。ちなみに湖南大学生は生徒証を見せると無料とかで案内してくれた李先生は笑っていた。学生たちの寮が近辺に建っていて、この書院の庭園で読書をしたり語り合ったりするらしい。旧七高生の姿が一瞬だぶっ

た。

ちなみに、ここにある湖南大学は中国国内で唯一、校門と敷地囲いのない大学だとのことである。湖南一の優秀校であるが最近では中山大学の方が生徒の質は上だと李先生は話してくれた。「私は中山大学院生」ですとのことだったが。

岳麓書院は入口の門、広間、東屋、楼閣、窓つきの廊下や小屋、祠、廟などからなる。

特におもしろいのは毛沢東の若い頃の寝室や部屋、歴代の要人たちの訪れたとき書いた書、とその時の写真など興味深い。

表の門に「唯楚有材・於斯為盛」の対句がある。

《楚に人材ありて、はじめて書院の繁盛有り》なを看板の《嶽麓書院》の文字は宋の真宗の肉筆と伝えられている。また、奥の広間にある朱喜自らの筆による「忠孝廉節」の碑は有名。

杭州に行った時、深栖さんと訪れた南宋の武人《岳飛》廟を観た時も感じたことだが宋という時代、やがて北の騎馬民族《元》や東北《金》などに滅ぼされる《漢民族》の華やかな一つの爛熟の世代にいつも自分は惹きつけられる。もう一度、ここ、《岳麓書院》は訪れたい。お勧めポイントといえる。

ここ岳麓山は山自体が一大行楽コースになっていて半日コースでゆっくりしないと本当のよさは分らない。もし仮にツアーのコースとして、この山のポイント、《幾人かの有名な先達の墓（国民的英雄・黄興の墓も含め）を訪ね。麓山寺、白鶴泉、愛晩亭をもし仮にツアーバスで回ったとしたらフイルムに収められた記録の何十分の一も本当の頭の中の記録には残っていないに違いない。

やはり、心地よく歩きながら現れる場所、場所がその歩きを含めてよみがえってくるものだからである。その辺が博物館に何時間いて眺めても、数々の遺品、出土品などが何処の博物館で見た物なのか記憶に乏しい理由かも知れない。　さて、期待して行った《黄興墓》は余りにも立派??過ぎて、何の感傷も沸いてこなかった。あれは、墓とは言わない。日本では、モニュメント（記念碑）と言います。

そう言えば、湖南大学の中央にも巨大な毛沢東の像が建っていた。

背面に回って建立記録を見ようと思った。そこに書かれて いた黒マジックでのイタズラ書きが目に入った。心無い学生の書いたものか?旅行者の誰かが書いたものか?分らないが、ここで《その文字》を書く気になれない。

そういえば、案内してくれた李先生が語っていた。この山もこの頃、物騒なのです。この前も山中で人殺しがありました。ゆすり、泥棒はしょっちゅうです。

僕は答えました。日本も同じですよ。何処も危険は一杯ですね。それは、治安とか生活格差の歪からだけではなくて、人のこころの問題でしょうね。と答えておきました。

帰りのバスの中で学生と話しました。僕ともうひとり年老いた腰の曲がった老人がいたとします。あなたは、空いた一つの席にどちらを掛けるように勧めますか?

「わたしは先生にその席をすすめたいと思います。でも、もし、先生がその人に勧めたらそれはそれで理解できます」彼女は答えました。

11時からバスに乗って訪れた今日の《岳麓山一日ハイキング》も大橋1号を渡る頃はもう時計の針は6時を過ぎていました。バスを降りて歩く、皆の足もこころなしか引きずるような足取りにみえました。

帰る途中、一軒の餃子屋に立ち寄り餃子を主食に2本の冷えたビールを7人で「乾杯!」しました。

2004/03/31　　岳陽へ

今、4月3日の朝、ちょうど5時です。

まもなく、王こうけん君からの電話が入るはずです。なんと朝6時の汽車で岳陽に行くのです。昨夜は早く寝ようと思っていましたら逆になかなか寝付かれません。

皆も経験がある筈です。一種の興奮状態なんですか。

何も、こんなに早い汽車で行かなくても1時間半で岳陽に着くのに、と思いましたが、岳陽出身の王君にしてみれば次の汽車は9時だし、しかも、座席指定が売り

切れとあっては仕方がなかったのでしょう。

なにしろ、週末の汽車は混むそうですから・・・・。

それにしてもよかつたです。

インターネット接続が可能になったからです。27日からこの日記が書けなかったのですから。

とりあえず、今から行ってきます。（二日後）

今日は本当は4月5日の月曜日です。詳しい岳陽紀行は別サイトでゆっくり書こうと思っています。

そこで、この日記欄では、このところパソコン不調で書けなかった（原因はどうやら、知人の送ったメールにウイルスが付いていたようです。下記の謝りが来ました。）

誠に申し訳ございませんが、僕のPCに「Netsky」が感染されたことを判明致しました。僕の油断で皆様には、近日、連続的にウィルスメールに攻撃されたと思います。

皆様に多大な迷惑をおかけしてしまったことに、心からお詫び申し上げます。このたび、本当に申し訳ございませんでした。ちなみに、ウィルスの再定義がすでに行われ、PCから問題の「Netsky」ウィルスを駆除していました。

・・・・・・・以上。名前は伏せときます。

そこで、それまでの、行動記録の主なものを振り返ります。

実は、大きな事がありました。長沙市の外事弁の人民対外友好協会・副会長兼秘書長の雷楚珠氏と副主任の湯さんに招待され《一路??》という長沙で一番大きなレストランで晩餐をうけました。

海江田会長を良く知っておられる方で髪は黒く若く見えましたけど若しかしたら、僕と同じように、見えるだけかもしれません。写真で見て下さい。と言いますのは今の仕事にもう17年も在職されてるし、貫禄から見て50台ではないでしょうか?

いろいろな話をしました。質問も受けました。日本に研修に来ている袁静さんのことも話題に上りました。通訳をしてくれた李さん(27歳、よりずっと若く見える女性）の素晴らしい日本語×中国語でとても、賑やかな楽しいひと時を過ごすことが出来ました。

2004/04/01　3月30日(火）の記録です。

2年級の李湯竜くん、1年級の王志国くんと3人で、この前行った時に登らなかった天心閣の閣楼最上階まで登って来ました。

一人50元という入場料は学生達には少しどころか、とても高い値段です。

あの時は下から見上げて写真だけ撮ってきましたが、鄭旗さんが「上まで登りましたか?あの上から、長沙のまちが全部見えます。」と言った言葉が気になって火曜の休みを利用して再度挑戦しました。

天心閣の古城壁が最初に建造されたのは2000年前で、城壁の上に建つ天心閣は数百年の間に改築、移転を重ね現在の形に落ち着いたのは1983年のことである。建物には彩色の絵画や彫刻が施されている。

三重の楼閣からなり鳶色のレンガ、反り返った軒先が特徴だが、中国の城閣はその殆どが反り返っているので特徴と言えるかどうか?

実際に最上階まで上がって見ると長沙の街並みを一望するには長沙の街はここ数年の間に余りにも急変貌、発展を遂げたのではないだろうか?

ほんの一部が見えると言った方が正しいような気がした。それより、ここ天心閣の特徴は、やはり**太平天国**〔1851から64年）の時の大砲台跡と二基だけ錆びた状態で据えられていた当時の大砲だろうと思う。

2004/04/03　岳陽

岳陽は古くは巴陵または岳州と呼ばれていました。

面積は８４平方キロ。人口は７８万、湘江の下流、揚子江が洞庭湖に流れ込むところに位置しています。

今回、まる2日のコースで一日目を南湖と岳陽楼と田舎（王紅軒君の実家）と市内めぐり。二日目を君山と洞庭湖という、ゆっくりコースで三人で出かけました。

先にも書きましたが朝6時の広州から岳陽行きの火車です。朝まだ暗い長沙駅で舎絹を待ちます。硬座しかないそうで「まいったナ」と思っていましたが軟座と殆ど変わらない綺麗な車両でした。口の悪いシャケンが

「馬鹿にしないでよ！」怒ってました。

この後、バスの中の床のメチャ汚れを撮ろうとした時も怒りました。愛国心の強い女性です。

実は、彼女の実家はここより西にある「常徳市」です。常徳市は第二次世界大戦のさなか、日本陸軍がとても悪いことをした所です。空軍による爆撃の際、細菌を撒いたとされている街です。

だから、僕はシャケンがどんな悪口を叩いても許します。我々の父の代が彼女の祖父の代を、そして、父の代に与えた悪行は謝罪し切れるものではありませんから。

広州からの車両は、対面４人掛けのほとんどが寝台代わりでした。起きてる人はわずかで思い思いのスタイルです。旅も市内も交通機関をほとんど公共バスと普通汽車を利用しますが、マナーは未だ未だ、と言っていいのか?この先も変わらない国民性?というのか。

公共性という感覚はなさそうです。嫌煙権などおそらくあと数年はかかりそうです。

次の三つがどうしても気になります。「散らかす。（床は食べかすを撒き散らす。）まず、譲らない（老、子連れ関係なし）。車内喫煙」　良いのは、叫べば何処でも停めてくれること。（長沙市内は多分無理）

さて、《岳陽楼》はもともとは城を守る兵士たちの休憩場所でした。三国時代に呉の大将、魯粛がまずここで水軍を訓練する為建て、次に唐の時代、楼閣に建て直し南楼と言う名をつけました。

宋の１０４４年藤子京が《岳陽楼》を建て直しました。そして彼の友達であった範仲がここで作った「岳陽楼記」で《岳陽楼》は天下に名を知られました。

岳陽楼は《武漢市の黄鶴楼》《南昌市の藤王閣》と並んで江南の三大名楼と言われています。

高さは２１メートル構造は柱４つ、三階建て、特徴は屋上のかぶと状建築です。歴代古建築では極めて稀と言われています。現在の楼は清代のものです。

《岳陽楼に登る　　杜甫》

昔聞く洞庭の水
今上る岳陽楼
呉楚東南にさけ　　（天と地）
乾坤日夜浮かぶ　　（一字の便りさえ）
親朋一字無く
老病弧船有り
戎馬関山の北　　（軍の馬）（故郷をさす）
軒に憑れば
涕泗流る（涙）

王紅軒君のお父さんが作ったご自慢の青蛙（チンワ）２０匹のうち3匹を食べました。味はハオ、ダンシ、ブハオカン。（見た目はグロテスク）

2004/04/04　　君山

君山は洞庭湖の中に浮かぶ小さな（と思って行ったらとても驚くほど大きな島だった。正直のところ、日本で考える小島とは全くイメージが違いますね。）でも、旅の案内にはそう書いてあります。

君山銀針とは・・・その島にだけ採れるユニークなお茶のことです。

これも正直なところ、中国は何処に行っても「ここはお茶の名所といいます」ね。説明を聞いていると、買って見たくなるから不思議です。

食堂や、バスなどで応対される服務員（小姐たち）と土産売り場の小姐たちは

「ほんとうに、同じ中国人?ジェンダ!タシー・イヤンダ・ジョンゴレン・マ?」と訊きたくなりますね。

さて、君山銀針は芽の先が丈夫でピンとしていて綿毛が多く長さも太さも均一で、海のほうずきに似た感じです。

ガラスの長めのコップ（よくこちらの茶館で出る）に熱湯を注ぎます。湯気が逃げないように蓋をしますと、数分経つと一本一本の茶がスーッと底の方に沈んでいきます。全部底に沈んだ様子は正に奇観ともいうべき、今まで見たこともない美しさです。

又熱湯をそそぐと、今度は、一本一本の銀針状の茶が上に上がります。眺めているだけで楽しい茶ですね。

味の方はあっさりしていて、そして、少々苦味があって結構美味しいお茶です。

いつか、上海で買った「一葉茶」のあの苦さに比べれば飲めるほうかも知れません。

もちろん買いましたよ。ここでだけしか買えないものですから、皆さんの中で「イヤー、飲んでみたいなァ、眺めて見たいもんだなァ・・・・」と、思った人は僕が帰った頃メールをください。少し、試飲程度なら送って上げましょう。

ともあれ、お茶の味道については、日本人と彼らとは味覚が違いますので何ともいえませんが、これは、僕の持論ですけど、もし、日本茶（煎茶・抹茶・ほうじ茶・深蒸し茶）などの味を覚えたら、中国人もどちらを選ぶでしょう?

日本に来て緑茶に親しんだ中国人の殆どが烏龍茶と両方出したら緑茶の方を選びますね。慣れというのは怖いものですね。

何倍も飲むなら龍井茶ですね。僕は・・・

こちらの喫茶店（大きいのがありますよ）では茶がいいですね。少し減ると小姐が熱湯をすぐ注ぎ足してくれます。

全く違うのは飲むものに対して中国人は第一義に考えることは「それは体に悪い。その飲み方は良くない」こう言います。これは、子供の時からの洗脳でしょう。何千年続いている観念といえますね。

話が少しそれますが、まず食事の時、絶対、お茶や水やまして、アルコールなどは一緒にというか交互にはとりません。

かなり固め（慣れない日本人なら多分箸で取れないぐらい）のご飯に辛い（唐辛子や塩）おかずでも何も飲みません。食事のとき飲むと身体に悪いからです。スープは飲みます。まして、ごはんと一緒に冷たいビールを一杯など言語同断ですね。

僕はいつもこれをやります。こうしないと僕の喉を食べ物が通らないからです。

おまけに青島ビール３５０ミリ一本は3元（４５円）ですから、日本人なら同じパターンをとると思いますよ。

中国の食堂は大きな菜館は別にして、冷やしたビールはありません。ビンダ!と言うとドン!１５分。と答えます。「冷蔵庫で冷やすから１５分待ってくれ!」タベも長沙駅近くの餃子店で言われました。この頃は暖かいビールにも慣れてきました。

湯船に入る習慣のない中国人にとって「風呂上りにキューッと一杯は」ありません。可哀そうですね。でも、この頃少し変わってきました。例の南国雨林や碧水温泉です。

あそこでは風呂上りに休憩室で冷たいビールを飲みながら肴をつまんでいます。もう、日本と全く同じ光景です。「身体に悪いよ。」は何処に行ってしまったので

しょうか?ついでに書いときますが、ここの休憩室はチョットすごいですよ。
豪華ベッドやふわふわ椅子にフトンつき大部屋（セット椅子が３０台並ぶ）は暗くて眠りを誘います。可愛い小姐たちがドアのところに立っています。（変な想像はしないように。健全サウナですよ）
この前はベッドサイドに冷えたビールをとって３０分寝てました。
いやぁ、話が何処から飛んでしまったのでしょう?
君山の銀針の説明が脱線もいいところです。しばらく、インターネットが故障していたので、喋りたい事が溜まってしまいました。実は、ここ岳陽ではもっと楽しいことがあったのですがちょっと公表出来ません。
どうしても訊きたい人は、一緒に夜釣りにでも行った時、船の上から月や星を眺めながら、クーラーの中から冷えた発泡酒でも飲み合いながら、お話して差し上げましょう。
写真の説明かたがたお話しますと、僕はここで高貴な僧から運姓を見て貰いました。結果的には１２０元のドデカイ赤ローソクを買わされた?（などと佛時においては言ってはいけない）点けた火は１００日燃え続けここの僧が拝してくれるそうですから安いものです。
僕は佛と強い因縁があるそうです。孫と貴方は縁が強く、又、祖父母との繋がりもとても強いのだそうです。
貴方は金や地位に今までの人生でこだわって生きてこなかった、これからも同じように生きてください。と僧は僕に語った。
その生き方の全ては貴方の孫に伝わり、お孫さん自身の心の支えになるのです。・・・金色の護身符と僕の尊者を一枚頂いた。帰ったら、孫娘・美宇ちゃんに早速、あげようと思う。
長沙の駅に着いたのは9時３０分でした。
来週はこの駅から張家界へ向けて、二泊のたびに出ます。張家界から来ている王志国くんの案内で、費用はなんと往復の寝台列車代込みで2万円そこそこというからビックリします。

2004/04/06　開福寺　開福寺は長沙で一番有名なお寺と聞いていた。中国の重点仏教寺院の一つにかぞえられているらしい。岳陽から佛づいてしまったらしい。
通代のものが移ったのか、ここでも又、家族の御札を買ってしまった。一枚3元だから「思い切って」ということにはなるまいが。長沙いるうちに一度は行って見たいと思っていた。
先週の火曜日は天心閣に行ってきた。今日の火曜日も昼からとてもよい天気になって来た。折角ある休みだし

残り少ない長沙での一日を暗い部屋に一人で居ることもあるまい。
一人で何とかなるだろう、とタクシーに乗った。観光マップを運転手に見せて，行き先を告げた。カイフースーと言ったつもりだったが案の定、何度も聞き返された。僕の方が標準語で彼が長沙弁だと思うことにした。
開福寺は立派な山門があり、くぐると線香の大きいのを買わされる。それを右手の火葬場のようなところで燃やすらしい。人のする真似をすることにした。
コインをもらい（入場票を買った時）それを真ん中にある菩薩像に投げるらしい。下に落ちずに引っかかったら運がいいことらしい。何も分らない。やはり、生徒を一人連れてくるのだった。
何か古さからすると明か清の時代の建物に似ているけど中国の場合、よく分らない。日本だって同じことだ。中国ばかり悪く言ってはいけない。偽物だって、土産売りだって同じじゃないか。
左右に大きな池があってなんと青亀（ウーグイ）が甲羅干しをしている。その数ざっと数百匹。壮観だった。
どうもこのところチンワ(蛙）とウーグイ(青亀）づいている。これにシャー(蛇）が加わったら長沙の三大げてもの（すべてとても美味しいらしいが）と僕は命名した。

2004/04/07

昨夜は真夜中に突然閃光が光ったかと思ったら一瞬ここはバグダットかな、と錯覚しそうな爆弾攻撃・・実は大雷の音でした。
長沙に来てもう何度か目ですがびっくりさせられます。日記風に昨日の午後からを書くと次のようになります。思いっきり、日記風です。
(又、失敗をしました。先ほど、１０００字位の文字を書き込んだのです。日記文を・・・一瞬のうちに消えてしまいました。
こんなことがもう何度あるのでしょう。
下書き無しの文章ですから泣きたくなります。気を取り直して再度挑戦です。)
新しくなったという湘江大道を散歩しました。
　長沙の人は本当に凧揚げが好きですね。子供と若い人はやりません。
興じているのは以外の人です。別にぜんぜん違和感がないから不思議ですね。
　テクニックがあるのでしょう。見ていると大きなリールを時々しゃくります。釣りと通じるところがあるのかもしれません。
空と海の違いだけなんでしょうか。やってみたくなりましたが勇気がありません。
１メートル間隔に立って揚げているのですから。
　さて、帰って来たのは5時前だったでしょうか。金庫のドアのような頑丈な入口を開けると中ドアが開いていました。慌てて出たものだ。
用心しなきゃ、と思い部屋に入ると、部屋の中にポンカンが袋ごと置いてありました。
　「アレッ!範先生が来たのだろうか?」と思っていると、何やら外がゴソゴソします。すると、使っていない部屋が開いてそこから、年配の女性のニッコリ顔が現れました。大家さんでした。
つまり、大家さんが自分の部屋に何か衣類でも取りに来たのでしょう。
　通じるような通じないような会話で、それでも３０分以上はお互い椅子に座って会話をしました。
大体言っておられる事が理解できるようになったので僕も大したものですね。尤も、会話の内容が限定されていますからね。
　お互い、あり合わせの物を交換し合ってお別れしました。結局、ひとやすみ出来ないまま夜の講義に出かけました。
ところが、かんじんの李クンと王くんが来ていなかったので、隣の1年生の教室に屈君が居たので遊びに行ったら、そこで一年生の女子生徒に囲まれてしまいました。
　質問されるままに、日本の話、僕の中国の旅の話など、屈君をからかいながらの2時間がアッという間に過ぎてしまいました。
MDに内容を録音していたので帰ってから聞いたところ結構、中国語の勉強になりましたね。
　九時が過ぎていましたが腹が減ったので屈君と近くの食堂に行ってワンタンを食べましたがそれがとても美味しかったですね。
値段を後で聞いたら3元（４５円）だそうです。いい夜食の店を見つけました。写真は湘江べりで凧揚げに興じる人.

2004/04/08

今日の長沙の天気は１００点です。ここ長沙の一日は空模様で決まりです。
朝８時からの作文の授業を今、終えて、部屋に戻って書いています。多分、これから、一人で湘江の川べりの散歩か、遊覧船にでも乗りに行こうかと思っています。
　５分ほど前にウルムチの馬麗春さんと電話を交わしました。５月は前半、新彊（しんきょう）ウルムチに１０日ほど行くことにしました。馬さんがカシュガル、コルブト、カラクリ湖などを案内してくれるそうです。
　範先生ご夫妻や学生たちには悪いけど僕の心は予定を一ヶ月早めることに決めました。ですから、出来れば湖南に居るうちに、南昌とろ山には行きたいですね。
明日の夜からは待望の《張家界》に行きます。
　汽車で6時間ぐらいかかりますが1年の王志国くんが案内です。
　日本からだと考えられない位安い費用で旅が出来ます。僕の日記を見ている方は「羨ましいなぁ。」と思っておられる方もおいででしょうが、個人旅行の醍醐味でしょうか。
、威張ってみても、実は、いつも誰かのサポートつきの旅で威張れたものではありませんね。

さて、思いついた時に最近のこちらでの旅のチェックポイントを記しておきましょう。

今までも書きましたが団体での食事の場合は不要ですが、個人的に食事をする場合、日本人はスープのような飲み物をとる習慣があります。

そういう時、あのインスタントみそ汁（・お湯だけで出来上がる・）は便利です。是非携帯して、お湯を貰って作りましょう。言っておきますがこちらのスープはまず飲めませんよ。（少なくとも炒飯の時は必携です。）

それと、ポケットティシュは携帯不要と言っておきましょう。嫌というぐらい、何処ででも出ます。

財布状になっていて日本のポケティシュを二個くっ付けたようなのです。ですから、旅行バックによくティシュを沢山持つ手行く人が多いようですが必ずそのまま日本に戻ります。どちらかと言えば、「濡れティシュ」の方が役に立ちます。

今夜、袁さん、鄭さん、範さん４人で食事をすることに決まりました。・・・・・と思って楽しみにしていましたら袁さんが会社の仕事が入り急に来れなくなったそうです。袁さんと会う為の集まりだったのに残念です。

食事のあと、三人でまたまた例のサウナ《碧水藍天》に行き、二階の休憩広場で若い男女の素晴らしい器楽演奏を聴き感動しました。

張家界は日本では武陵源と言った方が分りやすい方もあるかも知れません。でも、行ってみると武陵源という言葉は観光区域としては認知されていないようです。

日本の旅行案内書では、時に総括して武陵源と言う言葉が使われたりします。僕も以前から武陵源の中の張家界と思っていました。

教室で「明日は武陵源に行ってくるよ。」と言うと「エッ!先生はチョーカガイに行くのではナイノデスカ?」と言われてビックリした。

僕が理解した説明をさせて頂くとこういうことになる。

まず全体を《張家界》もしくは《張家界風景区》という。現地、湖南省の旅行案内によると、

「張家界は湖南省の北西部にあり、張沙からは約００キロ、張家界国家森林公園、天子山，索渓谷の三つの名所からなっています。張家界は総面積３６９平方キロメートルです。

有名な「黄石塞」は国家森林公園の中にあります。標高は１１００ｍです。

「索渓谷」と「宝峰湖」はホテルや観光施設が集まる軍事坪・武陵源区政府から歩いていけます。

水八百峰八千といわれる「天子山」は張家界の北部にあり、総面積は１００平方キロ，観光名所数は８０余りあり、主峰は標高１２６２ｍです。第二の桂林をめざしています。

ここ、張家界は韓国人にはとても人気のあるところらしいです。実際、あらゆる食堂や土産店、観光説明に韓国語が書かれています。

確かに、韓国の観光客はとても多かったです。日本人の団体、もちろん個人も、一度も会いませんでした。

あの三つのツーリストは黄山に行ってるのでしょうか?それとも成都の近くの山でしょうか?

ここ張家界は先にも説明しましたが、大きく分けて４っの見所があります。黄石塞と「索渓谷」と「宝峰湖」と天子山それに黄竜洞の４っですが、僕は、何といっても天子山でした。

まさに息を呑む絶景でした。

僕は幸福（シンフー）だな　ぁ、と目の前に広がる自然のパノラマ（ありふれた表現で申し訳ない。）にしばしズイラ（酔了!）。次は僕らの行程を描写します。

前の最後に汽車のことを言いましたが、ついでに運賃のことなど書き足してみます。

ここ長沙から西の方に特急で６時間ですから鹿児島からだと前の寝台特急《桜島》で岡山位までしょうか。料金が片道・１４０元（２２００円）というところです。

近距離・例えば長沙始発の長家界行きのような場合は１７両編成の列車の構成で５両程の寝台硬座のほかは全部硬座です。

始発から買う場合のみ硬座でも座席指定が買えます。料金は寝台の半額の７０元です。

また、始発が広州とか遠方で終着駅ももっと遠い場合はこの編成のほかに１両の軟座寝台に食堂車両が加わります。何故か軟座は見当たりませんでした。

軟座の替わりに硬寝台なのでしょうか?

途中駅で乗った場合、もし寝台が買えなかったら外国人は大変です。まず、繋ぎの

場所か、洗面所付近に地に座ったまま目的地まで、ということになります
もっとも、意識のうえで中国人的感覚になりかかった人は無事自由席の人になれるでしょう。
大学一・二年の頃鹿児島駅から東京まで３６時間を霧島の席無しで上京した記憶が蘇って来ました。あの頃はあの頃で楽しかったですが。
何時間も前から、整然と並んでいましたが、それでも、汽車のタラップを上がる時は、流石に心臓が高鳴ったものです。
「どの席に座ろうか?」
車両に入ってからの席取は目が血走ったものです。

なにしろ３６時間の長旅ですから、同席者も気になります。若かったですから、やはり若い女の人と同席が好ましいし、それが今も未だひきずってますね。
狭い寝台の場合、じじい（自分じゃないか?）より、小姐です。それもピャオレンな・・・。
硬座の大待合室で改札を間近にした人の気持ちと、あの狭い改札口へ殺到する人の気持ち、分らないでもないです。昨日は一人、女の行商人でしょうか
、大きな天秤籠を背負って改札口を通ろうとしますが殺到するひとの波で通れません。改札口が棒が横になって通れないのです。両隣の改札は流れがスムーズです。
可愛そうな天秤棒の女性、でも、一瞬の間だったようです。 あの、川の流れの石の間を抜けて流れる笹の葉みたいにスーッと狭い改札を抜けて行きました。
車内の何箇所かで寝台キップを車掌は売っています。７０元を右手に持った人の波が押しかけます。我が格さんもその中にいます。
「ごめんね!王志国くん!」
僕は心の中でつぶやきました。5月、僕は一人旅であの中の一人になれるだろうか?
昨夜、9時過ぎ長沙駅に着きました。
正確には8時50分頃です。三人で駅前の「五一大通り」を出発前に食べた「松花江餃子店」に《張家界の旅の最後の乾杯》をするために歩く途中、駅のシンボルのオルゴールの九時を知らす音が聞こえていました。
僕の充実?した長沙の旅もやがて終わりを告げようとする、そんな響きにも聞こえてきました。
《思い出は自分で創るもの》今回の《武陵源・張家界》の旅は、まさにそんな僕の考えていた夢の旅そのものでした。
行き、帰りの硬座寝台列車の中の見知らぬ中国人達との交わりをはじめ、中国人は目の前にいて、きっかけさえあればもう（日本で言う）友人もどき、と言うのを体験できたのも収穫でした。
でも、自分に殻がある限りたとえ人なっっこいと言われる中国人も決して、そんな好奇心は示しません。
むしろ警戒心なら強いお国がらと言えるでしょう。去年、慎介と行った蘇洲への汽車の旅を思い出しました。
今回の《武陵源・張家界》の旅は、日本式に言えば、助さん，格さんを連れた黄門さんのようでもあり、西遊記の和尚さんの気分のようでもありました。
二泊三日はその 10 倍のツアー旅行に負けない程充実したものでした。お湯は勿論のこと顔を洗う水がやっとというホテルに泊まったのも初めてでした。
ほとんど、一食が3元（45円）程度のご馳走（本当に美味しいんです。）で通した観光旅行も勿論、初めてでした。
一方、一人１００元（１５００円）を超えるロープウエーを二ヶ所、無料パス（格さんの顔で）で通り、山の入園料一人２５０元（３７００円ほど）も格さんの顔で無料という、とても、考えられえない愉快な旅でした

2004/04/17

もう「ケイジの長沙日記」は前回の《張家界紀行》で6月までサヨナラかと思いま。まあ、読んで下さってる方は余りは居られないでしょうが、最大の読者である本人が一番寂しい思いをしました。
いろんなことが起きていくのに忘れていくのは寂しいものです。これが連れでもいると、その人が覚えてくれているものですが、連れが中国人ではメイバンファーで

す。

ご安心ください。とりあえず、繋がりました。僕のＰＣに問題があったのではなく、やはり（よく、こちらに来ている人のＰＣがこうなるのを、ＨＰ上で見てはいたのですが・・）なにやら、長沙市のアクセス番号（ダイヤルの）が変わったとのことで、直してもらいました。

今回も学校の新婚ホヤホヤ美女・寺崎先生（中国名：二工・巧燕）さんのお陰です。もう諦めていましたから

（ワンバーにでも行ってポケスペ・hotmail のようなもの。だけでもみようかな、と思っていましたから）僕にとっては大恩人ですよ。（謝々）

さて、何から書いていいか分りません。《張家界紀行》は続きですから、思い出しますので、ちょっと置いときます。考えてみれば、忘れるほどの期間でもありません。とりあえず、目次だけ書いといて、あと入れ込んでいきます。

13日：3時頃から日語学院親睦のバーベキュー大会を烈士公園で開催した。

15日：袁静さんペアを交えて範院長・鄭さん、僕で晩餐会を《一路平和》で開催。

16日：　袁静さんと二人で華天ホテルのレストランで食事をしたあと、酒芭に行こう行こうと誘われたがあまり乗り気がせず、歩行者天国をブラブラ。

17日：今日は袁静さんの実家でご両親が昼、夜接待してくれるそうで、ワーゲン・パサートで迎えに来てくれることになっている。

18日：明日の日曜は鄭さんの実家で魚釣りを愉しむ約束で、参加者は《一路・・》のメンバー5人。市内から一時間ぐらいらしい。

20日：は学生の朱さんが「私の田舎に連れて行きたい。」バスで1時間ぐらいで、とてもいい所とのこと、「いってみてもいいかな?」「行ってもお食事は要らないよ」といっておいた。又、蛙や亀が出ても困るから。

2004/04/17

まず、ゴールデンウィークの計画は四っありました。

①杭州まで汽車で行き、招興・寧波3泊4日。

②桂林の金さん宅を訪問する。

③南昌から口山の2泊3日。

④鳳凰古城への4日の汽車の旅（780元）

一番希望は③だったのですが交通機関がバスしかなく6時間の普通の観光バスの旅は大変。1日千元出したら個人タクシーを出すと旅行社に言われたが、そこまでして行くこともない。最初の①を加治佐　昭（合肥市）と一緒に行こうかと思っている。でもこのシーズンの中国は春節に劣らぬ混雑らしい。

上旬は新疆の方を10日ほどかけて前回行かなかった所をと思い、馬さんにプランを立ててもらった。以下のようなプランである。

大石さん：　　こんばんは。

五月の旅行の件ですが、新疆にはカシュガルのほか、また行きたい所がありますか。以前行ったトルファンと天池にもまた行きたいのですか?

新疆南のところはちょうどういい気候なんですが、北の部分はちょっと寒いです。カシュガルだったら、カラクリ湖の見学は一日かかりますが、もし市内の観光とあわせれば、二日間十分です。

そのほか　お勧めすると、クチャ「庫車」キジル千仏洞も見る価値があると思います。一日ツアーです。カシュガルから列車でクチャへ行くと、九時間ぐらいかかります。ウルムチとクチャの間、航空便あります。

新疆以外はその時期に青海省の青海湖が一番いい季節を迎えるそうです。チベット風格のお寺も見学できます。ウルムチから西寧の航空便は二時間で1030元ですが、早めに要約すると割引があります。

月曜日だけあるそうですが、間に合わないと、まず　ウルムチから飛行機で蘭州にいて（二時間で800元ぐらい手に入れると思う）、それから蘭州から西寧へ列車（三時間かかる）でいけます。蘭州から100キロに有名な炳霊寺石窟が見学できます。

西寧から西安までの航空便も列車もあります。航空便は590元ぐらいです。

以上の航空便は早めに予定するとすべて割引があるです。三ッ星ホテルはほとんど一部屋が300元/日以内、手に入れると思います。

私は大体五月の十五日まで、休みが取れますが、弊社のツアーは私も西安に行くかどうかまだ決まっていませんが、今月末までに分かるようになると思います。もし

西安にも行けるし、時間にも間に合えれば、西まで御供になれるだろうと思いますが、言うまでもなく、大石さんのご希望に従うことは当たり前です。
　また　いろいろな詳しいことを打ち合わせなければなりませんが、メールでご希望をお教えください。メールを送ってくれてから、携帯メールでお知らせてくれれば一番いいです。

馬　麗春

●ほぼ、８０％はシルクロード（新疆）カシュガル紀行を決めていたのですが経費の面というか、実は中国は今、ガソリンが不足していて、４月２０日から全国内航空運賃が２０％アップされました。
　従って、割引も当然少なくなるので、まず、ウルムチ・長沙間が２０９０元になりました。日本円にして３万円弱です。カシュガル間を入れ、馬サンの分を加えたりすると、結構な額になりそうです。
　長沙・上海が８９０元（１万２千円）長沙・西安も同じく８９０元ですから、交通費は考えてしまいました。次の機会に２，３人で持つと一般ツアーよりずっと格安なので、残念ですがその時まで延期します。
　馬さんも、とても残念がってました。多分一人で、西海湖・西寧・蘭州などのチベット色濃い地方（今一番言い季節）を旅してみたいと思っています。時間と余裕があれば、九塞溝・黄龍あたりも欲張りたいです。

2004/04/19　　袁静さんとの毎日

１５日、１５日、１７日の三日間はまさに、袁静さんとの毎日でした。
　買い物、食事、市内見学、ご両親の実家に訪問と。「何処に行く?」「何を食べる?」「酒場（字がちがうジューバーと呼ぶ巨大なクラブとディスコ）行こうか?」。とか、「もういいよ」と言うと、「大石さんツカレマシタカ?」「いいや、別に」と言うと、「足マッサージしたいですか?」とくる。
　あつかんは3日目でした。朝１１時に学校前に迎えに来ました。ワーゲンポロを自分で運転してきました。このむちゃくちゃ運転の街で自分で運転するなんて無謀じゃないか!言いたい所でした。
　一日に4，5件の交通事故に遭遇します。すごいと言うより呆れてしまいそうな交通状態です。主要道路上での、Uターン、信号無視、が車も歩行者もバイクも同時に行われる交響曲です。
　案の定、袁静さんは下手（なれない）姫ドライバーでした。特に駐車時は冷や汗ものです。
　袁静さんのご両親はとても穏やかな微笑をたたえた上品は方でした。美味しい家庭料理は最高でした。人民政府のお役人さんには。とても見えないお父様です。家も素敵なマンションです。
　食事にあとは市内で有名な美味しい水の出る公園に連れていってくれました。昨年出来たという体育館の隣にあり、名前は「白沙古井」でした。あの長沙の地ビール「白沙ビール」の名の元だそうです。あとで、観光地図を見ても、何処にも記載されていませんでしたが可愛い小山のような公園と、水を求めてやって来た市民で賑やかでした。
　写真は袁静さんのご両親と。次は日記に書いた「白沙古井」明朝からわき続けている水らしいです。勿論、飲んでみました。美味しかったということにしておきましょう。最後は「長沙市図書館」に行ってきました。
　友好協会の雷副会長に招ばれた時、鹿児島市からの寄贈の文庫が有る，と言われたので、覗いて見たかったのです。残念ながら、何処のも｢-｢-はありませんでした。

2004/04/19　研修生

袁静さんは長沙市から毎年、半年間、鹿児島市役所に研修にくる一番新しい研修生でした。僕もこちらに来るのにいろいろ情報が欲しくて何度かお会いした女性です。スタイル満点（１７２センチ）の中国女性です。
　休みの日に二度ほど映画（赤い月・ラストサムライ）を観に連れて行ったことがあります。食事や酒バーなどで日本人の友好協会会員や鹿児島大学留学生などとも交流し、今までの交換研修生の中では充実した滞在だったのでではないでしょうか。
　特に「国際交流課」勤務だったので、市役所の中でも家庭的な所ですし、課員の

方も親身になってお世話され《袁静あなたは幸せよ》と言ったことがあります。
写真は平和堂の6階にあるブラジル料理レストランに彼女のご主人と三人で行きました。又、三度目のチンワ（蛙）を食べました。

しかし、ここで食べた野菜サラダは「こころの底からしびれるよ～な、吐息がせつなく～」そんな感じの美味しい日本の生サラダでした。ステーキもおいしいし、値段は一人前、58元ですが、順番待ち2時間でした。
ところで、一日目の鄭さん、範さん、一緒の会食のさい僕は生まれて始めて蛇をついに食べました。切り身の数から僕はこの蛇は1メートルと思いました。 袁さんは黒い蛇の皮が好物だそうで、僕はそれだけは死んでもいやです。身のほうは結構いけます。

2004/04/19

今日は本当に暑い！31度とのことである。街を歩いている人の服装はまちまちである。 無論、若者はTシャツだ。長袖のシャツも少ないが、ダーク系の背広姿が結構多いのが中国らしい。ファッションでいえば、靴の型に特徴がある。
ハリーポッターではないがトウが尖っているか、先の方が反り上がっているのが多い。日本では余り売れない。おしゃれ関係の仕事をしている人の靴の先は異常ともいえる。
歩行者天国を歩くと殆どの店が一軒で男女ものを扱っている。理美容院もそうだ。上海だけは違う。
さて、気になっている中国人気質について話してみよう。
このことは誰にも知られたくない。
このことは誰にだけは知られたくない。
日本ではこんな秘めごとに対する心配はあまり気をつかはなくてもよい。勿論、人によっては入り込んでくる人もいるが。
例外は無論多いが、かなりの人がしっっこいのだ、
「誰、だれ、ダーレ！」と
それほどの関係もないのにこれはもう妻か愛人の追及に近いのである。
もっとも彼女らからしてみればそれ程意味の深いことではないらしい。単なるお国気質だろうか?でも、２０％ぐらいは日本の女性以上に謙虚で慎ましやかな女性も多い 。
彼女らは日本ほど年齢の格差を気にしないので「危ない関係」のプロローグになるからご注意。僕の場合は未だ残念ながら、女朋友まで行った女性がいないので、あくまで好像の域を出ないけど。
少なくとも１０名以上の中国女性に聞いたところでの話であるが・・・。
・・・・・・ここの文章チョット待ってください。
僕のＥメールの機嫌が悪く受けられるのですが、送信が上手く行きません。ポケスペでこれから返事をします。僕へのメールも差し支えなかったら左の掲示板をご利用ください。
写真は１８日に行った鄭さんの田舎での料理：地鶏の卵を二個、生で頂きました。一瞬、「鳥インフル」も考えましたが・・・久し振りにご飯に掛けていただきました。

2004/04/20　　４月２０日・日曜日

鄭旗さんの田舎に魚釣りに行く日が来た。

範さんご家族に鄭さん親戚２人に息子さん計８人での魚釣りである。
昨夜、袁静さんご夫婦と平和堂６階のブラジル料理店で食べながら、外は大雨、明日は
まず、大雨だろう、「中止ですね。」と話した。結局、彼等は参加しなかった。
すばらしい快晴だった。約、３５分位、北の方向へ車は向かった。
鄭さんの田舎は日本の田舎の風景と殆ど変わらなかった。」お父さん、おかあさんはとても気さくな良い人だった。王君、袁静さん、鄭さんとご両親に歓待されたけど、どこも、とても感じがよかった。
待望の魚釣りに出かける。田舎道を歩くこと２０分。ため池、沼地、何だろう潅漑用の溜池が正解だろうか?深さ２ｍぐらい、広さ３０ｍ×５０ｍその程度の池である。

狙いは鮒と草魚（７０ｃｍ）である。結局、鮒だけ５０匹ぐらい釣ったか？大きさは２０ｃｍぐらい、餌はごかいである。　鄭さんの仕掛け通りで釣り始めたが、結局、ぼくは５匹ぐらい。難しい釣りでした。一日、のんびりと過ごしました。

2004/04/21　　月２０日・火曜日

朱俊橋さんの実家・株洲市に遊びに行った。二人での高速バスの旅である。長沙駅の近くのアポロデパートの横に近郊の高速バス駅はある。乗ってみると、なかなか快適なバスだ。エアコンにゆったりシート。時間にして８０分である。

株洲市は湖南省の南に湘譚市とほぼ並んで位置している。湘譚市が毛沢東の故郷として名を上げているのに対して、株洲市は工業の町として有名らしい。と言うのは、僕は全く知らない町だからである。

彼女に何か名物か、名所はないの？と聞いたら即座に答えが返ってきた。

帝の銅像のある広場が中国で天安門に次いで、第二のスケールなんだそうである。　だいたい、炎帝なる人物が初めて聞く名である。　２０００年も前の伝説の人物なんだそうである。なにやら、串木野市の「徐福」伝説を思い出した。

2004/04/23

さて、ここらでここ長沙市の食べ物情報を書いてみよう。あくまで、僕自身の偏見と体験上の情報であることをお断りしてである。

滞在体験者からすればかなり貧弱な体験でお恥ずかしい。忘れない為に書き留めておく、と、まあそんな感じと解釈して欲しい。　来る前に持っていた予備知識のうち、辛さ（唐辛子辛さと塩辛さ）はいつも、注文の際「不辛的！」「不辛的！」と注文するし、というより、同伴に、してもらっているので、さほど感じなかった。

また長沙人が口をそろえて「美味しいよ。」という蛇　も、チンワと発音する青蛙も試食はしてみた。いずれも、美味しかった。

蛇も元の形を想像しなかったら、「味口蛇」という料理は醤油味に煮て食べたけど不味くはなかった。でも、続けていくつも口にするまでは行かなかった。特に、料理の皿の中にあるクルッと丸まった黒い蛇の皮を、美味しそうに食べる袁静さんをみていて、異国を感じた。

鄭さんなど、食べ終わると、お皿の上には背椎と糸のよう細いあばら骨だけが残っていた。

スーパーの食品売り場にごそごそしているウグイ（亀）は結局、食べなかった。こんな形でヘビを売っているのを見た事はなかった。もひとつ、長沙人は犬が好物と聞いていたが、これも大げさな表現のようだ。

もっとも、鄭さんは「犬も、猫も美味しいよ。」とウインクをしてみせたけど。

食堂についていえば、「松花江餃子店」はお勧め店ナンバー１である。

黄興路近くの解放路にある店（滋賀の竹岡健一さんご夫婦にお勧めメニューまで紹介して貰った店）と長沙駅から五一大路を西に向かって１０分も歩くと右側にある「松花江餃子店」は共に１０数回訪れた店である。

ベストメニューは焼き（ジャン）餃子（ジャォズ）に水餃子、中の具は何でも美味しい。

注文するとき注意しなければならないのが注文の仕方である。

日本のように一皿とか、一人前とかは言わない。一人前を２（アー）両（リャン）と、１両が約５０ｇ（５個ぐらい）最小注文単位が２両である。

竹岡さんに勧められたうちの３～４品をいつも注文する。一人前の料金が大体、２０元ぐらいになり、学生３、４人で行っても６０元を余り超えない。

今にして思えば、竹岡ご夫妻は、６種類ぐらいの注文をされたところをみると、僕に試食を勧められたのだろう。多分一番高かった牛肉の薄く切った醤油味は、その後は僕のオーダーからは除かれた。正式名は醤牛肉といい、一皿、２５元ぐらいだったと思う。

白菜猪肉も美味しかったけど、その後は食べていない。恐らく、その時の料金は３人で１００元は超えていただろう。気の毒なことをした。

さて、何といってもここの餃子に並ぶ人気メニューは「東北三糸」（糸の字はこれではない）という春雨、細切りキュウリに卵焼きをこれまた細く刻んだもの。酢醤油で混ぜる。

「小葱拌豆腐」という絹ごしトーフの上に小ねぎを載せ、醤油をかけてたべる。醤

油の中に油が入っているのがなければ日本の冷奴である。僕は溜まった油をすてて上から醤油だけを又、かけて食べる。

これにねぎのお餅も美味しかった。正式名は香甜糖餅、これは中国人はよく注文する。形は違うけど味はどこも似ている。要するに甘い餅を薄く延ばしたものである。

回数多く行った店では歩行者天国（歩行街ブシンジェ）の入口角にある日本料理店「火の国ラーメン」は日本人には安心して行ける店と言える。５回ほど行ったけど、不思議と日本語はどこからも聞こえてこなかった。従業員小姐たちの、下手な「イラシャイマセ～」の日本語以外は。

ラーメンは一回食べて止めた。２０種ぐらいあって２０元と、まあまあだけど、焼き魚（サンマ、ししゃも）のほか、コロッケ、サラダ、寿司も二個１０元と異常に高いが味は悪くない。

日本感覚で食べたら５００円で充分なので、日本の寿司を食べたい向きにはお勧めである。みそ汁とキュウリのおしんこはサービスである。

もう、４年ほど前、ウルムチの日本料理店「平政」に馬麗春に連れて行ってもらった。

あのとき食べた寿司の味も忘れられなうほど美味しかったけど。実際は、期待感の薄さとの格差がないので、そう思うだけで、日本でだと、美味しい回転すしと違いはないのかもしれない。と言ったら、「平政」の美人おかみや「火の国」の調理師におこられそうだが。

何時か、「かつカレー」を食べたことがあったけど、ごはんとルウの比率が、ごはん７にルウ３、その上に薄いトンカツが載っている。これも、味は悪くない、でも、なんとなく変だ。ご飯をたくさん残してしまった。

日本ではカレーを食べて、こんなにご飯を残した経験がないので奇怪である。そういえば、炒飯もいつも三分の一は残す。僕が小食なのか中国人が大食いなのか？疑問は解けない。

ここの「黄興路」近くに平和堂がある。そこの６階にあるブラジル料理店はおそらく長沙では指折りの人気店だろう。竹岡氏のお勧めレストランにも入っていたので、袁静さんご夫婦に連れて行ってもらったことは先に書いたが、あの肉の味と、ボリュームたっぷりのサラダに惹かれ数日後、また出かけた。

日本語も少し話せる人気ブラジリアン（堺駿二に似ている）の柔らかい肉を切ってもらいながら、彼と日本語で短い会話を交わすのも楽しい。彼はここの主人なんだろうか？二度目なのに、顔なじみになってしまった。

３０分程に一度ぐらい回ってくるのでいつも皿の上には彼の柔らかい肉がなくならない。他の人より多めに切ってくれるからだ。

６名ほどのコックがシュシュカバを持ってテーブルを回る。湖南料理と果物やサラダ、それにアイスクリームはセルフになっている。一人５０元、土日は５８元である。日本人が来たら、まず、連れて行きたいナンバーワン・レストランである。

食べ歩き、というほど食べに行ってはいない。殆どは、ヤオリン近くの庶民食堂か会社の食堂での昼ごはんで済ましている。いずれも４元から６元、ビール３元を加えても日本円にして１５０円ぐらいである。

味にも慣れてきたし、空心菜など、気に入りの野菜炒めも分ってきたので、済まそうと思えば、一日の生活費は３００円（２０元）もあれば充分過ぎる。

範先生とは、週一回は必ず行く「碧水藍天温泉」でこれまた、何でこんな料理が無料なのと思うほどの食事を食べながら、長沙の生活水準や中国事情、過去と未来の展望などをいつも語る。

分りやすく今の生活事情を言えばこうである。まず住まいで言えば、日本の３ＬＤＫの各部屋を十畳程度にデラックスにした部屋で２万円足らずが一月の家賃という。

範先生の自宅（結構、豪華であるが、僕の家程度です。と、彼は言う）範先生は毎日、朝、９時から夕方６時まで、若い女性のお手伝いさん（一昔前の日本の女中さん）を月４００元で雇っておられるそうである。

掃除、洗濯、料理（昼と夜）まかせで、食事は食べさせてあげてるそうである。それでも安い。一万円（７５０元）も出したら、お気に入りの若い女中さんが雇えると言う。「貧しい農村人口が中国は多いですからね」と範先生は言う。

１月の食料費や交通費、以外とかかる携帯電話代などを合わせて１万５千円（１２００元ほど）会わせて４万５千円あれば、まずまずの快適生活は、今の中国では出

来ることになる。範先生は言う。
「上海郊外の田舎に住む外国人の引退者（年金生活の夫婦）がとても増えてきています」と。ただし、マンションやマイカーを買うとなると日本と現状は変わらないという。むしろ、贅沢品に関しては日本より金がかかると言う。
情報、文化、娯楽、治安のいい、上海、大連、青島などの郊外に家を借りて老後を過ごす方が、アメリカやオーストラリア、スペイン、タイなど、いわゆる顔から違う国でのんびり老後を暮らすより、中国の方が溶け込みやすいと思うのは僕だけだろうか?言葉が分らない、通じないのはどこへ行っても同じこと、その個人の問題であろう

４月２４日　　（土）シャケンと南岳衡山へ行ってきた。

衡山のことを何故、前に南岳と付けるのか山に登ってみて初めて分った。
衡山は中国の（五大名山）五つの岳の一つだからである。
東岳　泰山（山東省）
西岳　華山（陝西省）
南岳　衡山（湖南省）
北岳　恒山（山西省）
中岳　嵩山（河南省）
信仰上の霊なる山である。戦国時代により五行思想の影響により生まれたと言う。
総面積１８４平方キロ。長沙を朝、８時ごろに出発。華天国際旅行社の小燕が
「長沙ニイルウチニ　イテタ　ホウガヨイトオモウヨ。アタシ　イショ　イコカガイドリョウ　イラナイ」
というので二人でバスツアーも悪くないな、とＯＫした。
中国人８名の小ツアーに加えてもらった。費用３００元の所を２００元での特別サービスである。生憎の悪天候である。一昨日の３５度が昨日は昼間に空が真っ黒になるほどの異常気象。今日も寒くトレナーを着込んでの出発である。
今週は二日、湖南省を南に下ることになる。湘江に掛かる橋を先日は株洲市、今日は湘譚市と湖南省も２ヶ月の間に西、北、と体験分布図が広がってゆくのは楽しい。
約２時間半は吉川「三国志」を読む積りでいたが、とんでもない誤算、マイクロから飛び跳ねそうな状態の連続、火曜日の高速バスとは大違いだ。
前の席のインテリ風男性は景秦から会議に出る為に来たので帰る前に登りたくて来たと言う。
丁度、５月に西安を中心に北西地区を訪ねる予定なので、行程や交通機関そしておすすめの見所などを地図を見ながら聞きまくった。きつと変な日本人と思ったことだろう。
７８歳の老人と２５歳の中国銀行の小姐のカップルは不思議だった。近いうち、その老人とカナダの東側（と言うとケロッグ地方か?）に留学するのだと小姐は言う。
時々、恋人のような、愛人のようなしぐさをするので、ますます変だ。二人が話を交わす事は一番最後に彼女がバスを降りるときまで無かった。もちろん二人が話をしないわけではなく単に無口な二人、ということだ。
衡山一日ツアーは霧の中だった。
三年前、妻と娘と三人で黄山に登った時と同じ前の人が見えないほどの濃霧が覆っていた。衡山は仏教の聖地として多くの人が訪れる名山である。
、道教のお寺も数えると寺廟・庵・など２００箇所余りが点在していて、山全体が線香の煙と爆竹のすさまじい音で覆われている。
今日はとても寒い、霧が立ち込め恐らく１０度ぐらいの寒さだろう。
沢山の登山者、グループ、修行者団体などひきも切らずに登る。
霧になかの黄山そっくりの光景である。
可愛い，わりにはどでかい声（正確にはハンドマイク）と早口（に聞こえる）中国語のガイドが奇妙な団体を引っ張る。
頂上まで４，５箇所の寺院や名所，古跡を案内する。
途中で１０元出して、北方の軍服コートもどきを借りる。えらく重いコートだが寒いので仕方ない。こないだの３５度の陽気と２０数度の格差に体内異常が発生しそ

うだ。
一組のカップルは５０歳代の男性と４０歳代の女性、９０％は夫婦に見えるが組み合わせは目立つ。女の顔は西系のウイグル美人に見える。髪を茶髪にして、ときどき男に密着しすぎる。このへんが中国人の中年夫婦と違う。
ところでぼくと小燕の組み合わせは皆にどう映っているのだろう?小燕も少しぼくにくっつきすぎる。特にぼくの耳たぶを触る癖がある。
「アナタ　ミミ　サワルト　キモチ　イイネ。」
一つの寺院の中には、たいてい１０ヶ所以上の佛像と拝礼場所がある。そしてかならずそこには線香売り場があって、名前を書いて運勢判断をするようになっている。
立って三拝、ひざまずいて三拝。道教の拝み方はチョッと変わっているらしい。
「オナジホウホーイイヨ。」
小燕も結構熱心に拝んでいる。仕方がないので並んで参拝するけどはっきり言って面倒くさいと思っている。
「アタ（貴方のこと）ナニネガイアル　想念シナイトイミナイネ」
とうるさい。疲れもするが、金もかかる。
ところで、かのウイグルカップル、二人して、特に熱心だ、そっとガイドが教えてくれた。
女が昨夜、腕をナイフで切って自殺未遂をしたとか。ノイローゼなんだそうだ。僕はわずらわしくて二人とは一度も話をしなかった。
天女の池、サルノコシカケか霊芝とかの場所を見たり、蒋介石総統と奥さんの居間&ベッド、会議の場所、抗日戦争の資料や写真、どういうわけか明朝の女性のミイラ（ミイラはそれ自体が気味が悪いのでだいてい美女と形容詞がつく）まで見せる。
結構、面白いツアーだった。南岳大廟は最後のスポット・忠烈祠と共にスケールの大きな見所であった。北京の故宮を真似た九つの中庭。大殿はとりわけ綺麗だった。
バスに戻り回家（帰路につこう）というところで例のカップルが一向に戻ってこない。
なんてことか!門の前で大喧嘩が始まったのだ。
ウイグル女は大声でわめき、男に足蹴りを放つ。男は少し身体を引き、片手で制止する。
３０分経っても一向に治まる気配は無い。メンバーの一人が行く
「おまえさんたち!迷惑じゃないか!喧嘩は家に帰ってからせえや!」
「イヤ!あたしは帰らない!この男は金も無いくせに献金をし過ぎたよ」
「私たち二人のためにした願い事じゃないか?」と男が制す。
女の感情は高ぶるばかりである。「この男は私のお金を使う。自分は稼ぎは無いくせに」
「そんなことはこんな所で言わなくてもいいじゃないか?」と男が制す。
矯正小姐が制止に行く。　運転手が行く。勿論、ガイドはマイクを使って制止する。バスに残っているのは北から来た男性と、カナダの金持ちじいさんと、僕の３人だけになった。
黒山の人だかりである。結局、最後は男が車に荷物を　取りに戻り、二人を残してバスは４０分ほど遅れて出発した。
そして、なんとも奇怪な一日衡山ツアーは終わった。
あの二人の、喧嘩の本当の原因は何だったのだろうか?
中国語のわからない僕が知る由もないが。
もし僕があの男性の立場だとしたら、僕はどうしていただろう。
たぶん、同じようなことをしていただろう。唯一つ違うとしたら、もっと早くに、バスのガイドに言うだろうナ。
「スミマセン!お恥ずかしい所をお見せしました。どうぞ、私たちを置いてお帰りください。」・・・と。

2004/06/04

又、又、今朝、長沙に戻ってきました。明日朝から、最後の湖南・村州へのアドベンチャー旅行へ行って、9日には久し振りの鹿児島空港へ戻ってきます。
三ヶ月間、日本の情報（政治、経済、スポーツ、芸能）は全く知りませんでし

た。
あれほど興味のあった、プロ野球や大リーグも、衛星放送のあるホテルなど無関係の3星ホテル廻りで、見ようと思えば見れるインターネットも覗こうという気が湧きませんでした。
中国から最後の「ケイジの長沙日記」をしたためたいと思います。
・・・・貴陽で三日泊まったホテルは、それまでのホテルと外観も部屋も変わり映えはしないところだった。
でも、サービスの点では一番よかったように思う。
お湯の出も申し分ない。湯沸かし器も充分、作動する。
室内の電灯類も、全部点く（この三点が完璧なのは旅行中、ここだけだった。
おまけに、靴に塗るスポンジもあった。（これも、ここだけ）感激したのは、毎晩、服務員の女性がお盆に、果物を届ける。
リンゴに桃に、梨にスイカなど、日替わりに届く。親切なことにかわいい果物ナイフが付いてくる。このナイフはとても便利なので、持って帰ることにした。
・・・今朝、貴陽竜洞空港で、このお気に入りの果物　ナイフが検問で引っかかってしまった。
その前のｾｷｭﾘﾃｨﾁェックのときポケットに入っていたガムを包む銀紙がピーピーと反応して嫌な予感がしていた。
係官が「刀（ダオ！ダオ！）」と言い、中を空けろといっている。
二個（刃の部分が3センチぐらいの）ちゃちな果物ナイフなのだが
「君は刃物類を機内に持ち込んだら犯罪になることを知っているのか?」と言ってるらしい。
「いや、知らなかった。便利そうなので持って帰ろうと思って・・・」と答えると。　「それなら、荷物で別に送れ、」と言う。
この前の紹興の時の紹興酒と一緒だ。面倒になってもイヤなので
「我不知道！　不要。」と言ったら、僕のパスポートをチラッと見ながらそのナイフを取り上げ仕事に戻って行った。
ところで、「中国、ひとり旅」をよく聞くけど、バックパッカー達の行動は、よく分らないけど、観光地を要領よく、効率的に周ろうと思ったら現地ツアーを利用するのがよい。
何故なら、単独で目的地に行くのは不可能に近い場合がある。市街地に近い寺や博物館ならともかく、昨日、行った識金洞・鍾乳洞のような所は公共バスやタクシーをチャーターして行く所ではない。
なにしろ、巨大な岩が崖から崩れている箇所が3箇所、道路の陥没（外は千尋の崖）生々しく、又、近くで巨大ダムの工事中らしく、大型トラックはセメントを載せてひっきりなしに通る。
ダムの横の仮トンネルの中は真っ暗である。地獄の底に突入するように小型マイクロは走る。出口の光が近づくとホッとした。
そうして、やってきた鍾乳洞には感動した。東京ドームのような（そんな気がするくらい巨大な地下ホール）である。張家界こそ見損なったけど、桂林、鳳凰などよりスケールが違う。
それにしても、よく歩く、昨日はアジアーの大瀑布を5キロぐらい一周し、今日は石階段を上がったり、下がったり。少し出ていた僕のお腹は、すっかり凹んでしまいました。
帰りのバス中は窓のスクリーンを下ろし、外が見えないようにして眠っていました。
僕の、このページでの旅行記は今日でお終いです。
5月いっぱいの「中国・気ままな旅紀行」は左のメニュー「ニーハオ！中国」から、ご紹介したいと思います。再見！！

2004/06/01

お久し振りです！
今日はアルトンジェと言って、中国ではこどもの日です。久し振りの長沙は晴れです。
昨日朝「鳳凰」から夜汽車で帰って来ました。
範先生が主催の「僕の送別会」でした。
長沙市に新しく出来た本格的日本料理店「京都」でありました。体育館の近くの金？大酒店（4星）の二階です。

今日の2時発の飛行機で「貴陽」に2泊で行ってきます。
僕の旅も、あと少しです。帰国後、いっぱい貯めた原稿を書きまくりたいと思っています。
折角、ここに、日記風のフォルダがあるので、ときどき思いついたときに、思いついたことを、書き綴ってみようと思う。
早いもので、明日で日本帰還後、一週間になる。
100日前の生活習慣が戻ってくる。捨ててしまった（忘れていた?）もろもろが我が脳の襞を急速に埋める。最大の原因をTVとみた。
こだわりや、しがらみや、不要な情報を捨ててしまった生活が、どんなに自然で、人間らしいものか、いまわかったような気がする。
ところで、昨日も、一昨日も、たぶん毎日、夢の中では、まだ住まいは中国に居るようだ。
もっとも、昨夜の夢は帰国直前の夢だったので、近いうちに帰国後のシーンになるだろう。
昨夜の夢はびっくりした。僕が中国で知っている女性（小姐）が4，5名、一度に上海に来た。日本に帰る前の3日間、僕の立てたプランに合わせて小旅行をすることになっている。
それぞれは名前は僕の口から聞いているけど、会うのは初めてという。それぞれに気を遣って、隠したり、嘘を言ったり、・・・と、あの、昔の東宝映画「三等重役」のドタバタ・シーンの復元である。
ホテルには誰と泊るか?行く所は《朱家角》に《新天地》と架空でないのが不気味である。
今夜、続きが見れるのか?
さて、まだ、中国茶を飲む習慣がとれないでいる。あの、でかいジョッキ風のコップを5元で買ってきた。中国茶にはクッキーが合う。朝ごはんには合わないけど、でも、つい、注いでしまう

2004/06/29

謹啓　梅雨の真っ最中です。ここは緯度がだいたい九州とおなじくらいですから、梅雨があるとは聞いていました。しかし、中国の梅雨は、ずいぶん違うような気がします。
土砂降りになり100メートル先が見えなかったり、横殴りの台風のようであったりします。
でも日本と同じで陰陰滅滅たる日が多く、気分が滅入ってしまします。
学校は只今、後期の期末考査をやっています。6月25日で終わり、26日から夏休みです。8月末までたっぷり2ヶ月あります。試験の採点を終えたら、「黄山」に一週間ばかり遊びに行ってきます。
黄山は安微省の南部、長江の南側にあり、山水画そのままの風景が広がっているといわれます。
1990年、国連ユネスコ世界遺産委員会によって、世界文化及び自然遺産に登録されました。水墨画は実景であると当地の人は言っています。この目で確かめ、感動を味わって参ります。
7月20日に合肥を発ち、上海に一泊して21日の12:30ごろ着の飛行機で帰国の予定です。上海・鹿児島間の直行便があり便利です。
年間でここを引き上げるつもりでしたが、生活に慣れたことや、学校の幹部や生徒たちから引き留められ、家族とも相談して、もう一年頑張ってみることにしました。謹白
とは言っても老体のことゆえ、無理はできませんので、大陸的雰囲気である慢慢的（マンマンデー・ゆっくり）と鹿児島のてげてげ精神及び将来の横着さで暮らしてみます。
およそ十ヶ月の中国での教師暮らしは、悲喜交交でした。安微省唯一の外国語専門単科大学をたちあげることに参画できたことは、私の教師生活の中で画期的なことでした。
北京や上海の大学の日本語科を卒業して、日本に留学したり、何度も日本での語学研修を経験し、私よりもきれいな標準語を話す教授達とともに、日本語をどのように教えるかについて討論したり、工夫することはとても楽しいことです。
学生達は人懐っこく、さまざまな質問をぶつけてきます。農家出身の生徒が多く、慎ましい生活の中で希望を持って、日本語と格闘しています。

御無沙汰ばかりで申し訳ありません。何とか生き長らえています。上記日程で一時帰国します。一ヶ月ぐらいいる予定。またさらに一年続けることになりました。酔狂にもほどがあるといわれています。

会いたいですね。あなたの中国での武勇伝を肴にして、冷奴と枝豆で冷えた生ビールをガバーッとのみましょう。為了日中友好。シェシェニン。再見。

大石先生：

時間が経つのは早いものですね。そろそろ2ヶ月間も終わります。先生と会えるのはよかった。本当に。楽しかった思い出はいっぱいあります。

遊ぶとか、食事するとか。先生いままで　いろいろお世話になりました。

どうもありがとうございました。また中国に来るのは楽しみです。

3月前、先生は来る前に、範先生の話によると、大石先生は日本で2軒の美容院を経営しています。やさしいし、熱心だし、真面目な先生です。実は初めて会った時、私はそう思いました。

それに先生が元気だし、素敵だし、45歳ぐらい見えますね。

先生は遊ぶ時子供みたいですが、授業をする時厳しいし、真面目だし、本当にいい先生だと思います。

私の日本語あまり上手ではありません。

これから先生の指導をもらえないですが、大変残念ですね。先生、帰国しても、これからも連絡してよろしいでしょうか?お願いします。

私は夢をかなうために一生懸命頑張ります。

先生はいつも「張麗さんはかわいですね」

って言いました。私はそれを聞くとほんとうに嬉しいです。先生の授業を受ける時ときどき、いたづらをしたり、あまり真面目ではなかったり本当に申し訳ございません。

今更後悔してももう遅いですけど。

先生、中国滞在中楽しくおすごしになるように。ご健康とご多幸をお祈りします。また、今度会えるように楽しみです。

Bye Bye Best Wishes for my dear teacher

2004 4 29　張麗　zheng li ちょうれい。

大石先生：

お土産ありがとうございます。大好きでした。

2ヶ月だけ滞在しましたがこの2ヶ月の生活はいつまでも忘れません。

先生と一緒に食事するとか、湘江へ一緒に遊びに行ったとか、とても楽しかったです。

ゴールデンウイークはいろいろなところへ旅行するそうですが多幸を祈っています。

先生のおかげで日本語もだんだん上手になりました。

この間たいへんお世話になりました。ありがとうございます。

付き合っていて先生はとてもやさしいし学生の勉強に熱心だと思っています。

チャンスがあったらぜひ日本へ行って、お宅をお尋ねいたしたいです。いつも元気で運がよいのを祈ります。

りゅうしゅうより

（追伸）　竜習（りゅうしゅう）

時間は流氷のようです。流れていくともう二度と来ません。知らないうちにもう2ヶ月たちました。

わたしは先生に会えて嬉しかった。たぶん一番印象を与えてくれたのはやっぱり先生のやさしさ、それと、仕事への真面目さだと思います。

大石先生

盛夏のみぎりいよいよご活躍のこと心からお喜び申し上げます。

時間がたつのは本当に早いものだ。3月1日に先生に初めてあってから2ヶ月過ぎました。

もうすぐ先生とお別れすることになりますから、大変名残り惜しいです。これか

ら、私は先生の授業を受けられないと思うと本当に悲しくてたらないのです。
この学校にいらっしゃった間、先生は私にいろいろ丁寧に教えてくださってありがとうございます。
２ヶ月の先生との一緒の生活はとても楽しかったです。
先生が仕事に対しての強い責任感を持っていることは私は見習うべきだと思いました。
内の学校にこんなすばらしい先生がいたことを誇りに感じます。
さて、私は来年、日本へ行くつもりです。日本に行ったとき、先生のお宅を伺いたいと思います。
日本での日々も早くお会いできるよう楽しみにしております。
話したいことは他に沢山あります。でも、私は今日本語が余り上手でないのでこれからもっと一生懸命勉強しています。　これから中国の天気はだんだん暑くなります。
どうぞお体を大切になさってください。
長沙までいつもようこそいらっしゃい。
２００４・４・３０

ちんけいくん

大石先生：
この間いろいろお世話になりました。本当にありがとうございます。２ヶ月もうすぐ終わりました。先生と初めて会ったことはまるで昨日の事でした。
先生のやさしさが忘れられません。どんな時でも、みんなやさしいです。一生懸命私たちに知識を教えてくれました。先生のおかげ様で日本語らしい日本語を習いました。沢山の日本文化も勉強しました。
日本のことを良く分かるようになりました。
先生の体が強いのに私は感心しています。こんなに年をとったとは思えなかった。
先生と一緒に過ごした日々はいつでも目の前に浮かんできます。（浮かべると思います）また中国語をならう意志に感心しています。
先生は授業をする時とか、一緒に遊ぶ時とか。食事をするときとか、よく皆にお聞きになりました。
真面目な人だとよく考えます。
先生の中国語はだんだん上手くなって、今後ぜひ自由に話せるようになると信じています。
先生と離れるのは悲しいですが先生と巡り合えたのはほんと良かった。これから旅行に行く予定ですがぜひ私たちと連絡してくださいね。
また先生にお会いできることを今から楽しみにしております。　先生も私たちのことも忘れないでくださいね。

りびうん

大石先生：
暑い日が続いていますが先生はひとりで初めての都市へ行きます。トテモ心配です。楽してお元気でね。
今年の三月に先生は中国へ来てから2ヶ月が過ぎました。時間が速いね。先生の日本語の授業はとてもおもしろいでした。
授業中にはいろいろなことを習いました。
先生は私たちに本を読ませ手文法を覚えさせ作文も書かせます。たいへんむずかしい事があったら、よく説明をしてくださるのですぐわかります。いろいろ教えていただきましたありがとうございました。
先生は今６０歳ぐらいと、聞きました。信じられない！そんなに元気ですね。特別に先生と一緒に遊んだとき先生の体力は私より強いです。
本当に感心しました。　先生と一緒に遊んだり、食べたり、いろいろ楽しいお話を聞かせていただいたことを思い出しています。
先生はもうすぐ帰国へ行きます。いつかお会えですかほんとりわかりませんがこれからも先生とお連絡したいていかがでし

ょうか、先生。
この2ヶ月としてみれば、先生はそんなにまじめに中国語の勉強に夢中しました。先生ことから私はいろいろいい勉強しました。
たとえば日本人のまじめ、日本人民の友好、日本人の考え方もちょっとわかりました。これは私にとても大切になります。　私も日本の経済、文化、政治、風土などのことに趣味があります。
これからもっと沢山日本に関係する読物を読みたいです。
考えにくいこともあったら先生に聞いても宜しいですか。
先生はもうすぐ旅行が終わったら帰国しますね。
道中のご無事をお祈りします。ご家族によろしく。
２００４・４・２９　　ごぎりん

大石先生
お元気ですか?おかげさまでわたしは元気にすごしています。
日本語の授業はとてもおもしろいです。
授業中にはいろいろなことを習います。
先生は私たちに本を読ませます。漢字を習うし文法も覚えなければなりません。
大変むづかしいです。しかし、先生がよく説明をしてくださるのですぐ分かります。
先生はいつもとても熱心だし,親切だし、それに経験もあります。
本当に心から感謝します。
今はまだ日本語が上手に話せません。だんだん上手になると思います。
読むのは少し出来ます。将来、私は日本人のような日本語を話したいと思います。　お体を大切にお元気で。
りしかく

時間が経つのは本当に早いものです。知らないうちにもう二ヶ月たちました。
そろそろ先生は僕たちと離れていくんです。残念だと思いますけどしょが無い事です。
李湯竜

大石先生：
日本人にとって、中国語を勉強するのはとても難しいです。
しかし先生がいつも真面目に中国語を習っていますね。
私はその精神に感心しています。
二ヶ月そろそろ終わります。
いままでいろいろお世話になりました。
本当にありがとうございました。

黄雪容大石老師：
あっという間に月日が過ぎてしまいました。
でも、先生が私たちに与えてくれた深い印象はいつまでもここに残ることでしょう。
先生の私たち生徒に対する情熱や親切、また仕事に対する真剣さ、本当に私達は感動しています。
またいつか先生にお会いできることを信じています。
先生も健康に気を付け中国での残りの日々を楽しんでください。

王俊

（王俊くんは現在、韓国に留学しています。先日、鹿児島の僕に自宅に近況報告の電話が来て、懐かしかった。）

大石先生

光陰矢の如し、二ヶ月間もうすぐ終わります。

大変お世話になりました。どうもありがとうございました。

私たち、先生とめぐり合ってよかった。幸せの思い出いっぱいあって、先生の一言一行、特に先生の私たちへのやさしさ皆、一生忘れない。

中国滞在中は愉快にお過ごしになられますように。夏体健康！ お旅楽しく！

大石先生：

短い間でしたけど、いつも、みんなに日本語を教えてくれてどうも有り難うございました。

これからも身体に気をつけてくださいね。

株洲の朱俊橋

２００４・９・１５（水）

月日の経つのは早いもの、と言うコトバを一年のうちに何回使うのだろう。月を４で割るようになってから（意識の上でのことだが）特に早く感じるようになった。

今日は月半ばだから、前半と後半に分けて考えるように、これから改めよう、と思っている。

植物、とくに花を見てると感心させられる。毎年同じ時期に花が開くのにも感心するけど、隣の花とほとんど同じ日に開花するのは、どういうわけだろう。

となりの老婦人に戴いた月下美人が昨夜花開いた。

たった一輪だったけど、それだけに目移りせずに愛でることが出来た。最後は寝室まで一緒に移動。クーラーの風にゆらゆら揺れるさまは、まるで生きている花の精といった風情だった。

「いい匂いがするね。」

うちの奥方がベッドに横になりながら言ったけど、ぼくの鼻はそれほどデリカシィに乏しいのか、分からなかった。

「中国にもあるの？」

去年同じ頃、留学生の白さんが、ある、と言っていたのを思い出した。「あるらしいよ。」と答えると、私が行ったときは花屋は一軒も見なかった。と我が奥方は言う。彼女はあの街の花屋の豊富な花を知らないのだった。

花は路地に咲くのを眺めるのが美しい。

特に秋の、今頃咲く花は、なんとも色合いがいい。決してケバケバしさが無いのがよい。

我が家のほったらかしの、ちっぽけな庭に咲く、わずかの種類の野の花を、女房が朝、摘んで、さりげなく、それ相応の花瓶に、投げ込んだのを眺めるのが初秋のたのしみのひとつである。

〈秋の夜はふけて～すだく虫の音に～疲れた心いやす～我が家の窓辺～ちいさな、ちいさな～幸せはここに～〉

あの大橋節夫の奏でるハワイアンギターと彼の声が夏に別れを告げるこの季節にぴったりかもしれない。

今夜あたり昔よく聞いたLP盤をマイクロ製のプレイヤーに載せてJBL4333から音を出してみようと思う。

ワインがいいのか？焼酎がいいのか？やはり冷酒かな？

ぼくの後の2代目日本語教師－増田くんの日記はじめ。

11日目　5月15日（土）雨

写真は左…平和堂6階の中国料理店「8味味」

右…この後「干杯」が始まる

下…恐怖の「白酒」

昨晩大石先生が旅行から帰って来ましたので、範先生が私の歓迎会も兼ねた、夕食会を開いて下さった。大石先生は成都・九寨沟など各地を回ったらしい。九寨沟はなんとこの時期に雪が降っていたと言うことだ。水量も少なく訪問する一番良い時期は7月頃とおっしゃっていた。

歓迎会は平和堂(長沙で一番のデパート)6階の中国料理店「8味味」で行われた。範先生のお友達の鄭旗さんご一家、袁静さん(お二人とも鹿児島市へ研修生として半年間来日経験あり、日本語O.K.)も参加して盛大なものに。

飲み物は最初から52。もする「白酒(バイジョウ)」。一口飲むと五臓六腑まで染み渡るのが体験できる。「茶倒半杯、酒倒満(お客様にお茶は湯飲みの半分を入れ、酒はなみなみと入れる)」と言う中国のマナーがあるが、それに違わずあふれんばかりに、次々と注がれる。干杯!干杯!(ガンベイ=乾杯の意味)。酒が無くなるまで続く。グラスが親指の先の大きさだったのが、せめてもの救いだ。

噂に聞く舌が痺れるほど辛い湖南料理も初体験したが、選び方が良いのかほとんどの料理は非常に日本人好みの味付けである。長沙へ来られる日本人の方へおすすめしたい。

2日目　5月の日(木)晴れのち曇時々小雨

上海(11:55)→長沙(13:50)　MU5883便

長沙行きの便が約30分遅れた。(・・。д。)　長沙空港では大石先生と範例先生にお出迎えして頂いた。

お昼は15時頃。念願の松花江餃子店(五一路店)に範先生がつれて行ってくれた。早速餃子4種類、ピータン豆腐、豚のゼラチンを固めた変わった料理と湖南省名物のピリ辛料理を出してもらった。機内食も食べていたので、もうお腹いっぱい。結局夕食要らずになった。

宿舎に着いた後、生徒の李湯龍君にお願いして、携帯のSIMカードを買いに行った。カード50元、プリペイド携帯料金100元。携帯本体は弟に貸してもらって持ってきてあったので問題はなかった。

3日目　5月7日(金)一日雨

この日は長沙の5月には珍しく朝から雨。朝食は大石先生が泊まっていた華程大酒店(3つ星)のセルフサービスバイキングを頂いた。やはり驚いた事は、いつもお粥に入れる腐乳(豆腐を醗酵させて塩づけした物、朝食のお粥には一般的一口サイズ大)も唐辛子で味付けしてあった。いままで色々な中国のホテルの朝食で腐乳を食べたが、ピリ辛く味付けしてあるものは初めての体験だった。湖南省らしい。他の料理もやはり辛いものばかりで、あっさりした物は無かった。

お昼は宿舎の向えにある安い店に大石先生と行った。チャーハン一人前5元(約50円)。味もおいしく、一人で食べるのに適当な量であった。が、サービスで付いてきたスープがいけない。やはり辛いのだ。日本で言えば激辛。(>く)もうあきらめよう。早く慣れなければ。(・ω・)ゞｻｷｰﾝ

食べ終わると大石先生の友達 袁静さんが車で迎えに来てくれた。彼女も以前長沙科技進修学院日語分院の生徒であったらしい。3人で一緒にウォルマートへ買物へ行った。米国最大のディスカウンターが長沙まで進出しているとは思わなかった。まだ行っていないが、カルフールもあるらしい。そう考えると長沙も結構都会なのかな?

ウォルマートでは、身の回りの足りない物をそろえた。食料品も買おうと思って、ひょいと覗いた所に手のひらサイズの陸亀がいた。ペット用ではない。食材だ。隣にあった田鶏(食用カエル、田んぼにいる鶏に似た味の動物からこの名がついた)やザリガニには慣れているが、陸亀とは。いやはや、中国人はこれだから…。

夕食は大石先生が明日から長期中国旅行へ出かけるので、最後にと平和堂5階にあるブラジル料理へ出かけた。ここは58元で食べ放題。7時頃行ったが、満席で30分待ちとの事。長沙でも人気のスポットだ。料理はサラダ(サラダは長沙ではここでしか食べられない.大石先生談)、シュラスコ系に切ってくれる各種お肉、の種類のジュース、ビール、スパゲッティー、デザートアイス等々とても満足するものだった。が、ここにも奴等がいた。田鶏と亀。せっかくのブラジル料理がもったいない。それともブラジルでもポピュラーな食材なのか?亀→食べました。と言うか甲羅ばかりで、どこを食べたのかもわかりませんでした。味付けはただ辛いだけ。もっと素材の味を生かそうよ。

忘れられないヤオリンの風景集。

大石先生:

時間が経つのは早いものですね。そろそろ2ヶ月間も終わります。先生と会えるのはよかった。本当に。楽しかった思い出はいっぱいあります。

遊ぶとか、食事するとか。先生いままで　いろいろお世話になりました。

どうもありがとうございました。また中国に来るのは楽しみです。　3月前、先生は来る前に、範先生の話によると、大石先生は日本で2軒の美容院を経営しています。やさしいし、熱心だし、真面目な先生です。実は初めて会った時、私はそう思いました。

それに先生が元気だし、素敵だし、４５歳ぐらい見えますね。

先生は遊ぶ時子供みたいですが、授業をする時厳しいし、真面目だし、本当にいい先生だと思います。

私の日本語あまり上手ではありません。

これから先生の指導をえないですが、大変残念ですね。先生、帰国しても、これからも連絡してよろしいでしょうか?お願いします。

私は夢をかなうために一生懸命頑張ります。

先生はいつも「張麗さんはかわいですね」

って言いました。私はそれを聞くとほんとうに嬉しいです。先生の授業を受ける時ときどき、いたづらをしたり、

あまり真面目ではなかったり本当に申し訳ございません。

今更後悔してももう遅いですけど。

先生、中国滞在中楽しくおすごしになるように。ご健康とご多幸をお祈りします。また、今度会えるように楽しみです。

Bye Bye Best Wishes for my dear teacher

2004 4 29　張麗

Zheng li ちょうれい。

大石先生：お土産ありがとうございます。大好きでした。

2ヶ月だけ滞在しましたがこの2ヶ月の生活はいつまでも忘れません。

先生と一緒に食事するとか、湘江へ一緒に遊びに行ったとか、とても楽しかったです。

ゴールデンウイークはいろいろなところへ旅行するそうですが多幸を祈っています。

先生のおかげで日本語もだんだん上手になりました。

この間たいへんお世話になりました。ありがとうございます。

付き合っていて先生はとてもやさしいし学生の勉強に熱心だと思っています。

チャンスがあったらぜひ日本へ行って、お宅をお尋ねいたしたいです。いつも元気で運がよいのを祈ります。

りゅうしゅうより

（追伸）　竜習（りゅうしゅう）　時間は流氷のようです。流れていくともう二度と来ません。知らないうちにもう2ヶ月たちました。

わたしは先生に会えて嬉しかった。たぶん一番印象を与えてくれたのはやっぱり先生のやさしさ、それと、仕事への真面目さだと思います。

大石先生

盛夏のみぎりいよいよご活躍のこと心からお喜び申し上げます。

時間がたつのは本当に早いものだ。3月1日に先生に初めてあってから2ヶ月過ぎました。

もうすぐ先生とお別れすることになりますから、大変名残り惜しいです。これから、私は先生の授業を受けられないと思うと本当に悲しくてたらないのです。

この学校にいらっしゃった間、先生は私にいろいろ丁寧に教えてくださってありがとうございます。

２ヶ月の先生との一緒の生活はとても楽しかったです。

先生が仕事に対しての強い責任感を持っていることは私は見習うべきだと思いました。

内の学校にこんなすばらしい先生がいたことを誇りに感じます。

さて、私は来年、日本へ行くつもりです。日本に行ったとき、先生のお宅を伺いたいと思います。

日本での日々も早くお会いできるよう楽しみにしております。

話したいことは他に沢山あります。でも、私は今日本語が余り上手でないのでこれからもっと一生懸命勉強してい

中国ぶらり旅《休息休息一点々》

２００４・６・２５

《ホテルの洗面所》

ホテルの洗面所は、そのホテルに案内されたらまず最初に覗く場所である。ホテルの評価を、そこの洗面ブースで決めてしまう人が多い。

四ツ星や五ツ星に泊る日本人ツアー客の場合は浴槽があるのは当たり前だから、 その浴槽の形やシャワー設備の具合などで評価したりする。

ぼくの娘などは、洗面台に載っている洗面道具のバラエティさやドライヤーが付いているかどうかなどが、評価の対象であるようだ。

しかし，二ツ星や三ツ星に泊るぼくにとって浴槽などと、贅沢を言って入られない。

いきおい評価の対象はそのシャワー設備がいかようになっているかにかかる。

高級ホテルでシャワールームが浴槽と別に付いている所がある。

透明のガラスで仕切られていて、浴槽に入った後でもう一度そこで髪を洗う（シャワー室でなくても浴槽にもシャワーが付いているけど）あの高級シャワー室だけのホテルが一軒だけあった。

たいていのシャワー設備がビニールカーテンかプラスチックのドアである。

何にもないスッポンポンのタイル敷きにトイレと壁にシャワーがポツンと付いている所が結構多い。

それでも、充分なお湯量と温度があれば文句はいわない。この二つは入るときにならないと分らないので

「おぅ！なかなかいい設備じゃないか。」

・・・と思っていてもしっぺ返しを食うことがある。

《紹興》のホテルはまさにその通りだった。四ッ星で、部屋は広く、外の眺めもよく洗面所もきれいだったけど、お湯を貯める段になってビックリした。お湯がでないのである。ホテルマンを呼んで来てもらったら 「こんなものです。ここは部屋の場所が設備から遠いので、申し訳ないが我慢して欲しい。」と言う。

「じゃあ、他の部屋に変わりたい。」と言うと、

「今日は満室で，どこも空いていません。」と答えた。５月２日、確かにその日はゴールデンウィークの二日目だった。こんなこともあるから安心できない。

《洛陽》のホテルの洗面室にはバスはないけどサウナ室があった。二日目に入ってみようと服務員に使い方を聞いたら、「知らない」と言う。 今まで、だれも入ったことがないそうなのだ、あきれたものだ。

トイレットペーパーはほとんどのところが節約サイズというか、ロールの大きさが日本の三分の一ぐらいである。家庭でも、そろそろ新しいのを準備しなくちゃ。と思うほどの量しかない。でも、合理的だと思う。

新しい合理サイズのトイレットペーパーが洗面台の上に置いてあるホテルは多い。

一度、用を足して、サテ、紙は何処かな?と思って，捜すけど見つからない。

なんと、便座の真後ろにあるではないですか?これにはビックリしました。

「いったい、どうやって紙をとるのか?」

片手では絶対紙を切れない事を初めて知りました。是非お試しあれ！、

貴陽の三ッ星はベッドサイドのライトが無かった。本を読んだりする人はいないのだろうか?モスク系のホテルだったので回教徒は寝る前は本は読まないのかもしれない。

ただ、ここのホテルの良いところは顔を洗う洗面台のすぐ横に飲料水の出る蛇口が付いていたことだ。この設備は中国の何処にもない優れものだった。

いつも、歯を磨いた後のうがいの時水を間違って飲まないよう気を使っていたけどこの設備だと安心して、水でうがいが出来る。

今回の旅で一番感じたことは、浴槽に浸かる。という、あのゆったりした時間を中国のひとびとは、知らないままで一生を終えるのか、ということでした。

反面、誰が入った分らない、ホテルの浴槽に、不潔で、病気がうつりそうで気持ちが悪いから入りたくない。という中国人の友人の言葉も少し分るような気もしました。

《休息休息一点々》

長沙の食べ物情報について

２００４・７・１

さて、ここらでここ長沙市の食べ物情報を書いてみよう。あくまで、僕自身の偏見と体験上の情報であることをお断りしてである。

滞在体験者からすればかなり貧弱な体験でお恥ずかしい。

忘れない為に書き留めておく、と、まあそんな感じと解釈して欲しい。

来る前に持っていた予備知識のうち、辛さ（唐辛子辛さと塩辛さ）はいつも，注文の際「不辛的！」「不辛的！」と注文するし、というより、同伴に、してもらっているので、さほど感じなかった。

また長沙人が口をそろえて「美味しいよ。」という蛇　も、チンワと発音する青蛙も試食はしてみた。いずれも、美味しかった。

蛇も元の形を想像しなかったら、「味口蛇」という料理は醤油味に煮て食べたけど不味くはなかった。でも、続けていくつも口にするまでは行かなかった。特に、料理の皿の中にあるクルッと丸まった黒い蛇の皮を、美味しそうに食べる袁静さんをみていて、異国を感じた。　鄭さんなど、食べ終わると、お皿の上には背椎と糸のよう細いあばら骨だけが残っていた。

スーパーの食品売り場にごそごそしているウグイ（亀）は結局、食べなかった。こんな形でヘビを売っているのを見た事はなかった。もひとつ、長沙人は犬が好物と聞いていたが、これも大げさな表現のようだ。

もっとも、鄭さんは「犬も、猫も美味しいよ。」とウインクをしてみせたけど。

食についていえば、「松花江餃子店」はお勧め店ナンバー1である。　黄興路近くの解放路にある店（滋賀の竹岡健一さんご夫婦にお勧めメニューまで紹介して貰った店）と長沙駅から五一大路を西に向かって１０分も歩くと右側にある「松花江餃子店」は共に１０数回訪れた店である。

ベストメニューは焼き（ジャン）餃子（ジャォズ）に水餃子、中の具は何でも美味しい。

注文するとき注意しなければならないのが注文の仕方である。

日本のように一皿とか、一人前とかは言わない。一人前を２（アー）両（リャン）と、１両が約５０ｇ（５個ぐらい）最小注文単位が２両である。

竹岡さんに勧められたうちの３～４品をいつも注文する。一人前の料金が大体、２０元ぐらいになり、学生３，４人で行っても６０元を余り超えない。今にして思えば、竹岡ご夫妻は、６種類ぐらいの注文をされたところをみると、僕に試食を勧められたのだろう。多分一番高かった牛肉の薄く切った醤油味は、その後は僕のオーダーからは除かれた。正式名は醤牛肉といい、一皿、２５元ぐらいだったと思う。

白菜猪肉も美味しかったけど、その後は食べていない。恐らく、その時の料金は３人で１００元は超えていただろう。気の毒なことをした。

さて、何といってもここの餃子に並ぶ人気メニューは「東北三糸」（糸の字はこれではない）という春雨、細切りキュウリに卵焼きをこれまた細く刻んだもの。酢醤油で混ぜる。「小葱拌豆腐」という絹ごしトーフの上に小ねぎを載せ、醤油をかけてたべる。醤油の中に油が入っているのがなければ日本の冷奴である。

僕は溜まった油をすてて上から醤油だけを又、かけて食べる。

これにねぎのお餅も美味しかった。正式名は香甜糖餅、これは中国人はよく注文する。形は違うけど味はどこも似ている。要するに甘い餅を薄く延ばしたものである。

回数多く行った店では歩行者天国（歩行街ブシンジェ）の入口角にある日本料理店「火の国ラーメン」は日本人には安心して行ける店と言える。５回ほど行ったけど、不思議と日本語はどこからも聞こえてこなかった。従業員小姐たちの、下手な「イラシャイマセ～」の日本語以外は。

ラーメンは一回食べて止めた。２０種ぐらいあって２０元と、まあまあだけど、焼き魚（サンマ、ししゃも）のほか、コロッケ、サラダ、寿司も二個１０元と異常に高いが味は悪くない。

日本感覚で食べたら５００円で充分なので、日本の寿司を食べたい向きにはお勧めである。みそ汁とキュウリのおしんこはサービスである。

もう、４年ほど前、ウルムチの日本料理店「平政」に馬麗春に連れて行ってもらった。

あのとき食べた寿司の味も忘れられないほど美味しかったけど。実際は、期待感の薄さとの格差がないので、そう思うだけで、日本でだと、美味しい回転すしと違いはないのかもしれないと言ったら、「平政」の美人おかみや「火の国」の調理師におこられそうだが。

何時か、「かつカレー」を食べたことがあったけど、ごはんとルウの比率が、ごはん7にルウ3、その上に薄いトンカツが載っている。これも、味は悪くない、でも、なんとなく変だ。ご飯をたくさん残してしまった。

日本ではカレーを食べて、こんなにご飯を残した経験がないので奇怪である。そういえば、炒飯もいつも三分の一は残す。僕が小食なのか中国人が大食いなのか？疑問は解けない。

ここの「黄興路」近くに平和堂がある。そこの6階にあるブラジル料理店はおそらく長沙では指折りの人気店だろう。竹岡氏のお勧めレストランにも入っていたので、袁静さんご夫婦に連れて行ってもらったことは先に書いたが、あの肉の味と、ボリュームたっぷりのサラダに惹かれ数日後、また出かけた。

日本語も少し話せる人気ブラジリアン（堺駿二に似ている）の柔らかい肉を切ってもらいながら、彼と日本語で短い会話を交わすのも楽しい。彼はここの主人なんだろうか？二度目なのに、顔なじみになってしまった。

３０分程に一度ぐらい回ってくるのでいつも皿の上には彼の柔らかい肉がなくならない。他の人より多めに切ってくれるからだ。

6名ほどのコックがシュシュカバを持ってテーブルを回る。湖南料理と果物やサラダ、それにアイスクリームはセルフになっている。一人５０元、土日は５８元である。日本人が来たら、まず、連れて行きたいナンバーワン・レストランである。

食べ歩き、というほど食べに行ってはいない。殆どは、ヤオリン近くの庶民食堂か会社の食堂での昼ごはんで済ましている。いずれも4元から6元、ビール3元を加えても日本円にして１５０円ぐらいである。味にも慣れてきたし、空心菜など、気に入りの野菜炒めも分ってきたので、済まそうと思えば、一日の生活費は３００円（２０元）もあれば充分過ぎる。

範先生とは、週一回は必ず行く「碧水藍天温泉」でこれまた、何でこんな料理が無料なのと思うほどの食事を食べながら、長沙の生活水準や中国事情、過去と未来の展望などをいつも語る。

分りやすく今の生活事情を言えばこうである。まず住まいで言えば、日本の３ＬＤＫの各部屋を十畳程度にデラックスにした部屋で2万円足らずが一月の家賃という。

範先生の自宅（結構、豪華であるが、僕の家程度です。と、彼は言う）範先生は毎日、朝、9時から夕方6時まで、若い女性のお手伝いさん（一昔前の日本の女中さん）を月４００元で雇っておられるそうである。

掃除、洗濯、料理（昼と夜）まかせで、食事は食べさせてあげてるそうである。それでも安い。一万円（７５０元）も出したら、お気に入りの若い女中さんが雇えると言う。「貧しい農村人口が中国は多いですからね」と範先生は言う。

1月の食料費や交通費、以外とかかる携帯電話代などを合わせて1万5千円（１２００元ほど）会わせて4万5千円あれば、まずまずの快適生活は、今の中国では出来ることになる。範先生は言う。

「上海郊外の田舎に住む外国人の引退者（年金生活の夫婦）がとても増えてきています」と。ただし、マンションやマイカーを買うとなると日本と現状は変わらないという。

むしろ、贅沢品に関しては日本より金がかかると言う。

情報、文化、娯楽、治安のいい、上海、大連、青島などの郊外に家を借りて老後を過ごす方が、アメリカやオーストラリア、スペイン、タイなど、いわゆる顔から違う国でのんびり老後を暮らすより、中国の方が溶け込みやすいと思うのは僕だけだろうか？

言葉が分らない、通じないのはどこへ行っても同じこと、その個人の問題であろう。

湖南/桃源のウイグル人物語

95%の人は常徳市桃源県に住んでいます。東晋の陶淵明の「桃花源記」に述べた桃源県は長沙市から230キロ、常徳市から40キロです。小さいけど、30の民族が暮らしています。

ウィグル族、回族、土家族、苗族は人数多いです。宗教もさまざまありますが、仏教、道教、イスラム教、キリスト教、カトリック教が共存しています。桃源県の東部の14キロのところには楓樹ウィグル族回族郷です。総人口は3041１人、ウィグル人だけは5327人です。

楓樹郷は小山の麓に位置して、沅江の支流—白洋川が村の近所にくねくねと流れています。車で行くと、入り口の道端に「歓迎您進入維吾尓族第二故郷—楓樹」と書いた大きい看板が立っております。一月中旬に、新疆は凍りつくような寒空、風が骨にしみるほど寒いですが、一方、ここはは平均気温は零度以上で、並木がまだ青々としています。そうですけど、新疆人にとって暖房つかない部屋が外よりもっと寒そうで、なかなかなれません。こういう気候に慣れるように、湖南省のウィグル人は600年ぐらいかかるでしょうか。

ウィグル村の建物は湖南省の普通の建物と同じです。新疆のウィグル人の顔つきや着物のような人とも会っていません。哈勒・八十将軍はここに来てからもう600年ぐらいので、回族などの民族と婚姻を結んで、顔つきがずいぶん変わりました。

普通、湖南弁と漢字を使って、ウィグル語とその文字を使える人もあまりいません。しかし、イスラム式の生活習慣がずっと守って続いています。

三、湖南省のウィグル人

翦氏父子：現代の湖南省のウィグル人の代表として、言うまでもなく、わが国の有名な歴史学者—翦伯賛です。また彼の息子翦天聡も華中科技大学の教授です。二人といえば湖南ゥィグル人はみんな鼻が高くなります。

ハフィャ：ハフィヤとは23歳の娘です。湖南ウィグル人の23代目です。顔を見るとウィグル族と想像できません。今、長沙市の新疆クチャ人のウィグルレストランでアルバイトして、もう一年ぐらいです。「新疆ウィグル人と会って、たいへん親しみを感じて、だから、ここでアルバイトします。まるで、自分の家にいるようです。」と彼女は湖南弁でそういいました。暇あると、彼女も同僚のウィグル人からウィグル語を習います。

あるとき、「あなたはウィグル人ですか、それから、漢民族ですか」と聞かれると、彼女は「いったいどういう民族かより、中華民族の一部分ということはもっと大切ではないでしょうか

。私はムスリムです。故郷は新疆のハミです」と答えます。

彼女は新疆に行ったことがまだないですが、「新疆のウィグル娘がなんと綺麗でしょう。ウィグル語をしゃべるとき、歌を歌って言うようです。みんなも歌舞が上手ですね。今、一所懸命ウィグル語を勉強したり、仕事をちゃんとやったりして、新疆に旅行に行きます。」と彼女ウィグル式の帽子をかぶって憧れている顔で言いました。

歴史をたどって見ると、民族の移動は時々発生しました。例え、前漢時代の烏孫、唐の時代のウィグル族、元の時代、モンゴル族およびジンギス汗の西征であちこちに移動された民族、また清の時代にシボ族の西遷などです。

民族の溶け合うによって、社会も進んできました。歴史の車輪は誰も押しとどめられないまま進んで続いていきますが、その轍はまだよく見えます。

湖南ウィグル族はそのことでしょう。600年の間、顔も言葉もずいぶん変わりましたけれど、自分自身はイスラムを信仰しているウィグル族のことはずっと心の中にこだましています。

住めば都という道理、湖南省の桃源県に住んでいるウィグル人も湖南の独特的な風景になりました。人間仙境と呼ばれた桃源郷に幸せの生活がずっと続いていることをお祈っております

―この項は２０１９(平成３１年)３月１６日(土)に転載して校正を入れました。―

中国ぶらり旅（江南を旅する）　２００４年のＧＷ５月

（主な訪問先）杭州・紹興・寧波・普陀山・岳飛廟

朝、８時に僕の日本語学校があるヤオリン（人民路と詔山路の十字路付近を呼ぶ）でタクシーをひろい空港バスの出る民航大酒店に向かう。長沙駅のすぐ前、五一大路にある。

空模様がチョット気になるが、長沙の朝はいつもこんな感じだ。

朝から快晴にはお目にかかったことがなかった。

バスの入口付近にはタクシーの呼び込みがうるさい、いつものことでもう、なれっこになった。「空港まで６０元で行くよ!」と、叫んでいる。一人１６元だから、４人一緒ならタクシーでもいいが、こっちは一人だから割りが合わない。

２０分にバスは出た。長沙黄花空港まで約 30 分ぐらいかかる?

これも、いつものことだがバスの中の音楽のバカでかいこと、中国人は皆、聴覚に異常があるわけでもあるまいに。こんな中で携帯で話している人の声は、もう叫びに近い、もっとも中国人にはひそひそという話し方は無用らしい。

不思議なことは、この状態でテレビが点いていることだ。画像だけしか見えないのに。

ついつい悪いことかもしれないが、すぐ中国では、と決め込んでしまいがちで注意しようと思うのだけど。

外は今にもスコールの来そうな空模様だ。

杭州行きの改札が始まった　つもりだったが、二列のぼくの並んだ方はストップ状態である。

、右側の違ったチケットを持った人達がどんどん入って行く。

団体旅行なのか、ゴールデンウイークの初日だから仕方ないが、聞いているとあと一人がなかなか来ないらしい。

時計を見ると、離陸時間を過ぎようとしているのに。

又、「中国は・・・」と言いたくなる。結局、１０分遅れて南方航空機は飛び立った。

杭州まで１時間の旅だ。運賃は８００元。袁静さん（半年間、鹿児島市役所に交換研修に来ていた美人）の話だと、普段は２～３０％の割引があるらしいが、この時期は無いと言う。ホテルもそうなんだろうか?

なんと、３０分位の時に食事が出た。お茶とクッキーではなくまともな吃的東西だ。

「地球の歩き方」をバッグから出して杭州の地図を眺めていると隣の男が地図を覗き込む。予約したホテル「望湖賓館」を捜したがなかなか見つからない。

字からして「西湖」の近くに違いないと思うが。

男の様子がチラチラから凝視状態に変わってきた。あきらかに何か話さないとおかしいような空気になってきた。

「あなたはこのホテルは何処にあるか知らないか?」

待ってましたとばかりに男はニッコリ笑って、今度は堂々と僕のマップに接近してきた。

こうして、彼と僕との会話は機が着陸するまで続いたのである。そして・・・

空港バスでも、彼は先にバスに乗っていて、僕の席（窓側）を空けて待っていてくれた。当然、バスの中の３０分も話が弾んだ。

中国語だけの会話だったにもかかわらず、ぼくの幼稚な語学力でこんなにも抵抗なく、意思の疎通がスムーズに行った事はなかった。

最後、彼は、杭州駅で降りたが、その時はもう朋友状態に近かった。

彼は、バスの車掌に、「あの日本人は望湖賓館に行くので、近くでバスを止めてあげてくれ。」と伝言してくれた。

ニコニコ笑って手を振ってくれた彼の笑顔が僕の杭州の印象を満点にした。

彼は父母の故郷がここ杭州で、自分は現在は無錫である会社の副社長だと言う。

「去年、行く予定だったが時間の関係で蘇州までしか行けなかった」とぼくが言うと、

「今度、無錫に来たら是非訪ねて来てくれ。」 と言って名詞をくれた。

・・・・・・・・・・・・・・

ホテルはまさに西湖の鼻の先にあった。

3年前、妻や娘と訪れた時、ゆっくり歩いてみたかった西湖の中道をゆっくり歩いた。

ゴールデンウイークの初日でのんびり、なんていうには程遠い　もう殆ど行列状態だったけど、人々の顔や様子を眺めながら歩くのは楽しい。

住んでいる長沙市の街の風景とは随分違うものだ。

肌に感じる日本との距離感がほとんどないのである。もし、突然皆が日本語を喋り始めても違和感がない気がする。

同じ中国でも、ここ杭州は華南とも、華北とも、どうかすると、すぐ近くの国際都市・上海より中国臭さ?が感じられないのは不思議である。（僕の個人的感覚だけど）・・・・・・・・・

ただ、これはどの街に行っても感じるのだが、道路沿いの木の大きさ（年輪の）には感服する。

以前は、中国の樹というと湖畔の柳しか浮かばなかったが、今では、何処へ行っても巨木の幹の形の美しさと頭上に覆いかぶさる葉のボリュームに感嘆するばかりである。

「何百年前からこの樹はここにあるのだろうか?」

と、いつも思う。

樹は中国の歴史を僕に語りかけてくれるのである。

ガイドブックや人の話でよく聞く《西令印社》に行ってみようと思った。

マップを頼りに小高い公園の中を上って行きやっと探し当てた《西令印社》は生憎、休みだったけど、別に印鑑が欲しいわけでもなかったので、残念とも思わなかった。

それより、そこの服務員が

「今日は残念ですね。お休みですネ。」

と、日本語で答えたのに驚いた。沢山の人の中に居て僕が日本人て分るのかなぁ。

さて、明日はいよいよ紹興に行く。まだホテルも決めていない。電話で予約する勇気がまだない。

こないだ一度トライしてみたが、相手のコトバがさっぱり聞き取れずにパニクッタので自信をなくしている。

そうだ、ホテルに相談してみる手がある。こちらの希望も言いやすいしそうしょう。交通機関は列車もあるが今度の旅はバスを利用しようと決めている。

高速バスの乗り方だけはやっとマスターした。

行き先を言ってお金を出すだけ。と、言ってしまえばそれだけだが、「言うは易し、聞くは難し」なのである。

そんな、本や、電子辞典の例にあるようにはいかない。というより、実際は、あんなのは殆どやくに立たないと言っていい。

心配していた天気は快晴そのもので、日焼けしそうな陽気だった。

西湖に沈む夕日をひとり眺めながら杭州の一日は暮れていく。

前回来た時の街に出て、名物料理でも食べるのもよいのだけど、行動派の僕にしては珍しく、今日はそんな気にならなかったのである。

窓から心ゆくまで西湖を満喫するのもいいものだ。

紹興のことを考えていた。　はじめての訪問である。

キーワードは何だろう。まず、魯迅を訪れることにしょう。

次は紹興酒に関する所か、寺は余りないようだ。一日バスツアーでも利用するのも一つの選択肢かもしれない・・・・・

ホテルで早い夕食を済ませて一人のんびりしていたら突然携帯電話が鳴った。
華天旅行社の小燕子かな?
小燕は5日に上海に一泊で遊びに行く、と言ってたけど、もしかしたら日程が変わったとかの電話かな?と思った。
「ケジさん。ワタシ　李黎　デス。ワタシ・イマ　杭州　キテマス
ケジさん　今、ドコノ　ホテル　イマスカ?」
何と、上海のぼくのメルトモ李黎からの電話だったのである。
「ワタシ、百合大酒店　ニ　トモダチト　イショ　キマシタ　」
実は一週間ぐらい前に電話で話しをしたときに、
、「ゴールデンウイークは南昌の濾山行はやめて、杭州から寧波そして普陀山と旅行をしようと思っているけど・・・・・」
寧波から普陀山へはどうやっていくのか分からないので教えて欲しい、と訊いたら、なかなか電話で話が通じなかったのである。
「ワタシ　イッショニ　ツイテイキマス　イイヨ。フネノル　チョト
ヒトリ　ムズカシイカナ　ケジサン　ヒトリ　チョトシンパイ」　と言うので、
「李黎が暇なら、来てもらうと助かるけどな、」
と答えたけどまさかほんとうに来るとは思ってもいなかった。
五月のぼくの「ぶらり旅」のスタートは、なんと、メルトモ李黎との二人三脚となったのである。
正確には李黎の親友との三人旅ということになった。
一気に、賑やかな旅が明日から始まることになったのである。

紹興　２００４年5月2日

紹興がこんなに魅力的な町だとは来て見るまで分らなかった。
紹興は一口で言うと老街と魯迅と三輪車の街と言える。　魯迅の故郷ということだけは知っていたが、それ以外の事は紹興酒の発祥の地ぐらいしか知らなかった。
だから、着いたら**魯迅記念館**に直行した。壁面いっぱいに魯迅の顔の書いた記念館の前はおそらくゴールデンウイークのせいだろう。人、人、人でいっぱいである。
祖父母の部屋、父母の家、学んだ学校、子供の頃に遊んだ築山、それに、最近出来たばかりという魯迅記念館には民族魂・魯迅の字がでっかく書かれてある。
内容、特に執筆された本の一冊一冊の紹介なら、上海の魯迅公園近くに日本人に寄贈で作られた「魯迅記念館」には遠く及ばない。
また、時代時代の足跡、特に、日本留学時代の資料や内山書店（上海）の資料など、上海の記念館の方が充実していると思った。
マップを見ると、ここのすぐ近くに「太平天国壁画館」という観光スポットが載っていたの。
三輪車を捕まえ「ここに行ってくれ。」と言った。紹興の街、いたるところ、三輪車の洪水である。
三輪車用の道路か?と間違うほど、車に負けないほど三輪車が威張っている。という感じである。乗って、びっくりしたのは、「エエッ!こんな路地を通るの??」という感じなのだ。
紹興の街は昔、おそらく明の時代から清朝ごろの街がそのまま残っている地区が沢山あるようだ。
三輪車のおっさん達が写真を入れたビニールファイルを見せながらホテルの前や、魯迅記念館の前などで客引きをしている意味が乗ってみてよく分った。
市内の老街の名所に案内する写真を見せてるのだった。乗らなければ、分らないままホテルに帰るつもりだった。

肝心の「太平天国」は見つからず同じ場所に、観光名所「沈園」があった。仕方がないので降りて観光をすることにした。未だ、時間はたっぷりある。
沈園は中国の何処にでもある公園と言う感じだ。
上海の豫園の公園みたいな例の花石で囲まれた池がメインである。
相変わらず入口付近には三輪車が並んでいる。人のよさそうな年配運転手をさがす。料金は5元から10元というところである
。魯迅路をホテルへ向かって左へ向かう所から《越王殿》へかけての老街もお勧めだと彼・運転手のおじさんが勧めるので20元でチャーターすることにした。
予想をはるかに超えた魅力いっぱいの光景が一時間ほど続いた。紹興の老街は誰にでも勧めたくなる観光スポットだ。
　黄山の沌渓の老街とも、烏鎮や西糖や周庄の古鎮水郷とも違った、本当に古老街が見せ掛けでなく生活の街として生きている。
生活している人だけが2004年の人間で、器は200年前のまま、といったらいいのか、器が延々と続く。
そして、あの周庄と同じ運河には小船が浮かび、太鼓の橋もある。
越王殿を見て一度ホテルへ帰ることにした。そして、今度は夜、歩いて夕食をこの辺で食べようと思う。
途中、老街の中で紹興酒の工場というか瓶に絵を描いている所をおじさんが教えたので入ってみた。結局、老街のほとんどを三輪車に乗ったままで回ったことになったけど、この次に紹興に来る時はあと幾つかあるらしい老街も含めて終日「老街ぶらりぶらり」をして見たいと思う。

　ところで話は余談になるが、中国一の経済都市が上海であることはご承知の通りであるが、上海で最も活躍している経済人はこの杭州から紹興を経て寧波から舟山諸島出身の人たちだといわれている。

　また故事で有名な「**呉越同舟**」や「**臥薪嘗胆**」というコトバもこの地**呉の国**と**越の国**の間の争いに素になっているのだそうだ。詳しい事は詳しい人に任せる事にしたい。
余談ついでにもうひとつ余談だが、老街の中で買った豆壷のような紹興酒（何年ものか分からなかったが）を二個買った。
紹興酒好きの中振連の事務局長の菊池さんにお土産にと思って求めたのだが
寧波から上海へもどり長沙へ飛行機で帰る際にバッグを機内持ち込みで上の二個を入れたまま検査を通ろうとしたら検査官が中を開けろと言う。
「お前はこの中には何の液体が入っているか分からない。機内持ち込みは許さない。手荷物預かりで送るか、それを置いて行け。」と言う。
「見ただけで貴方はこれが酒と分からないのか?紹興酒と書いてるじゃないか。」と抗議したが、係官は横を向いたまま返事をしない。
後もつかえているので仕方なしに又逆戻りして預けに戻った。
空港内の免税品店で酒を買った時はどうしたっけ?と考えながら再度、手ぶらで検問をくぐったのだった。
日本と寧波の関係は深い。
遣唐使の僧侶の多くはここ寧波を経由して各地へ旅立った。
現在は多くの日本企業が進出している。港へ向かう道にそって日本文字の企業の名前が続く。
杭州のホテル、7時に起床。少し雨が降っている。
8：00ホテルで朝食、目玉焼とお粥を食べる。
8：40バスセンターに着く。今出たばかりだという。
寧波まで長途巴士（長距離バスのこと）で約1時間である。料金は39元、日本円で600円ぐらいである。
　汽車と違って、人が一杯になれば次々と出発していくからとても便利で且つ、早

い。そして、乗り心地も快適である。
余談だけど、食の国、中国にきていて、一番、口に合う食事がホテルの朝のバイキングとは情けないがコーヒーもジュースも豊富だし、パン類菓子類も取り放題、勿論、フルーツもよりどりみどり、何よりも新鮮な且つ安全?そうな生野菜があるのが嬉しい。
　それにしても、いつも思うのが中国人のバイキングの取り方である。我々から見ると常識を逸しているとしか言いようが無い。
一つの皿にゆで卵が5個、マントウが5個、その横にスイカのスライスを縦に１０枚ほどかさねてある。その後に山のように中国菜を持ってテーブルに向かう。
　4,5名のグループだとテーブルの上がお皿で埋まってしまう。
・・・・・・今、寧波行の高速バスの中にいる。
不思議と静かである。一昨日夕方に、李黎から電話が入り、本当は昨日、今日と3人での江南紀行と、なるところだったのに、李黎の友人に用事が出来てしまい、急遽、二人とも、上海に帰ってしまった。
結局、ぶらり旅はひとり旅となったのである。
　窓から見る外の景色は九州の田舎をバスか JR で走っている感じだ。　山と民家と森に村が繰り返される。
　寧波と言う文字の看板がだんだん多くなる。それにしても、中国語の簡体化は思い切ったものだと思う。
　これも、何回かに分けて行われてきたらしいが、寧の字がウ冠の中が１１画から2画に、丁になるのだから驚きである。
　それにくらべ、日本の漢字はこの頃、逆行しているような気がするが。
　文字はコミュニケーションの手段に過ぎないと思えば、何も寧などと丁寧に書く必要もない。
　機も机になってるし、業も上だけで終わりである。
　なにも韓国のハングル文字のような訳の解らないのとは違うのがよい。まさにシンプル　イズ　ベストといえる。

　パソコンを持参していないのでメモ書きで間に合わさなければならなくなった。観光地の説明はどうせ、中国語なのでチンプドンつまり聞いても分からない。
　寧波のホテルは昨夜、紹興のホテルで紹介してもらった4ッ星である。名前は金港大酒店という。
　すぐ目の下に川が流れている。姚江（ヤオジァン）と甬江（ヨウジァン）の二つの川が交わる近くにある高層ホテルである。
　僕の部屋は３０階ぐらいにあるので寧波の街が一望出来る。素晴らしい眺めである。
　明日乗る船は甬江にあり、ホテルから目と鼻の先である。つまり寧波港は海ではなく川にあるのだ。
　ホテルのボーイに天童寺までタクシーで行きたいと、言ったらＯＫ、分かったという。何処かに電話をして聞いていた。　「３００元で往復どうか?」という。チャーター出来るらしい。
　元気の良さそうな女ドライバーだ。
０：２０分にホテルをスタートする。約2時間かかるという。
３００元はチョッと高すぎると思い、女運転手に言った。
「天童寺まで、片道でいいから、幾らで行くのか?」　すると、その女運転手が言う。私はボーイに、5時間のチャーターと言われている。天童寺のほかに阿育王寺を回り、市内を観光して
３００元だから、そんな高くない。今から変更はしないで欲しい。
　私もその予定で会社に言われてきた。」
　ぼくのボーイへの言い方が悪かったのだろう。確かに包車（中国でチャーターの意味）バオチャーと言ったのだから。片道だけのタクシー料金は５０元、また向こうで阿育王寺までタクシーで５０元としても半分で済んだのにと惜しい気がしたが。

天童寺は３００年に創建された禅寺で、中国禅宗五山のひとつ。

１２２３年（南宋）に曹洞宗の開祖・道元がここで学んだ。
下の写真：天童寺、　阿育王寺も４０５年に建てられた禅寺で中国禅宗五山のひとつ。

大雄宝殿に向かって右側に舎利殿があり、その中に**鑑真**太師像が安置されている。

夜は街をぶらぶらして、久しぶりに美容室でカットする。二階でまずシャンプーして、マッサージ。そのあと1階でカットしてもらう。

僕を切ってくれた男性美容師は　「ぼくのこのシザーは日本製だ」と自慢していた。

夜は日本食を食べたくて男性美容師に聞いたら、おいしい日本料理店があるという。

花月と言う名前の店であさりのバター焼が２５元　サンマの塩焼きが　３０元　鉄火巻き　　２０元ママと意気投合して話が弾んだ結果、注文外の特別サービスが一杯。もう最高にご機嫌な寧波の夜でした。

明日、私と一緒にゴルフに行かないか?と誘われてしまったが明日は普陀山に行かなければならない、と言うと残念がっていた。

「また寧波にクルヨ」と言って店を出たのは１２時を回っていた。

普陀山

●中国仏教四大聖（名）山のひとつ。
　他は**五台山・峨眉山・九華山。**

●全ての中心に大慈大悲の女神、観音菩薩が鎮座する。

●普陀（プトゥオ）は「観音菩薩の住む山」を意味するサンスクリット語のポタラに最も近い中国語である。チベットのラサのポタラ宮殿にある観音菩薩とはよく似ている。

●**観音**について　　日経・ガイドブック　　the national geographic traveler より。

観音は衆生を救うことを本願とし、中国では普陀山に鎮座している。キリスト教にとっての聖母マリアと変わらぬ、深い慈悲の情けを備えている。　観音は菩薩、あるいは未来仏で、中国全土で長い間信仰されてきた。

女性の振興が特に強く、とりわけ子宝を願う人の信望を集めている。

しかし、人々の求めに応じて様々に姿を変えるとされている。

千本の腕を持つ千手観音もよく見かけるし、蓮の花や飲み物が入った杯をもっている肖像もある。

観音の性別についてはハッキリしない。**観音菩薩には性別はないとする意見もある。**もともと男性だった観音に女性の資質が授けられたようにも思える。初期の頃の観音があきらかに男らしく見える特徴を備えていることは間違いない。さて、いよいよ今度の旅の一番、楽しみにしていた普陀山行の日が来た。

不安もいっぱいである。

その第一は、このゴールデウイークの時期に果たして、日帰りが出来るのだろうか?ということである。

もし、帰れなかったら島に泊まらなければならない。

ホテルは寧波の四つ星を予約してるし、万一の場合宿泊費３００元が無駄になるのだから。

朝、ホテルのフロントで行く方法を聞いて来たけど、ホテルのフロントは必ずしも当てにならないことは、昨日のタクシーチャーターでも立証済み。

普陀山行の舟はすぐそばにある寧波港から乗れると言う。

普済寺（ブージースー）　１：３０～２：００頃

フェリーが港に到着したら、左方向に木立をぬけて北にむかって**普済寺**（ブージースー）へ。この辺りが島の中心にあたるので、小さなホテルやお店、レストランが集まっている。

北宋時代に創建された寺院の正面には蓮の池があって、本堂の（大雄宝殿）の釈迦像の周囲には、いたるところに観音菩薩の姿が見える。　寺院の南西に**多宝塔（ドゥオバオダー）**が建っている。ここは元朝時代の建造物で仏象で飾られているので有名。

仏頂山（ホーディンシャン）　２：３０～３：３０

普陀山の東側、千歩砂海岸の北に、仏頂山の斜面にしがみつくように法雨寺（フォーユイスー）が建っている。

３５元出して索道（スダオ）つまりロープウェーに乗る。

島で二番目に大きい**慧済寺（ホイジースー）**がある。

港まで歩いて10分もかからない。船のチケットを買う。出航は10：00だそうだ。今、8：50分、なんと、この港で70分も待つことになる。A型日本人である大石はこういう時間の過ごし方が大嫌いである。

待たされるのが嫌いと言うわけではない。例えば飛行機の到着が、出発が1時間遅れる、といっても別に気にならない。避けられたのに、といった失敗が気に入らないのである。

それならそれでホテルでゆっくりしてから出てきたのに、フロントで船の出港時刻表ぐらい準備しておけば良いのに、と思う。　いや、そういえば聞くことは聞いたんだった。

「到普陀山的船的時刻表、有没有?」

答えがチンプンカンプンだったのだ。発音の問題?だったのか、相手の耳に欠陥があったのかさだかでない。でなければ、港に電話して、何時出航か問い合わせてもらえないのか、とか。此処は日本じゃないんだ。

何とか切符は買ったけど先行き不安、やはり、李黎に残ってもらえばよかったのか。李黎も、今、前の仕事を辞めて、目下仕事探しの最中なので忙しいらしい。

買った切符にはこう印刷されていた。

寧波　→普陀山　2004・5・4　10:00　開車　　11：20　開船　　票銭58.00元

バスの出発が10：00、1時間20分バスに乗って、港に到着もう、かなりのおんぼろバスだった。道が悪いのかと思って眺めると、アスファルトのハイウェーじゃないか。　タイヤに空気が入ってないのかもしれない。ときどき激しい衝撃が走る。バスが飛び跳ねているのだ。横をハイヤーが滑るように駆け抜ける。

時計をみて驚いた!何とこのぼろバス、時間だけは正確!11：15分に大木射港に着いた。

海馬1号が待っていた。　およその航行時間は40分という。船代は120元である。　他の船の4倍速いというから、値段もそこそこかかるのか?

船の中もこの時期、満員だった。　普陀山の港も案の定、人の波、杭州の西湖といい、GWはすごい。

写真をみるとかなりあちこち回っている。そうそう、入山料は30とも40元ともかいてあるが、僕が実際に払った金額は門票代、130元とメモされてある。GW特別大貴了料金だったのかな。

独りでのぶらり周遊というのは自由は自由なのだが、なかなか踏ん切りがつかないものである。例えば、休憩、食事、乗物本来ならそうしょうと思ったときに自由に出来るはずなのについ過ごしてしまう。

性格もあるのだろうが僕は連れがあるときの方が決断が早い。「腹減ったね、今、食べませんか?」「チョッと、休まない?」　何かにつけてメリハリがある。これが独りだと、夢遊病状態になってしまう。「腹もへってないようだし」「何処で乗ろうかな・・」

優柔不断そのものである。

そういえば30年以上も前になるが、あの大阪万博の時は独り周遊だった。歩き回って、食べ損なって浮遊状態に近かったのを思い出す。

別に今日がそうだとは言わないけど、ずらりと並んでいる露天の食堂の店先に美味しそうな海鮮（日本的魚類、エビ類が）泳いでいる。値段も安そうだ。

時刻も昼時期である。まず食べてから周遊もいいのでは、と思うけど踏ん切りのつかないまま周遊バスに乗る。

地図を片手に行く先の書いたバスをさがす。

結局、左の写真のような順番で1時半から5時頃まで、足の向くまま気の向くまま、回った。食料は何を食べたのか覚えていない。と言うのは嘘で何処かのお寺の道沿いにある大きそうな且つ、ごく平凡なレストランに入って食べた。麺類でビール込で30元ぐらいだった。　又今夜、寧波の日本料理店で寿司でもと思った。

もう、身体がくたくただった。

百歩だったか、千歩だったか忘れてしまったけど、平凡な海岸で砂の上に寝転がっ

て5時の時報を知った。
　これから帰ったら6時半にはホテルに着くかな?そんなことを考えていた。この海の向こうは吹上浜と対面してるのかな、とそんなことを考えていた。これから起きるとんでもない事件のことなど知る由もなかったのである。
　プロローグは帰りの船切符売場から始まった。
　着いたとき帰りの分を買っておけばこんなことにはならなかったのに、なんと!
「帰りの切符は一枚もありません!」だと、
「なに!帰れない!どうしよう。ここに泊る?冗談じゃない、　寧波ノホテルはどうする?キャンセル?まさか?」

　ふと海港の方を見ると何艘か連絡船が係留されている。かって屋久島から船に乗れずに貨物船の乗せてもらったことが頭をよぎった。　「ヨシ!当たってみるか。」
　1艘の白い古そうな船に観光客らしい人たちが足早に歩いていくのが見えた。
「ヨシ、あれに、乗せてもらおう」　乗組員らしい人たちに聞いてみた。
「この船、ニンボー、イキマアスカ??」と、すると是!是!
　速く乗れ!と言う。「まあいいや、観光客が一杯乗っていると言うことは、帰りの高速船「海馬」に乗り損ねた人が乗ってるんだから大丈夫だろう。と船内に入った。
　窓は頭の位置にある。ぼろのシートが並んだ、北の工作船よりちょっとましな船だった。
　幾らかと聞くと15元だという。どれぐらいかかるか?と聞くと1時間ぐらい。と答えた。
「なんだ、結構、早く着くじゃない。性能（馬力）が良いのかもしれない」
　テレビも一応着いているところをみれば、貨物船じゃなく、ちゃんとした連絡船なんだ。とホット胸をなでおろした。
　今、5時45分、ボロ船に乗ってのお帰りである。
　僕の横に巨大な男が割り込んできた。僕は窓側、といっても窓ははるか頭の上にある、の方へ押し付けられた感じになった。えらいことになったものだ。船は満席になっていた。
　来たときの快速船がうらめしい。6時になってもまだ出航しない。いや、もう走っているようだ。何も分からない。
　横の大男は眠ってしまい両足を思い切り広げてきた。最悪!6時半、突然、船が止まった。　人々の動きが慌しい。
「なに!もう着いた??????????」　「30分も経ってないじゃないか?」
　船が着いた港は普陀山の隣にある朱家尖島という島の港だったのだ。それからバスで舟山島に渡りそこの港から寧波の港に又船で渡るのだという。
「帰り着くのは一体、何時??????????」

　すぐバス乗り場を探したが見つからない。辺りはもうかなり暗い。それらしい場所にいた男の人に事情を話すと、
「もうバスはいない。早く行かないと舟山～寧波の船も終わるカモシレナイ」と言う。不安は募る。ものごとが悪い方へ悪い方へと流れているようだ。
「タクシーはないのか?」
「アルヨ」「幾らぐらい掛りますか?」「200元でボクが交渉シテアゲマショウカ?」と、男が言う。「100元で頼んで欲しい」
「ソレムヅカシイトテモトオイ」男は携帯電話でタクシー運転手の知り合いと交渉してるらしい。
「150元可以（イイトイッテイル）」
　多分、実際は6：4ぐらいでこの男と分け合うに違いないと思ったけど、仮に50元負けさせたところで日本円で700円ぐらいのものだ。親切に対するチップと思えば安いものだ。
　そう考えて「明白了!オネガイシマス」
　30分間のタクシーの中は無言でいろいろなことが頭に浮かんでは消えた。見知らぬ島の、見知らぬ町の、見たことのある看板やファーストフード店が走馬灯のように現れては消える。

結構、タクシーはスピードを出してくれているようだ。
早く、港へ着いてあげようと、タクシーの運転手もボクのために努力してくれているような気がする。
やがて目の前に大きな駐車場が現れ、その先にでっかい、大型フェリーが目に入った。
やれやれ、とふっと力が抜けた感じだった。大ジョブネ　フネマニアッタ　ヨカタネ（このコトバは中国語の翻訳）
運転手のぐっと前に出した左手親指の OK サインがうれしかった。まるで、二人でラリーに出て優勝したような気持ちだった。
８：００頃に無事、寧波の港（こちらではなぜか馬頭マァトゥという）についた。
タクシーで市内まで１３０元だという。
「バスで行く」と言ったら「幾らなら出せるか?」と言う。「７０元なら」と半額を言うと「バスでも６０元だぜ。」と交渉人のことば。
すぐ横に面包車（ワゴン）のようなボロバスがいた。車掌らしき女にネイハまで幾らか?と訊くと、〈１５元よ」と答えた。
「普陀山の帰りは、なんで乗物の交渉が多いんだろう。」
そういえば、観音菩薩への拝礼をほとんどしないままあちこちの寺院をぶらついた罰が当たったのかも知れない。
おんぼろバスは１５人のすしずめ状態で朝来た道と同じ市内へのハイウエーをがたがたと音を立てながら走る。
約１時間、９：２０分頃に市内に到着。タクシーを拾って（８元）やっとホテルに着いたのは９時４０分だった。
もうすっかり疲れてしまった。
美味しそうなあの普陀山のわたりがにも伊勢海老も食べたかったけど、結局、今夜の晩餐はケンタッキーのチキンセットだった。
この後上海経由で長沙に戻り、ひと月間、新たに「ぶらり旅」に出ました。
そして、今度の旅の終わり行った朱家角を紹介したいとおもいます。
日本に帰る６月始めの旅でした。多分、スグ書かないと思います。写真だけ載せておきます。

２連泊した金港大酒店（下）　２００４年５月４日　　又、長沙へ戻ります。

家角　２００４年６月８日

特に観光地・朱家角の紹介コメントはありません。
まだ冬の名残の抜けない２月の２８日に鹿児島を飛び立ち、目標の一つであった中国滞在１００日を実現することが出来ました。　今回の旅の終わりはここ朱家角でした。　中国らしいものはいろいろありますが。

一番長かった中国滞在で満足?疲れた?ケイジさんでした。

水墨画そのものの奇山である張家界や黄山。川から眺める桂林の山々。長江を下りながら現れる三峡の壮大な景色。
そして西湖や洞庭湖、青海湖などの中国独特の池や湖など・・・・・。
また古い寺院や古城に老街など・・・・・・
でも中国らしい生活の匂いを感じようと思ったらこの江南地方の水郷故郷に勝るものはないように僕は思う。
「どこも似たようなものだよ。」とこちらの人でも言うけれど、それでもなんとなく訪ねたくなるから不思議である。
正直なところ訪れた水郷と地名を正確に結べられなくなってきたけれど、まだ残っている近郊の水郷があるので楽しみだ。

中国ぶらり旅より

岳飛を語ろう。２００２年

マルコポーロが「キンサイ」とよんだ杭州（当時は臨安）に今僕は居る。南宋が中国の都であり続けたのは１５０年に１年欠ける。しばらく司馬遼太郎の「街道

をゆく」を辿りながら南宋時代の岳飛の世界にタイムスリップしてみよう。日本との比較を分かりやすく、大胆に?当ててみると大体、次のような感じか?つまり、宋は南宋の前に北宋時代があって、これが１７０年続いた。
日本では平安公卿藤原道長の頃である。そして平清盛から、武士・源頼朝に代表される鎌倉時代へ、南宋はそんな時代から北条の頃の話と思ったらいいのではなかろうか。

・・・「都市としての繁華さは、空前のものであった。商品経済の国内での充実が、やがて貿易に向かい、爆竹がはじけるようににぎわっていた。　唐（長安『今の西安』）との違いは、国力の弱さである。華北に展開する金という異様な国号をもつ異民族国家からの圧迫と、それについての危機感は、南宋の知識人の精神を前代（北宋）とは違うかたちで変形させた。宋代においてはじめて強烈なかたちでの漢民族ナショナリズムが成立する。杭州が南宋の行在所だった頃は、周囲をかこむ城壁の長さが１６０キロもあったという、まさに、当時、世界一の都市だったであろう。（『街道を行く』より）

「岳王廟」には是非行ってみたかったが、今回の旅程には入ってないとのことだった。　僕としては六和塔などより、もっと言えば、メインのコースである「西湖めぐり」をパスしてでも「岳王廟」を訪れてみたかった。、昼食時間が１時間あるというので、その時間を利用しない手はないと思い世話人の深栖さんに頼んでみた。　「実は僕も一度行ってみたかったんですよ」　「西湖めぐり」を終えた僕らは、タクシーをひろって１０分ほど離れた「岳王廟」をめざした。岳王廟」は南宋の武人**岳飛**（１１０３～４１）の廟である。（以下「街道をゆく」より。）

岳飛は一介の武人で、むろん王などではなかったけどその死後人々が彼を敬愛したために南宋の朝廷が，死んでの３年後に王号を追贈した。

このような例は，他に三国時代の蜀の武人**関羽**の例があるのみである。彼は唐代に「王」になり、明の代（１５９４年）には「帝」になった。以後、その廟は関帝廟と呼ばれている。　岳飛は日本でいえば、鎌倉末・室末初期の武人**楠木正成**（１２９４～１３３６）のような存在にあたる。

秦檜（１０９０～１１５５）という政治家がいた。　私どもが岳王廟の楼門を入った時にすぐ右の塀ぎわに座っている鋳鉄製の人物をみた。秦檜とその妻である。２人の像は檻のような鉄柵の中に入れられ後手に縛られてひざまずいて座り、うなだれている。秦檜は南宋の宰相で、一代を通じて権勢を誇った。その晩年、しきりに一族の繁華をはかり、政治を私物化した。　最後も平穏で、栄耀に包まれて死んだ。　ひとびとは、天道の不公平を思ったのであろう。
「死せる秦檜を鉄人として再生させ、さらしものの刑にかけて、醜を天下に晒させたい」という後世の民衆の思いが、こういうかたちをとった。　秦檜は，忠誠な将軍・岳飛を獄につなぎ、ついで殺したが、岳飛のこの場所にあっては逆になっている。宰相が檻に入れられ、はずかしめられているのである。唾をはきかけるな」と、塀の掲示板に書かれている。それでも地面に唾が落ちている事を見ると、秦檜夫妻に対してそのようにする風習は、時代がいくたび変わっても衰えないらしい。

秦檜は南京に生まれた。
北宋の末に科挙の試験に合格死、権勢家の孫娘をもらいその後、大いに有能な官僚として知られた。北宋が滅亡した年（１１２７）に、金軍によって、北へ連れ去られ、三年後に帰された。実際は、それとなく秦檜をおどし、暗に金のために間諜的な存在になれといったかもしれない。南宋は金が恐かったので、金と繋がりのある秦檜を重用した。

時の皇帝は高宗である。高宗は秦檜を宰相にして、金との和解をはかった。　実際は南宋は弱くなく、特に岳飛軍は強かった。えば必ず勝った。宗軍が勝っては困る）という、高度の観点からの矛盾を、高宗も秦檜も持った。
いったん臣下の礼をとった和平条約に背くばかりか、金を無用に怒らせ、ついには南宋そのものをも失うと秦檜はみた。このことは、秦檜の変わらぬ対金方針であり、高宗はそういう秦檜を信用した。

　岳飛は、今の河南省湯陰の人である。　農民の子として一兵卒からたたきあげ、まだ三十代のはじめというのに、湖北一帯に展開する大軍の将になった。その軍は「岳家軍」とよばれ、諸軍に抜きん出ていた。秦檜は金と交渉をもち、新たな講和を申し入れていた。この政治レベルの方針と、岳飛をはじめ南宋の諸軍が大いに金軍に勝ち続けているという軍事状況があわず、
ついに秦檜は岳飛をはじめ諸将を呼び戻し、彼らに高位を与えると共に、兵馬の実権を中央に移した。岳飛は、このことに不満だった。檜は岳飛を逮捕して、獄中で毒殺してしまった。　岳飛、三十九歳である。彼は背に、「尽忠報国」という刺青をしていたという。岳飛廟の本殿にあたる域内に入ると、巨大な白壁の城壁があって、「尽忠報国」と書かれている。

ついでながら、明治維新の功労者・**西郷隆盛**が、新政府の欧州追随姿勢に不満をもち、明治六年（１８７３）に陸軍大将の身で下野したとき、**以下の詩をつくった。**
彼はひそかに岳飛の心境だったらしい。

。独不適時情　　独りじじょうに適せず。
豈聴観笑声　　あに観笑の声を聴かんや

雪羞論戦略　　恥をすすぎ戦略を論じ
忘義唱和平　　義を忘れ和平をとなう
秦檜多遺類　　秦檜のいるい多く
武公難再生　　武公再生し難し
正邪今那定　　正邪いずれにか定めん
後世必知清　　後世必ず清きを知らん

（「街道をゆく」）
より。

.西郷隆盛の遣(征)韓論についてホームページで興味深い見解を見つけた。少し、抜粋してみる。

http://www.page.sannet.ne.jp/ytsubu/・・・・・・・ここで、西郷と大久保の間で大論戦が繰り広げられたのですが、結局西郷の主張が通り西郷派遣が正式に決定されたのだが、しかし岩倉の最も腹黒い策略で、西郷の朝鮮派遣（単独での平和交渉）は潰されてしまった。

岩倉具視が閣議の決定を逆の派遣反対と偽って天皇に奏上してしまったのである。一人の人間の私心によって、国の運命が決められたのだ。よくこの**明治六年**のいわゆる征韓論争は西郷ら外征派と大久保の論争と言われているが、それは事実に全く反している。

西郷は公式の場で、朝鮮を武力で征伐するなどという論は一回も主張していない。

一方、内政を優先させるのが先決と主張した大久保の方だが、その後にしたことといえば、**明治７年**には台湾を武力で征伐し**翌８年**には、朝鮮と江華島で交戦し、軍艦に兵を乗せて送り込み修好条約を強引に結ばせてしまった。これをもってしても外征派対内治派という構図がいかにまやかしであったかが分かる。出来上がった歴史の通説は必ずしも当てにならないのである。

個人の主観で歴史をみてしまい、そのまた主観というのが、当てにならない。ＮＨＫテレビの「そのとき歴史が動いた」ではないが、史実にもとずいて書かれた小説でも作者の思い入れというのが必ずあるのだから。

「通説」と「史実」いづれが真の事実なのか?これは、とてもむづかしい問題である。帰りに深栖さんが言っていた。

僕は「政治家として，自国の為にした行為が許せないのではなく、人々が許せないのは、彼の生き様なんじゃないだろうか?」

「お互いに、自国のことを思い為したこととしたら、結末が余りにも不条理だ、と思ったのだろう。」と。 その頃の日本は、というと、鎌倉時代の源氏の時代から北条氏による執権政治が始まるころだろうか?そんな時代の話だとしたら、現在の我々の抱く人の道とはずいぶんと温度差があるのではないかと思う。

余談だが、西郷は何故、岳飛に心酔したかというと親交のあった福井藩士・橋本左内（景岳）の影響ではなかろうか。幼少より学を好み、１０歳の時に『三国志』を通読したと言う。

中国宗の武将岳飛を敬慕し、自ら景岳と号したのは１２歳のときであった。左内は藩主松平春嶽に近侍し日露同盟論に代表されるような世界的視野をもった国家体制の構想ひっさげ諸藩の有志（西郷や藤田東湖ら）と親交を結んだ。

—2019年3月16日(土)に転載校正しました。デザインだけ—

中国ぶらり旅（長沙から華南各地へ）　2004・5月8・9・10

—成都から楽山・峨眉山・九寨溝・黄龍・南岳衡山—

2011

6・8　改訂

2004年の成都市は峨眉山や九寨溝へのベース基地として位置づけだった。市内の観光スポットは前回のツアーの時、回っているのでこのページでは余りコメントもない。

5月8日PM0：45

中国南方航空C3461機は長沙黄花空港を1時間遅れて飛び立った。

2：25分、成都空港に無事着陸した。この無事と言うコトバ、一体どういう意味なのか分からないけど汽車には使わないのに何故か?飛行機にはよく使う。「墜落しなくてよかった」と言う意味にしかとれないのだが。

入場料30元、空港を出たのが2：45だったのでマイクロバスでホテルに着くまで1：10分かかった事になる。

大体、ホテルが分かりにくい所にあった。

このあと、このホテルには黄龍の帰りにも泊った。何度かタクシーを利用したけど、ほとんどのタクシーがホテルを探し当てるのに苦労した。。

連れの少燕は成都は初めてだという、中国の少女たちにとっては長沙市から成都市に行くのはそんなに簡単なことではなさそうである。飛行機代を出してあげて数日

観光するなんてことはこの上ない贅沢なことなんだろうと思う。杜甫草堂にも、武候祠にも是非行って見たいのだと言う。　旅行社に勤めていると、お客様によく聞かれるのだと言う。

それぞれの位置関係なども体験していてお話しするのと、そうでないのとは随分違うんだと言う。当たり前のことだ。　時計の針はもう5時を大きく回っていた。

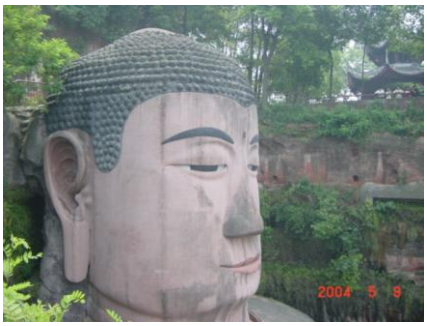
今から、道教の有名なお寺である**青羊宮**まで回るとなると大変である。二ヶ所でも、駆け足で回らないと閉門してしまう。　まず一番遠い杜甫草堂へとタクシーを飛ばす事にした。

漢詩を嗜まないとここ杜甫草堂の良さは分からなのか?

５：２０分に草堂を出て武候祠へ向かう。

滑り込むように３５分に切符を買って中に入る。もうほとんど人はいない。

この前行かなかった劉備玄徳の墓だけは今回見たかったので捜した。なかなか立派な墓だったけど何日かあと洛陽に行ったとき劉備の部下で義兄弟の関羽の墓に行ったけど、そちらの墓の方が数回りも大きかった。



何でも財産の神様に関羽はなったのだそうで全国からご利益を求めて参拝に来る人が多いんだそうである。

やはり、青羊宮は見学出来なかった。

６：３０

陳麻婆豆腐店で夕食を食べる。久しぶりであちこちから日本語が聞こえてくる。幾つかある個室は日本人のツアー客でいっぱいです。と小姐（ウエイトレスの娘）が教えてくれた。

夜は歩行街（ブシンジェ）を散歩した。

小燕はやはり女の子である。

髪留めが欲しいんだそうだ。

片っ端から店を覗く。買い物嫌いなぼくは外のベンチに座って、通りがかりの人たちをムービーに収めるのに余念がない。

それにしても、成都は美人が多い。イヤ、ほんとうにヘン、ピャオレン、ヘン　ミャオティオ!ぞろいだ。

小燕には言わなかったけど実感だった。

帰ってから範先生にそう言ったら、

「それは本当です。重慶と成都は美人の街です。」　と断言。

ぼくは調子に乗ってまた言った。

「リェン（顔）もピャオレン（綺麗）だけど、担是（ダンシー）それ以上に皆　ヘン　ダー（大きいね）和ピャオレン　シュンプ（そして、おっぱいが大きい）ですね。」

これはちょっと日本だとセクハラ発言ですかね。と僕が言うと範先生（例の目をまあるくして）

「大丈夫ですよ。男ならみなそう思いますよ。」と流暢な日本語が返ってきた。

９日（二日目）の朝

６時３０分起床、７時３０分の出発だという。

昨日、陳麻婆豆腐のエキスを薦められたけど今日になってから「買っておけばよかった」と後悔する。

あの大きさはみやげにベストだった。明日又行ってみよう。　例によってあちこちのホテルでツアー参加客を拾う。

結局、楽山への出発は８：１５分。

バスは思いっきりオンボロである。メンバーは１５名、ガイドは美人、天気は快晴、とは言っても四川の空はどんよりしている。

よい表現法がないけど、敢えて言えば、薄く白身がかかった目玉焼き、とったところだろうか?

今日はここ楽屋山から峨眉山の麓にある峨眉山市に泊るらしい。明日は峨眉山を１０ｋぐらい歩くそうだ。

もっとも明日になって分かったのであるが峨眉山の頂上には登らないツアーだったのである。海抜３０７７ｍの高峰・金頂に登るものと思っていたので、そうでないコースもあるのだということは考えてもいなかった。

今となっては仕方がないけど、峨眉山まで行ってて山の頂上に（何かのアクシデントがあって）登れないのじゃなく、登らないコースだったなんて本当に悔やまれた。

９日のこの段階では知る由もなかったのであるが。

３０分もしないうちにトラブル発生！

「バスが動きません！男性はスミマセンが降りてください。」

「エンジンがかかるまでクルマを押してください。」だとやれやれ先が思いやられるワイ。

１１：３０　チョッと早い昼食。０：００から楽山大仏への登山開始という。

楽山市は岷江、大渡河、青衣江の３つの河が合流する地点にある。

ちなみに楽山大仏は高さ７１ｍ

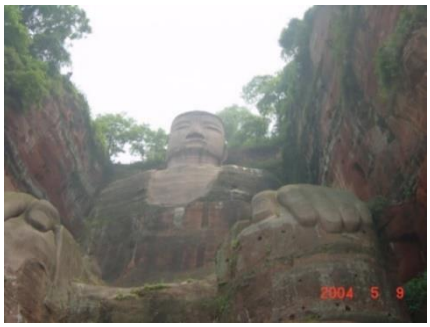
肩幅２４ｍ

頭の高さ　１５ｍ

頭の幅１０ｍ

耳の長さ　７ｍ

目の長さ　３，３ｍ



完成するまでに９０年の歳月を要したという。

ガイドの話によると、大仏にまつわるいろいろな不思議な伝説があるという。

大仏の左を下り、右から上がって行く。船から眺めるコースもある。

後ろから見た大仏の頭です。　楽山大仏は**弥勒菩薩**である。

１２００年前（７１３年）唐の時代に凌雲寺（リンユンスー）の僧侶、海通が彫り始めたと言われている。

かれは９０年後の完成には見ることなくこの世を去った。

この大仏の制作は街を流れる岷江（ミンジャン）の氾濫を鎮める目的で行われた。

凌雲寺は・・・・

唐代の創建だが現存するのは明・清代のもの。

（右）

午後３：３０分　美人ガイドが言った。

「皆さん！これから皆さんをあるところ（**水晶**屋）にご案内しますネ。

アシタは峨眉山行きます。あそこは聖山ですから、商業行為はしません。

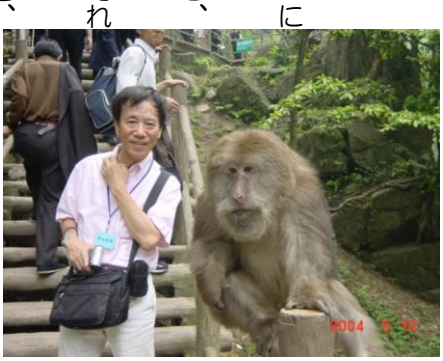
商品だから売ッテイマセン。これから行く店でそれぞれ水晶を買って、それに願いを書いてください。

明日、お寺でそれと一緒に名前と生年月日を書き、僧に提出して、その石に**念**をいれてもらいますネ。

もちろん、ぼくは買わなかった。中国人は素直なのか信心深いのか？結局、その店を出てバスに戻るまで１時間はかかったことになる。

屋台がいいですよ。とガイドがいうので夜は屋台に行くことにした。

屋台といっても一軒で３０人から４０人は座れる広さの店が３，４０店連なっている。歩いて行ったらその先に



３日目の朝７：００

峨眉山市を出発、約３０分で報国寺に着く。

７：４５分おんぼろマイクロから大型の観光バスに乗り換える。約３０分ぐらいで**峨眉山**の上り口に着く。

峨眉山についてガイドブックからの説明を要約すると

・・・・仏教の四大名山の一つとして知られている峨眉山はもとは道教の宮観や隠遁所が数多くあった山だが、６世紀に仏教徒によって普賢菩薩の聖地とされた。道教の開祖・老子はかってこの山に住んでいたといわれる。

仏教の四大名山は、寺院の入口に立つ四天王によって守られている。九華山は標高１３４２ｍ。　五台山は　３０５８ｍ　　普陀山は丘ぐらいの高さ

普賢菩薩は象の背中に乗り睡蓮の花を手にしている。**９：３０**

ロープウエー（索道）で１０３０ｍの万年寺へ着く。

外は雨が降っていたので5元のナイロンレインコートを二枚も買って防備したがついた頃は上ってしまった。

それより索道の上で左足首を外側に捻挫してしまった。

山頂までバスで行くものとばかり思っていた。

ガイドの話では行かないのだそうだ。ガッカリである。

折角此処まできたのに、足を捻挫したのでもう歩きたくはなかったけど、籠か、バスで、後は索道があると聞いていた。残念である。

今から3時間ぐらい渓谷や山道を楽しみながら**峨眉山**名物の猿山見学なんだそうだ。

たかが猿、屋久島にだって、都井岬にだって猿ぐらいいっぱいいる。足も痛いし行きたくなかったけれど我慢して出かけた。

今まで見たこともない猿にはビックリしたけど僕の**峨眉山ツアー**はちょっと欲求不満の多い旅だった。

九塞溝・黄龍　２００４年5月１０・１１・１２日

〝華天假期〟成都九寨溝峨眉山楽山精華遊行程安排

左の日程表は華天旅行社から渡されたスケジュールである。

5月8日(第一天)：長沙乗機 CZ３４６１（１２：１０/１３：４０）赴成都(不含餐）武候祠・杜甫草堂　　星宇大厦住

5月9日(第二天)：早餐後乗車赴楽山・遊楽山大仏・凌雲寺・海師洞・九曲桟道・住：峨眉山

5月１０日(第三天)：万年寺・清音閣・白龍洞・一線天・野生猿区・回成都（不含晩餐）　　星宇大厦住

5月１１日(第四天)：綿陽・江油・平武・九寨溝・蔵族風情　　九寨溝口住

5月１２日(第五天)：全天遊九寨溝：樹正溝・日則溝・則査窪溝・等三大景区　（溝内中餐為路餐）九寨溝口住

5月１３日(第六天)：九寨溝乗車赴黄龍・茂懸住

5月１４日(第七天)：前往成都　　返長沙　　結束愉快旅程！

実際に九寨溝を訪れるまではテレビや写真集で紹介された風景を自分の頭の中で想像して、あたかも実際に行ったかのごとく擬似体験をしていた。位置関係も仮想のイメージなのだがまるでそれが現実

だと思っていた。
　しかし、実際に訪れてみてぼくの仮想は見事にひっくり返されることになったのである。
まず、高さである。お恥ずかしいことに地図上(平面）では成都から見て九寨溝の方が上方にあり、黄龍は途中にあるので九寨溝の方が高いと錯覚していた。
CZ３４６１機で成都空港に到着してから４日目の朝を迎えたことになる。
　楽山～峨眉山と回り成都に戻り今日から九寨溝・黄龍ツアーの始まりである。
昨夜、二日振りの成都の街歩きを小燕と楽しむつもりだったが峨眉山ツアーのバスが例によって大幅に到着が遅れて、夕食を食べるのさえやっとだったのである。シャオエン（小燕）がなぜか不満そう。買い物でもするつもりだったのか。安いものだけど、中国人はよく買い物をする。
　それより今日からのツアーの食料を調達する充分な時間さえ取れない始末だった。
　８：００に星宇ホテルのフロントを出て外に待っている旅遊バスに乗った。が既に２０分経過しているのにバスは動き出さない。いつものことだ。
「誰か?」「何か?」を待っているのだろう。
　見たところ、なかなかいい久しぶりの大型バスである。シートもまあまあである。同伴するツアー仲間たちも感じはいいようだ。
　むろん、外国人はぼく一人のようである。皆はぼくが日本人とは今のところは気付いてはいない筈。
　突然、大音量でディスコ風音楽が車内スピーカーから流れてきた。よくあるパターンだが中国人の耳は確かに異常である。こういうとき（朝の出発時は）日本では静かなピアノ曲か軽いポップスと相場が決まっているのだが。
　隣に座っている小燕が言った。
「１３時間は着クマデカカルそうデス。タイヘンダネ。」

しばらく走るとバスの中では何やらゲームが始まったようだ。小燕の通訳によると、牛という言葉が多いので牛にちなんだコトバのゲームらしい。
　中国人はこんな時、子供のように純心で無邪気である。溶け込み方が自然でいつも羨ましいと思う。車内はぐっと打ち解けてきた。
　２：００に昼食を食べ**平武の王宮（報恩時）**に着いたのは午後３：４５分だった。
　報恩寺は明代１４４０年、故宮様式を真似て城として作られたが時の中央政府に寺と偽って今にあるという。クスノキで作った宮殿風建物が圧巻である。途中で１時間ほどバスが立ち往生した。山頂付近か、目的地にさほど遠くないところだと思うが、がけ崩れか交通事故かのどちらかだろう。結局目的地に到達したのは１１：００が過ぎていた。　バスの中はアメリカ映画ターミネーター」を上映していた。中国の長いバスの旅では何かアクシデントがない方が珍しいのかもしれない。
　慣れているのか、何時間待とうが、乗客は平気である。せかせかもしなければ、何故動かないのか?誰も尋ねない。
　これが日本人だと、やれ情報不足などと騒ぎかねない。
　そんなわけでこの日の夕食は１１時半を回っていた。何を食べたのか記憶にないけど思ったのは我々を待っている食堂の服務員（店員や料理人）のことだった。こんな遅い時間までよく待っているものだ。予定の時間がこんなに過ぎたらさっさとやめて帰るのが中国式のように思っていたが。
　バスを降りると寒くて体がちじんでしまった。
これは真冬の寒さである。、明日の九寨溝観光がちょっと心配になってきた。
　「アタ（あなた）サムクナイ?ワタシ　イタ(言った）デショウ　ジュザイゴゥ（九寨溝）トテモサムイネ」
　小燕は心配そうにぼくを気遣うが仕方がない。

ぼくの用意したのは長袖Tシャツと薄いジャケットの他は半袖シャツだけである。
ひと月ぐらい前、張家界に行った時は、寒いだろうとダウンのフード付きジャケットを持っていったら邪魔になって困ったのと、もし、寒ければホテルで買うか？貸用のコート（黄山の時はホテルの部屋に備え付けがあった。）があるかも知れない。
それより、高い山に登るというわけでもないしと思って持ってこなかったのである。
うっかり標高３０００ｍ～４０００ｍ付近全体が高地という認識が不足していたのだ。
黄山の三大主峰である蓮華峰・光明頂・天都峰の標高が１８００ｍ。張家界の天子山の高さが１３００ｍ？クラスだというから、いかに今いる所が高所であるということなのだが悲しい事にぼくは感覚人間（文系）なので数字で高低を理解しないタイプなのかもしれない。
２８人のグループは何故か？多分ホテルの選び方（二つ星と三ツ星）の関係だろう二組に別れた。ぼくらの組には車中からよく話をしていた東北地方・牡丹江から来た二人組みギャルと海南島から新婚旅行で来たという若い男女、広州からの若い男・李さんそれにこのツアーのあとは続けてチベットに行く、という３人組男性たちが一緒だった。
五日目（１２日）の朝を迎えた。今日がハイライト
第一幕
九寨溝観光の日である。外は快晴！
８：００に朝ごはん：塩無しでゆで卵とお粥を食べれた。円錐形のマントウも食べた。
寒い！この寒さは2月頃の感じである。二つに分かれた全員２８人が揃った。
バスの中はニワトリ小屋の中のような騒ぎである。
一気に九寨溝口へ向かうのかと思いきや、「毛牛肉」の販売店に着く。
??族の共同経営か？地べたに5、６０店ぐらいの

１平方ｍほどの店が並ぶ。ヤギの角を１５元（最初は６０元と言った）で買う。削って白酒に入れたりして飲むと何にでも効くそうだ。観音像を４０元（２００元と最初言った）で買った。高かったかな。
・・・・九寨溝の観光についての感想はここでは書かない。
どんなコトバを使っても、ぼくの文章では表現しきれない。行って見て、目で観る、それだけではなく、五感で感じなければ九寨溝のよさを表現することは出来ないと思った。
実はここに載せた数枚の写真を見ていても、ぼくはあの日の美しさを思い出すことが出来ない。
中国の言葉で〝童話世界〟とか〝仙境〟〝幽玄〟などと表現されているようだが、どれも違うように思うし、どれもあたっているようにも思う。
伝説によれば、女神が悪魔と戦った時、魔法の鏡を落とし、その破片が多彩な湖になったと伝えられているが２～３億年前の海底隆起が元になっているのは中国の他の景観地区である黄山や張家界、華山と同じである。　確かに黄龍は松藩経由だと九寨溝に行く途中から右に折れたところに位置しているが綿陽経由で行くと成都から４６０ｋｍ、平武から白河の峠を越えて行く。　途中の峠が４０００ｍなので九寨溝は峠から随分と下っていったところにあることになる。
つまりここがイメージする時大事なことなのだけど実際行って見るまでそこまでのイメージは働かなかった。
つまり、九寨溝旅遊の出発地点は文字通り溝（谷底）なのである。溝口（２００８ｍ地点）からスタートである。
それでは何処が一番高い山かといえば、この九寨溝を地図上で成都の方へ帰る途中にある川主寺から右へ、つまり黄龍への途中の峠（３８４０ｍ）から見える雪宝頂（５５８８ｍ）である。　ぼくは長年、自分の頭の中で固定化されていたイメージを修復するのに手間取った。１１日のバスの中では5元で買った《九寨溝・黄龍

旅遊マップ》を広げてバスの進行と現在地を地図上でチェックしながらの仕事に没頭していた。

翌１２日の黄龍旅遊の時も同じ作業を進め、やっと今では新しい、コレが本当の九寨溝・黄龍旅遊マップが頭の中で完成した。

黄龍は入口付近で３１００ｍ、一番上(奥）にある五彩池で３８５８ｍである。

ちなみに九寨溝のほうは入口で２００８ｍで一番奥の原始森林では３４００ｍ、いわゆる山間の谷底から一番奥の原始森林まで３２ｋｍ、バスを利用して１時間３０分かかるのである。

黄龍は１時間ほど歩いて上まで行き、九寨溝はバスを上手く利用して（何度乗っても無料）行きたい池（海と言う）を回る、といった観光といえる。

ジオラマでもあれば一目瞭然なのだろうが、多分、文字で表現するのは、表現方法も下手なので読んでいる人はサッパリ分からないと思う。

帰って来てから思ったのだが、実はぼくの辿った九寨溝ツアーは丸一日（１３時間）が移動時間だった。バスの中から眺める山中の景色は確かに素晴らしいものではあったがそれにしてもとても長い、バスの旅ではある。今この九寨溝と黄龍の目と鼻の先に（２００３年の秋）に**九黄空港**がオープンしたのだそうだ。

成都から九寨溝まで、バスで行くと約４６０キロかかるが、空港からだと九寨溝まで、わずか８０キロという至近距離なのである。

空港に降り立った瞬間、標高３５００ｍ地点なのだからタラップを降りた途端に高山病に罹ったりしないかと心配してしまうけど楽といえばこれほど楽なことはない。利用するに越したことはないのでは思う。

さてぼくの錯覚はまだあった。九寨溝といえばすぐ連想するあの蓮の形をしたトルコ石色の池の集団は九寨溝にもあるもとばかり思っていたら違ったのである。

頭にすぐ浮かぶあの景色は黄龍のそれも一番奥の五彩池まで行かなければ見れなかったのである。

それも黄龍寺を右に遊歩道を登り展望台まで行き眺め更にまた次の展望所へと、幾つか回らなければ息を飲むような光景を満喫することは出来ない。

途中にもあの段々畑のような小さな蓮池の重なりはないわけではないが五彩池を見ずして黄龍を語ることは出来ない。今にして思えば、黄龍に行ってよかったと思う。実を言うと今回のツアーには二つの選択コースがあったのである。ぼくの選んだ九寨溝・黄龍コースの他に九寨溝・**牟尼溝**コースというのがあって滝・瀑布の素晴らしい観光地で黄龍と人気を二分しているのだという説明であった。

そちらを選んでいたらあの段々畑のトルコ石色の池を見ることはなかったかと思うとゾッとするのである。

一方、**九寨溝の幾つかのグリーンの湖は福島・磐梯の五色沼を想像していた**。こちらの方はスケールの大きさを除けば湖の色は似ていた。

これも帰って来てから思うことだがやはり一日で九寨溝の二つのコースを回るのは無理があるようだ。

今回は季節が五月だったので水量が不十分のため**真珠灘瀑布**も**諾日朗瀑布**もほとんど見るべきスポットではなかったけど出来れば8月か9月に飛行機を利用して再度訪ねてみたいものである。

その時は5キロにわたって小さな湖が散らばるあの《**樹正群海溝**》もたっぷり時間をかけて散策してみたいと思っいる。

九寨溝観光のフィナーレは《チベット民族舞踊》鑑賞だった。バスの中でガイドの説明によると2つの劇団があるらしい。

小燕の通訳によると素人の地元の部落民がする素朴な舞踊と、ある有名な男性が訓練、練習して選ばれたスター達による演劇とがあるというのである。

ぼくは劇場と小屋掛けの違いと、すぐ認識した。

値段は劇場タイプが100元で小屋タイプは30元だと言う。

チャン族やチベット族の伝統的古楽器の演奏や歌や踊りが繰り広げられる、と言う。

雲南に行った時、麗江で見た民族歌舞踊を思い出していた。一番前で観たあの舞台は今でも雲南を語るときなつかしく瞼に浮かんでくる。

「アタ、ドチラ　ヲ　ミタイ　デスカ?」

小燕はぼくに訊いた。「小燕は、どっちを観たい?」と返すと、アタ　ミタイホウ　デイイヨ。と言う、彼女はぼくの言う答えが大体分かっているようだ。だから、ぼくは**本心とは逆の**答えを言った。「高いほうにしょう。折角だったら豪華なショーの方がいいものネ。」

小燕が嬉しそうにニッコリ笑った。

「アーヨカタ!　アタシ　マタ　ヤスイホウ　ヨシチャン　エラブ　オモテタ　アタシ　タカイホウ　ミタカタネ。セカクミルダカラネ。」

ぼくの方にからだを寄せてぼくの目を覗き込んできた。

一緒に買い物をする時も、食事の時でも、お金をつかうもの中国語で東西（ドンシという）に対しては必ず安いを第一にしているのでぼくをケチと小燕は認識しているようだ。

ぼくに言わせるとこれは**無駄使い**と**節約**の違いにすぎないのだが。

「バスナカの　ヒト　ミナ　タカイホウ　ショー　カッタ　ミルネ」　皆も大劇場のショーを予約した。と小燕は嬉しそうに言う

劇場は九寨溝随一の五つ星ホテル《シェラトン》の中にあつた。入口で白い布を肩に1人づつかけてくれる女性たちの可愛いいこと、劇場内の客席の広さといい、座ると場内がかりの小姐たちが一人一人に毛牛肉とお茶を、お皿で配るサービスといい、こちらを選んでよかった、と思うことだった。

華やかに繰り広げられる歌、踊り、コント、観客もステージで一緒に参加するいろいろな出し物など、1時間半の時間楽しさ一杯の観劇だった。

圧巻はフィナーレだった。客席の半分ぐらいが舞台に上って劇団のスターたちと一緒に踊る。小燕や李さん、東北からの若い女性も、みんなでステージに駆け上がって踊った。もちろん僕も。

2004年5月13日

1日：深夜のホテルのフロント。

「朝6：30に食事をしてください。出発は7：00です。」

とガイドに言われていた。

ホテルの中の売店は既に閉店していたが商品は見れたので防寒具かセーターでもないかと物色して見たがデザインの悪いジャケットが2,3枚ぶら下がっているだけだった。それも250元と値札が付いている。100元でも買いたくない。

部屋の中は猛烈に寒い、これではシャワーどころではない。カバンの中身の整理と各種充電で寝るまで1時間は費やした。

デジカメ、ビデオムービー、携帯、AC レコーダーとひげそり用の充電池など充電

に時間がかかる。

現在、８：００、黄龍行のバスの中である。今夜のホテル到着は１０：００とのこと。車内の寒さはかなりのものだ。昨夜リハーサルしたのだが昨日の昼休みに諸日朗のショッピングセンターでみやげに三枚買ったマフラー（大判）は今日の秘密兵器になった。

首と頭を覆うと体感温度がこんなに上るものかと思うほど暖かい。

牡丹江のノッポの方の小姐がシェンム、シェンム（羨ましい！）と見る度に言う。

彼女のカメラはキャノンのイオスで１５センチぐらい本体から飛び出た望遠レンズが付いてる高級品である。

（ぼくに言わすと、何でこんな重いものを・・と思うのだが、二人で写真ばかり撮り合っているところを見るとマニアなのかもしれない。二人一緒の写真を撮りたくなるとぼくの方を見てニッコリ笑う。つまり、シャッターを押して欲しいの、と言う合図の笑顔である。

「ゲイニー　照像ジャオシャン　ハオマ?」

写真撮ってあげようか?「ハーイ!ありがと。」「ナニ、どういたしまして」「謝謝!」「不用謝」

ぼくも一緒の写真も沢山撮ったのでメールアドレスでも訊きたかったけど結局、名前もアドレスも訊かずに別れてしまった。

ぼくに助けを求めたので、できる限りの操作を試みたのだが結局直らなかった。それではぼくが一緒に行動して写真を撮ってあげます。日本に帰ってからメールで送りましょう、と約束して殆んど二日間の行動はこの５人は一緒だったのである。

８：００、突然、バスが止まった。皆が降り出した。とある小屋へ案内される。トイレ駐車を兼ねているらしいがもう何か分かった。

「チベットのクスリのセツメイカイ　アリマス。」

小燕が教えてくれた。コースに組み込まれているのだろう。やれやれである。他のグループも合わせて４０名ほどの客である。一応薬屋の着る白衣を着た女性が説明を始める。もう何回目だろう。言葉が分からないのを幸いに今、原稿を書いている。

寒さ対策についてである。

真夏の7,8月（これも来た事がないので寒くないとは保証出来ない）が九寨溝観光には寒さ対策がまず一番である。

山歩きはだいたい暑くなるのでて厚手の衣服は邪魔なものとばかりタカをくくっていたのが大間違いだった。

下着はハイネックシャツにタイツは忘れないよう、出来ればホッカイロのひとつも用意したいものである。・・・・・・などと、メモっている所へ、皆さん、クスリ袋ヲブラさげてバスに戻ってきた。

１０:００、又、バスが止まった。今度はさっきよりずっと大きなセンターである。巨大な水晶を販売しているところだったのである。

ぶらっと一周してものめずらしそうに物色している小燕や李さんたちと別れて外へ出た。

今、書いているこの文章には、実は簡単なメモを手帳にとっていた。そのメモを見ながら今、（当時より3ヶ月後）書いている。

そのメモの余白に小燕が書いたと見られる日本語が小さな文字で次のように書いてあった。

・・・・・ケチのよしちゃんは何にも関心ずに1人でまわっていた。

（今日までぼくのメモを見てたのは知らなかった）

本当は一緒に水晶を見て回りたかったのかもしれない。

「オー!ジェガ　ジェン　ピャオレーン!」などと奇声をあげながら・・・悪いことをしたと、思っている。

でも「アタシコレ　ホシイナ」などと言われたら大変である。

でも「アタシコレ　ホシイナ」などと言われたら大変である。路上では掘り出し物が?-?-?-?

０：４０、やっとバスは３７００ｍの黄龍入口へと近づいて来た。

周囲の建物がすっかりチベット族の建物様式に変わってきた。バスガイドが酸素吸入器の使用を薦める。５０元だそうだ。大きな空気袋を肩からぶら下げて歩くのだそうだ。頂上の一番高いところは３８００ｍあるので酸欠になる人が多く吐き気がするそうである。

実際、途中の休憩所でぼくのはす向かいに座っていた若い男性が突然、口からドバーッ！と吐き出した時は本当にびっくりした。

ぼくは結局、勿体ないので何度か鼻に差し込んでスースーしてみたけど別にどこかが楽になったとも感じなかった。

本当に中に酸素が入っているのだろうか、Ｏ３オゾンの匂いがあまりしなかったように思えたけど。

「アタ　（あなたのこと）クルシクナルマエニ　ハヤメハヤメに　ツカタホガイイとガイドサン　イッテタヨ　」

としきりに小燕は浮き袋の使用を薦める。

鼻にチューブの先を入れてパイプを開き思い切り深呼吸をする。言われた通りにやるのだが、どうも新鮮な酸素が入ってくるようには思えない。

「アタ　コンチ(空気)トテ(通って)ナイノデショウ。ナ。」とうるさい。

新婚旅行中の二人＆二人

まだ水量が少ないせいか見所のはずの滝は殆んど枯れていて水無し滝だった。一番奥の五彩池に登りついたのはもう５時を少し過ぎた頃だった。さすがに五彩池は声にならないほどの美しくも珍しくもある光景だった。しばらくは左右で写真をご覧下さい。

３０分かかって入口に着いた。あれは乗ってるとちょっと恥ずかしいものである。ホテルに着いたのは予定の１０時をはるかに遅れて深夜の０時３０分だった。

どこでどう遅くなったのか記録がないので思い出せない。

メモにはホテル着１：１５分とあるから、０：３０から夕食を食べて４５分後にホテル着ということらしい。６時に黄龍を出発しているから６時間のあいだぼくらは処をうろついていたのだろう。

途中に寄った売店の外の広場で何ともいえない笛の音が聞こえる。

民族服の男性が吹いている。前の机に何本かの笛が並んでいるところを見ると販売してるのだろう。この手のものに僕はとても興味があって、自分があんな風に吹けるような錯覚になる。

広州の李さんが既に机の前で笛を物色している。

早速、ぼくも行って、吹い男に吹き方を習い買った。

５０元だった。李さんも買った。

日本人だと言うと、その笛男はすかさず「北国の春」を吹き始めた。それが又この高原にこだまして何ともいえない響きだった。

「よし、この曲をぼくは日本に帰ったら練習しよう。」

５０ｃｍほどの長さの真黒な横笛は今回の九寨溝の最大のぼくへのみやげ物だった。　**なのに！！**

翌日、ぼくの宝物の横笛は成都の空港へ着いたとき、乗ってきたタクシーの座席に置き忘れてきてしまったのだ。

成都から長沙への１時間の飛行中、あの？族の男の吹く「北国の春」が耳から離れなかった。

私の中国９　日帰り旅行２つ。

この小旅行は教師生活中の週末を利用しての日帰り旅行です。

４月２４日（土）南岳衡山へ行ってきた。

衡山のことを何故、前に南岳と付けるのか山に登ってみて初めて分った。
衡山は中国の（五大道教の名山）五つの岳の一つだからである。

東岳　泰山（山東省）
西岳　華山（陝西省）
南岳　衡山（湖南省）
北岳　恒山（山西省）
中岳　嵩山（河南省）

信仰上の霊なる山である。戦国時代により五行思想の影響により生まれたと言う。
総面積１８４平方キロ。長沙を朝、８時ごろに出発。華天国際旅行社の小燕が
「長沙ニイルウチニ　イテタ　ホウガヨイトオモウヨ。アタシ　イショ　イコカ
ガイドリョウ　イラナイ」
というので二人でバスツアーも悪くないな、とＯＫした。

中国人８名の小ツアーに加えてもらった。費用３００元の所を２００元での特別サービスである。生憎の悪天候である。一昨日の３５度が昨日は昼間に空が真っ黒になるほどの異常気象。今日も寒くトレナーを着込んでの出発である。　今週は二日、湖南省を南に下ることになる。湘江に掛かる橋を先日は株洲市、今日は湘譚市と湖南省も２ヶ月の間に西、北、と体験分布図が広がってゆくのは楽しい。　約２時間半は吉川「三国志」を読む積りでいたが、とんでもない誤算、マイクロから飛び跳ねそうな状態の連続、火曜日の高速バスとは大違いだ。
　前の席のインテリ風男性は景秦から会議に出る為に来たので帰る前に登りたくて来たと言う。
丁度、５月に西安を中心に北西地区を訪ねる予定なので、行程や交通機関そしてお勧めの見所などを地図を見ながら聞きまくった。きつと変な日本人と思ったことだろう。
７８歳の老人と２５歳の中国銀行の小姐のカップルは不思議だった。近いうち、その老人とカナダの東側（と言うとケロッグ地方か?）に留学するのだと小姐は言う。時々、恋人のような、愛人のようなしぐさをするので、ますます変だ。二人が話を交わす事は一番最後に彼女がバスを降りるときまで無かった。もちろん二人が話をしないわけではなく単に無口な二人、ということだ。　衡山一日ツアーは霧の中だった。
三年前、妻と娘と三人で黄山に登った時と同じ前の人が見えないほどの濃霧が覆っていた。衡山は仏教の聖地として多くの人が訪れる名山である。　道教のお寺も数えると寺廟・庵・など２００箇所余りが点在していて、山全体が線香の煙と爆竹のすさまじい音で覆われている。
今日はとても寒い、霧が立ち込め恐らく１０度ぐらいの寒さだろう。
沢山の登山者、グループ、修行者団体などひきも切らずに登る。
　霧になかの黄山そっくりの光景である。
可愛い，わりにはどでかい声（正確にはハンドマイク）と早口（に聞こえる）中

国語のガイドが奇妙な団体を引っ張る。
頂上まで4，5箇所の寺院や名所，古跡を案内する。
途中で１０元出して、北方の軍服コートもどきを借りる。えらく重いコートだが寒いので仕方ない。こないだの３５度の陽気と２０数度の格差に体内異常が発生しそうだ。
一組のカップルは５０歳代の男性と４０歳代の女性、９０％は夫婦に見えるが組み合わせは目立つ。女の顔は西系のウイグル美人に見える。髪を茶髪にして、ときどき男に密着しすぎる。このへんが中国人の中年夫婦と違う。　一つの寺院の中には、たいてい１０ヶ所以上の佛像と拝礼場所がある。そしてかならずそこには線香売り場があって、名前を書いて運勢判断をするようになっている。
立って三拝、ひざまずいて三拝。道教の拝み方はチョッと変わっているらしい。
「オナジホウホーイイヨ。」
小燕も結構熱心に拝んでいる。仕方がないので並んで参拝するけどはっきり言って面倒くさいと思っている。
「アタ（貴方のこと）ナニネガイアル　想念シナイトイミナイネ」
とうるさい。疲れもするが、金もかかる。
ところで、かのウイグルカップル、二人して、特に熱心だ、そっとガイドが教えてくれた。
女が昨夜、腕をナイフで切って自殺未遂をしたとか。ノイローゼなんだそうだ。僕はわずらわしくて二人とは一度も話をしなかった。
天女の池、サルノコシカケか霊芝とかの場所を見たり、蒋介石総統と奥さんの居間＆ベッド、会議の場所、抗日戦争の資料や写真、どういうわけか明朝の女性のミイラ（ミイラはそれ自体が気味が悪いのでたいてい美女と形容詞がつく）まで見せる。結構、面白いツアーだった。南岳大廟は最後のスポット・忠烈祠と共にスケールの大きな見所であった。北京の故宮を真似た九つの中庭。大殿はとりわけ綺麗だった。

バスに戻り回家（帰路につこう）というところで例のカップルが一向に戻ってこない。
なんてことか！門の前で大喧嘩が始まったのだ。
ウイグル女は大声でわめき、男に足蹴りを放つ。男は少し身体を引き、片手で制止する。３０分経っても一向に治まる気配は無い。メンバーの一人が行く
「おまえさんたち！迷惑じゃないか！喧嘩は家に帰ってからせえや！」
「イヤ！あたしは帰らない！この男は金も無いくせに献金をし過ぎたよ」
「私たち二人のためにした願い事じゃないか？」と男が制す。
女の感情は高ぶるばかりである。「この男は私のお金を使う。自分は稼ぎは無いくせに」　「そんなことはこんな所で言わなくてもいいじゃないか？」と男が制す。
矯正小姐が制止に行く。　運転手が行く。勿論、ガイドはマイクを使って制止する。バスに残っているのは北から来た男性と、カナダの金持ちじいさんと、僕の３人だけになった。
黒山の人だかりである。結局、最後は男が車に荷物を　取りに戻り、二人を残してバスは４０分ほど遅れて出発した。　そして、なんとも奇怪な一日衡山ツアーは終わった。

あの二人の、喧嘩の本当の原因は何だったのだろうか？中国語のわからない僕が知る由もないが。
もし僕があの男性の立場だとしたら、僕はどうしていただろう。
たぶん、同じようなことをしていただろう。唯一つ違うとしたら、もっと早くに、バスのガイドに言うだろうナ。
「スミマセン！お恥ずかしい所をお見せしました。どうぞ、私たちを置いてお帰りください。」・・・と。

中国ぶらり旅（中原の足跡）　２００４・５月

５月１６日から２５日までの１０日間、「中国ぶらり旅」という名を勝手につけたひとり旅をした。

訪れた都市は・・・鄭州・洛陽・西安・蘭州・西寧・西安。主な観光地は崇山・少林寺・龍門石窟・華山・青海湖・白馬寺ほか幾多のお寺だった。

僕がこのコースを自分で企画した最大の目的は、中国大陸の二大河川である長江と黄河を自分の目で、より近くで眺めてみたい、という夢の実現だった。第２の目的は紀元前７００年から紀元後２００年の間、中国古代史の華やかな舞台であった。とりわけ春秋戦国時代の中原は宮城谷昌光の歴史小説のファンである僕にとって訪れてみたい夢舞台でもあった。

三年前に《三峡下り》で長江の旅は済ませていたので今回はぜひ黄河を流域をという思いが強くあったのである。

思い通り鄭州の「黄河風景区」では広大な黄河の砂地をホバークラフトで走り廻り、蘭州では黄河を羊の袋で出来た筏に乗って下る体験も出来た。

・・・・かって都、長安を追放された李白は黄河の印象を次のように書いた。

“わたしは舟にのり黄河に浮かんで都をはなれ、東へやってきた。

さらに帆をあげて進もうと思うのだが、波が高く山を連ねたようである。

天は果てしなく長く、水も果てしなく広いのでさらに遠く旅を続けていくのがいやになった。”・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

“黄河の水は東の海に向かって走り、太陽は西の海に落ちる。

すぎゆく川の水も、流される時間もアッというまであり、人を待ってくれない。青春の顔たちはわたしを捨ててしまった。

人生の白髪となりはててしまった”・・・・・・・・・・・・李白。

僕が今度の旅の出発点を鄭州にしたのは二つの理由があった。

１つは汽車の長旅をしたかったこと、はるばるこの地に来た。という気持ちになるには、飛行機ではイヤだったのである。地図を見ると判るけど長沙～鄭州間は北へ一直線なのである。

もうひとつの理由は邱永漢氏の小説「中国の旅、食もまた楽し」の中の「水害の中で育った黄河文明の町鄭州」の文を読んで、鄭州と黄河がひっかかっていたからである。

・・・・・・中国の文化と言えば、中原の文化であり、「中原を制するものは天下を制する》と昔から言われている。中原とは、黄河の流域のことで、ある。

・・・・・以下、本文より引用。

中国地図を拡げるとかなり北のほうに位置しているが、商（殷）の時代（約三千五百年前）から北宋にいたるまでの歴代王朝はこの地域にひらかれ、数々の古墳が次々と発掘されるのも大体この地域である。

俗に黄河文明と呼ばれるように、中国の文化が黄河沿線に発生し、開封・鄭州・洛陽・西安と東へ動いたり、西へ動いたりしたのは決して偶然ではない。

そうした史跡が次々と開掘されて出土するのが河南省の鄭州である。

・・・・・今でこそ黄河は鄭州市から北へ３０キロほど離れたところを流れているし、水量もだんだん減ってきたので、しばらくは落着いているが、いつまたどこで大暴れするかわかったものではない。

いつも本の上でばかり接して実物に一度もお目にかかったことのない私としても、一度は鄭州に行ってみなくてはと思った。

二日前の５月１４日の夜１０時１５分、僕は一週間の《九寨溝》の旅から帰ってきた。　成都を夜８時１０分に飛び立ったので、２時間の飛行距離なのに結構疲れていた。

詔山路の華程大酒店に着いたのは１１時を回っていた。

翌１５日（土）は夕方から平和堂の六階にある餐館で益田くんの二代目日本語教師歓迎会が範院長主催で開かれた。

その二日間で《九寨溝》の時の洗濯物を乾かさなければならない。あいにく長沙は雨模様でジーンズが乾きそうもない。１６日からの長旅に間に合わしたいのでホテルに頼んでジーンズだけ乾かしてもらった。

この間のことをぼくの手帳には詳細にメモされている。

●１４日夜：バッグ〈旅用〉整理。電子辞典に電池を入れる。ＤＶは入らなかったらやめる。傘はいれる。ズボンはチノパンにする。ジーンズは乾くか？クリーニングに出せるか？（ホテルで出来るか？）

●華天旅行社に行く。ホテルだけは三星にしたい。ツアーは現地ツアーに加わりたい。日本人ガイドは不用。

●１５日朝：外は雨、いかにも長沙。昨夜，寮（益田住む）からホテルに戻ったのが夜中の１時、風呂に入って寝たのが２：３０だった。　九寨溝以後、時間が狂ったのか。朝、寮に行く。天気が良ければ益田君が生徒たちと岳麓山に行くというので、一緒に、と思っていたがこの雨ではとても無理。

●李湯竜に電話する。彼に上げた白いウインドブレーカーを今度の旅行中貸して貰おうかと思う。あの九寨溝の寒さはないと思うけど、念のためバッグに入れておきたい。

●このホテル・華程（ファチョン）大酒店はなかなか気に入っている。部屋も、場所も、環境も、サービスも充分だ。満点が五つ星としたら準というところか？一泊２５０元とは安すぎる感じ。でもたまに故障がある。昨夜、風呂の排水蓋がどうやっても開かない。

●１６日朝風呂に入る。９：００　小燕が来る。少し雨。１１：００荷を持って寮へ衣服（洗濯物）を取りに行く。

●１１：００ホテル、チェックアウト。携帯の入金２００元購入。中国銀行の初めてカード機を使って引き出す。　小燕に付いてて貰う。

テストに１００元、正式に１０００元、シークｒットナンバーは小燕だけは知っている。二人で黄興路の歩行街にシャツを買いに行く。

●カードを使ってジーンズの上下を買う。小燕にもジーンズをプレゼント。総額、５００元〈７５００円〉

●４：２０小燕、ぼくを長沙駅まで見送る。彼女の手配で１０元出して、改札前に皆をさしおいてホームに案内される。コレってどうなっているの？「駅員のアルバイトよ。」小燕が言う。いろいろな裏口が中国にはある。

●旅行カバンのロックが壊れて開かなくなった。どうしょう。

●小燕が言う「アナタ　ムコウイタラ　スグナオシテモライナサイ　ナオタラ　モウ　ロクツカワナイデ　イイデショウ」

・・・・・・と言って，心配そうに小燕は帰って行った。

小燕（２１歳）は今度の中国滞在中に僕の旅の全ての旅程から交通手段からホテルまですべてを相談に乗ってくれた「長沙華天旅行社」の僕の担当“尋游小姐（ダオヨウシャウジェ）”だった。

ダオの字が中国簡体字で違うけど、「ガイド嬢」のこと。

彼女の達者な日本語のお陰で旅は楽だと思うけど、頼ってしまって自分一人の孤独感を味わえないので「一緒に行かなくて大丈夫ですか？」との申し出を断った。

《九寨溝》の時も、行く前は「道中、生きた中国語の専属教師付き旅行が出来ると楽しみにしていたが彼女の日本語能力におされてしまい中国人旅行朋友たちとの会話があまり出来なかった。　いざと言うときの電話（手机）連絡だけはいつでもとれるようにして僕は長沙駅５時１０分発鄭州行の硬座寝台列車（ｋ２１５４）に乗った。

翌朝６時３０分に鄭州駅に司机（スージ）注：車の運転手のこと。　が僕の名前を書いた紙を掲げて待っている事になっている。

夜中に突然、僕の携帯が鳴った。

「もしもし!天石さんでいらっしゃいますか？」　久々に聞く正統派日本語である。

「明日朝、鄭州で降りられる大石さんですよね?」
「ハイハイ、そうですが・・・・」
「私、河南大学日本人留学生です。実は、明日、大石さんを案内する事になっている趙福生ジャオさん（写真下）私とアパートが一緒彼が大石さんのガイドをとても怖がっています。」
「もし、英語のガイドでよろしかったら、お願い出来ると、言っています。」
「あぁ、別に特別な説明など要りませんよ。それに、僕も、意思の疎通程度は話せますから、手まねなど入れて楽しくやりましょう。と伝えてください。」
「そうですか?彼が言うには、運転ガイドの場合、食事は大石さんが持つこと、各所観光地の入場券は自分の分だけでいいことなど、知っておられるのか?
もし、会社に直接、私への不満を告げられると怖い。・・・そう言ってるんです。」
「お年はおいくつぐらいのかたですか?」
「６０ぐらいです。」
「そうですか?じゃあ同級みたいなものです。ご心配なく」
おかげで、明日の一日のイメージが浮かんできた。
夜は河南大学の留学生も一緒に鄭州の**歩行街**で食事でも・・・
中原・ぶらり旅の一日目の夜はこうして暮れた。車中での中国人とのコンタクトはほとんどなかった。か、記憶していない。
鄭州の改札口で趙福生（ジャオ）さんがニコニコ顔で僕の名を書いた紙を両手で掲げながら迎えてくれた。
昨夜の電話できっと安心したのだろう。
メモ帳をめくってみたら、１７日の蘭にはこう書いたあった。

支出：　朝ごはん　二人　２０元
入場券　３０元
ホバークラフト　６５元
昼ごはん　二人　２５元
夕ご飯　麦労当　２２元
スーパー(手帳他)　９元

ホテル：　聚和賓館
見学：　黄河風景区
河南省博物館
商代遺跡
歩行者天国

朝食を終わると趙福生（ジャオ）さんに頼んで、ひとまずホテルへ行ってもらった。
旅用のシェーバーはあるのだが、どうも、あの火車硬座の洗面所で歯を磨いたり，顔を洗う気にならない。トイレにも行きたいので1時間ほど休憩をしたかった。
実は、他の理由もあった。
この前、杭州行きの時買った短期旅行用の滑車つきカバンの暗証ナンバーキーが壊れてしまい、開かなくなってしまったのだ。　赴福生（ジャオ）さんにお願いしてどこかで直してもらうよう昨夜の女子留学生との電話でお願いしてあった。
「ワタシ　鍵屋ニイッテ　ナオシテキマス。」
趙福生（ジャオ）さんは僕をホテルに送るとそう言って出て行った。　1時間ほどして趙福生（ジャオ）さんが帰ってきた。
「先生のイタ（告訴我）バンゴウ、ツオラ（間違いネ）」
いつの間にか、決めていた０１２３が別な暗証番号に変わっていたらしい。
うっかりパスポートでも入れて空港で開かなくなったら大変なので今から鍵はかけないようにした。
それでも時間はまだ１０時前。ホテルから近いという《河南博物館》に行った。とても立派な建物だった。
趙福生（ジャオ）さんが門番としきりにやり合っている。
駐車場のことかと思っていたら、未だ開館しないのだという。あと一時間あとなので先に黄河遊覧区に行くという。
鄭州の道路は直線が多い。滑走路のような道路が延々と続く。
左折や右折すると又延々と続く。そんな感じの街だ。　昼食は鄭州名物を食べた

いと、と言うと

「オーケー，マカシテクレ。」と赴福生（ジャオ）さんがニコリ。

市内をグルグルと回る。かなり運転は荒い。

あちこちでのやりとりを聞いてると趙福生（ジャオ）さんの性格は内輪に優しく、他人に強く当たる、よく見かける中国人の性格のようである。

このあと明日の少林寺、明後日の龍門石窟と、今回の旅中、一番長く共に時間を過ごした人だった。

僕のために一度も嫌な顔を見せることなく接してくれた。

もっとも、他の案内人（ガイド）もその点では同じだったけど。

6時ごろにホテルに帰ってきた。30分ほど休憩をして夕食を兼ねて鄭州随一の繁華街に出かけた。タクシーで10分ぐらいのところにあった。

大きな広場があって、その広場を中心に二つのデパート方向と歩行街が続く。上海、杭州、成都、長沙、岳陽と最近は、どの都市にも歩行街があり、その都市の香りを嗅ぐことが出来て愉しい。

街は活気にあふれていたけど長沙や成都ほど明るくなく（ネオンが少ないのか?）商店の照明のせいか?よく分らなかった。

夕食はデパートの1階で麦当労（マイタンラウ）マクドナルドのこと。ですました。

夜おそく小（シャオ）燕から電話が入った。

「ヨシチャン!、キョウハ　タノシカッタ　デスカ?

ワタシ　シンパイシテタヨ　アナタ、手　アラワナイカラ

キタノホウ　非典（サーズ）キオ　ツケタホウガ　イイヨ。」

「大丈夫だよ。ご心配なく・・」

「ソチラノ　ガイドの　コトデ　フマン　アタラ　スグ　デンワ

イイヨ　アタシ　イツデモ　マテルヨ。」

明日は崇山・少林寺です。

東西南北と中央の聖山のそれぞれをつかさどる道教の神。道教での地位は高い。東岳大帝（泰山）、西岳大帝（華山）、南岳大帝（衡山）、北岳大帝（桓山）、中岳大帝（嵩山）の五帝で、東岳大帝が五岳の首となる。

東岳は人の命を、西岳は金属を、南岳は水棲生物を、北岳は大河を、中岳は土地山川をそれぞれ司る。

7：30

司机の趙さんと一諸の朝飯を食べ僕は彼のでっかいマイクロ車に乗って少林寺のある嵩山へと向かった。

華天の小燕が作ってくれた日程表によれば、今日の見学地は

道教・中岳廟・・・中国最古の道教廟

嵩陽書院・・・・・古代四大書院の1つ。

少林寺・・・・・演舞庁

塔林・・・・少林寺の歴代和尚の墓地

白馬寺・・・・中国天下第一寺

・・・・・洛陽へ　　・・・とある。

今度の「中原ぶらり旅」は僕としては珍しく事前の旅プラン無しの行動をとることにした。具体的に言うと、今までの旅の場合、行く先々の観光地の詳細を「地球の歩き方」などで、よく調べ、所在地を含め穴場なども、そして、名物や土産品も事前リサーチするのが通常の僕のパターンであった。

今回は何故か?何もしたくなかった。今日の場合も1つのキーワード《少林寺》だけ知ってて、見学し後は鄭州には戻らずにそのまま洛陽に行く。

・・・それだけだったので小燕のいろいろ考えて立ててくれたプランにはあまり関心が無かったのが本音である。・・・・というより、中国に来てから、あまりのお寺参りの多さに、いささか食傷していたというのが、本音かもしれない。

ホテルに戻ってから土地の「旅行地図」どこでも大体、5元。これだけは必ず買った。を眺めて足跡をたどった。これも、今までとは逆である。

各スポットの説明は勿論すべて中国語だし、おまけに今説明を受けているところがどんなところなのか?予備知識も無いわけだから、司机の趙さんも、一生懸命説明

してても本当は張り合いがないのだが、そこのところは、僕の演技力でカバーした。
言葉の最後の単語をオーバーにリフレインつまり繰り返すのだ。
例えば、年代が分ったとすると、すかさず
「オゥ!!３５８０年前ですか?」
「オゥ! サンチェンウーバーニェン イーチェンマ?」
又は「オゥ!真的? オゥ ジェンダ マ?」
あとは、合間合間に「対 トイ、対了 トイラ」とか、返事を入れればよい。
ときには「明白了馬?」と、くるのでこれは簡単である「明白了!」
司机のジャン(趙)さんは大いにご満足の様子なのである。
又、感心するほど彼はいろいろと詳しかった。ときには本当の正式ガイド(胸に写真入カードをぶら下げている)の説明を聞いてる中国人観光客さえが彼の説明の方に鞍替えしてくるぐらいだったから。
それにしても、《中岳廟》は中国最古の道教寺ということで、面積は３７万平方メートルで殿堂や楼閣などを合わすとその数４００を越えるというとても立派な廟でした。
中には巨大な、今まで見たことも無い大木がいくつかあった。彼がひときわ熱の入った説明をしてくれたのだが分らなかった。一応、大いに分った振りをして**「オー オー ミンバイラ!!」**と、慌ててデジカメを構えシャッターを切った次第。ツライデス!
注:帰ってから本で調べてみたら、この古木は《中岳廟》にあるのではなくて、崇陽書院にあることがわかった。
崇陽書院は宗(９６０~１２７９)の時代に作られ、儒教の四大書院のひとつだった(以前は仏教と道教の寺院でもあった)その他の書院は湖南省・長沙市の岳麓書院と江西省にある。
注目すべきは2本の古い柏の木だ。
これらの木は紀元前１１０年に嵩山の登った漢の武帝によって、大将軍と二将軍の位を授けられたとされる。
中岳廟はそこから北東、嵩山で最も高い峻極峰に登る途中にあるらしいことがわかった。
どうやら我が司机のジャオさんは先に《中岳廟》にのぼりまだ上に行こうとしたら階段の登り口で一人の老夫人に行く手を拒まれたんでした。
「ここから上は工事中で上がれません。」と言われ。
いまここに嵩山・少林寺のマップが無いのでそのとき書き込んだであろう足跡がわからない。
故宮を真似て作られたという峻極殿はとても素晴らしく、変わっていたのは石造りの亀が石碑を背に乗せたのがあり、外国人観光客がパチパチ写真を撮っていたので真似をして写していたら、すかさず、わが司机のジャンさんが傍に来てながいながい呪文が始まった。
「3”$%&.((;~=)(.. &%$##&.)()($%%#?:?:」
お恥ずかしい事に、疲れてくると、僕の聴能力も初心中国語学習者とかわらなく、呪文に聞こえてくる。
さて、少林寺での昼食は何処で食べたか、説明がしにくい。
不思議な体験だった。
最初、割りと大きな食堂ホールに行ったけど、そこから別なところに案内された。
西洋人が２０名ほどチェックインしようとしているフロントのようなところの横の小さな入り口を入ったところにある小部屋と言った感じの場所だった。
まさか、ホテルの食堂でもあるまいし、
それにしても、ここがホテルだとしたら2星クラスだろう。
司机のジャンさんは結構慣れた感じなので初めてではないのだろう。
食事はセルフになっているが、客は4,5名、この付近の武術館で修行しているような外国人青年など、セルフといっても、おかずの種類は４種程度、・・・・どうみても、一般客相手の食堂とは思えない。

・・・そんなわけで、ここでの昼食シーンがとても鮮明に残っている。
・司机のジャンさんに理由を訊けば分ったのでしょうが・・
この時の僕の脳神経は語学サイトが麻痺していたので訊く気にならなかった。
もちろん、とてもまずく、ほとんど手をつけずじまいだった。
演舞場での**工夫**（コンフー）は圧巻だった。
本当はあちこちにある武術館で少年たちの稽古シーンを見学したかったのだがショー化されたのもここでしか見ることが出来ないのでワクワクして約1時間余りを堪能した。
ＶＴＲにしっかり写っていた。もちろん、カメラは膝の上に置いてステージは目でしっかり観ていた。
上海雑技などでクルクル回ったり、身体の間接をはずしたりは観ていたが彼らの工夫は違った迫力のあるものだった。
司机のジャンさんが塔林を出た時に僕に言った。
「白馬寺は明日の予定になっていますけど、もしよかったら
洛陽（ローヤン）に行く途中なので今日イクドウデスカ?」
うかつにも僕はその名前を今初めて聞いたのである。

「バイ　マー　スー?ゼンモヤン?」白馬寺って何ですか?
彼は小燕から、届いていた「旅程表」を指差しながら
「ココニ、（写）カイテアリマス・・・白バイ馬マー寺スーです。」
・・「当然（ダンラン）可以（カーイー）！」いいすよ!
・・・・**白馬寺**については、そのような訳で実はよく知らない。案内役のジャンさんも、ここの入場口で案内入場を拒否された。３０元かの入場券が必要とのことで、僕もあまり興味がなかったのと、もう呪文の案内に辟易していたのでジャン氏には「スグ見てきますから、３０分ぐらい、ゆっくりしていてください。」と言って中に入った。
しきりにジャンさんが「第一次ディイーツー」と言うので、何かが一番なのだろうぐらいの感じだったけど、本当は中国で最初に建てられた寺院だそうだ。
インターネットで捜して、どなたかの説明を拝借した。
・・・・・・・・・

洛陽郊外１５㌔の所にあるこの白馬寺は中国で最初に建立された仏教寺院であると言われています。白馬寺は後漢明帝の永平１１年（６８年）天竺から仏典を白馬に積んで来た2人の僧侶を開祖すると言う。山門の両側には、２頭の白馬の石彫があり、境内の東西に、高僧（竺法蘭と攝摩騰）の2人の墓があります。2人の高僧は沢山の経典を持ってやって来ました。
注：実は別な旅行本の説明ではこんなことが書いてありました。
参考に転記してみます。
・・・・・・中国最初の仏教寺院とされる白馬寺（バイマースー）は、洛陽の東１０㎞地点に立つ。この寺の起源についたは興味深い逸話が残っている。
後漢の時代の紀元６４年、明帝が宮殿の前の空を神が舞っている夢を見た。占い師に夢の解釈を尋ねたところ、それは仏陀に違いないという答えが返ってきた。
そこで帝は二人の僧侶をインドに送り、仏教の経典を持ち帰るよう命じた。数年後、二人は二頭の白い馬に乗り、経を抱えて戻ってきた。
これが中国に初めてもたらされた仏教経典であるとされる。
経典を保管する為に寺院が建てられ、2頭の馬にちなんで白馬寺と名づけられたというのである。
現在残っているのは後世に建てられたものだが、寺院には1世紀まで遡る事の出来る歴史の記録が残っている。内部には二つの墓がありニ人のアフガン僧が永遠の

眠りについている。・・・・・・

白馬寺と言う寺名については諸説あり、正確には解らないようである。地名説。白馬が佛典を乗せて来たので、それにちなんだ命名とかいろいろあるようだ。

洛陽に白馬寺が建立された後、各地にも同名の寺が造られたと言うことである。長安にも建康（南京）にも白馬寺と称する寺があったそうだ。

現在の白馬寺は明の嘉靖年間（１５２２－１５６６）に大修復され、清代にも１度、解放後の（１９６１年）にもあったようである。

本堂には（経幢）円形の石柱に佛号・経文を刻んだものと、元代の碑刻は共に芸術性が高いと言われている。境内には天王殿・大仏殿・大雄殿と言った伝統的な四合院形式による建物が歴史を感じさせてくれる。

大雄殿の東西に元代に彫られた１８羅漢像があり、白馬寺観光の中心的なスポットと感じた。

東側に金代の大定１５年（１１７５）建立の斎雲塔と言う石塔が建つている。四角１３層、高さ２４㍍でこの寺院のシンボル。馬寺鐘声・『洛陽八景』の一つ。明朝・嘉靖３４年（１５５５）の鋳造で重さ２，５㌧。

面白いことに、この鐘の音にこたえて洛陽東門にある鐘も共鳴すると言う。二つの鐘の周波数が同じなので、こういう現象が起きるそうでである。ここでは「馬寺の鐘音、西にこだます」と言われている。

丁寧な説明に感謝！！

白馬寺の見学は久々に説明役に気を遣わなくて（はっきり言うと演技をしなくていいのと）寺院が古い割には綺麗に維持されているのと、これは、何と言ってもいいのは、階段があまりない、全体が平地で公園のような感じがしたりで、とても快適な?お寺だった。

さて、メモに書かれていた今日の経費(入場料）は・・・

少林寺入園料　　１５０元

とても高いと思いました。

食事(昼)　　４０元

とても高いと思いました。

土産に買ったＴシャツ（５枚）　　１６０元

骨筋肉痛用薬　　１００元

達磨和尚の写し絵（松間さんに）　　２０元

洛陽までの道路はほとんど高速を通ったような気がする。高速の出口で３０分ほどのハプニングが発生。高速の料金支払い所で一台の小型トラックが出れずにいる。

小柄な男が何やら紙切れを振りかざしながらわめいている。中からは、それを否定するような返事。

とうとうトラックを降りて詰め寄る男。

助手席から彼の奥さんらしい人も降りてきて、二人で抗議。

相手にしない事務所側。

２０分ぐらい、クラクションを鳴らし続ける我が司机のジャオさん。

だんだんエスカレートして行く喧嘩。

司机のジャオさんがとうとう車から降りて行き怒鳴り始めました。

「なにやってるのか知らんがあんたら、ここでやりあわんで横のほうでやったらどうや！車がよけいならんどるのがわからんか！！このアホども！」

今度は、トラック男と司机のジャオさんの言い合い。が始まる。

とまあ、喧嘩の場合は中国語も、カタカナ日本語も合わない。

何故か?関西弁・・・・・・・・・・・・。

３０分ぐらいしてやっとハプニングは終わった。

まだ日の高い４時過ぎには洛陽の街に入ってきた。**洛陽**のことについては次の洛陽

（ローヤン）編で書くとして

ここらで少し小休止《**休息休息!一点点**》。

＊**旅も**何日か続けているとホテルでの少々のトラブル（不都合な点は余り、気にならなくなってくる。たとえば、ＴＶが点かなかったりすると諦めて観ない（観たくて点けるのではないので）。お湯のポットが故障していたらミネラルウォーターの「アハハ「」で間に合わしてしまう。

お風呂のお湯にしても出さえすれば少々ぬるかろうと、湯量が少なかろうと、おかまいなし。

暖かい季節のせいもあると思うけど、不思議なもので、浴槽のないシャワーだけのホテルを続けて経験してしまうと、たまに浴槽があっても、何だか湯を貯めて入るのが気持ちが悪くなってくるから不思議なものだ。

上海や長沙市の三星ホテル（四星に近い）だと連泊すると、ベッドシーツなどを新しく変えてくれるけど、地方都市の三ツ星クラスになるときれいに掃除はしてくれてもシーツや洗面用具もそのままというところが結構多い。

たいていのホテルはベッドサイドに電灯のスイッチがセットされているがそのすべてのスイッチが１００％機能しているところはなかった。

もっとも、全部のスイッチをわざわざチェックするような客も珍しいと思うけど。

どこかのホテルで浴室のなかにインターネット接続端子（電話線）が説明つきで付いていたのにはビックリした。

一人で三ツ星ホテルに泊っているとたいてい按摩・足マッサージの誘いの電話が入る。いや、二人でも同性同志だとかかってくるのかもしれないが。慣れないと注意が必要だ。

言葉が通じないのでアンモアという言葉だけで、「ハイ、ハイ」と言ってしまうと、数分後、ドアｆがノックされ、開けると、そこに立っている怪しげな小姐の怪しげな微笑に一瞬！「あれーっ！！」・・・と、いうことになる。

それはそうと、昨夜頼んだ按摩（正真正銘の）小姐はうるさかった。

年は１８歳，名前は李とか言ってた。ホテル内の美容室からの出張とか、とにかくよく喋りまくる。次から次へとローヤン弁ではなしかけてくるので按摩の気持ちよさに浸っておれない。

おまけに力が弱い。お前、本当に、「アンモア小姐??」と言いたくなる。１時間６０元が勿体ない。

市井の中国人と話す機会の少なかった頃は《生きた中国語会話編》とばかりに、いろいろ話をし、ときには、按摩中にメモをとりだし、漢字で筆談をしあった頃がなつかしい。

明日は朝、７時に司机のジャオさんが迎えに来る。

明日は**龍門石窟と洛陽博物館それに関羽の首塚のある関林堂**を観光することになっている。

龍門石窟

大同の雲崗石窟・敦煌の莫高窟と並ぶ中国三大石窟のひとつ。

北魏の孝文帝の洛陽遷都にあたる４９４年に開始され、唐代までの約４００年間にわたって続けられた。

現存する石窟は計１３５２ヶ所。全長は１ｋｍに及ぶ。唐代末までに彫られた仏像は１０万体。

多くの石窟は西側河岸にあるが、北魏時代の石窟は入り口付近の3洞をはじめとする１４窟で、その他は唐代のものである。

ほぼ中央上ぶにある奉先寺洞は、龍門石窟を代表する石窟で、唐の最盛期に造られた。

中央に高さ１７ｍの**盧舎那仏の坐像**があるが、モデルは**則天武后**といわれている。

・・・・洛陽というのは、宗において衰微するまでは，大した町であった。

唐代では、首都が長安であったとはいえ、なお、副首都の位置をたもっていたとされる。

唐の長安は世界都市として当時、遠く西方まで光芒を放っていたが、その後背地である「関中」は秦漢時代ほどの農業生産力を持たなくなり（長安の消費人口が大きすぎるため）食料その他の物資は洛陽にあおがざるをえなかった。

このため洛陽が副首都とされ、長安なみとまではゆかなくても相当な規模の宮殿や官衙（ギョ）がそなえられていた。

皇帝でさえ長安で食糧不足になると、めしを食うために（ごく具体的な意味で）洛陽まで出てきて長期滞在した。

百官を連れて来た。当然後宮の女どももきた。

みな洛陽で、数万人の支配階級とその寄生者たちが、箸をうごかしてめしを食った。

玄宗皇帝などは洛陽にやってきてめしを食う事がしばしばで、それより前、盛唐のころの高宗などは、在位三十三年のうち十一年もこの洛陽で暮らしたと言う。

江南の穀倉地帯から大運河などの水路をへて食料が洛陽まで運ばれてくる。

洛陽から長安への輸送は険阻な陸路が多く、難渋をきわめた。

その輸送を待つより、いっそ口を洛陽に持って行って食物を食うほうがてっとりばやく、そう言う発想で洛陽への行幸が営まれた。

九世紀には、日本僧の空海も円仁もこの町を通った。

／・・・

旅の間中、ぼくは何度思ったことだろう。
「もう、山の上にある寺には登るのをよそう。」と
この香山寺の階段はとりわけ堪えた。
どこやらの学生たちと一緒だった。可愛い女の子たちがたくさん一緒だったので何とか上まで上がることが出来たがジャオさんと二人きりだったら，やめてたかもしれない。
しばらく行くと白楽天（白居易）の墓がある公園を訪れた。
洛陽への帰りに**関林**へ立ち寄った。
曹操が敵側になる関羽に敬意を表して建てたという関林は
プランの段階からぼくが小燕子に頼んでコースに組んでもらったところだった。
もう少しさびしい処かと思っていたら、ここは経済（金儲け）の神様なんだそうで、中国全土から金持ちになりたい人たちが訪れるんだそうだ。
一番奥にある**関羽の墓**（まんじゅうのように大きな円の中にある）に行ってみた。
成都にある劉備の墓も大きかったけれど、ここの墓は三倍は確実に大きいと思った。
帰りの車中でぼくは言った。「明日はボクひとりで洛陽博物館やら市内見物でもして
午後の汽車で蘭州に行きますから、ジャオさんはボクを
ホテルまで送ったら鄭州へお帰り下さい。」・・・・と。
「メガンシー　メイガンシー。ハイヨードーシージェン。
ウォ　ダイニー　ボーウーグアン　クオイー」
注：大丈夫ですよ、まだ時間が一杯ありますから
ボクが案内します。」

ということで、ホテルに帰らずに**洛陽博物館**に行くことにした。
余り期待もしていなかった博物館だったけどこれがとても内容の濃い博物館だった。
古いせいか、そういう意味では洛陽の市街地の雰囲気と似ている。豪華な、ゆとりのある内部ではなかったけれど、人も少なくゆっくり見学できた。あとで、ここの陶器・唐三彩は有名だど知ったのだけど、確かに圧巻だった。
カメラを車の中に置いてきたのが残念だった。
またジャオさんがなにかしきりにすすめてくれる。
「シンダボーユグアン　マーチャーダ　・・・・・・・シンブシン
ニーミンバイラマ？」
何やら新しい博物館を見に行かないか？と言ってるらしい。」
ボクが分らないのか、今度はメモ紙に２０元とか、馬とか、　書くので
「オーケーオーケー、可以（クァイー）」
あぁ　いいですよ」というと、ニャリと笑って走り出した。
連れて行かれたところは洛陽の中心街にある広場（グアンジャン）である。そういえば広場の真ん中に工事の後がありクレーンがあり、大きなテントが張ってある。そして、馬の像があったように思う。
駐車場をみつけ車を降りた。
地下に降りていくと階段の途中で又料金所がある。あぁ、ここが新しい博物館で２０元の入場料が要るというわけか？
何とそこは、３年ほど前に、ここに大きなスーパーを作ろうと工事を始めたら底から馬の骨や荷車がいっぱい出てきたらしい。
調査してみると、なんと紀元前７００年から２００年のころの周の時代というからあの西安で発掘された秦の始皇帝の兵馬ヨウより以前である。
今年２００４年の４月というからごく最近にこの現場をそのまま博物館名にしたとのことで、真新しいパンフレットを貰ったのだが残念な事にボクが帰ってから送ってもらうことになっている郵送品箱に入れたままで今此処に無いのでそのパンフレットに書かれた**新博物館名が**わからない。
送って来次第、ここに書き込むつもりである。

（下がそのパンフレットです）

それまでは馬荷車博物館みたいな仮名が付いていて、人々もその呼び名で呼んでいたらしい。

それは暗い地の底に、眼下にそのままの形で、綺麗に土を払い落とした馬の骨と、荷車の列が連なっている。

２０００年前の馬のいななきが聞こえてきそうな感動的な現場がライトで照らされていた。

写真撮影が禁止されていたので現場をお見せ出来ないのが残念だけど、そのパンフレットには現場写真が載っているので、ボクの許に郵便箱が届いたらコピーしてお見せできると思う。

６月２５日に最後の荷が中国から届きました。上に書いたパンフレットのコピーを早速、写真の最後に掲載します。

上の原稿の博物館名も分りました。

以前２００３年１０月１日　周王城車馬杭博物館　開館

２００４年初　上更名『**洛陽周王城“天子駕六”博物館**

２０日の日記

今日、行く予定の博物館を昨日済ませてしまったので今日は昼過ぎまでホテルでゆっくり過ごすことにした。

ジャオさんは今日の蘭州行きのことについて何度も僕に念をおして、昨夜、６時ごろホテルにボクを送ったあと、ニコニコ笑顔で、名残惜しそうに?手を振りながら鄭州に帰って行った。

奥さんにおみやげでもと５０元札を一枚手渡した。　あとで、「何てケチなことをしたのだろう。１００元渡せばよかった。」と反省したが、この頃、ボクも、１００元～1，５００円という日本変換レートを忘れてしまいかかっているようだ。

日本式に考えたら２００元ぐらいお礼に渡しても多すぎはしないのだが。

午前中はホテルでいろいろと書き物をしたりして1時３０分のチェックアウトまで過ごすことにした。

なにしろ暑い、こちらに来て天候に恵まれる過ぎているのか

これが5月の天気で、長沙が異常なのか?

多分、後者だと思う。

ふと、牡丹公園にでも行ってみようか?と思ったけど日射病にでもなったら元も子もない。

それにしても、昨日の東関（もしかしたら、この名称、正しいかもしれない。メモにあったから・・・）新公園はびっくりした。

すばらしい観光地が洛陽に出現した。

日本の観光社も新しいコースの設定をしてもいいのではないだろうか?

１１：４５頃：

突然、携帯が鳴った。長沙の小燕か?それとも、シャケンか?それとも上海の李黎か

ウルムチの馬さんか?と思って電話に出ると、はるばる熊本の八期友達・上田平加寿子さんのなつかしい声が飛び込んできた。

「オイシサン!今、何処にイルノ?」

それからしばらく熊本～洛陽間の国際電話は続いた。

「アタシ、インタネットの回線で電話してるから電話料ただみたい。気にしなくていいのよ。」

いつもの彼女のあかるい顔を思い浮かべながら、ぼくも、こちらの様子をこまかく話す。彼女は僕のからのメールやＨＰで結構、僕の行動を知っていてくれて嬉しかった。

「わたしもこのごろ中国に興味を持ち始めたのよ。」のコトバは嬉しかった。

電話を切ってほどなく、昨日のジャオさんから電話がきた。

「蘭州に着いたら電話をくれ。」という。

もう、彼の役目は終わったはずなのに。」

心配してくれてるらしい。例によって、なにを言っているのか早口の中国語はわからない。最後に例によって

「明白了馬?」ときたので

「対了!明白了。」と、合言葉で答えると、日本語で

「サヨナラ」とヨにアクセントをおく独特のコトバで電話を切った。

ほどなく、フロントから電話が入った。

「火車票（汽車の切符）を渡しに部屋に行く」と言う。

ジャオさんが僕に切符を持っていくようフロントに言ったのだろう。

駅は近いからタクシーは使わなくていい。とホテルの服務員は言う。これも、ジャオさんがホテル側に申し伝えていたのだろう。

実は昨夜、今日の駅までの行程を体験してみようと歩いてみたら結構遠いし、旅行カバンを引っ張っていく事を思えばわずか5元（洛陽のタクシーはとても安い）何も節約するほどの額でもないのでタクシーで駅まで行く事に決めていた。

その後に起こった **洛陽駅での出来事。** を知りたい人は、ここをクリックしてください。

次 5/20　　朝：晴れ。

中国人と中国語で話していると本当に疲れてしまう。

昨夜の按摩小姐・李の質問攻めにも辟易したが、司机との会話も、おおまかな意図は分るのだけど、ガイドのような説明になると、とんと理解できない。

それでも必ず最後に「明白了マ?」（ミンバイラマ?）と念を押してくるので

「対了、明白了。」　「ハイッ、よく分ったよ。」と答えることにしている。

ここであることを思い出した。（シャンチライラといいます。）　日本語を勉強中の学生や留学生もぼくと話をする時、日本語で

話をするので、彼らが日本語未熟児ということをつい忘れてしまって日本語圏で会話をしてしまう。

彼らも分ったような顔をしているので、ついそのつもりでいるとぼくの場合と同じ状態なのかもしれない。そういえば、授業中によく　「わかりましたか?」と訊くと、　「全ぜ～ん、分りません」と返事が返ってくる。

ぼくはそれから無駄をなくするためセンテンス毎に　「わかりましたか?」

「聞こえましたか?」と聞くことにしたのだ。

実は昨日も面倒なことがあった。

ホテルの服務員が

「あなたは明日、一時半にチェックアウトすることになっていますネ。その時にこちらで預かっています火車の切符とルームのキーと交換シマス。」　と言ってきた。

ぼくとしては何時にチェックアウトしようとぼくの勝手で、開車（出発）が2：20ということはもうすこし早めにホテルを出ようかナと思っていた。

昨夕は暇だったので、駅まで散歩してみたら司机が言うほど近くはない、大きな荷物をひきずって、この暑さを考えるとタクシーの5元は惜しくはない.と思っていると　「そんな必要ははい。駅はチカイです。アナタノトモダチ（司机のこと）はアルイテユクヨウニ。」　と伝言されているというのである。

確かに昨日、ジャオ氏が何度もぼくにそのことを念を押していた。もちろん好意で、確かに今日の予定は朝から「洛陽博物館」に午前中に一人で行くつもりだったのでチェックアウトの時間が過ぎてしまって超過料金を取られたら困るので荷物だけフロントに預けてもらおうと彼に話したのだった。

「没関系!」（メイガンシー）（心配いりません）

ホテルには1：30までおれるように言ってあるので部屋に荷物を置いてて構わない。

また、駅は「ヘンジン!」とても近い!タクシーに乗るほどの距離はない。・・・・ともう親切の押し売りなのである。

そんな意思を厳しくホテルの服務員は聞いていたので、こちらの意思は無視されてしまったようなのだ。それでも、タクシーの件は　「余計なお世話で、わずか100円足らずで楽出来るのだからそうしたい。ぼくは疲れている（ウォ　ヘン　レイ　ラ）」

と言うと、　しぶしぶ了解したようだ。

でも、チェックアウトの件は早くすることは「不要」（ブヤオ）「駅で待ち過ぎる」と頑として聞かなかったのである。

・・・・・・・ぼくはすっかり疲れてしまい　《我明白了！！》「と応えざるを得なかった。

《休息休息一点々》　３　《中国人の怒り方》名物司机ジャオ氏のことをもうひとつ紹介。

中国人の「抗議のしかた」は半端ではない。男も女もすさまじいものである。

「青海湖一日遊」（イーリーヨウ）でも、そのあとの「華山一日遊」のときにも一組のカップルの抗議も思い出に残っている。

なぜなら、それまで、バスのなかで2人してやさしく、二人だけの世界よろしく、いちゃいちゃしていたのに、何かのことでガイドといさかいが始まると、そのふたりは交互に、ものすごい剣幕でガイドに抗議のコトバを浴びせかけるのである。

青海湖では大学生カップルだった。どこやらへの入場券が学生割引がある、ないのことからだったようである。

背の高い彼と、とても子供のような可愛い彼女のップルだっただけに正直いってイメージが壊れてしまった。（これは日本人的感覚）

洛陽編で書いた、例の高速道路での一幕は執拗な喧嘩のような抗議としては一番長い時間だったので印象深い。

料金を払うゲートで一人の小柄な運転手がお金ならぬ、　・・・・なにやら汚い紙切れをかざして係り官に食い下がっている。

（思うに、回数券か、割引券みたいな感じ）　ときどき、クラクションを鳴らし続けるわがジャオ氏にその小男が

「別なゲートへバックして変われ」

という。そんなことで、ハイ分りましたと引き下がるようなジャオ氏ではない。係り官と小男のバトルはエスカレートして行く。

やがて、大きな図他袋を一杯積んだ小型トラックの右のドアが開いて、こんどは小男の奥方の登場である。

ご多分にもれず、こちらは大女である。眺めている側としては格好の役者そろいである。

ふたりして足を踏み鳴らしての抗議が続く。１５分ぐらいはジャオ氏も車の中から文句を言っていたたまりかねて出て行った。

「あっちに行って話しをつければいいじゃないか?クルマガいっぱい待ってるのが見えないのか??このアホども！」

とまあこんな感じだと思う。でも、本気で怒っている事はそうなのだろうが、こんなことは中国人にとって日常茶飯事のようだ。

なんといえばよいか「反射神経」に「こらえる」とか「よく考えてから」とか出来ない民族性ナノカナと、思ってしまう。　動物が、つついたら反射的にかみつく、といったような反応にみえる。　ジャオ氏も観光所の検札でいつもこの症状が出てしまう。

小さなお寺などでは結構、運転手の入場パスで通してもらえるが白馬寺や少林寺とか龍門石窟とかの大型風景区、特に世界遺産の地域などはまず、無理なのである。　それでも、かれはねばる。

「俺はこの日本人観光客のためにガイドを仰せつかっている。俺はいつも来てて見たくはない。でも、俺がいないと彼に説明する人がいないから一緒に入れてくれ。」　と、顔写真入りのパスカードを見せるが受け付けられない。

最初はやさしい声で微笑をみせながらの説明だけど、どうしても受け付けられないと分ると顔と声は一変する。口から唾を吐き散らしながら大男の運転手は怒鳴り始める。

何度か外で待ってもらって一人で（その方がかえって気楽な場合もある）のんびり歩き回ったけれど龍門石窟のような場合は中に入ってから3時間以上は見学しなければならないので待って貰うのも大変なので僕の方で入場券を買ってあげる事になる。

観光地の駐車代金（わずかばかりだけど）と同伴中の食事代はぼくの負担ではあったけど何処に行くにも専用車で、食べるところも案内してもらい、道に迷う事も無く、その点では旅にまつわるハプニングが無いのが少し物足りないかもしれないけれど、時間と経費の無駄だけはカット出来る。

《中国人との会話》

中国人と会話をしていて思ったことは核心と言うか、用件だけを単純に話してく

れると分り易いけど、添え言葉が多いとちんぷんかんぷんに聞こえてくる。
しかし、タクシーとか、道を聞くとか、簡単なフレーズ（決まり文句）だとまあまあクリア出来るけど、慣れてくるとそういう訳にはいかないのが実態である。
それと、キーになるコトバがクセのある発音をされると「何について話されているのか」が分らないのでサッパリである。　あとで、「なーんだ。」と思うことが度々である。
特に地名は、その土地の人は独特の言いまわしをする場合が多く、わかりにくい。洛陽は《ルゥヤン》と覚えていたら、こちらにきたらみんな《ローヤン》と発音する。
タクシーの運転手が　「ローヤ、多少天ドー?テェン　ニザイ?」（洛陽にどれ位滞在してます
か?）　と質問された。そのローヤが分らず、今回の旅のことなのか、中国のことなのかと、とっさに返事ができなかった。
喫（中国語でchi:チー）も巻き舌でツーと言った方が通じやすいことがわかった。
是（中国語でshi:シー）も巻き舌でスーと言った方が通じやすいのだ。　もっとも、僕の居た湖南の方の特徴かもしれないが、
そうそう、方言といえば湖南地方最大の言語の特徴はなんと言っても「ラ行」と「ナ行」の逆転発音だろう。
「いろいろ」を「いのいの」、「いぬ」を「いる」と言う。だから、「いろいろな犬がいるね」　は湖南人は「イノイノナ　イルが　イヌナ」と言う、と長沙大学で日本語の先生をしておられた知人の竹岡健一氏が言ってお
られた。
ぼくも興味をもって、自分の生徒たちに試してみたら、特に張家界や常徳の方のと、安徽省の生徒たちも逆転発音でいくら直してもダメだった。
特に「これを見るね?」と言うと「ミヌ　　ミヌ」つまり「見る、見る」と、言っているのだけど　「見ぬ、見ぬ」と否定に聞こえる。「来る　来る」が「クヌ　クヌ」とくれば否定に聞こえる。
《お母さんは知らないのじゃないノ?」と聞いたら、彼らには何と聞こえるのだろうか?・・・と、ふと考えてしまった。
話はかわるけど、この頃、中国では会計（日本では、ゴアイソとか言う）の時、「マイダン!」と言う。学校では結銭（ジェジャン）と習ったので言ってみたら通じなかった。
多分、発音が悪かったのだろうが、マイダンはどこでも通じた。
トイレも「ツアソ　ザイ　ナール?」で覚えていたら最近は「ツアソ」とは余り言わないらしい。何と言うかといえば「洗手間」《手洗》「シー　ショウ　ジェン」と言う。
これも実際の発音ではショウははっきり言わない方が通じる。
ついでに僕が感じた通じる中国語を2，3あげて見ましょう。実際の発音（ラジオやテレビで習った。）とは違います。
不知道（ブ　ジィ　ダオ）は仏（ブッ）堂（ドォ）つまり、（ブッ!　ドゥ）と発音した方が自然に聞こえるそうです。
「幾らですか?」一番良く使いますが、多と銭の間ははっきりことば（シャオ）などと言わないで、言葉が出ずにつまった、そんな感じがネイティブに近い感じにる。
こんな感じに言います。「ドゥ　ハ　チェン?」
係りの人（ホテルでもどこでも）を呼ぶ時よく使う次のコトバはこう言います。
服務員!!（フーゥ　ユエン!決してフー　ムーではない。
つまるところ、三文字漢字は真ん中は、詰まって発音するのが良いのかも知れい。
以上、僕の偏見による会話編であることをお忘れなく。

次は蘭州です。

中国ぶらり旅《休息休息一点々》

《ホテルの洗面所》

２００４・６・２５

ホテルの洗面所は、そのホテルに案内されたらまず最初に覗く場所である。ホテルの評価を、そこの洗面ブースで決めてしまう人が多い。

四ツ星や五ツ星に泊る日本人ツアー客の場合は浴槽があるのは当たり前だから、　その浴槽の形やシャワー設備の具合などで評価したりする。

ぼくの娘などは、洗面台に載っている洗面道具のバラエティさやドライヤーが付いているかどうかなどが、評価の対象であるようだ。

しかし，二ツ星や三ツ星に泊るぼくにとって浴槽などと、贅沢を言って入られない。

いきおい評価の対象はそのシャワー設備がいかようになっているかにかかる。

高級ホテルでシャワールームが浴槽と別に付いている所がある。

透明のガラスで仕切られていて、浴槽に入った後でもう一度そこで髪を洗う（シャワー室でなくても浴槽にもシャワーが付いているけど）あの高級シャワー室だけのホテルが一軒だけあった。

たいていのシャワー設備がビニールカーテンかプラスチックのドアである。

何にもないスッポンポンのタイル敷きにトイレと壁にシャワーがポツンと付いている所が結構多い。

それでも、充分なお湯量と温度があれば文句はいわない。この二つは入るときにならないと分らないので

「おっ！なかなかいい設備じゃないか。」

・・・と思っていてもしっぺ返しを食うことがある。

《紹興》のホテルはまさにその通りだった。四ッ星で、部屋は広く、外の眺めもよく洗面所もきれいだったけど、お湯を貯める段になってビックリした。お湯がでないのである。ホテルマンを呼んで来てもらったら　「こんなものです。ここは部屋の場所が設備から遠いので、申し訳ないが我慢して欲しい。」と言う。

「じゃあ、他の部屋に変わりたい。」と言うと、

「今日は満室で，どこも空いていません。」と答えた。５月２日、確かにその日はゴールデンウィークの二日目だった。こんなこともあるから安心できない。

《洛陽》のホテルの洗面室にはバスはないけどサウナ室があった。二日目に入ってみようと服務員に使い方を聞いたら、「知らない」と言う。　今まで、だれも入ったことがないそうなのだ、あきれたものだ。

トイレットペーパーはほとんどのところが節約サイズというか、ロールの大きさが日本の三分の一ぐらいである。家庭でも、そろそろ新しいのを準備しなくちゃ。と思うほどの量しかない。でも、合理的だと思う。

新しい合理サイズのトイレットペーパーが洗面台の上に置いてあるホテルは多い。

一度、用を足して、サテ、紙は何処かな?と思って，捜すけど見つからない。

なんと、便座の真後ろにあるではないですか?これにはビックリしました。

「いったい、どうやって紙をとるのか?」

片手では絶対紙を切れない事を初めて知りました。是非お試しあれ!、

貴陽の三ッ星はベッドサイドのライトが無かった。本を読んだりする人はいないのだろうか?モスク系のホテルだったので回教徒は寝る前は本は読まないのかもしれない。

ただ、ここのホテルの良いところは顔を洗う洗面台のすぐ横に飲料水の出る蛇口が付いていたことだ。この設備は中国の何処にもない優れものだった。

いつも、歯を磨いた後のうがいの時水を間違って飲まないよう気を使っていたけどこの設備だと安心して、水でうがいが出来る。

今回の旅で一番感じたことは、浴槽に浸かる。という、あのゆったりした時間を中国のひとびとは、知らないままで一生を終えるのか、ということでした。

反面、誰が入った分らない、ホテルの浴槽に、不潔で、病気がうつりそうで気持ちが悪いから入りたくない。という中国人の友人の言葉も少し分るような気もしました。

蘭州へ

「ぶらり旅」で利用した寝台列車は6回ほどあったと思う。　蘭州へ行く時は下段ベッドだった。下段は頭のそばにテーブルがあってその下にはポットが置いてり、皆が利用するので中段や上段のように早くから横になることが出来ないから嫌いだった。　案の定、一組の夫婦が遅くから食事を始めた。何か、とても匂いの強い（あまり好きでない）おかずを食べている。

食後は奥さんの方は上段にさっさと上がったけど、男の方は友達が替わりにやって来て二人でビールを飲み始めた。

ぼくの頭が来るであろう位置に男のお尻がきてる。　とても嫌な感じである。下段ベッドの嫌いな典型的ケースである。

そういえば、書かなかったように思うが、旅のはじまりである長沙から鄭州行きの寝台は中段だった。

上段とばかり思い込んでいた。鄭州の日本人女子留学生からの長い電話の後だった思う。

夜中にトイレに立って帰ってきた。車内は真っ暗だった。ぼくは上段とばかり思い込んでいたので、目ぼしい位地で上段に上がろうと手をやったら人の足に手が当たった。（一瞬、ビクッとした。）

列を間違えたと思い次のベッドに行くとそのベッドは見ただけで膨らんでいた。今度は一つ手前の列の上段を下からそっとふとんを開けてみたら、又足があった。

目ぼしい場所を4回ぐらい往復したが全部人が寝ている。　パニック状態になった。初めの場所に戻ってくると中段（そこはぼくの向かいになるベッド）の男が大声でわめいている、おそらく　「お前のベッドはここじゃないか！何を寝ぼけているんだ！」

とでも言ってるのだろう。そのうち、車掌までやって来て「切符を見せろ」と言う。中国の寝台列車は何故か?汽車に乗ってから切符と金属のチップ（犬の首につける検札片のようなもの）に変えて、汽車がつく頃元の切符と交換する。目の前に自分の寝ていた中段ベッドが主を待って空いているではないか。あたまを掻き掻き、「スミマセン、ネボケテマシタ」を連発して事なきを得た。　ひとつ間違うと、とんでもない大事件になりかねないところだった。《鳳凰》へ行く時に乗った硬寝台車は素晴らしかった。二階建て寝台で、下段に上下二段ベッドがあり、上段に同じく二段ある。幅もひろくて何もかもが新しい。それに較べこの列車のひどさはどうだろう。相客との会話の夢も消え、ＩＣレコーダーでのシャケンや小燕や学院の生徒たちとの会話復習に励むことにした。

蘭州の駅には早朝の6時過ぎに着いた。　小燕から「蘭州の案内は女性ですヨ。タノシミネ。」と言われていたのでチョット愉しみにしていた。

でもぼくを迎えてくれたのは小太り（遠慮して言って）の女性、でも、ニコニコとても愛想がよさそう。力もありそう。ガイドはどこでも親切で、よく気がつく、おまけに力持ち、中国語でダオヨゥとよぶ。漢字は**尋游**と書く。ダオの字は簡体字である。　案内してくれるクルマは黒のアウディの乗用車だ。運転手も女性でダオヨウに負けないくらいの体格をしている。

二人とも３０代半ばといった感じである。もうひとつ、二人に共通した特徴はとても髪が短いことだ。もう、ベリーショートなのである。運転手の方は後ろから（前からも大差ないが）みるとほぼ男性化している。気分も、二人の会話も、聞いてると男っぽい。イエイエ、決して嫌な印象は受けない。むしろ、その逆と言っていい。夕方には西寧に向かう（火車で）ので蘭州のコースは忙しい。ぼくは蘭州での観光についてもお恥ずかしいが知っていなかった。本当にどうしたことなんだろう。

旅程表も貰っているし、分厚い「地球の歩き方・中国」も持っているのに。あまり旅の連続で観光地めぐりの意識がなくなったのか、でも、ただひとつのキーワード、黄河をまたぐ第一番目の橋がここにある。　その橋の上から黄河を眺めてみたい。それと、もし、実現するなら、何らかの方法で河の上を舟で流れてみたい。ということだけだった。結論から言うと、すべて、実現した。

　ただ、有名な第一橋だけは今、補修工事中で渡れなかった。なにやら、橋の高さを変えるのらしい、８月には完成するとのことだった。最初に向かったのは「**白塔寺**」で、ここも、予定の上り口が工事中とかで、くねくねした裏の山道を、分かれ道になると、誰かに訊きながら頂上に着いた。
また、二人に案内されながらいくつかの寺を覗きながら降りた。
イスラムの寺もあり、この山も霊山なんだろう。蘭州の市民の憩いの山だと言っていた。ながい歴史のある山寺というのはよく分った。
人の早口の中国語の解説はよく分らなかったけど、分った振りの演技は前よりさらに上達していった。山を下がりながらお寺を訪ねるというのはとても快適だった。
蘭州の街は川沿いに沿って綺麗な道路が一直線に続いている。次に向かったのは黄河の河川敷きに降りて、魚かエビを捕っているところを見学に行った。
これは多分、観光のコースではなかったのだろう。橋を渡ってぼくらはUターンした。なにやら水車が見えるところに来た。コース表に+++水車と書いてあったので予定のコースなのだろう。
河近くにモーターボートやゴムボートみたいなのがあった。たぶん、黄河で遊ぶ船に違いない。すると、ダオヨゥが　「イカダ　ニ　ノッテ　ミナイカ?」と，言った。よく見ると黄色い皮袋がたくさん板に付いている。何時かどこかのテレビでこの皮袋（一匹の羊を殺して、腹の中を空っぽにして、中に空気を入れて紐で結んでしまうのを見たことがある。よし、これに乗ろう。と決心した。鄭州で黄河の河川敷をゴムの水中翼船で走るよりはるかに愉しい体験だった。

５０元で一生の思い出を作ることが出来た。
ＤＶムービーをまわしながらの**イカダ乗り**だったのでバランスに苦労したけど後で見てみるとなかなか良く写っていたので嬉しかった。やはり女性はいい。何の話だと思いますか?
　ガイドの話です。もちろん、ミャオティャオなピャオレンは鑑賞としての心身の後のほうの脳神経を刺激してくれますが、それなり女性は前の方の神経に心地よく反応してくれます。
　蘭州の二人のサポーターはその意味ではとても心地よい同伴者でした。
よくしゃべりまくり、よく笑い（かなりの豪傑笑い）、よく、クルマから外とケンカ（に中国では聞こえる）をする。
　二人して（とても仲の良い友人同士らしい）漫才をしてるようで、僕を巻き込んでしまう。
　コトバはまさに方言も混じっているので昨日のジャオよりまだ理解できないのになんとなく身体で分るから不思議。
　２人とも主婦でこどもがいるらしい。
　運転席と助手席で交互に僕に向かって孫娘の話を聞きたがる。２人とも小学校の高学年らしい。
　全寮制だという。そして、子供に対する期待感?思い入れ?そんなものは中国人の親たちはかなりのものである。
　子供に対する考え方、というより中国人の家庭・家族観はいろいろ考えさせられる事が多い。家族の絆の強さを感じる。
　親は子供に対して教育の為には金を惜しまない。しかし、貧乏でその惜しみたくない金がない家庭が多い。
　親の気持ちがよく分る子供たちは、自分は大きくなったら絶対お金持ちになって

今度は親を幸にしたいと考える。
僕の教えた日語学校の生徒たちの《将来の夢》という作文に、ほとんどの生徒が「大きくなったらお金持ちになりたい」と書いている。
そういうパワーが今の中国の発展の原動力になっているのかも知れない。
デモ、書いている生徒の多くが「・・・・と思っていましたが、今は少し違います。お金より大事なものは何か？
お金持ちの悪行？に対する批判的な考え方も書かれていたのを思い出す。
ところで、蘭州での一日ツアーは左の写真が時間の経緯と同じにしてあります。
（静止画を除く）
お昼は何を食べたいか？と聞かれたので、羊の専門料理でも食べたいですネ。と答えると、「ヨシヨシ、お任せ下さい」と言い、又３０分ぐらい車を郊外に、と言っても黄河沿いに走らせて左写真の店に連れて行ってくれた。まだ時間があるといって、ガイドさんは蘭州一のデパートを案内する,と言い連れて行ってくれたが余り見たくもないので、それでも３階ぐらいまでは興味ありそうな顔をして眺めまわしたけどその上についてはお断りしてデパートを出た。
・・・・・３：００
蘭州の待合室から改札が始まった。
電光板もなく、ただ中国語による構内放送だけである。もっとも
聞いてる乗客たちの動きでほとんどは判るのだけど言葉の理解はむづかしい。司机の劉さんが一緒にホームまでぼくの荷をひっぱってくれた。
切符に**０２下５号**と書かれていた**下**とはなんだろうと思っていたら、何とその火車は二階建て列車だったのだ。
結局、彼女はぼくを列車の中まで荷を持って付いてきてくれ、なんと！横に座ったカップルの中国人に
「他去西寧、他是日本人、到時候　ヨロシクネ」

とお願いまでしてくれた。
そして、ホームに降りて汽車が動き出すまで見送ってくれた。
今回の旅は司机やガイドに恵まれたけど車中の相客とはあまりコミニュケーションがなかったのが残念だった。
よく、旅の体験談で聞く
《中国人は好奇心にあふれた人種だから、何でも聞いてくる》
と聞いていたけど、だんだんそれも**昔は**・・・と言うことになるのかもしれない。
司机から、ぼくの事を頼まれたカップルも、列車が西寧に着いたら僕に目で合図をしてくれたし、ホームに降りてからも、改札口に行くまで目を配ってくれた。
もしかしたら、ぼくがだまっていたから向こうも話しかけてこなかったのかも知れない。

西寧市

２００４年５月２１、２２、２３日

５月２１日夕　西寧に着いたのは夕方である。西寧の駅には若い袁クンが迎えに来ていた。
ホテルへ案内すると言う。タクシーで５分もかからないというから歩いてもそこという距離のようである。
ということは、その町の繁華街はけっこう遠いということか？
訊いて見たら、たいして遠くないという。
もし、貴方が時間があったら、ぼくを街の屋台に連れて行ってくれないか？と聞くと。
「アァ、いいですよ。（もちろん中国語）」と、ニコニコ顔で答えが返ってきた。
西寧の屋台村は愉しかった。すごい活気で、貴陽の屋台もすごかったけど、地方

都市（省都）の屋台はとても愉しい。まず安いのが一番、そして、果物が豊富である。

5月22日

朝、7時に青海湖行一日ツアーのガイドが迎えに来た。

１５人乗りのおんぼろマイクロである。もうこの手の乗物には慣れてしまった。

天気は曇り、こちらに来てても、曇りそらは頭が重い。

青海湖は海抜３０００ｍ越える高地にあるという。

黄龍を思い出す。

いま、バスに、６人乗っている。例によって、あちこちにいる今日の青海湖行の参加者と携帯で連絡をとりながら拾って行く。

全部の参加者が乗り終わるまでに約1時間ほどかかるのはだいたい分ってきた。

この段階ではツアー参加者はお互いにほとんど、会話が無い。

これが、帰りの頃はバスをそれぞれが降りるたびにまるで親戚か旧知の仲間のように、にこにこと、大きな声で、時には冗談を交わしながら、名残惜しそうに一期一会が終わる。

中国一日旅行のたのしみな1つでもある。

さて、僕は今日はいかような手で皆と接しようか？

今までの鄭州、洛陽、蘭州は僕一人に案内人という旅だったけど、見知らぬ中国人のなかに自分一人という一日旅行は経験がない。

ゴールデンウイークは思いがけず李黎とのふたり旅になったし、

衡山の時の一日旅も、九寨溝や峨眉山のときも小燕と一緒だったので他の乗客とのコミニュケーションは心配なかった。

まあどうにかなるだろう。こういう機会を自ら求めていたのだから・・・と開き直っていた。

ところで、**今から行く青海湖とはどんなところなのだろう。**

ウルムチの小馬から薦められるまでは場所も知らなかった。

後で調べた情報では中国最大の塩水湖で日本の琵琶湖の6倍という。

ある旅行社の分類では《秘境の地》となっている。

青海湖には今の時期（5月）が一年中でいちばん見ごたえのある季節なんだそうで、おびただしい数の渡り鳥が空を真っ暗に覆うんだそうである。

ぼくはヒッチコックの名画《鳥》を想像している。

小燕は「おみやげは青海湖で買ってきてね。」と言った。

ただ、気になるのは九寨溝で一緒だった広州の李さんは

「中国はほとんど行くたけれどいちばん面白くなかったところは青海湖だった。あそこだけは行きなさんな。」

と言っていた。

8時20分すぎ、バスはまだおそらく最後の参加者を捜して、あちこち路地を走り回る。参加者も、もっと広くて、わかりやすい所まで出てきてたらいのに、日本ならそうするだろう。

ヤット、最後のメンバーか、男女ふたりに小さい子供組を拾うとバスは満席１５人になった。

やがて、若い女性のガイドの案内が始まった。

１０時前、周りの風景が一変した。

「大草原」・・・・・・という言葉を生まれて初めて実感した。

あとで旅行雑誌をみると《湖東牧場》と名前まで載っているところだった。

湖は頭に浮かんでいたけど、その周囲はこのようになっているということは想像

だにしていなかった。
　だれも教えてくれなかったし、本も読んでいなかったから、この延々と続く大自然のサファリパークには感動した。
　むかし、中学校の社会の教科書で読んだことのあるサバンナとかプレーリーとかいうコトバが蘇ってきた。
　延々と続くフェアウェイ、なだらかな起伏、砂漠の形のまま草が生えている感じというか？
　ひとかたまりに現れる羊の群れ、そしてヤクの群れ、ときどきは馬のむれ、そして、フエアウエーが突然ラフに変わっていく
と車道の脇3メートルぐらいのところに両側、金網が張ってあって羊たちが車道に出てこれないようにしてある。
かれこれ1時間も走っただろうか、今まで蜃気楼のように水平線に見えていた山かげは、全く見えなくなっていた。
　草原と羊、牛、たちの景色がこんなに飽きの来ない眺めだとは思いもしなかった。
　この草原にドライバーとアイアンを二本、それでゴルフボールを打ちながら果てなく進んでいったらいったい「どうなる？」と
考えたり、それはもう、いろいろなことを想像した。
　一番後ろに座ってよかった。というのが、羊の集団というか、羊たちもグループがあるらしく、そのグループのリーダーがまず、車が行き過ぎるのを待っている、
　そして、次のバスが来ないのを確かめてからそろそろと、車道を渡り始めると、あとに集団が続くのである。
　果てしなく続く直線のハイウェイをバスのうしろの窓から眺めていると動く白線が次々と連なっている。「急げ、急げ！」とせかしたくなる光景が今でも眼に浮かんでくる。
（なんどもシャッターを切ったけど残念、よくわからない。）

隣に座っている婦人が「へんな日本人」と、思ったことだろう。
横を撮ったり、うしろを撮ったり、デジカメで撮ったり、ムービーカメラで撮影したり、一時もじっとしてない。
　ちなみに、たいていの乗客（全部、中国人）は眠っているようだった。
　0時頃バスが青海湖に着いた、バスを降りていまからカートに乗って鳥島に向かう。そのカートの乗り場が混んでいる。
　きれいに並べばいいものを皆が団子状態になっているからせめぎあいが続いていて、僕はグループの前の方に並んでいたのだがアッというまに結局、ビリになっていた。
　中国人はすごいパワーである。特に並びの時はすごい。
　想像していたほどには《鳥島》の鳥は迫力はなかった。
　空を覆うなんて光景は皆無、ほとんど沼か砂地のうえで餌をついばんでいる光景だった。
　数は多かったけど、これほどの人が集まるのだから
「やはり中国」なのだろうか？出水の鶴だって、此処に負けない見栄えがする。
　ぼくは知り合った中国人やガイドに出水のツルのことを言いたくてしょうがなかったけどとても残念なことにツルという中国語がどうしても浮かんでこなかった。
　それはそうと、実は朝からぼくは何も食べていないのに気付いた。今2時すぎだから、何か食べたい。
　今朝、予定では7時半にバスが迎えに来る事になっていた。

だから、7時にホテルで朝食をとって、そのままジンを待とうと思っていたら7時にツアーのガイドからの電話が入ったのだ。
昨夜、劉くんと屋台のはしごをした。3軒の屋台を食べ歩き、最後の店でエビの蒸し焼きを30匹近く食べた。
ちなみにイザル70匹ぐらいで20元ぐらいと安い。もう食べ過ぎて、それなのに、帰りにゆでジャガイモ（朝、捨てた）まで買ったのだ。
とても朝食をホテルで食べる雰囲気ではなかったのが災いした。
「先生はちゃんと朝ごはんは食べなきゃダメデスョ。」と旅発つ前にぼくに念を押した小燕子の声が聞こえそうだ。
先日の夜行のときと同じだ。スニッカーが眼にちらつく、あのチョット固めのスニッカーを食べたい。

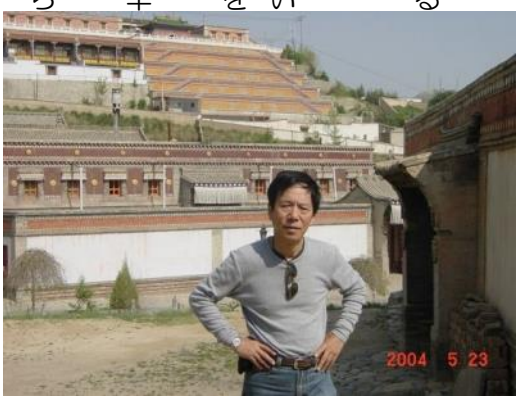
5：00

ヤット車が休憩所らしきところに停車した。目の前には青海湖が広がっている。
最初はトイレ休憩かと思っていた。
青海湖郷土料理の夕食だそうである。
このあとの一日旅でも、よくあったけど、帰りに6時ごろ、途中下車して夕食を皆で食べるのが定番らしい。無論、この場合は支払いはそれぞれだから、食べようが食べまいが自由である。
今日はひとり30元ということだ。もう、値段も料理内容もなんでも良かった。
出てきたメニューは、青海湖の黄魚だった。
スープから始まって、から揚げ風、甘酢あんかけ風、油揚げ風と4品の黄魚料理が続いてくる。まずいご飯にマントー2種が主食である。
次に野菜炒めが4品ほど続いた。塩味がついてて旨い。まだあと2品あるらしいがもうお腹が一杯だ。あんなにぺこぺこだったのに食べ始めたらもう入らない。

中国人とは胃の大きさが違うのかもしれない。それにしても皆は良く食べる。ちょうど側にみやげ物売場があったので頼まれていた小燕へのアクセサリーでも捜そうと思った。

6：30

バスは西寧に向けて走っている。
あの感動の大草原を今度は反対側の窓から見ることにした。
羊たちを見ているとあることに気付いた。
何千匹、何万匹だろうか?かれらは何をしているかといえば皆草をたべている。もしくは、鼻を地面につけて歩いているか、のどちらかである。
ポカンと上を向いている羊は一匹もいない。羊だけではない、ヤクも馬も同じ姿勢である。
青海湖の高速ゲートを過ぎる時、時計を見たら午後7時を指していた。
完全に日が沈むまであと50分はかかる。
今日も好きな日の出と日の入りを眺めながら一日が過ぎようとしている。
チベットのラサへ向かう陸路の玄関口という。チベット族や回族など多くの民族が行き交う街である。昨夜、
ガイドの袁クンと屋台を回ったけど、本当に多くの民族が混じりあっているのを実感した。
もっとも、ぼくもハンゴレン（朝鮮人）に間違われたけど、日本語と韓国語の違いなど判るはずがないのだから、顔だって同じに見えるのだろう。
ダライラマ14世もこの近くの出身だという**タール寺**は西寧を南へ26km行ったところにある。
チベット仏教黄帽派の六大寺院の一つで、14世紀に生まれた黄帽派の創始者、ツオンカパ生誕の地として信者の敬意を集めている。敷地内には大金瓦堂、八宝如意塔、バター彫刻の立ち並ぶ回廊などがある。
とくにバター彫刻の仏像にはびっくりした。袁クンの説明で分かったのだが、堂内



にある仏像群は、すべてガラスのケースに収められている。

バターが外の熱（気温）で溶けないようにと、サーモスタットで管理しているのだそうだ。

「電気ガ故障したらミナ　トケテシマイマス。」

ぼくは何処に装置があるのか、と、ケースの隅々を捜したけれどとうとう見つけることは出来なかった。

仏像が解けた時の様子を想像してみたりとても興味深いところだった。

供えの場所には必ず小さなボール状の黄油（ホワンユ）バターのこと：があったけど、彼の説明を理解する事は出来なかった。

タール寺はとても興味深いお寺だった。他の中国寺（道教、禅寺も含めて）と一番違ってたのは仏僧たちの存在である。

とにかくその数が多いのである。いたるところ僧たちがいる。考えてみるとお寺に僧がいるのは当たり前なのかも知れない。

他の寺（日本の寺もそうなのだが）で修行僧をあまり見ないのは観光客の目の届かない場所が寺のなかに別にあるのだろうか。そういえば、寺内のそこここに、《請不進入旅遊客》と書いた立看板を見たことがある。

興味深いシーンが多いので記録して皆に紹介できればと思い、

「写真を撮ってもいいのかナ?」

とガイドの袁クンに尋ねたら、あまりハッキリした返事を貰えなかったので遠慮した。

昨夜は小燕子から珍しく長い手机（携帯）メールが届いた。

彼女からのメールはふだんはローマ字での日本文で交信することにしている。ほとんど用件だけの短文である。

多分、察するに、今日で彼女が僕のために作ってくれた旅行日程が終わったので、その意味もあってのメールなのだろう。

午後には西安に向けて飛び立つことになっている。

西安での４日間は知り合いの陳さんご夫妻との再会や一日か二日、念願だった《華山》の旅遊などは当地に行ってからの情況次第と思って、長沙への帰り日も未定にしていた。

・・・・・・小燕からのメールの一部です。

今度の旅行はどうですか?私家にいた、ズット雨でした。なんにもできなかった、

貴方を思う時、心の痛みを感じられ：貴方を見る時、幸せだと思い：貴方と知り合うのは、縁であり：無消息の時、寂しい気がする。

片思小燕子。

ぼくにとってタール寺での体験はとても思い出深いものだった。

帰りに立ち寄ったチベットグッズも今までの他の寺院などにあるみやげ物とは違い、買い気をそそるものが多くあり、しかも安いのでまとめ買いをしてしまった。骨董品はほとんど偽物に違いないと思い控えたけど。

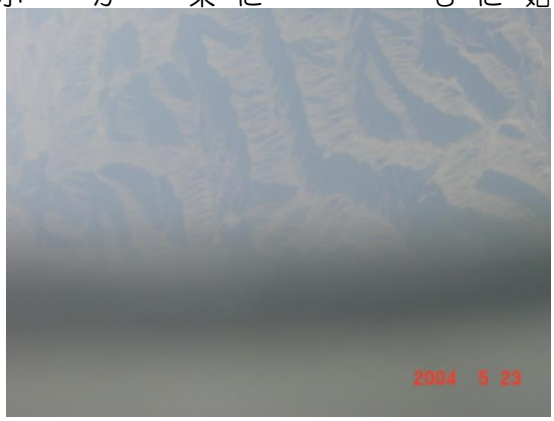
でも、ここで購入したほとんどのグッズは、お別れ教室のとき、我が愛する生徒たちに配ってしまった。

ところで、西寧では、タール寺のあと、山肌にくっついたような、きつい階段を上がり、**道教の寺院・北禅寺**に行った。あまりのきつさにぼくは、

「もうお寺は結構です。」と言って、これから上は工事中だから策道（ロープウェイ）で行きますか?との袁クンの問いをさえぎり、山を下りた。　彼の話によると、このあと空港に行く前に，もう一ヶ所寺院に立ち寄

る事になっている。と言う。
「よしてくれぇ!」と言いたい。小燕は自分がお寺好きなせいか、
ぼくの旅程に、いくつ寺参りを入れたのだろうか?
「先生、だいじょうぶ、今度行く寺、ゼンゼン　キックアリマセン」
と袁クンが言う。
清真寺は明代の創建で、緑と黄色のあざやかなイスラム寺院である。中庭では白い帽子を被った信者たちが、そこ、ここの椅子に腰掛けて熱心に教典を勉強していた。
大きな中庭のセンターに一本の線（幅１ｍぐらい）が引いてあり歩行路と書いてあった。
何も、わざわざこのひろい庭の中の細い線の上を歩く事も無かろうに、と思いながら本堂に行った。立ち入り禁止と書いてあり、覗いただけで来た道を引き返してきた。
結局、大したこともなく空港まで行く時間を引いても、まだ時間が余る。暑いので、入り口付近の石の上に座って時間つぶしをすることにした。
袁クンが言った。
「この寺院は毎週金曜日がお祈りの日なんです。祈りの時間が近づくと、５０００人以上の信者さんが集まり、お祈りします。」
と、それで「歩行路」の意味が分かった。歩行路以外の場所は信者が座る場所だったのである。
実はここで、余り知らせたくないことを書かねばならない。
いろいろ考えたのだが、旅の心得のひとつとして・・・・・・。
ここの石段で休憩している時の事です。
ガイドの袁クンに運転手がなにやら難しそうな話をしている。
しばらく、ふたりで話をしたあと、袁クンがおもむろにぼくに話してきた。
「先生、実は今日のごガイド料を１００元、これから空港まで送っていく車代として１００元，計２００元もらえないか?」　と言うのである。
実は彼との話の中で、ぼくが
「空港まではタクシーで時間と料金は幾らぐらいか?」
と、聞いたら、タクシーなら１００元ぐらいです。との会話を思い出した。同じ料金なら、彼等の送って貰ってもいいか?
しかし待てよ。《いままで、ガイド料は払ったことないゾ、》
連中、悪巧みをしているな、と思ったのでぼくはこう答えた。
「そう、でも、今までガイド料は払った事はないよ。ツアー費に入っているのじゃないのですか?」
「会社からそうは聞いていない」と彼は言う。
・・・本格的な中国語のやりとりが続く、今までは分かろうが分かるまいが、「**対了**。」分かりました。「**明白了**」了解しました。と答えて、済ませてきたが今度はそうはいかない。
考えてみれば袁クンには昨夜も3時間ぐらい僕に屋台を案内してくれ、世話になっているし、日本円にして1，５００円ぐらいの付合料は払ってもいいかな、という気がしたのも事実だが、
「そうですか、言うとおり払いましょう。でも、帰ってから長沙市の旅行社に報告したいので今から貴方の旅行社に寄って《受け取り領収書》を書いて**印**を押してくれ」と袁くんに言った。
二人のまた長いヒソヒソ話が続いた。袁クンが口を開いた。
「ガイド料は要らない」送り代だけでいいと言う。
解ればいいことで、ぼくは金が惜しいのではなく、騙す行為を許せないだけのこと、袁クンに言った。
「先ほど渡した２００元は返さなくていいよ、１００元は君へのぼくからの小意思（シャオイース）だ。」
二人はまた、こそこそ話をはじめたが結論が出たのか、
「先生、申しわけないが、１００元あげるのは先生の零銭（リンチェン）つまり、チップだという意味のことを紙に書いてくれないか」

と言う。なかなかしたたかな感じである。
ハハーン、この運転手が首謀格なんだ、と思った。
とりあえず１００元は返してももらい時間も来たので空港へ向かった。ぼくは後部座席から、この顛末を小燕に電話した。
「ウェイ!二ハオ、小燕！
昨天晩上我収到信・・・謝謝、号外、我現在座車・・・・・・・・
実は、ここ西寧の導遊ガイドがこう言っているが・・・・」
「アンタ　イクラ　ハラタ?払ワナクテイイヨ　アタシ　ソチノ
リヨコウシャ　デワスル。」　　と言って切った。
ほどなく運転手の携帯が鳴った。運転手から携帯がガイドの袁クンに渡され、結構、長い会話が交わされていた。ぼくにはもう大体のいきさつが解っていた。
小燕から西寧国際旅行に抗議が入ったのだろう。
やがて、車が停車した。そして、袁クンが言った。
「会社が空港までの送料は貰わなくていいと言ってるので１００元は先生に返します。あとの１００元は領収がなければ受け取れません。」と言う。よほど、きつく会社に叱られたのだろう。
可哀相に思った。でも、これでよかったのだ。騙しが成功したら彼らは又同じことを繰り返すに違いないから。いや、性懲りも無くつづけるかもしれないけど。
ぼくは名刺の裏に、しっかりと、袁クン宛で１００元は少ないでしょうが君の配慮に対しての、ぼくの気持ちです。と記した。
楽しい旅をありがとう。　　大石・・・・・・・・・・と。
袁クンはニッコリ笑ってその名刺をポケットに収めた。
空港で西安行きの飛行機を待っている時小燕からのメールが入った。
anata okane dosita kaesite morataka watasi si
npai siteruyo
６：１０発の西安行きＨＵ２０７機は、何と１５分も早く西寧空港を飛び立った。
乗客名簿を確かめての離陸なのだろうが遅れて飛び立つた経験はあったけど定刻より早くの出発（チューハー）は初めての体験だったので驚いた。
機内から見る外の景色は山また山の連続、まるで恐竜の背中が連なったようである。
背中と背中との間に溝があり、その溝の幅の広いところに、良く見ると土で盛ったような民家が見える。色が同じなので幾何学的な人造物を見逃すとわからない程である。いかにも原始的な建物に見えるが、これで案外、住んでいる人にとっては夏、涼しく、冬は暖かい快適住居なのかもしれない。
もう離陸して３０分も経とうとしているのに、延々と連なる恐竜の背中は続く。機内の窓が二重になっているので、その美しい背中を撮ることが出来ないのが残念である。
昨日の、あの広大な湖畔の大草原が見えないのが残念だがこれはこれで ヘンピャオリァンである。
シャオチーが配られた。機内は一列３人掛けの小型機である。
ぼくの好物である大根の漬物が入っていた。この前は、いとも簡単に開けられた袋が今日はどうやっても切り口が見えない。メガネを取り出して探すがダメだった。勿体ないのでそっとバッグに入れた。
昨日、ツアーで出た青海湖の黄魚にはまいった。小骨の多さと肉の柔らかさは海魚を食べるぼくらには苦手である。そんなとき、こんな漬物があると助かるのである。
一時間少しで**西安咸陽空港**に着いた。
久し振りの西安である。西安といえば、友人の松間和尚の顔がすぐ浮かんでくる。始めて中国に来たとき北京の次に訪れた西安、そして、敦煌、ウルムチへの行き帰りに立寄った西安、いつも松間氏と一緒だった。
鹿児島に来ている陳兄弟のご両親にもお世話になったのはもう４年も前になる。そんな思いが空港に着いたら浮かんで来た。
もうひとり旅も大分慣れてきた。空港バスへの乗り方も手馴れたものである。ホテルはの位置は大体分っていたので服務員に東門の近いところか、鐘楼近辺で降ろし



てもらうよう告げる。
●　ホテルに着いたら久し振りの西安の街で夕食に出かけること。
陳夫妻に到着を知らせること。●そのとき、明日の都合を聞くこと。
●華山一日遊の方法をホテルか陳夫妻に聞くこと。●帰りの長沙行の航空券の予約はどうするか?など、いろいろと済まさなければならない事がいっぱいある。ぼくはバスの中でノートにメモをとるのが忙しかった。
　ぼくのことを心配している華天の小燕にも無事西安に着いたことをメールで知らさなければならない。彼女は、自分の建てたプログラムの上をぼくがなぞっているのを観察しているのかも知れない。
　我が子のひとり旅を見守る母親の気持ちに似た感情が芽生えたのかも知れない。この前のメールはそんな感じに読めた。
　月末の鳳凰行きは、ちょうど週末で勤務（工作）ゴンゾーがないのだと言う。
「ヨシチャン、一緒ニイコカ（一起去?）ワタシ　ホンファンは　イタコトナイノイキタイナ」と言っていた。
　結局、シァトルバスは鐘楼の西側の角の?ホテル前で降りた。
「空港行のバスの始発もここです。行かれる先の予約をされませんか?」
　と添乗の服務員が親切そうに言うので、ここで済ませた方がいいかな、早く、ひとつでも解決しておこうと、まあ、いわば渡りに船と言った感じで手続きを済ますことにした。
　頼みついでに、携帯電話のチップの売場を聞いたところ、明日朝に連れて行ってくれる。と言う。
えらく優しい小姐だった。まぁ、営業からみの親切だとは思うけど。
手机（携帯のこと）の調子が昨日から変なのだ。突然、不通になる。
電波が届かない筈がない市街地なのに、といって電池は今朝充電したばかりだし、あとは銭切れかナ・・・・と思う。
　ホテルはここから東大路を東に向かい、解放路の一つ手前の尚徳路を左折して・・・とその辺まではタクシーに告げられるけど、あとは運転手がホテルを知ってるかどうか?である。
案の定、尚徳路に入ってからホテルが見つからない。

　目指すホテルはなんと細い筋を入ったところにあった。
ホテルの前はバスが5，6台、タクシーなら二桁は駐車出来るスペースがあるのだけど、そこへ行く道路が信じられないほどの細道なのである。こんなホテルも又、初めてだった。
ホテルに着いた時はもうかなりの時間だった。晩御飯はどうしょう?
　感じのいい服務員（ホテル小姐たち）だったので安心した。
いつもフロントでの彼女たちのぶっきらぼうというか無表情の応対に頭にくることが多い。
案内された部屋は思いのほか綺麗で広かった。
　早速、陳さんに電話を掛けるが、なかなか通じない。フロントに電話すると番号の回し方が西安は違うらしい。
　電話でなかなか意思が通じ合わない。仕方が無いので諦めて電話を切った。すると、しばらくするとドアがノックされた。
　開けると服務員がニコニコ笑顔で立っている。
「我教ニ打電話的方法・・・（かけ方を教えに来ました。）」と言う。
「アナタ　ニホンジン　ワタシ　ニホンニ　イツカ　イキタイ
　ニホンノ　ハナシ　キキタイ　デス。」彼女は電話のかけ方を教えてくれた後でぼくに告げた。〈この間は中国語でのやりとりです）

「いいですよ、何でも訊いてください。」
　1時間後、二人で西安の街に食事に出かけた。仕事（フロント）の方は大丈夫なのだろうか?
　鐘楼近くの餐館で軽い夕食をとりながら彼女との思いがけない愉しいひと時を持てた。

小燕に怒られそうなので名前は書かない。でも、西安の街は何故か、たのしいアクシデントに見舞われる街である。

２４日朝：

陳ご夫妻と４年ぶりの再会である。

あの時は電話をする時も一方的に三つぐらいの文章を紙に書いた喋るだけだった。それでも、胸がどきどきして中国語にならなかったのを思い出す。それから較べたら今は少しはましかナ、と思う。

１０時ごろ、あの頃と変わらないお二人の姿が現れた。

場所も同じホテルのロビーである。あまけに手に何かビニール袋をぶら下げているのも４年前と同じだった。

「お久し振りです。４年ぶりですね!お変わりありませんネ。今回はまたお世話になります。」

ぼくは、準備していた中国語を今度は、きっとうまく通じているだろう、と　確信をもって話した。

そして、長沙市長に差上げるつもりで買ってきていたモンブランの万年筆を陳さんに手渡した。

その日、一日の行程は

●携帯電話の店にお金を２００元入れる。

●中国銀行に行って１０００元引き出す。

●昨日予約した航空券を購入にいく。

●明日の華山行の一日遊の申込みをする。

・・・・・以上陳氏にお手伝いしてもらうことでした。

午前中に用件を済ませた後、陳夫妻はぼくを餐館に案内してくれた。

・美味しい!久しぶりに美味しい料理を食べた。

満洲料理店だった。

メニュー（菜単）は

○　糖酢鯉魚（松鼠魚）

○　玉彩拉皮

○　玉米餅

○　豆腐花

○　菊花里背

○　大学芋

西安二日目の夜（24日）

夜は**大雁塔**（**ダーエンター**）の北側の門，慈恩寺の前の公園に巨大?とまではいかないけど、とてもすばらしい公園が出来上がった。

陳氏の話によると昨年の１０月に完成したばかり、と言う。

慈恩寺は、いうまでもなく有名な高僧、玄奘（６０２~６６４）がインドから戻った後で寺の管理にあたった。そして、彼が持ち帰った大量の経典や仏像を納めるために**大雁塔**（**ダーエンター**を建設したものである。

現在、反対側の南門の方の大拡張工事が始まっている。

この門の前にある玄奘和尚の銅像の前では多くの観光客の記念撮影が絶えない。

夜、８時

ほとんど暗くなった公園の水辺には数百人の市民や観光客が噴泉の上がるのを待っている。

突然、水中が七色に変わったかと思うと音楽が鳴り始めた。

交響曲（クラシック）だったのにはびっくりした。てっきり中国の音楽と思っていたから。ラスベガスのベラージォホテルの前の踊る大噴水を思い出した。

一緒に観ている陳氏にそのときの感動を語ろうと思ったがとても中国語への翻訳が難しそうだったので断念した。

いつの日か、身振り手振りを混ぜて、自由に中国語を操れる日がくればいいなぁ、と思うことだった。

ここの噴泉公園は正式名称は**曲江**というのらしい。

幅が８０ｍぐらいで長さは３００ｍぐらいはありそうである。
周囲はそこここに中国の歴史上の有名人（杜甫、李白といった詩人から他の文化人の銅像を中心にミニ庭園を囲ってある。）場所が１０ヶ所ぐらいある。
若者たちがその中の入って写真を撮っていたが、係りの人に注意されていた。
噴泉のプールは下に向かって 30 度ほどの勾配になっていて下からは噴泉が上がっていくように見える。
上からは下がっていくように見えるのだろう。だから、どの位置に立って見るのがいいのか？
陳氏が掛かりの服務員に尋ねた。
すると、そばにいた人たちも話しに加わってきて「そりゃ、下から観るのが最高よ！」別な子連れの親子が「私達は真ん中付近で観ることにしてるの、だって左右にめが配られるから・・・・。」
誰だったかが言った。
「一番いいのは、まず、一番上にいて、それからゆっくり下に歩いてきたらどうだろう？」
「そうそう、それが最高かも。」ということになった。
ぼくたち３人はかくして、最上段に向かって、すこし小雨が降り出した石段を急いだ。
噴泉池は５段になっていて平面池の隣同士は数段の階段になっていた。

背景の大雁塔は幻想的にライトアップされ左右から二本のレーザーが走るさまは噴泉開始の数分前から、もうワクワクとした気分にさせてくれる。
北公園（曲江）の夜の大スペクタルショーは現在の中国の世界を視野に入れた観光事業のスケールの大きさを、まざまざと感じさせてくれるものだった。

西安４日目（26 日）

今夜の時半の海南航空機で長沙に戻る。
なんだか惜しい気がしないでもない。
でも明後日から小燕と鳳凰に行かねばならない。
あと出来れば一週間ぐらいカシュガルから,カラクリ湖を回ってクチャとか新疆ウイグル自治区を旅したかったのだけど小馬の時間がとれなかったことと、ちょっと経済的なことも頭によぎり断念した。
昨夜、小燕から久しぶりにプライベートな電話が掛かってきた。
旅行中、ほとんどは何かアクシデントがあった時しか直接電話では話しをしなかったのでベッドの中から話しをするのは久し振りだった。
話しの内容は要約すると「鳳凰は二日ツアーデス。ガイドが現地人で、アナタはコトバが多分通じないと思う。アタシが通訳しないとゼンゼン　オモシロク　アリマセーン。」とまあこんな話しだった。
さて、今日は独り行動である。西安市内で是非行ってみたいところがあった。
いわゆる、**西門**と西大路にあるイスラム人居住地そして**清真大寺**である。
朝八時，少し身体がきつかったけど東大街の中ほどから西門まで歩いてみることにした。
結局、一時間ほどかかって鐘楼まで来た。
かなりばててきたのでタクシーを拾おうと思ったけど、此処から先こそ歩いた事がないところだった。好奇心が疲労に勝った。

西へ１００ｍから２００ｍ歩いた頃から頭に白い帽子を被った人たちが多くなった。
イスラム系の人たちである。
道路も急にでこぼこが多くなってきた。
開発、工事中なのか、右の一角は１００ｍぐらいの間口でビルの新築工事の最中であった。
やっと、西門に着いた。門の壁にでっかい赤の横断幕が貼ってあった。
「もしや？」と悪い予感がした。

近づいてみると西門上の楼閣は木枠が組まれており、下にある切符販売所にも人影はない。
折角、此処まで来たのに。
翌日、見送りに来てくださった陳氏に「昨日は西門を観に行きました。」と言ったら「今、工事中で登れませんでしたね。」と言われた。
そんなことなら、前の日に西門に登ってみたい。
といえば早く分かっていたのに、と悔やまれた。
仕方ないのでタクシーを拾って清真大寺へ行くことにした。
タクシーの運ちゃんも余り場所がわからないらしくイスラム人街へ入ってしまった。
運転手が場所が分からない事が幸いしてぼくはこのイスラム街の細いいくつもの筋を行ったりきたりぐるぐる廻り見学させてもらうことが出来た。
もうほとんど中国人、正式には漢民族は見ない、イスラム系中国人というのだろうか?女性は例の覆面?男性は白い帽子である。
朝の屋台がいっぱい軒を連ねる。朝は家では作らないのかもしれない。
とうとう運転手は
「ここで降りて観光客の後を付いていけば入口がみつかるよ」
と無責任な事を言ってクルマを止めた。
運転手の言ったとおり確かに欧亜人のツアー客がそこここにいっぱいいた。肩からDVムービーを提げ、半ズボンスタイルが彼らのトレードマークのようだ。ほとんどが中年、どこの国もコレは変わらない。
清真大寺は本当に分かりにくいところにあった。
幅２ｍぐらいのみやげ物屋が並ぶその一軒分の左に入口があった。こだけ、ひときわ人だかりがしているので分かったぐらいで、もし誰もいなかったら通りすごしかねない。
入口で２元を払って団体客の間をぬって先に入った。

西寧の**清真寺**とはちがって、こちらの方がずっと歴史を感じさせる建物だった。
面積は狭かったけど庭園風のイスラム寺院と道教風の院とを融合させたような感じがした。
あちこち写真をとって３０分ほどで**清真大寺をでた。**
出口から左右にみやげ物屋が１００軒くらいずらりと並んでいる。
歩いてみると、もう全く同じものばかりをどの店も並べている。
今までと違うのは客引きや呼び込みがほとんど無い。
手にとっても控えめにしか反応しないのがよい。
ある店で陶器の箸を手にとって「多少?」と訊いてみたところ、「１５元!」と女主人が言うので、そのまま歩きかけると突然「いくらなら買うか?」
とこれまたなかなかのアクセントの日本語で声がかかった。
ひとりで歩いているぼくに日本語でといかけるとは、?:?:?。「５クァイ、イーガ。」（五元でどうか?）と言うと「くあぃー」（いいよ）と言う。
ところで、何で日本人てわかったの?と聞くとニヤニヤして答えがない。ぼくが日本語で訊いたからだろう。
「モットいいものが奥にある。観るだけでいいからどうか?」
と太った女主人は言う。
奥のせまい室には棚いっぱいに清朝のころのものばかりだというめずらしい骨董品の山がおかれていた。
むろんそのひとつひとつが売り物で、売る気なのだろうから彼女の説明は熱がこもっていてよく分かる。
博物館の陳列品の説明をするガイド嬢よりはるかに興味をそそる説明だった。
「先生!これは清の**皇帝の本物の落款（印章）です。」ともったいぶって刻印をとりだした。
確かに４センチ四方のかなり立派な印款だ。４００元でいいと言う。

骨董趣味がないので値引きもしないで他の品に目を移したが交渉したら半値以下にはなるのだろう。

清朝の頃のアンティークな布製の人形の数々にはなぜだか触手が伸びた。

いかにも古い感じで、なんともいいようもなく、いいのである。

1つ、300元だと言う。話しているうちに150元まで割り引くという。

ぼくの関心がわかるのだろう。

「一個、50元でどうか?」と言うと「100元ならいい。」と言う。

一瞬、店のお客さんの児玉基子さんのご主人の顔が浮かんだ。

「好きそうだなぁ」と思ったが、不思議なもので、長く交渉しているとその品に対する欲望が段々としぼんでくる。

「二個 100元では?」というところで、とうとう交渉は成立しなかった

ちょうどその時店先にアメリカ人の団体が入って来た。

「ちょっと待ってて。」と言って彼女はアメリカ人相手に今度はカタコトの英語で商売を始めた。

長引くようだったのでぼくは店を出ることにした。

あわてたかの女主人は

「また来てネ。」と紙切れに自分の店の番号を書いて渡した。

《 213房》と書いてあった。

・・・。チョッと悔いの残るアンティーク人形だった。

次は華山に挑戦します。華山が中国有名聖山五岳の一つだと、当時知る由も無かった。

でも何故か気になっている山ではあった。

山といえば黄山とか武陵源(張家界)や峨眉山がすぐ目に浮かぶ。

では、なぜ華山かというと、知人の留学生の陳姉弟を高千穂登山に連れて行った際、弟の豪クンが

「中国には華山という山があって、そこはここよりずっと険しい、すごい山です」

と言ってたこと、同じく鹿児島大学留学生の白銀平さんのエッセイを日本文に翻訳した時も、その中に華山の素晴らしさを紹介してあったことなどで華山がぼくの頭のなかで、ある種の存在を占める山になっていたのである。

ぼくはいつの日か、この山を自分の足で必ず踏みしめるんだ、という、確信みたいなものを持っていた。

だから華山の姿を初めて見た時の出会いの挨拶は「初次見面」ではなく「好久不見(久しぶりですネ)」だった。

ぼくはどちらかと言うと山登りが好きな方ではない。山は好きだけど、登るときのきつさが嫌なのだ。登りはじめて10分もするといつも

「アァ.来るんじゃなかった。」

と後悔する。それなのに登りたいと思う。最近は体力や気力より、体が言うことを利かなくなったら・・・と思うと無理してでも登れるうちに、なんて思うこの頃である。

ところで、 生涯にぼくの登りたい山、すなわちぼくの五岳を挙げるとすると、次の山である。

富士山・屋久島の宮之浦岳・中国の黄山・西安の華山・麗江の玉龍雪山実は、すでに前の三つは登ってしまった。

今回の華山を踏破すると、後残るは玉龍雪山だけということになる。玉龍雪山は4年前、麗江に行った時、かの山を遠くに眺めながら、ツアー旅行だった為に果たせず、頂きの白い雪を眺めつつ別れてきた思いがある。

《華山一日遊》の費用は260元ということだった。ほとんどがバス代と入山料だとすれば高いのか安いのかわからない。こちらの旅行社の例の寄せ集め団体ツアーである。

朝8:00の集合から帰りは6:00ごろと言われた。ガイドから8時にぼくの携帯

に電話がかかった。本当に、中国手机は役に立つしろものだ。

「グォ　来了!」(モウ　ホテルに着きましたよ。)という電話だった。また、慌てさす。結局、ぼくの前に乗っていたのは４人で、なんと、バス(班車)を４回も乗り換えて、最終的には１２名ほどのグループでバスは華山に向けて出発した。

ガイドもその間、３名ほど変わり、今のガイドが本当のガイドなのだろうか。ということは、ぼくが日本人だということは多分わかっていないのかもしれない。まあ、別にどうということもあるまい。

ぼくはもう、あまり考えない事にしていた。一緒に行動しているうちに分かることだろう。

一行が売店で軍手を買っていた。それと、何か?赤いひもを買っている人がいた。

ちょうどいいチャンスだと思い一行の中の、若い一組の女子大学生らしき小姐たちに訊いた。

「ぼくは日本人の旅行者です。ひとりで旅をしています。」

と自己紹介をしてから、

「　ところで皆さん手袋を買ったようですが必要なんですか?」

「それと、　その赤いひもはゼンモヤン(なんでしょうか?」

・・・・・と。

彼女らは江西省.吉安から来た女子大生だと言った。返事はいつも英語だった。

「手袋は坂が急なので手をつく機会が多いからつけた方がいい」、とガイドの説明があったそうだ。

もう一つの赤いひもについては縁起物らしいこと以外は、彼女らの説明にぼくの語学能力がついていけなかった。

結局、このほかに二組の熟年夫婦、一組は北京人、一組は四川人の７人が索道(ロープウェイ)で北峰(雲台峰)１６１４ｍまで上がってそれから西峯、南峰と廻るコースを辿るメンバーということになった。

要するに、ぼくはヨン　スダオ(ロープウェイを使って登る組)というキーワードに飛びついただけのことで、もう何度もこの言葉だけは張家界でも、鄭州でも、蘭州でも、どこでも聞きなれた言葉だったのである。

余談だけど、ここのロープウェィの料金も５０元と高かった。他の人たちはそんなに出していないようで、なにやら騙されたような気がしていたらガイドがご親切にぼくに言った。

「アナタのだけは往復切符ですからこのカードはだいじになくさないでください。」

ところで、ここでぼくの感じた華山の印象を書いて見たい。

華山は今までにぼくが抱いていた中国の山とは違っていた。

今まで見てきた山、又は登った山はとても好看(ハオカン!)つまり、眺めることで感動した山がほとんどだった。　黄山を筆頭に張家界、峨眉山、九寨溝・黄竜、衡山、しかりである。キーワードは奇岩と松と絶壁である。

ところが、この華山の他の山との最大の違いは、この山はいわゆる訓読みでよむ「いわやま」ではない。音読みで読む「ガン山」とでも言おうか。「いわ壁」ではなく、華山の岩はまさに「ガンペキ」なのである。

山全体が一枚壁・・・・・・・・・・・・・。

「中国超級旅遊術」第三書店・を書いた河合宣雄氏によれば

・・・・「そもそも華山は、大昔には地下に埋もれていた岩石です。

それが約 8000 万年前の地殻変動で隆起し、反対に渭河地帯が陥没して、現在のように海抜２２００ｍの山になったのです。

華山の登山路は一本だけで、山頂部分でのみグルリと一周できる回遊路になっています。・・・・・・

索道(四人乗り)もかなりの急勾配である。ロープウェイに乗って　「チョッと、

怖いな」と感じたのはいままでめての経験だった。
登山道は幅1メートルぐらいの急勾配ではあるが,感心するぐらい綺麗に階段を彫って出来ていた。
崖側や岩肌の側にもしっかりした鎖が張り巡らされてあり、よほど高所恐怖症でない限り、下を覗き込まなければ、歩いている分には遠くで眺めるほどは怖くはなかった。
あの赤いひもは大部分はこの鎖に結ばれていたけど、崖の外に生えている樹木の枝、それは、あんなところに一体、どうやって付けたのか?《》と考えられない位置、**絶対に崖から落ちてしまう位置**に付いているのには驚いた。
時間と共に仲良くなってきた、**にわかグループ**の皆と、登ったり,下ったり、途中の寺院（**がある**）で休憩したり、岩の間の休憩処で休んだり、「声を掛け合ったり」「冗談で笑いこけたり」、手を差し伸べて、引っ張り合ったり、時には、下からお尻を持ち上げあったり、・・・・と、
名前も呼び合わない（中国にわかツアーに名前はほとんど不用）同士が本当の仲間同士になって行動すること3時間余り。
数時間後には別れ別れで、おそらく一生逢う事もない人たち同士の一期一会である。旅のたのしさを感じるひと時だった。
もし、独り行動だったら果たして3っの峯の頂上に立つ事が出来ただろうか?おそらく無理だったに違いない。ただ、残念だったのはあの名高い空中桟道をちょっと見てみたい、という夢は果たせなかったけれど。
ぼくは蓮華峰に立ったときフト日本にいる留学生、白銀平さんの顔が浮かんだ。
「そうだ、ここから電話をして、驚かせてやろう」
手机をポケットからとり出し何度か送信を試みた。でも、日本へは残念ながら繋がらなかった。
まさに　《山登りを満喫した》そんな峯山一日遊だった。
華山から西安に戻ったのは予定の時間をはるかに越えた夜の10時すぎだった。
5：30に華山からの帰りのバスが出たからここまで4時間30分かかっていることになる。
実は二ヶ所ほど寄り道をしたのである。
一箇所はこの手のツアーには付きものの買い物停車である。・・
・・・・　椅子が並んだ個室に一行が案内され、白衣を着た若者の薬剤師もどきが講演というか説明がが始まる。手にはひからびた茸みたいなものを2.3個持っている。
いつでも、どこでもある販売パターンである。
10分ほどの説明のあと大きな売場に導かれる。
ぼくは　「ティンブドン!」（言葉がワカリマセーン!）と言って外に出た。
大体、同じような行動をする人が何人かいるが他のメンバーは結構中を徘徊して売り子の説明を聞いている。
その割には買い物をしてくる人は余りいない。中国人は人の話を聞くのが好きな民族なのか?それとも、従順なだけなのだろうか?
このあと、絶対見逃せない場所だから、みなさん是非観て行って下さい。とガイドが薦める**《西岳寺》**に立ち寄った。
結局、此処に1時間ほどいたことになる。
写真も沢山撮ったけれどこのページに収めることが出来ないので写真だけ別の写真集に貼り付けます。
見たい方はここ《西岳寺》をクリックしてください。
このあとは西安編の後の方が26日（水）の行動になっている。

−2019年3月17日（日）再々編集しました。

貴州旅情　鳳　凰　ホン　ファン

（鳳凰・貴陽・黄果樹瀑布・織金洞）

2004・5・24　8：45

長沙駅

吉首行硬座2階建寝台車で鳳凰に向かう。

初めて乗るタイプである。とても中国の〈失礼〉火車とは思えない垢抜けた車体である。何だかワクワクさせてくれる。

いつか、長崎から博多へ向かう時に乗った快速がこんな感じのしゃれた車体だったのを思い出す。

先日、蘭州から西寧への昼の硬座も2階建て火車だったけど今日のは寝台である、何といっても、約14時間乗ってるわけだからやはり良い列車にかぎる。

どんな構造かというと、1,2階、二段づつになっている。つまり、上段無しのゆったり二段である。

ぼくと小燕はあいにく続き番号なのに背中合わせの席になってしまった。　小燕は不満らしく、自分の向き合わせの乗客にしきりに交渉を始めた。　はじめは無視していたその客もとうとう最後は根負けしたのか、しぶしぶ席を替わってくれた。彼女がニャリと笑って打ち明けた話では

「アタシ　イイマシタ　アタシタチ　シンコンリョコウ　デス。イッショムキデナイト　さびしいデスネ。」と

あの人「ショウガナイネ」と言ってたよ。・・・・・・・・・とクスリと笑った。

夜汽車も慣れてきた。

先ほど駅前の五一大路にある「松花江餃子店」でふたりで三人分のギョーザを食べてきた。来る前にウォルマートでふたりの好物であるスニッカーチョコレートも8個買った。もちろん「アハハ」もしっかり2本買ってきている。

ところで鳳凰は、どんなところなのか？

鳳凰は長沙に滞在している日本人留学生や社会人等、ほとんどの人が「行かれましたか？」「こちらにいらっしゃる間に是非行かれるといいですよ。」と薦められる所である。彼らが言うには

「もしここ長沙にいるから鳳凰は近いけど日本に帰ったらわざわざ鳳凰までは来ないと思います。日本人用ツアーはありませんし」と。

折角近くに居るのだから、こんなチャンスはないというわけである。

「鳳凰って一体どんな感じの観光地ですか？」　と尋ねると

「そうですね、古い昔の中国が残っています。昔にタイムスリップですかね。」

それ以外はズバリと表現してくれない。長沙にいるぼくの近辺の中国人もハッキリとした答えをくれない。よく訊いてみると

「実はまだ行ってないんです。行ってみたいのですが」

と言う答えである。

それでも少ない言葉からイメージをまとめてみるとこうなる。

水郷・老街・古城・少数民族・南の万里の長城・沈征文〈作家〉・・・・

吉首の駅に着いたのは夜明け間もない頃だった。

駅前に迎えの現地ガイドが来ることになっている。

ガイドが見つかり、小燕がガイドと打ち合わせしていると、そこに同行の他のツアー客が来たようである。　小燕がその同行ツアーと顔をあわせたが「アイヤ！」　・・・とびっくりした声をあげた。

「一緒のグループはあなた方ダッタデスカ?」（中国語デス。）

・・・大きな声（原語）が飛び交う。なんと、

寝台車のぼくたちの席の下段のふたりの男性とその隣のブースの若いふたりの女性４人が今回の鳳凰グループだったのである。

女性のうちの１人はまだ高校生か?そんな感じのギャルで何度も夜中にぼくたちのブースの男性（お父さん?）を尋ねてきて、実はうるさかったのでよく覚えていた。　かくて、たった６人という、今までのツアー最小単位の２日間の旅が始まったのである。

今日の見学コースはまず鳳凰古城へ行き民宿に入り午前中は古城の中の見学、船に乗って**沱江下り**そして、昼飯をとった後南方長城というミャオ族の作った長城を見学して、そのあと、黄絹橋古城をまわる。明日はミャオ族の部落、大きな瀑布、それから鍾乳洞を見学して夜行で帰って来る。

まず沈征文の旧居を見学する。沈征文は１９０２年鳳凰で生まれた小説家で生涯に７０冊の本を書き、鳳凰や張家界を世に紹介した人として有名である。

旧居は四角い中庭を４つの建物が取り囲む四合院と呼ばれる建て方で正面の建物の中央の部屋には沈征文の肖像が飾られている。　今、鳳凰はその素晴らしさを世界の人たちの憧れとなった。　更に写真本の紹介は続く、

永遠の鳳凰

鳳凰の美は派手な着飾りが人目をひきなり、圧化粧ではなく平あっさりして奥ゆかしい清純が安らかである。おっとりしていて美しい。

それは古い出会って昔かたぎではない。それは高潔であり名声が物欲にとらわれない。

横から見ると一幅の絵に見える。縦から観ると詩一首に見える。遠く見ると一文字に見える。近く見ると本一冊に見える。

浅く深く見てもそれは歴史に青レンガ一枚に見えて文化の地図一枚です。

画帳を開くと一条の河流が古い城をたずさえて真正面から顔に当たってくる。

柔らかで美しいのはやはり**沱江**です。

沱江は深い時間の中で浮き上がるニジである。柔らかで、青色で、澄み切ってで、変化に富んでとらえがたい。ところで、鳳凰大橋の上から虹橋方向を眺める景色は本当に素晴らしいものだった。しかし、この光景をもっと具体的な言葉で表わすとしたらどう言えばいいのだろう。先に表現したように「本当に素晴らしい」「ヘンピャオレン美しいデスネ」「うーん！！」などと副詞や形容詞を並べるだけで他に適当な表現方法が見出せない。それはつまり、風景をそれぞれ見る人の感性がどうとらえるかにかかっているからである。

鳳凰を薦めてくれた人たちから明確な理由を得られなかった訳が今、分かったような気がした。

鳳凰のこの景色を言葉で表現するのは困難なのである。現実の風景の美しさよりその風景から思い起こされる恐らく見たこともない遠い昔の想像の風景をタイムスリップして見ている不思議さ、みたいなものといったら少し近いのかとも思う。だから、それはいわゆる原風景とも違うのである。

「それでいいんだ。」とぼくはこの景色を眺めながら思う。

そして今、ぼくもまた同じように人に薦めたいと思う。

《鳳凰に行ってみませんか?そして、鳳凰大橋の上から岸辺で洗濯をしている老若の女性達の姿を、そして彼女らの叩く洗濯棒の音を聞いてみましょう。

、無邪気に裸で泳いでいる子供達の姿を追いながら、はるか３００年前?（日本だと安土桃山か?）の明から清の時代の古い中国の景色を、アナタが感じることが出来ます。きっと、とても貴重な視覚体験をすると思いますよ。》

・・・・・・・・・・・・・・・ぼくはじっと目を閉じて頭の中に浮かぶはるか昔を想像していた。パタパタと叩く洗濯の音、はしゃぎまわる子供達の歓声が今聞いている耳から、頭の中の想像のシーンの中のぼくの耳に、重なっていった。

６人のグループはそれは賑やかなものだった。

一緒の食事はまるで家族旅行の雰囲気そのものになっていた。書き出したらきりがないほど愉しいシーンの連続だった。

小燕を連れて来たのは正解だった。主役はぼくであったり、１７歳のコギャルだったり、それぞれの行動、買ったみやげの批評から、誰かが買い物をすると、あと

の5人が側にいてなんやかんやと雑音をいれるやら、そのうち、ぼくにはヨシ、ヨシというあだ名がついてしまった。
　ぼくが無意識によーし、よーしと気合みたいな声をよく出すからなのか　よく分からないけど。
　バスの中では一緒に歌を合唱したり、とうとう
「ヨシ、ヨシ　ひとつ日本の歌を披露してくれ。」と自分でさくら、さくらを口ずさみながらぼくを促す。そして、周りは拍手、拍手である。　いろいろな質問も飛んで来る。
「こないだ日本映画観てたらメシメシといってた、あれどういう意味か」
「たぶんご飯（ミーファンダイース）のことだろう」と答えておいた。

　雨の上るのを待つ。そして、登り始める仲間
二日目に行った滝：上り口で昼飯を食べた。ものすごい大雨が降ってととても滝口まで行くことが出来ないと、ガイドの小李が言う。確かに沢山の観光客がここでトランプやマージャンをして時間つぶしている。雨が上がるのを待っているのか。
「雨の中でも,もし行きたければ連れて行く」と運転手の王さんは言う。
「アタシイキタイナ。」
と小燕がぼくの顔を窺がう、ぼくは雨が大嫌いである。あのピチョピチョと顔や体に滴れ落ちるのが我慢ならない。手だって濡れるのが嫌いだから。あの中国製の薄い5元の雨合羽は二枚重ねてもどこからか、ほとんどは首からだけど入ってくる。
「ネエ　イコウ　イコウ　」小燕はぼくの顔を見て促す。
「ティンブドン」（聞こえませんネ）と答えたら膨れてしまった。
そうこうしているうちに奇跡的にも雨が上がったのだ。
靴を藁ぞうりに履き替え〈2元〉雨合羽を被り我がにわか家族の滝見行列が始まった。
　あの道中の数時間〈2時間?〉の出来事、別に特別なこともないただの行軍だったけど今思い出しても鮮明な映像で浮かんでくる愉しい時だった。
鳳凰でのかずかずの行動は今回のぼくの旅のなかでは何か特別なページのように思えた。
旅はやはり、独りよりも友といろいろを分かちあいながらの方がいいのかなと思ったりする。声を出さない独り笑いは確かにさびしいですネ。
考えてみると目まぐるしい旅を続けている。
　何もこうまで急がなくてもいいのにと思うのだが・・・・。
　自分で決めているのだから仕方がないが、つまるところ経済と曜日に左右されてこうなっている。
　打ち明けた話がこうだ。今、長沙のホテルに泊ると一泊３００元はかかるのである。　だからその分、旅先にいた方が無駄がなくていいと思う。それと、週末は小燕が何処か連れて行けと言ってくるのでなるべく空けておきたい。
　まあ、そんな理由で目まぐるしくなっているのである。
　３１日の朝：長沙に着いた。今夜は過程大酒店に泊って、明日は昼２：００の飛行機で貴陽に行かなければならない。
　洗濯時間は３１日の朝の数時間である。益田氏の授業の間に済まさなければならない。
　１日の昼までには取り込んで旅行バッグに詰める。《今度はリュックで行こうか》」
３泊４日の旅だけど郊外（山や滝）が多いので荷物が多そうでもあるし?。いつも行く前のシュミレーションで失敗する。
　小燕を通して華天旅行社に費用をサービスしてもらった今回の貴陽ツアーは往復飛行機を利用して３泊で１５００元だった。
　日本円で２万円ほどだから、まあまあといった料金である。　解放路の華天ホテルの１階に華天のサテライトがある。　ぼくは８階の社には行かず、いつもここで小燕と相談する。　小燕のほかに3名ほど事務の小姐がいてもう顔なじみだ。ここのところ石油の値段が上ったので飛行機が値上がりして、割引がほとんどなくなったので厳しい,と華天小姐は言っていた。　小燕が持ってきた旅行表を見るとこうなっている。
　第一天：１４：００黄花空港発１５：１５貴陽空港着

空港まで導遊（ガイド）の迎え有。市内の名勝を案内して弘福寺（チェンリン公園）　ホテルへ

第二天：黄果樹瀑布（ホワングワシュウブブー）約2時間半かかる。

原始苗寨（イエンスーミャオザイ）

天台山　　天竜屯保　　ホテルへ

第三天：織金洞（ズジンドン）中国第一鍾乳洞　　ホテルへ

第四天：　朝8：05貴陽空港～9：05長沙黄花空港

・・・・旅も少し重ねてくると、いわゆる旅の感慨というものが薄れてくることがよく分かってきた。

旅の楽しみの2～30％はあの旅立ちの朝の（昼、夜の場合もあるが）何ともいえない気の張りにあるといっていい。　詳しく言うと、前の晩から、当日へ、そして、家を出て空港までの車中、そして空港ロビーへと続く一連の流れの中で湧き上がってくる何とも言えない緊張感、まさに《旅立ちへの序曲》とでも言える高揚感なのだ。

ところが出入りが激しくなると、その辺の高揚が薄れてくるのである。

ツアーコンダクターの友人がいつも羨ましいと思っていたけど案外彼らは今のぼくの気持ちに近いものがあるのかも知れない。

貴陽は我が朋友：深栖氏が昨年、独りで旅して来た地である。

鹿児島から見た時は上海経由で殆んど雲南に近い辺地に見えていたけどここ長沙から眺めると、西隣の省である。

この前というより2日前に居た鳳凰からはほんの数時間バスに乗れば着くような距離である。後で地図を見ていて、これは帰らずに周遊した方が良かったのか?と思うことだった。

今日の長沙の天気は珍しく青空が広がっている。

南方航空CZ8656機は定刻通り2：00に黄花空港を離陸した。

長沙での短い1日はすべて上手くいった。天候に恵まれたからである。寮の前の校門を何度か行き来したが生徒と会えなかったのがちょっと残念だった。

昨夜、チャンスがあったら安徽から来ている仲良し二人組の呉林小姐と李碧雲さんを平和堂7階のブラジル料理でご馳走してあげようと何度も寮に電話したけど通じなかった。いつも授業態度が熱心で、ぼくはこのふたりに目を向けながら授業をしていた。

3：10　貴陽空港着

空港に迎えに来てくれた国際旅行社の張騨くんの車で1時間ぐらい（約10㌔）で貴陽市街地に着いた。

早速、**甲秀楼**を訪れた。

甲秀楼は南明河の中洲に建つ高さ22m三層の楼閣である。

河の中の巨岩の上に立っている。明の時代に建てられた美しく歴史を感じさせる建物である。

楼閣の上からは市街地を眺める事が出来て夜はライトアップされとても美しく、中では**茶館**が各楼ごとにあり、市民の憩いの場として利用されているようだ。

この後、市の北西部（ぼくの泊るホテルもこの近く）にあるチェンリン山の中にある弘福寺に行った。ロープウェイがあったけど九曲径と呼ばれる登山路を登った。

弘福寺は海抜1300mの山頂にあった。

園内には麒麟洞という洞窟があり国民党と共産党の内戦中に**張学良**が幽閉されていたところを見学した。

貴陽のガイド・張（ジャン）くんはかっこいい若者で、結婚していてもう子供も居る.と言ってましたがとてもそうは見えなかった。

「貴陽名物を今夜、食べたいですね」

とぼくが言うと、

「　しゃぶしゃぶなんかはどうですか?」と彼が言う答えたので「いいですね。」と、今夜の夕飯が決まった。

もう6時も過ぎていたので「じゃあこのまま行きましょう。」と、早速、街に繰り出した。

街の一番店だという大きな餐館でる。あいにく個室しか空いてないという。「OK」と答えて案内された。

写真のような沢山の名物菜が次々と出てくる。

魚星草（ユイシンツァイ）は殆んど食べれなかった。又、日本豆腐で失敗した。あのソーセージ形の黄色い玉子トーフを見たら「シマッタ」と思い出した。何度やられ

たことか。又、忘れていた。

長沙で、西寧で、同じ失敗をしたのに、豆腐という名ですぐ注文してしまう。それにしてもここの料理にはあのぼくの嫌いな香菜（シァンツァイ）が殆んどの料理に入っている。土豆（じゃがいも）かろうじて食べられる。・肥牛肉のシャブシャブを二人前注文、お湯に入れるとすぐちじんでしまう。

タレがとても辛くて味が変で食べられないので「しょうゆ」と「酢」をもらって自分でタレを作って食べた。これは旨かった。もう一皿、こんどは羊肉を注文した。

余り食がすすまなかったので張くんに悪いなぁ、とは思ったが、これだけは仕方のないことだった。

次は　黄果樹大瀑布へ行きます。

某社の旅行ガイドから・・・黄果樹大瀑布の紹介

・・白水河の激流が作り出す９つの滝が集まる黄果樹。そのうちの最大の滝が黄果樹大瀑布だ。高さ６８ｍ、幅８１ｍから流れ落ち大きな水音を立てている。滝を裏側からみることができるのが興味深い。

明日は朝７：００に迎えに来ると言う。いつものミニバスによる黄果樹ツアーである。たいていその日のガイドから部屋に電話連絡がはいることになっている。

この前の青海湖ツアーで懲りているから美味しくない名物しゃぶしゃぶを張くんと食べた帰りに近くのスーパーでパンを沢山買って帰った。それと屋台でおいしそうなバナナを一房。とにかく安いものだからつい買いすぎてしまう。

実は部屋に戻ってびっくりした。

籠の中にりんごが2個とかわいい桃が3個入っている。おまけにミニカッターまで付いている。こんなサービスは初めてだ。

結局このサービスは滞在中続いた。最後の日は食べ残しの果物とパンやビスケットで袋がいっぱいになった。

ホテルはそれぞれ、どこかいいところがあるものだけど、ここチェンリンホテルは湯沸かし器もベストに作動したし、シャワーの湯も、熱さ湯量とも充分。ＴＶも良く映る。

ホテルの浄水湯沸かし器。上のタンクに水が入っている。

右は今回のミニツアーの仲間たち。

部屋はあまり豪華とはいえない。日本のビジネス・ツインといったところだがいろいろな機能が正常だということの方が、旅をしていると余程有難いのである。

取るに足らないことかもしれないがスリッパの横に丸い簡易靴磨きスポンジが二個置いてあったのはとりわけ嬉しかった。

三日間一度も按摩の誘いがなかったのはちょっと寂しかったけど（深栖氏は、貴陽は夜の電話がうるさかった、と言ってたけど）泊るところで違うのだろう。

７：００きっかり電話が鳴りガイドの声がした。

「馬上下来！等一下」いますぐ行きます。と言って電話を切る。

ミニバスにはふたりの女性が乗っているだけだった。

この前小燕から習った　只会一点点！は初対面の言葉としては、なかなかいい言葉だ。相手がすぐニッコリ笑うから説不好より会話としてはウイットに富んでいるのかもしれない。

最終的には１４名のグループツアーになった。その内の１０名ぐらいは一つの団体のようで、皆知り合いのようだった。きさくな人たちである。でもどの省から来たのかは分からなかった。

ミニツアーの良さはお互い写真を撮りあったり、食事のときの会話などが仲間内として出来るので、独り旅でありがちな人とのフェエンスがない点が有り難い。

でも、いつも思うけど、モット中国語が聴けて、喋れたらどんなに楽しかろう、と思う。頑張らなくっちゃ。

今日みんなで食べたお昼は美味しかった。

ぼくはこういうツアーの時にみんなで食べる食事はわりとＯＫ（美味しい）と思うのに昨日のように改まって餐館みたいなところで注文して食べる時は未だ美味しかった試がない。

・・と言うと注文してくれた相手に悪いけど、本当だから仕方がない。

いちばんとばっちりを食っているのが小燕と李黎だろう。

「アナタ自助菜（セルフ式）　ジャナイト、、ダメネ！
アタシイッショウケンメイ　エラデモ　アナタ　タベナイ
カナシクナテ　アタシモ　ショクヨク　ナクナル。キヨハ
タベタクナ　クテモ　タベナサイネ！」

いつか、とうとう小燕が怒った時があった。

チョッと話は変わるけど、ひとつ中国人と一諸のツアーで気になることは彼等はバスや車の中でよく窓を開けることでだ。タクシーの運転手なんかも殆んど運転席と助手席の窓を開けて走っている。

呼吸気の弱い人が多いのか?風に当たるのが好きなのか?真夏でクーラーが効いてても開けたがる。

寒いときには本当に困る。ぼくは身体が水に濡れるのと走っている窓から入る冷風がとても苦手である。

更についていないのか、ぼくの前に座る人に限って窓を開けたがるから不思議。寒くても中国人は閉めてください、などとはまず言わない。だから、ぼくも言うわけにいかず、防御するしかない。これが、中国人と一緒の乗物での一番つらいことである。

アジアーの大滝を堪能したあと、また古いお寺を訪ねることになった。城山を照国神社から登るような感じだ。頂上にある禅寺は２００年の歴史というから清朝に建てられたものである。

天台山の山頂にある天台寺、頂上までの石の階段は自然の石をそのまま積み重ねた階段でその当時（２００年前）のままの階段なのだろう、バームクーヘンのようで珍しかった。

そうそう、今日は帰りにバスから見たアクシデントを語らなければならない。一つは、よく見る交通事故である。

１０トントラックが見事に横倒しになっていた。

幸い路肩側に上手く横転していたからよかったけどこれがセンター側だったらおそらく道路全体を覆っていたことだろう。と言うことは今日の瀑布見学ツアーはおそらく中止か、変更になっていたに違いない。

もうひとつは更に仰天した。、通り過ぎてから夢を見ているような気がした。反対側斜線に止まっているバスのうしろで、女同士の取っ組み合い（の末だと思うが）の喧嘩のシーンだった。

顔から血を流している女の上に馬乗りになって右手にはかかとの尖ったパンプスを、下になった女の頭や顔に振り下ろそうとしている光景・・・・周りには止める風でもなく見ている5,6名の男たち・・・・あっという間の流れの中で見た光景だった。まるで映画のロケーションを見ているような気がした。

明日は織金洞（ジンジンドン）という中国第一の鍾乳洞を見学ということらしい。

今日のコースは目的地（織金洞）まで3時間ぐらいかかるらしく朝、６時に迎えが来るという連絡が張クンから携帯に連絡があった。念のために5時にホテルからMCをするように頼みました、と言う。

いつもミニツアーは朝早いので困る。最終出発は僕が乗ってからいつも1時間半は過ぎる。いつも最初の方の順番になっているようだ。

それにしても今朝はおどろいた。４時にモーニングコールが掛かった。一時間も早い呼び出しである。誰かが間違ったのだろうがえらい迷惑である。あと2時間、どうしてくれるのか?寝るわけにもいかず仕方がないので日記を書いていた。

こんな日に限って迎えが来たのは6時半だった。

すでに　４人の先客が乗っていた。一組の夫婦と一組の親子（といっても子の方は２０歳過ぎた娘さんだけど）。

中年夫婦のうちの男性がにこにこと話しかけてきた。

「*Cant you speak English?*」

結構、流暢な英語だった。
大体、OKと答えておいた。おかしかったのは最初に出た言葉が中国語の大概（ターガィ）可以（クァイ）だったことである。
「Are you ready take Breakfast?」又英語で質問が来た。
なかなか頭の中の言語切り替えが出来ないのか、
「已経イージン」とか「チー（食べる）」とか言う単語が先に出てきてしまう。
バスの中は10名になった。これが今日のメンバーだろう。いつもツアーのメンバーが替わるので面白い。
本日はかなり騒がしそうである。
しばらくするとガイドの女性が車から降りてしまった。しゃべりまくる運転手がひとりである。あちこちからツアー客が運転手に声を掛けている。
どんなやりとりなのか僕には「ティンブドン」だが、おそらく「ガイドはどうしたんだ。」「今日はガイドなしなのか?」とでも聞いているんだろう。
しばらく行くと大きな橋があった。たぶんそこも観光コースなのだろう。
クルマが広場のようなターミナルとはお世辞にもいえないようなところに駐車して、皆、運転手の後からぞろぞろと橋に向かって歩き出した。
むろん、何も分からないぼくも後をついて行く。
橋から眺める景色、とりわけ下に見える渓谷が素晴らしかった。
フト、紙ヘリコプターを飛ばしたくなった。
いつか、屋久島の登山の帰りに安房の近くに新しく架かった大橋から飛ばしたヘリコプターを思い出した。
作って飛ばしたら気持ちがいいだろうナ、と思いながら紙がないのが残念だった。
相変わらず、かの中国人は僕のそばで英語を使いたがる、どちらからですか?と聞いたら、台湾から来た。という。奥さんの方は主婦というよりは仕事人のようでメンバーのなかでも飛びぬけて垢抜けている。

バス乗り場付近には、いつの間にかももを売るおばちゃんが2,3人並んでいた。みな試食をしている。何人かが買っていた。又、バスの中で皆に配るのだろう。ミニバスツアーでよくある光景である。こうして、皆が仲良くなっていく。そして、かならずツアーリーダーがいるものだ。
9:30　まぶしい太陽の光がバスにさしこむ。周りの景色はたてよこ20X30位に綺麗に仕切られた水田が延々と続いている。また台地には棚田が美しいカーブを描いている、なつかしい日本の風景に似ている。
時計は11:00を過ぎているのにバスは小さな町をいくつも過ぎやがて山道に入っていった。運転手もよく知らないのか?時々バスを止めては人に聞いている。
だんだん道は険しく1000mは上ったように思う。
巨大なダムの工事場を過ぎ、とんでもない?岸壁に小さな坑道（トンネルとはいえない）クルマが通れるのだろうか?そこをミニバスは入っていった。
もし、こんな中で離合でもすることになったら?万一、壁がくずれて生き埋め?いろいろなことがよぎり、ほんとうに怖かった。灯かり一つない坑道を何分かかったのだろう。向こうに小さな光が見えたときは心底、ホッとした。
トンネルを出てからも怖いシーンは続いた。
左は岩壁が張り付いていて右は断崖絶壁（もう窓から下を見るのが怖いほどの）おまけに、道路がときどきえぐられているところがある。
突然!目の前に、落ちてきたばかりと思われる岩石が、ドーンと現れる。クルマをとめて、皆で石を動かしてバスは進む。皆、はしゃぎながら大声で作業しているのが奇怪いである。
間違っても自分達のクルマには落ちないものと信じているようだ。
ここで、お陀仏になったらぼくの消息はいつ、どうやって伝わるのだろうか?バッグに名刺が入っていたっけ、パスポートはホテルに置いて来たし。
《もしもの事があればここに連絡を。》と中国語で書いたカードを作ってポケット

に入れて置く必要があるナ、と思った。

中国でも最大級の規模を誇るこの織金洞（ジージンドン）は別名を地下天宮と呼ばれている。洞の総面積は約３０７ｋ平方、総延長距離は１２．１ｋｍで一番広い洞は幅１７３ｍ、高さ１５０ｍ、東京ドームと?変わらない広さである。

ここ安順の近辺は鍾乳洞の宝庫と言った感がする。

ぼくも中国で一体いくつの鍾乳洞に潜った事だろう。スケールの大きさではここ織金洞はどこにも引けをとらないものだった。

ただ、いつも中国の鍾乳洞に行って思うのは、洞の中の色電球のケバさである。幻想的という感覚が違うのか?あれが綺麗だと思うのか?よく理解できないが、ここと言う見所に限って七色のネオンに照らされている。その前で一枚５〜１０元の記念撮影が繰り広げられる。

まあケチをつけるのはよそう、素直に見事な迫力さえ感じる洞だった。特に魅せられたのは床面にいっぱい広がる黄竜の湖面と同じ蓮模様の湖である。

黄龍のようなエメラルド色の水はなかったけど石灰石が何千年にもわたって出来た自然の美は見事だった。

ホテルに戻ったのは7時が過ぎていた。

３日も貴陽にいて、未だ繁華街に出ていなかった。今夜が最後のチャンスだった。

荷物はムービーを一個だけにしてホテルのロビーに下りた。フロントにいる可愛らしい服務員に貴陽的最繁華的地方在那里?と尋ねたらニッコリ笑顔で紙に書いて教えてくれた。

大十字・小十字・噴水池　是　ルァ市区

その後に「Ｎー　是　那　里　的?」と書いてぼくの顔をのぞいた。　ぼくはすかさず「日本来的。」と書くと、一瞬、目を丸くしていた。

「我想去坐的士。」と言ったら両手の人差し指をクロスして打車十元と言った。

９時半ごろに大十字（大道路の交差点に屋根付きの天橋が架かっている。）に着いた。その歩道橋を五段ほど上りかけたところで見知ったような女性にあった。

一瞬、誰!!こんな見知らぬ街で?と思った瞬間、相手の女も下りかかった足を止めた。昨日、一日一緒だった瀑布ツアーの女性だった。

ニッコリ笑って反対側の公園の方を指差して何か言った。

・・聞き取れなかった。分かった振りをして、ぼくは今日はジジンドンに行ってきた。今、帰ってきて、街にぶらぶら遊びに来たのだ、と言った。

ぼくの話はよく?通じたらしく、

「そうですか?愉しかったですか?」と言った。

「とても愉しかったです。でも、途中が怖くて、とても疲れました。」と答えた。

彼女はまた、ちょっと早口の中国語で何か話しかけてきた。

ぼくは良く聞き取れなかったので「ティンブドン」と言うと彼女はもう一度ゆっくり話してくれた。

ぼくは二度目も分からなかったけれどもう「ティンブドン」とだけは言いたくなくて「ソウデス対了。」と返事して、

「我明天早上６点回去」

とだけ言うと、急いでる振りをして「再見!」と言って手を軽く挙げて別れた。

喋れたら、一緒にお茶でも、と言いたいところなのに残念だった。

ホテルに帰るとガイドの張クンからのメモが届いていた。５：４０にモーニングコールをします。６：１０には迎えに行きます。とのことである。毎晩、寝不足になる。

我がサポーター達からもひっきりなしに連絡が来る（メールで）小燕は、明日の長沙のホテルの予約が取れたこと、スケジュールについては上午は寮で洗濯、中午は新しいホテルへ４ッ星だけど５００元でいいとのこと（高いなぁ）。

下午は華天旅行社に来てくださいと細かい指示である。

実は、三回目の小荷物を鹿児島に送りたいのだけどどうしょう。時間がない。

いつものホテルが　６月１０日まで長沙で全国規模の会合があって２０万人の人がホテルを予約してくるので部屋代も５０％アップする、との通告でキャンセルしてしまったら、本当に取れなくなってしまい華天に頼んでいたのである。かねての二日分の宿泊費にはまいった。

上海の李黎からもメールが届いた。
「慶二先生7日下午凡点到上海我去接Ｎ－。要我為Ｎ(あなた)予定大酒店馬(マ)?」
ぼくの長沙滞在もいよいよ終わりが近づいてきた。
明日、一日長沙にいて明後日は朝から最後の観光ツアー湘南にあるチェン州に一泊ツアーに出かける。
このあと実際の行程は6月5日からchen zhouへ行き、その後上海（朱家角）を経て僕の旅は終わるのですが、記録的には

—2019年3月17日再校正しました。そしてドッキングー

済南・孔子廟・泰山・青島・労山9日の旅

2005年10月17日から—恒雄ちゃんとの想い出

—再・文章・

レイアウト修正 2016.8.5

トテモ長いプロローグ

動機というかきっかけが三つあった。
一つは足が丈夫なうちに五岳を制覇すること、既に三岳は登った。南岳衡山·中岳嵩山・西岳華山の三つである。
泰山は五岳のなかでも「長」と崇めたてられている聖山である。日本から一番近く且つポピュラーなので最後でもいいかな、と優先順位最後尾につけていた。
ところが、
実は、最近、霧島神宮の参拝の石段が堪えるようになってきた。下りのとき右ひざが痛いのである。老化のせいなのだろうか、それとも鍛錬不足のせいだろうか。
中国の山は殆んどが石段である。石段は膝にくる。
特に泰山の石段登りは中国紹介のＴＶなどでもよく紹介される難所である。石段が７０００段、時間にして６時間かかるらという。せめて半分でも自分の足で挑戦してみたいと思っていた。　（下写真は泰山登山途中で）

もう一つは泰山コースの入口になる青島市に従兄弟を発見したことである。
高校時代（今から４５年も前）会ったのを最後に、はっきりいって存在を忘れていた従兄弟である。もちろんその頃は従兄弟の中でも一番親しかったのだが。
今年９月２３日、実母の妹が９２歳で亡くなった。
その伯母の次男が現在、青島市の日本企業に３年半勤務中の恒雄くんである。
「僕がこちらにいる間にぜひ遊びに来ませんか?」
僕より一つ年下の彼のこの言葉が泰山に僕の足を向かわしたと言える。
チンタオは海岸線が奇麗な避暑地ということ、有名な青島ビール発祥の地ぐらいしか認識がなかったのだが、留学生の隋さん、李さん夫妻をはじめ今年の留学生代表の黄佳さんがチンタオの出身ということから最近、身近に感じる中国になっていた。
「大石先生、今度、私が帰るとき一緒にいきませんか?」
「日本語先生をしませんか?姉が学校をしているんですよ。」と隋さんに誘われてもいた。
そんな時、日中友好協会交易部のお付き合いで親しくなった中国東方航空の鹿児島支店長代理の喬謹さんが
「１０月中ごろ、１０日ほど休暇をとって、上海蟹を食べに帰るけど、大石先生、一緒に上海に行きませんか?旅費割引少しある・・・もし先生がチンタオに行くなら是非一緒に泰山にも登りたいね。

まだ行ってないから。」
　という。この三番目の動機が僕を決心させたのである。
　そうしてさっそく、青島の恒雄くんとのメール交換が始まったのである。

慶二さん
10/17～10/20は工場の溶接士に日本の資格を取らせるため、日本のロイドから検査官に来てもらって資格試験を実施することにしています。
そのため、お相手が十分出来ないかもしれませんが(夜は時間を割きます。)又とない機会なのでぜひ、実現させてください。
チンタオ市内観光は１日あれば十分です。郊外の労山はお勧めポイントですが、最低あと半日必要です。
泰山・曲阜は行くべきです。チンタオを朝７時の火車（特急）で泰山に14：15に着きます。
その日のうちに泰山か曲阜のどちらかを回ってしまって、翌日、残りに行かれた良いと思います。帰りは泰山14：48の特急でチンタオ着は22：30になります。夜行列車もあります。
少し強行軍ですが、泰山に２泊できたら、ゆっくり観光できます。以上からチンタオ：２日、泰山・曲阜：２泊３日と計画されたらいかがでしょうか?
友人の方が中国の方のようですから、よくご存知だと思います。泰山は同行できませんが、チンタオ・労山はご一緒できたら良いな!と思っています。可能なら上海を先に訪問されて、10日間の予定の後半にチンタオ…と
旅程を組むことが出来たら幸いです。

恒雄くん：
　18日朝発青島行、帰り21日夜上海帰りではどうでしょう。
　出来たら泰山の山頂に泊りたいのですが・・ホテルの環境はどんなでしょう。
　22日か23日朝から揚州と南京に2泊して、26日の朝鹿児島帰りを計画しています。
　協会の会長が10数年前、記念事業で青島の有名な公園に記念植樹をしたそうで、　大きくなっているのかな、それとも、引き抜いてしまったのか?見てきて欲しいと言ってました。　公園の名前は忘れたそうです。
　又、行く前にはメールか電話します。暇があったら恒雄くんの会社・工場見学もしたいですね。

慶二さん
18日からチンタオ訪問であれば私のほうも都合がよいです。18日のチンタオ到着は夕方になると思うので観光の時間はありません。21日夜、上海移動とすると泰山・曲阜旅行だけで目いっぱいになってしまいそうです。

せっかくですから、あと１日余裕をとってチンタオ市街、労山を観光できるように日程を考えていただきたいものです。泰山の頂上の宿は昔風の建物で（かび臭かったと聞きましたが）、ホテル形式ではないかもしれません。
私はふもとのホテルに泊まりましたが、有名な朝陽を見るためには頂上の宿が適しているようです。
泰山には中国人の友人は同行可能ですか?
公園は多分、中山公園ではないかと思います。公園の名前がわからないと、確認のしようがありませんね!

恒雄くん：
青島～泰山に一緒するつもりの喬謹（東方航空支店長）氏が20日、21日に上海で会議が入ったそうで行けなくなったとのことです。
　今、兄、健二を誘っていますが、彼も11月なら良いけど、と言ってます。
11月はもう寒いでしょう。折角なら山は連れがあった方が楽しいかな、とも思いますが。
　もし、ひとり旅の場合、青島発の「中国人ツアー」はどうでしょう。

ホテルに迎えに来て、寄せ集めの14，5名のミニバスツアーで「曲阜～泰山3日間ツアー」はありませんか？
　昨年の滞在中はいつもそれを利用してひとり旅をしていました。そうなると山頂泊りは多分無理かもしれませんが。・・・・というわけで、今計画変更を思案中です。

慶二さん
中国人の友人が一緒だと心強いのに残念でした。上海の会議を先に済ませて、その後チンタオ、泰山ということには
できませんか？または、良い機会だからぜひ奥様を同行されたらいいのに…と思いますがいかがですか？
チンタオからのバスツアーもあります。資料を取り寄せます。11月、泰山山頂は寒いと思いますが、10月とそれほど大きな違いはないのではないでしょうか。私は8月に行きましたが、山頂は震えるほどでした。
健二さんが都合がつけば、一人旅よりは楽しいと思います

恒雄くん：
　早速の返事ありがとう。
　喬さんに無理は言えません。本社の会議でしょうから。
今、妻はちょっと体調を崩していますし、特に山は弱いようです。市内見学や観光地巡りは体調が戻れば可能でしょうが。もっとも3年前は娘や3人でツアーでしたが、黄山に行きました。ロープウェィと籠を利用してですが。
　再度、兄に誘ってみます。ところで、17日の昼に鹿児島から上海に着きますがその日のうちに青島とは無理なんですか？そうすると18日終日青島市内観光が出来そうですが。バスツアーの件よろしく。

恒雄くん：
　こんな案はいかがでしょう。青島～泰安は結構（7時間）時間がかかるようですね。
上海から朝、青島に行かずに済南に飛んで（時間も、料金も同じくらいですね）その晩泊って翌朝、そこから泰安まではすぐのようですが。曲阜の観光も終えて青島に行く、というのはどんなでしょうか。21日、22日を青島で過ごせないでしょうか？
　中身（くわしい旅程）はよく分かりませんが、済南もこの際、空気を吸ってみたいのですが。

慶二さん
　大変、良い案だと思います。済南は水の都といわれる山東省の省都です。泉がたくさんあるところと聞いています。　済南から泰山は移動距離が少ないので1時間以内で行けます。汽車も電化されて所要時間が短縮（青島ー泰山5時間程度）されているようです。
　泰山、泰安、曲阜の観光、青島での滞在に時間の余裕が生まれます。21日から青島であれば私もフルアテンドできます。　済南、泰山のホテルは日本で予約可能だと思います。済南から泰山への汽車の切符の予約も日本で出来るでしょうか？済南では市内観光バスツアーがあるのではないかと思いますがぶっつけ本番ではちょっと心配です。
　タクシーだと200元くらいで半日観光できると思います。タクシーはホテルのカウンターで手配して貰う方が安心です。
済南から青島まで観光ガイドを手配することも考えられますが、結構費用がかかるのではないかと思います。
青島のホテルは私が滞在している「王朝大酒店」だと荏原割引料金で5つ星で1泊400元（日本のビジネスホテル並み）です。よければ会社で予約しますから連絡ください。以下のような日程でどうでしょうか？

17日：鹿児島ー上海ー済南　（済南泊）
18日：AM/済南市内観光　　PM：済南（13：21）ー泰山（14：14）移動（泰三泊）
19日：AM/泰山観光（Taxi～ケーブルカー）　PM:泰山市内観光　（泰山泊）

20日：AM:曲阜観光（Taxi）　PM：泰山～青島移動（汽車）…（青島泊）
21日：青島市内観光　（青島泊）
22日：労山観光　　（青島泊）
23日：AM/上海へ移動　”注”今、泰安という町の名前は「泰山」（駅名も）に変わっています。体、方針がきまりましたね！
日本で手配できない範囲でこちらで何かすることがあったら連絡ください。青島のホテルはぜひ私と同じところが便利だと思います。
青島滞在中はフリーにしておいてください

慶二さん
おはようございます。
チンタオは最近、不順な天候が続いていましたが、今朝は気持ちよく晴れて秋の青空です。
チンタオは日本の東北（水戸）と同じくらいの緯度ですから、鹿児島より、かなり涼しいと思います。
現状で最高気温が20度、最低気温が10-13度程度です。チンタオ郊外の労山と私の部屋のベランダからのチンタオの風景の写真があったので送ります。こちらで会えるのを楽しみにしています。

恒雄くん：
22日の夜は喬さんご一家と食事をするかも知れません。
曲阜からチンタオへの間、汽車かバスか分かりませんが僕の携帯から貴方に電話をしましょう。20日と21日は間違いなく王朝大酒店に泊ります。　23日に昼過ぎの労山の観光が終わるようなら、夕方にチンタオを発って上海に帰るという案もあります。　もう一晩そちらでゆっくりして23日に上海に帰るのもかまいません。その場合は今回は揚集や南京行はキャンセルです。

慶二さん
日程1日ずれの件、了解です。

小泉首相が靖国参拝
昇殿・記帳せず
就任以来5年連続 私的色を強調
中韓反発に「心の問題」

21日夜青島到着、22・23日は青島滞在として、21-23日の王朝ホテルを予約しております。
23日上海移動になったら、その時に変更しましょう。泰山を歩いて上るのは相当きついと思います。（3～4時間の登り）ロープウェイから見たら、急な石の階段が延々と続いていました。
ロープウェイで上って、徒歩で下山のほうが楽でしょう。慶二さんは黄山を登られるくらい元気だから問題ないかもしれません。

17日の朝：喬さんが会社の車で迎えに来てくれた。
　旅立ちの朝はいつものことながらワクワクするものだ。
ところがテレビを入れたらとんでもないニュースが流れてきた。
小泉純一郎首相が今朝、靖国神社を参拝した、と告げている。
「なにも今日行かなくてもいいのに、タイミングが悪いな、まさかデモはないと思うけど。」
日本国民の半分が反対し、国益の面からもマイナスの方が多い。まして最も近い二つの隣国が猛反対をしている靖国参拝を今する必要があるのだろうか？と思う。
　来年、総理を辞めてからなら、8月15日だろうが何時だろうが、羽織袴で心置きなく参拝したら良いのにと思う。
　ガス田や竹島の問題とは違って、こういう心の問題は「おもいやり」の心の方が「言い分」に勝る、と思うのだが。
「・・・じゃあ」と一方が言う「・・それ・じゃあ」と相手が反論する。
　二人の言い分にそれぞれ正当性があったとしてもそれでは対話になってはいない。TV評論や週刊誌での国内議論も相手の立場になって考えるという「おもいやり」の心からはどんどん離れていくようで寂しい気持ちがする。

空港に着くまで喬さんとは靖国参拝問題での話し合いが続いた。

鹿児島空港に着く。初めて東方航空の事務所を訪れた。窓の外には目の前に大きな機体が見える。作業服をきた人たちが足早に動き回っている。機体の点検でもしているのだろうか。

こういう形で中国へ旅立つのは初めての経験である。

これも喬さんと親しくなれたからのことで、一般旅行者と違った気持ちである。

そういえば、一年前の三月は初めての長沙へ、しかも１００日滞在という、この時も、いつものツアーや観光とは違った期待感と不安感に包まれていたものだ。

出発まで随分時間があったので事務所にスーツケースを置かせてもらい出発カウンターへ出てみた。喬謹さんから「今日の乗客状況はいいです。満席に近いです。」と聞いていたが、ロビー内は確かに国内便なみの混みようだった。

乗客数が伸びず１１月からは、折角、昨年から一便増えていた月曜就航便が廃止になるという。鹿児島の場合、ビジネス関係の利用客が少ないのだという。観光だけではやはり無理があるらしい。

中国全土からのビザが解禁になったので中国からの観光客の勧誘も計ろうとしているのだろうか。鹿児島へは安い運賃で入国出来るのだろうから入国を鹿児島にして帰国を福岡に、或いはその逆のコースを設定して、九州一周の旅などを考えてみてはどうだろう。そのためには南九州の魅力をもっともっと上海その他でＰＲしなければいけない。その方法はなんだろう。

いつも上海便を利用して思うのだが、中国国内の乗り継ぎ便を半額にしたらどうだろうビザ不要の２週間以内に限ってもいい。

例えば、鹿児島～上海を 45,000 円とすると上海～青島の往復を 700 元（9500 円） 上海～長沙を８９０元（１２０００円）もちろんＭＵ中国東方航空利用で。

航行時間が一時間ぐらいの中国国内便の料金が７～８００元、日本円でいま一万円強だから現在の往復運賃四万五千円は高くはないのだろうか。

日本からの、そして上海からの国際運賃も三万円以下になるともっと行きやすいのだろうが。

・・などと考えているうちに上海浦東空港になめらかに（と喬さんは中国人操縦士を褒める）着陸した。

そういえば機内で長沙市に行く市役所の団体と一緒だった。隣の隣に同じ通り会の南洲館の橋本さんがいて，ひとこと会話する。初めての長沙とか。

帰国後、我が協会の交易部に入会のお誘いをし、快諾された。

トイレに行く途中、うしろの席に弓場貿易の弓場氏を発見、香港に行かれるそうとか。

（参考:空港～上海駅間ノバス１時間１０分で１８元･２６０円ぐらい?･でした。）

中国の一日目には必ず訪れる浦東の夜景、今夜の満月はとても美しかった。中国の一日目には必ず訪れる浦東の夜景、今夜の満月はとても美しかった。

昨夜、妻がわが家の窓から城山の上に見える月を眺めながら僕に言った

「貴方は明日は中国でこの同じ月を見ますね。」

と言う言葉を思い出していた。

上海の来るたびに一度は覗いてみたかった和平飯店の老人ジャズバンド。

８時から演奏があるという。時計を見たら7時半。一瞬、躊躇したけど中で待つことにした。客はいないのに殆んどの席に予約カードがおいてある。

小姐が案内してくれた席からは、どの席も大きな柱が前にあってステージは見えない。ざんねん！

入場?料５５元だったか、飲物は別なのか?２０元前後のプライスがついていた。青島ビールをオーダーする。撮影はＯＫだというのであちこち写した。

演奏が始まる頃になると、団体というかグループ客が入ってきた。予想通り?･というか、ほとんどのグループが日本語を話している。

もう、ここは日本国の音楽喫茶。

なぜだろう?･こんなところでは日本人にはあまり会いたくない。

「皆さん、ワンドリンクは確か、込みになってるはずですから。」

案内のダオヤオ（ガイドさん）の大きな声が雰囲気をこわす。
もう今の上海で独りエトランゼなど味わうことの方が無理なのかもしれない。
「サンセット77」「テイクファイブ」「スターダスト！」と口々に言いながら、なにやらメモ紙に書いてガイドに手渡す。ドリンクのオーダーではなく演奏曲のリクエストである。
この時点までは60年代の東京の音楽喫茶を思い出していた。
でみ、演奏が始まると、椅子には掛けずにあちこちからカメラとムービーの乱射？になったのである。
そして、　とうとうすごいことが始まった。
客が交代で演奏中のバンドマンの後ろに立って記念写真を撮り始めたのだ。
プレーヤーも観光バンドを自認しているのだろう。ひとつのイベント（興）と考えれば決して場違いでもなければ他の客の顰蹙をかうシーンでもないのだろう。
年齢層が50代位なので観光ツアーというより会社、企業関係の研修か慰安（似たようなものだが）の団体だろう、まあ、おおいに楽しんでください。そんな気持ちで和平飯店を後にした。

ところで、今度の旅で特に気づいたことは価格のことである。
まず、ホテル代だが、上海で気に入っていた上海駅前のホリデイイン・ダウンタウンが最初の泊りか783元だという。昨年5月は560元だった。便利で四つ星にしては上等なホテルである。
それが今年は783元。仕方ないのでチンタオの帰りも二日予約しようとしたら、1200元だという。勿論、一泊で料金ある。
長沙にいるとき寮を出てから暫く滞在した華程大酒店（三ツ星）が450元を1週間滞在したら350元でいいという。ただし今度の土曜だけは850元だという。長沙市で全国規模の大会があって、3万人ぐらいが全国から集まるからだそうである。
つまり正月料金のようなものだ。
中国のホテルの料金はさようにめちゃくちゃと思ったりするが彼らにはごく、自然のことらしい。
仕方がないので上海駅のホリデイインのほんの2分ぐらい先の上海中亜飯店に変えた。
中のこしらえもホリデイインと遜色はなかった。料金はなんと318元、二日泊って636元だった。
良いホテルを見つけたものだ。ちなみに3階には中国で有名な「上島珈琲」があり、かなり遅い時間まで食事がとれる。
喫茶店といっても日本人好みのレストランである。普通の中華飯店にはないコーヒーはもちろん、牛ヒレステーキやサーロインもある。
なにより嬉しいのは生野菜のサラダがあることだ。
この手の喫茶店は長沙にも何軒かあって辛くないのでよく食べに行った。
ただ、料金は当地の相場からすれば太貴（タイグイ）である。
以前はホテルは南京東路～西路を走る地下鉄2号線沿いが多かったけど上海駅～徐家匯～上海体育館を走る1号線の始発駅、上海駅付近のホテルのほうが何かと便利なのが分かった。
新天地などで遊んでぶらぶらと人民広場まで歩き、地下鉄を利用してもよし、タクシーで帰っても安いものだ。
なによりは、どこか近辺に一日旅に出かけるとき利用する上海駅や高速バス停のある上海体育館に行くのに便利がよいのである。
そういえば地下鉄の切符（カード）が又、換わっていた。
昨年は確か、裏が磁気（こげ茶）の手前から挿入して1メートル先に飛び出すカードを抜くとバーが通れるシステムだったが、今は丸い面のそのカードを当てるというかかざすだけでバーが空くという形式になっていた。
まだ導入まもないのだろう。カードの裏をかざすのか、表を当てるのか分からず、どぎまぎしている人が多い。
悪い予感がした。僕の前の若い女性がバーが動かず慌てた。
多分、機械がカードを読み込まなかったのだろう。

もう一度戻って当てなおせばいいのに僕の顔を見ている。
仕方がないので僕のカードを機械に当てた。
するとバーが開き彼女は通って行った。今度は僕のバーが開かないはずだ。そう思って祈るようにバーを押したらスッと通れた。何だったのだろう？
もし通れなかったら・・・・と考えないことにした。
国内で飛行機を利用する時はよく考えて買った方が良い。今回、済南行とチンタオから上海帰りを午後の便にしたのは運賃が何百元の単位で違ったからである。どうかすると一便違いでそれぐらいの差が出るときがあるのだ。

初めての済南空港に着いたのは夕暮れだった。

親切なボーイ（喬クン）に聞いて、夕食はホテル最上階（22階）のレストランでとることにした。昨年なら無理してでも繁華街に繰り出すところだが聞けば済南には歩行街はないんだと言う。
青島ビールに焼きギョーザあと野菜炒めのようなもので夕食を済ませ部屋に戻ってしばらくしたらドアがノックされた。
一瞬、昨年のひとり旅の記憶がもどった。
・・・・・・・・可愛いい？？小姐のご訪問か？
ドアをそっと開けると、
色白で長身のボーイの喬クンが頼んでいた済南市の市街地図をもって立っていた。
何か話があるというので中に入ってもらった。
余談だけど、時々、このような応接室つきのホテルにで出くわすことがある。ドアを開けると10畳ぐらいの大きな応接間になっていて、豪華なソファに大型TVを備え寝室との間は大きなドアで仕切られている。
ここ「吉華大厦」もそんな四星ホテルである。湖南省の岳陽市のホテルはこれ以上の設備だったのを思い出した。房銭は300元台の並価格なので得したよ

うな気分になる。　多分、星の判定（ランク付け）は部屋の豪華さではなくホテルの設備できめているらしい。
…彼の話というのは次のようなことだった。
先生は明日の朝、泰山に行かれます。そして、その晩は泰山に泊り、翌日、曲阜に行かれその後汽車で青島（チンタオ）に行く計画ですね。
折角、済南に来ていながら、美しい済南の泉を見られないのは残念です。
それと、曲阜からチンタオは汽車だと7時間かかります。チンタオに夜中に着くかもしれません。心配です。
そこで提案ですが、こういうのは如何ですか？
明日、タクシーを一日貸し切るのです。
一日で泰山に登って、曲阜を見学して又、ここ済南に夜、戻って来ます。
翌日、昼過ぎまで、済南の観光を済ませ汽車か、高速バスでチンタオに行かれたらどうですか？済南～チンタオは高速バスで4時間足らずです。
夕方の6時過ぎにはチンタオに着きますよ。
「もし、よかったら今から懇意にしている運転手をここに呼んでもいいです。」
・・・・・・・と言うのだ。
一応、ぼくも泰山のホテルは予約していたけどスーツケースを持って曲阜の何処に預けるのか、と迷っていたので、経費（チャーター料金）さえ折り合えば、と乗り気半分というところだ。確かに済南観光を上海発をケチって午後の便にしたお陰で今日果たせなかったのを悔いていたのだ。
僕はボーイに言った。
「確かに良い案ですが，ほんとうに一日で泰山･曲阜を観光出来ますか？

僕はバスやケーブルじゃなく足で登るつもりなんですよ。」
ニコニコと笑顔をたたえながらボーイの喬クンがいうには
「経験があります、この提案は多くの旅行者にいつも感謝されてます。」と
…30分程して案内するという運転手を連れて喬クンが来た。
頭の毛の薄い丸顔の男である。上客を前にして顔中が笑顔である。
「お客さん、心配いりません。泰山、ゆっくり登ってきてください。
3時間でも4時間でもタクシーは逃げませんね。
明日の観光も付き合います。」
「じゃあ二日間のチャーターで幾らですか?」
「普通は一日チャーター700元ですが、二日
チャーターで700元でいいよ。」
これで、心配していたスーツケースを持ってバ
スに乗らずに済む。
リュックひとつでしかも不要なものは車に置いた
まま観光出来る。
昨年の『中原の旅』を思い出した。
『済南は黄河も見に行きたいけど大丈夫です
か?」丸顔の運転手が人差し指と親指で○を作っ
て見せた。
これで今から開いたままのスーツケースを整理しないで放ったまま寝れると思う
と嬉しかった。
街に出なかったのでいつも旅先で感じるその町の印象はないが**済南**という土地の
ことを考えていた。
済南（jinan)という都市名を意識したのは実はとてもとても新しい。
実は昨年、協会の中国語会話教室にネットを通じて若い女性からの問合せがあっ
た。
「私は来年、三月より済南の大学で日本語の教師をすることになったのでそれま
で、中国語を特訓をしたいのですが、どうすればよいのでしょう?二人一組で習いた
いのですが。」

済南市が山東省の省都であることも知らなかった。青島の方が省都だとばかり思
っていた。それから、地球の歩き方（ダイヤモンド社）を読んで歴史的には春秋時代
の**斉の都**だつたこと。
その王が釣りで有名な「太公望」だということや観光的には街のあちこちに湧き出る
「泉の城」として有名なこと、それにもまして、満洲事変、シナ事変へと繋がる**「済
南事件」**（1928年5月）の舞台となったところだということも初めて知ったので
ある。

朝、7時に目覚めた。こちらに来て3日目の朝である。今日も快晴。
7時半に運転手がニコニコ顔で迎えに来た。
朝ごはん、食べたか?と聞くのでまだだと答えると、連れて行く、と言う。歩いて2,
3分の所にそれらしき店が並んである。店先ではマントウを蒸している。
「何食べたいか?」と聞くので「カユ」と言うと店の人となにやら話している。
いままでホテルのお粥（zhou）以外で美味しかったためしがない。
念のために「白粥」と念をおしたけど、やはり色つきの、猫も食べそうにない粥がで
た。
餃子はあるか?というと「ある。」というのでそれを食べた。歯がたたないほど硬か
った。近くの店でパンを買った。かじりながら行くことにした。
ぼろのサンタナはよく走る。メーターを見たら120キロ出している。100キロ
のスピードで目の前に迫るトラックをクラクションを鳴らしながら追い越していく、
しかも反対車線に膨らませながらの追い越しだから乗ってる方は心臓に悪い。
曲阜まで2時間半で行くと言う。8時20分にホテルを出発したから、事故に遭遇
しなければ11時前には曲阜に着く予定である。
2時間もあれば三孔を回れると運転手は言う。
なんと10時40分に孔子墓に着いてしまった。
正式には「孔林」という。
入ると女性が付きまとってくる。
よく分からないがガイドらしい。10元で良いと言うけど言葉が分からないので雇
っても仕方がない。

こういう観光は日本人ツアー客が来ていると一番良いのだが、不思議なことにまだ、こちらでそんなグループに出会ったためしがない。
だから、曲阜観光はめぼしい写真で見たところを眺めるだけしか出来ないのが残念である。
「孔林」から「孔廟」までは喬さんの車で移動し、2時間後に会う場所を決めて一人で「孔府」まで見学することにした。
どこをどう歩いたかハッキリしない。最初に行ったところが、どうも孔子の子孫が暮らしていた邸宅・「孔府」らしい。
出口を間違えてとんでもなく遠いところに出たらしく二輪車で「孔廟」　に戻る（写真中）ことになった。
解説も無しに次から次へと建造物を眺める、これが僕の中国観光のパターンでその時その時は感じ入るものがあるのだけど、次から次へと忘れていくのが残念である。
念の為に、写真を撮るのだけど目印になる記憶が消えてしまう。
特に曲阜のような歴史的な建造物が多いとホォーツ!ホォーッ!とため息の連続で見終えたら何にも残ってない。お恥ずかしい次第である。

さて、曲阜を12時事14分に発って一時間。一路、泰山へ。
タクシーが大衆橋横の中天門行きバス発着所に着いたのは1時15分だった。
バスがなかなか出発しない。
20分は待っただろう。要するに満席になったらスタートするらしいことが分かった。
一席空いてるのだ。
僕のメモによると1：50スタート～2：09着とあるところをみるとバスの切符を買ってから35分かかったことになる。長いはずだ。

次のメモには2:15分スタート・・・4:15分南大門着とあって、15を消して25と書き換えてある。
南大門の鳥居から天街まで階段がまだ10分ぐらい続いたのだろう。
天街から**玉皇頂**まではまだ少し階段を登らなければならない。
しかし来るまえに決めていた自分の目標は対松亭から南大門へ続く、1633段の難所十八盤を登り切ることだった。
十八盤は天梯（てんてい）とよばれ、800mで400mの高低差があるといわれている。
特に**南天門の緊十八盤は**、下を見ると足がすくんでしまうほどで、這うように登らなければならない。
登り切ったあとにある天街とはどんなところなんだろう。
将来、ここ天街を訪れることはあるかも知れない。
中天門からロープウェイに乗れば僅か50元で8分という時間でここを訪れることが出来る。
しかし、自分の足で2時間かけてここに到着する経験はもうおそらく一生ないだろう。
そんな気がしての『泰山登山」だったので天街から登ってきた十八盤を見下ろすと何ともいえない達成感に酔うような気持ちだった。
もう上**玉皇頂**は余り魅力はなかったのがその時の実感だった。
確かに最後の20分はきつかった。
3段上って一呼吸、また三段上って二呼吸つまり10分登って10分休憩といった感じだった。
幸運にもひざは何ともなかったのでホッとした。
天街を20分ほどうろうろしていた。

玉皇頂から下りてくる人達、ロープウェイで上ってくる人々、十八盤を上り終えた人たちで天街は混んでいた。
店を覗いてみたがみやげに買いそうなものはなかった。
古いお店が多く、たいていの店は二階が宿になっているようだ。
泊って朝、ご来光を拝む人たちが多いのだろう。
もう暫くいたら好きな夕日を見ることが出来るかもしれない。
そう思ったけど運転手の喬さんが待っているのが気になったのと、あたりの　雰囲気から「もしかしたらロープウェイの最終時間に間に合わなかったら大変。そんな気がして、泰山の頂き（付近を）後にすることにした。
　こうして僕の今回の旅の第一の目的五岳の第一聖山·泰山登山を終えた。
ロープウェイとバスを乗り継いで最初の大衆橋に着いたのは5時15分過ぎ頃だったと思う。運転手の喬さんが
「6時過ぎだと思っていましたヨ　　早かったですね。」
　ニッコリびっくり顔で迎えてくれた。
　もうすっかり暗くなった済南の街に着いたのは7時が半分ぐらい過ぎたころだった。約束していた夕食を喬さんと一緒にとることにし、彼の案内で済南名物を注文した。（左上の写真はその時食べた食事のあとで、食堂の小姐に撮ってもらった。）
　こうして旅の第一章は明日の済南（ジナン）市内観光を残すだけとなった。
当初、スーツケースを引きずりながら幾多のハプニングを期待？しての泰山旅行だったが結局、心ならずも、お金を使っての安易·安全な運転ガイド付きの旅になったのである。
　済南市内観光は全く、想像したとおり、公園入口に車で着いて、何分後に車と待合せをし、次の観光地へ。その繰り返しで何箇所かを回る。チャーターの気楽さに任せての半日が過ぎた。
済南の写真だけは適当に写してきたので
　こころは時々、夕方に着くであろうチンタオの

街と、ニコニコ笑顔で迎えてくれる従兄弟の恒雄クンの顔が浮かんで消えた。
　運転手の喬さんが汽車より高速バスの方が早いかもしれない。
　汽車は駅で待つ時間が長いね。というのでそうすることにした。
　一度は汽車に乗りたかったけど、4時間ぐらいなら確かに20分間隔ぐらいで出るバスの方が楽で快適なのは分かっていた。
　とうとう**市街地を見ることなく済南市を離れる**ことになった。
　長距離バスのターミナルは二つあるらしい。
　最近、豪華バスもあるらしいというので喬さんが連れてきてくれたのは**「済南長距離総合バスターミナル」**だったが、
たまたま切符売場で買った番号のバスはとても豪華とはいえなかった。
　（乗った長距離バス）チンタオ行きのその次のバスも後ろに控えていたがまあ、似たような型だったので乗ることにした。
　バスの中ではおいしい牛乳に菓子パン，降りるときは雨も降らないのに雨傘のプレゼントがあった。企業間の競争が激しいのかナ。
チンタオへの初踏み入れは高速バスターミナルだった。
飛行機や鉄道に較べるとやはり感動に乏しいのは否めない。
バスから降りたら早速、恒雄くんに電話を入れた。
　「どこのバスターミナルかわからないけどタクシーでホテルまで行くから着いたら電話する。」そう言ってタクシーに乗った。
「　かかっても 20 分位でしょう」従兄弟が言ってたけど、段々、山道に入っていく。なんだか市街地から離れていくようだ。

チンタオは海岸線と聞いていたイメージとかけ離れた初印象だった。

後になって地図を見たら着いたバス停は「青島長距離バスターミナル」といってホテルのある**第一海水浴場**に行くには青島一の大きな公園「**中山公園**」の中の山道を上ったり下ったりしたのだった。一瞬だけど、行き場所を間違っているのでは?と不安がよぎる。旅行者気質はなかなか抜けないものだ。寝る前の

毎度の学習、ベッドの上で20分ぐらい、ホテルで買った青島市街地図で研究に耽るのだった。

ホテルのロビーに従兄弟の恒雄くんがニコニコ笑顔で迎えてくれた。

「まる3日、青島滞在なので、明日はのんびりとチンタオの海岸を歩きませんか。」

幾つかの観光スポット巡りものんびり、ゆっくりしましょうよ。」

計画では半日観光だったのが、思ってもない余裕の行動となった。

朝9時半、匯泉王朝大酒店の外は日は照っていたけど風があり肌寒い感じである。

ホテルのロケーションが良い。

道路(南海路)を跨ぐとそこは砂浜である。

時間にしたら1分もかからない距離なのだ。

この肌寒い朝なのに何人か海水パンツ姿で砂浜をジョギングしている。

海まで80mはあるか?恒雄くん曰く

「引いたら200mぐらいなるよ。」「夏は波打ち際は人で見えません。」

海岸へりを第二海水浴場の北側にある1949年前官僚や資本家の別荘地であった「八大関景区」へ歩いた。

途中の岩の上、あちこちの新婚さんの記念写真撮りに出くわす。

ちょっと数えただけで8組はいた。

やはり、一番良い撮影スポットがあるのか、前の組の終わるのを待っている。

ちらっとドレスの中が見えたが下はジーンズのようだ。

身はジーンズでも心は無垢のドレスであってほしいものだ。

ロシア人が建てて国民党総統蒋介石が住んでいた「花石楼」その他、八大関賓館、元帥楼などを見た後、どの旅行書にも紹介されていないけど是非、訪ねてみたい故居があった。

『**康有為故居**』である。

康有為が晩年を日本人の妻と共に過ごした住いである。地図で調べてみたら、なんと、僕の泊まっている王朝大酒店の近くだった。 公主楼を見た後、恒雄クンが

「まず、慶二さんのぜひ見たいところに行ってからお昼にしましょう。」 と、タクシーを利用することになった。

小魚山公園の入口から東へと歩き、突き当たりを右に下る坂道をおりていくと、住宅街の中に小さな洋風建築が姿を現した。

中国近代史の中でその名を知られる康有為が晩年を過ごした建物である。康有為(KangYouWei)は、1858年に広東省南海県で生まれた。このため「康南海」とも呼ばれている。

1898年、当時の光緒帝のもと戊戌(ぼじゅつ)維新を変法論の主唱者として、西洋の近代国家体制を学んだ指導。先進的な中国人として、また傑出した政治家として知られている。

1917年、康有為は初めて青島を訪れた後すぐに大連へと赴任する。

この短期滞在の間に、青島の緑の樹々と紺碧の海の風景は康有為に強烈な印象を与えたようで、1923年には再び青島に帰ってきてここに居をかまえた。

この居は「天遊園」と名付けられ、1927年に没するまで、青島を訪れるたびにこの天遊園に居住したという。

さて、中国近代史のなかで康有為(KangYouWei)の存在というどのようなものだったのだろうか？　それには当時のアジア情勢から眺めていかなければならない。.

日清戦争の敗北は中国の知識人に深刻な衝撃を与えたのだろう。

下関条約調印の報が伝わると、挙人（郷試に合格して会試を受ける資格の出来た者）1200余人が**康有為**の呼びかけに応じて連名で「条約を拒否し、政治制度の改革を行って屈辱から抜けだそう」という上書を清朝に提出した。

政治制度の改革とは　日本の明治維新を手本にして国会を開き憲法を制定して立憲君主制を樹立するという運動である。その改革（変法）運動が広まっていくと、

革新的な若い知識人たちは各地に結社をつくり、新聞や学校を通じて啓蒙運動を行っていった。

特に梁啓超（1873～1929）は科挙に失敗した後、康有為に師事し、上海で新聞を発行して変法自強の論をひろめ（1896）、また翻訳を通じてヨーロッパの学芸の紹介に努めた。

康有為のたびたびの上書はやがて若い光緒帝（位1874～1908）の心をつかみ、光緒帝を動かした。

ついに1898年6月、光緒帝は変法の詔書を発布し、康有為・梁啓超・譚嗣同（たんしどう、1865～98）ら変法派を登用し、戊戌（ぼじゅつ）の変法（1898.6～98.9）を開始した。

一方、改革に反対する保守派は西太后を動かして変法派の弾圧をはかった。

1898年9月、西太后は光緒帝を幽閉し、変法派を逮捕・処刑した。

康有為や梁啓超は日本(香港説もある）に亡命したが、譚嗣同は処刑された。

結局、新政はわずか3ヶ月で終わってしまったのである（百日維新）。

戊戌の政変後、西太后は三度摂政となり、保守・排外派が政治を動かすようになった。　1898年(明治31年）9月の時点で、康有為は40歳、梁啓超は25歳、譚嗣同は33歳、光緒帝は24歳だっ**た。**

この頃、つまり日清戦争が終わって3年後、日露戦争の勃発まであと6年という時代の日本からみた対中国そしてアジアの状況はどんなだったのだろう。

日清戦争敗戦の後清朝政府が13名の官費留学生を日本に送り込んで以来中国からの留学生は私費を中心にどんどん増え続け、孫文、康有為、黄興、張継、宋教仁、陳天華など、まるで日本は革命の戦士のふるさ とのように彼らはのびのびと振舞っていた。

明治の日本人はアジアが外国に侵略されていることに義憤を感じ、なんとか各国が 腐敗した制度を改革して立派な国家になってくれるよう、傑出した人物には物心とも に応援した。

アジア主義ともいうべき理想に燃えて西欧列強に立ち向かったのは政府の要人だけで はない。多くの民間の志士が純粋に支援活動し続けていた。

1897年(明治30)9月に横浜で宮崎滔天は孫文と運命の出会いをし、意気投合する。

滔天はさっそく孫文を犬養毅に引き合わせ支援を求めた。　1898年(明治31)康有為が光緒帝とともに断行した「戊戌の変法」は西太后ら保守 派の反撃に会い、康有為と梁啓超は命からがら香港に亡命する。

滔天は康有為を日本に招いて孫文と会わせ、一つにまとまるように説得するが、皇帝 の信任を得ていた康有為はプライドが高く、なかなか孫文の意見と合わない。

孫文は清朝を倒す革命を目指しているのだが、康有為は立権君主制度に固守して激論と なり、ついに妥協点を見出すことはできなかった。

しかし滔天は康有為を犬養毅や伊藤博文、大隈重信などに紹介している。

その頃、中国では　山東におけるドイツ人宣教師殺害事件（1897）を口実にドイツが山東半島に進出すると、義和団を中心とする排外運動が起こった。

義和団は、1899年末には山東省から河北省に入り、「扶清滅洋」（清を扶（たす）けて、西洋を討ち滅ぼそうの意味）をスローガンに掲げ、各地の教会を襲撃し、宣教師やキリスト教徒を殺害し、鉄道や電線を破壊し、1900年6月には20万人の勢力となって北京に入り、日本およびドイツ人の外交官を殺害した。

6月21日、清朝の保守・排外派は義和団を利用して外国人を一掃しようとして列強に宣戦を布告した。 清軍による北京の外国公使館に対して攻撃が始まり、また華北一帯にわたって教会・外国人に対する大規模な攻撃・殺戮が始まった。列強はこれを機に在留外国人の保護を名目に8カ国（日本・ロシア・イギリス・アメリカ・ドイツ・フランス・オーストリア・イタリア）が共同出兵にふみきった。映画『北京の55日』はこの時の映画である。

康有為のその後については・・・

かれの改革思想は、君主立憲政体による共和制社会の実現にあった。しかし、当初の改良思想も、亡命後はしだいに後退し、光緒帝の復辟運動に終始した。その後の16年間、アメリカなどに亡命し、帰国したのは、中華民国成立後で、そのころには反動派と烙印されていた。

1917年、宣統帝の復辟運動に参加し、弼徳院副院長を授けられたが、運動は失敗して、アメリカ大使館の保護をあおいだ。1927年、国民革命軍が上海に迫り、青島に逃げ、失意のうちに病死した。

チンタオは翌日の『労山登山観光』をはさんで3日間、ホテルのある第一海水浴場付近を中心に西側の天主教堂(中)から旧市街「中山路商業区」を経て「桟橋」までと、新市街のジャスコを中心に贋物店のひしめく「ジーモール」そして、夜は恒雄くん、行きつけの日本語の話すホステスのいる『カラオケバー』(左写真)などを体験した。ここには本店と支店と二日間遊びに行った。

一晩は僕が持ったが700元位だったと思う。日本円にして1万円ほどだった。 恒雄君の友人も一緒だったので、一人当たりにすると3千円ということになる。こちら(日本）のスナックと余り変わらないようだ。

…思い出したことがある。

昨年、長沙にいるとき、範先生が「カラオケバーに行きますか?」と意味ありげに誘われたことがあった。

普通の「カラオケ（個室で何人かで行って歌を唄うだけ）」とはちょっと違うのらしい。

「どれぐらいお金が要るのか」と聞くと、「初めに気に入った同伴女性をきめます。」という。 もっとも、決めなければ無料らしい。決めると、その段階で日本円で一万円ぐらいの料金がかかるのだと言う。

傍が「女性は横にはべらして一緒に歌を唄うだけでですか?」と訊くと、

「そうです。」という。

「ぼくはいつも指名しませんよ。」と範先生はいう。

「幾らぐらい持って行けばいいんでしょうか?」

「三万円もあれば大丈夫かな」「唄うだけなら5千円ぐらいあれば」

実はこの時のことはよく覚えている。鹿児島からある知り合いが仕事で長沙に来て僕に言ったことの続きだったから、

「今回で長沙二回目ですが、いつも公の歓待がうんざりするぐらい続き、もう辟易です。本当は、もつと庶民レベルの夜の世界を体験したいのですが」

と、ジャーナリストの知り合いが言うので範先生に尋ねたのだった。

ちなみにそこに行く約束をした時は彼が帰国する前で、八時に通程大酒店で待ち合わせをしたけど、携帯で「あと1時間は抜けられそうにありません。」というのでカラオケ行きはキャンセルになった。僕も滞在中の金銭感覚ではとても

惜しい額なのでホッとしたことを覚えている。

青島での訪問先はあと、中山公園は3時間ほどブラブラした。最高の天気で園内は菊のデスプレィでいっぱいだった。日本流に言うと『菊祭り』である。

日本の庭園と寸分変わらない。色彩感覚の違いはある。真紅があちこちに配色されている。公園内にウエディングドレス人形（フィギュア）が立ってたりする。

あと青島ビール工場見学と資料館に行った。昼間からジョッキで生を飲まされる。オール中国語の説明でさっぱりだった。

世界のビールが陳列されてたけど日本のはアサヒスーパードライだけ、何百本もある缶を数回見直してみたけどスーパードライの色違いが2本だけだった。ちょっと寂しかった。

アサヒビールは現在、青島ビールと提携関係にあるのだという。そうか、と合点がいったけど、世界の著名ビールの展示となると、キリンやサッポロ、サントリーがないのは気になった。

三日目の朝、ホテルの外ですごいチャイナ風の音（笛）と太鼓の大合奏が始まっていた。道路を隔てた三叉路で20名ぐらいの真っ赤な制服（衣装）を着たグループである。

実はこのカップルの男性は日本人しかも鹿児島県の笠沙の出だそうである、女性の方は中国・大連人。

昨夜、ホテルの日本料理店で男性の親族達がカゴシマ弁で騒いでいて、その隣合わせだった。

ホテル前玄関でのセレモニーは大変な賑わいだった。

爆竹の中で獅子舞の曲芸が続き、『私もこちらに来てこんな派手な結婚式は初めてです』

と恒雄クンの会社の上司がデジカメ片手に語っておられました。　おかげでいい見学をさせてもらいました。

この後、僕の旅は労（正しくは労の左に山偏がつく）山の一日登山と上海近郊の水郷同里の観光が続く。どちらも、思い出多き旅だった。

労山は西安の『西岳華山』に石の質感や形状が似て切り立つと言う表現より、そびえると言った感がした。

特に、海岸線とのコントラストは、中国では始めて見た山だった。

恒雄くんが「労山は、裏というか、もっと奥の方から登る道があって、そこから、真っ暗な洞穴を登っていきます。

眺めも、スリルも一番だと思うので、そこへ行きます。」と言う。

あとで地図を見たら『仰口景区』と書いてあった。

上がり口付近には道教の庵「太平宮」がある。仰口索道という二人乗りのリフトが10分程、さほど勾配のない山を登ると、次に5元で買った懐中電灯の光だけを頼りにやっと通り抜けられそうな穴倉を時には垂直に近い角度の崖を登ったりして山頂へ出る。はるか下に海岸線が見える。

『こんな良い天気に恵まれて労山に登るのは初めてです。ひどい時は霧で何にも見えないときがあります。」

従兄弟の恒雄君がニッコリ笑って言った。

東方航空の喬さんがいたら「ワタシ　晴れ男ヨ　雨フラナオヨ。」　と自慢げに言ったことだろう。

そんなことを思いながら労山頂上を後にした。

帰りは「歩きましょう」との恒雄君の提案に従って、いくらか紅葉になった木々を眺めながら下った。

参考に・・・・

街を歩いていると、液体の入ったビニール袋をぶら下げている人に出会う

生ビールを家へ持ち帰っているのだ。青島では、これが新鮮な生ビールを手に入れる方法。値段は量ではなく、重さで決まる。こ3元（約50円）で袋いっぱい。

生ビールを外で飲みたいときは、ストローで飲むのが青島流。青島を英語で書くと、„Qingdao"、けれどもチンタオビールに書かれているのは„Tsingtao"。実は、ドイツ語で青島を表記したものだ。

それには当時のアジ情勢から眺めていかなければならない。.

「眠れる獅子」と呼ばれていた清朝が**日清戦争（1894～95）**に敗北し、その弱体が暴露されると列強は争って中国へ進出し、利権の獲得に乗りだした。

日本が下関条約で遼東半島を獲得すると、条約調印からの日後に、ロシアはフランス・ドイツをさそい、三国が共同で日本に対して遼東半島を清国に返還するように勧告した（三国干渉、1895.4）。日本はやむなくこれを受け入れ、11月に遼東半島を清に返還し、その代償として3000万両を受け取った。　そしてすでにシベリア鉄道の建設を進め、極東への進出を強めていたロシアは三国干渉の代償として、1896年に清から東清鉄道の敷設権を獲得した。中国分割の野心を持つドイツは、2人のドイツ人宣教師が殺害された事件を口実に艦隊を派遣して膠州湾を占領した（1897.11）。そして翌1898年3月に膠州湾を租借し（期限は99カ年）、青島（チンタオ）市を建設し、東洋艦隊の根拠地とした。

租借とは、他国の領土の一部を条約によって国が借りることであるが、租借期間中の租借地における行政・立法・司法権は租借国がもつので、事実上領土割譲の性格を持つことになる。　ドイツが膠州湾を租借すると、ロシアは遼東半島南部（旅順・大連）を租借し（期限は25カ年）、旅順に要塞と軍港を、大連には商港を建設した（1898.3）。　イギリスは、ロシアの旅順・大連租借に対抗して、清の北洋艦隊の根拠地であった山東半島北岸の威海衛を租借して東洋艦隊の基地とし（期限は25カ年）、また九龍半島（九龍半島と付属の33島を含み、新界といった）を租借した（期限は99カ年、1898.6）。　フランスも、翌1899年に広州湾を租借した（期限は99カ年）。　列強は租借地を軍事基地とし、そこから内地に通じる鉄道の敷設権や鉱山採掘権をも併せて獲得した。そして自国の権益地帯の独占をはかるために、特定の地域を他国に割譲しないことを清朝に約束させる不割譲条約を結び、その地域を自国の勢力範囲と定めた。ロシアは中国東北地方を、ドイツは山東省を勢力範囲とし、イギリスは長江流域と広東省東部を、そしてフランスは広東省西部と広西省・雲南省・海南島を勢力範囲とした。また日本は台湾対岸の福建省を勢力範囲と定めたので、中国は事実上列強によって分割されたにひとしい状態となった。

済南事件と時代背景

1925年3月、偉大な領袖。孫文が死去し国民党は軍を背景に右派の蒋介石が実権を握った。26年7月、孫文の遺訓を継ぎ 北伐」が宣言されると蒋介石は北京へ向けて北上を開始した。蒋介石に率いられた国民革命軍はさらに北上し、翌28年4月北京を占領し北伐を完成させ、10月に南京国民政府首席に就任し全国統一を成し遂げた。

国際緊張の高まりと日本の大陸侵略

しかし，この時期、第一次世界大戦後の一時の平和、国際協調を実現したワシントン体制は終わりを告げた。

1929年の世界恐慌前後から、国際社会は不況と混乱を強め、ドイツでナチズム、イタリアでファシズム、日本で軍部勢力が台頭し、英，米、仏に敢て挑戦する空気が強まった。

こうした中で日本は金融恐慌・不況に苦しみ中国における勢力拡大を加速した。

すなわち幣原喜重郎の協調外交から田中義一の強行外交に転じ、

統一中国の出現を牽制した28年の山東出兵、張作霖爆殺事件から31年の満州事変へと、中国大陸への侵略を強めていた。

済南事件　1928年（昭和3）5月，第2次山東出兵断行中の日本軍が，中国山東軍の済南（ちーなん）で同地を占領し，北伐途上の中国国民革命軍と衝突した事件。金融恐慌の中で成立した田中義一政友会内閣は，中国の国民革命が日本帝国主義の既得権益を侵すことを阻止しようとして，まず1927年2,000人の軍隊を山東省に派遣した（第1次山東出兵）。これはまもなく撤兵したが，1928年，北伐再

開により，日本政府は再び多数の軍隊を派遣し，済南を占領した。そこに，国民革命軍が入城してきたため，衝突，市街戦となり多数の死傷者が出た。

この事件で，日本政府は，中国人が日本人在留人を殺したとデマ宣伝し，軍隊を増派し（第3次出兵），中国北部一帯を占領，武力を背景とした交渉を行った。1929年妥協に達したが，このことは，中国民衆のナショナリズム感情をあおり，反日・反帝運動として燃え上る結果を生んだ。

済南事件

西田畊一（こういち）在済南総領事代理が酒井少佐とともに蒋介石と会見していた五月三日の午前九時半頃、事件が発生した。

日本側の説明だと発端は、国民革命軍の正規兵約三〇人が城外の商埠地内で満州日報の取次店を営む在留邦人の吉房長平宅を掠奪したことにはじまる。そして、この知らせを受けた久米川好春中尉が率いる日本軍約三〇人と襲撃した中国兵約三〇人との間で銃撃戦が開始され、近辺でも複数の個所で射ちあいが発生したとしている。

東京朝日新聞

山東出兵に廟議一決し
熊本師團に動員令下る
千葉歩兵第一聯隊にも
けふ午後上奏御裁可

あす聲明書を發表

二十三日門司出帆

駐在部隊を急派

北軍の

山東出兵を伝える新聞記事

実態は、国民革命軍の反日宣伝をめぐる紛糾かと推定できるが、吉房宅は、日中両軍が激戦を交わした麟趾門街からは七〇〇メートルほど離れた場所であり、軍事衝突の直接的な誘因とは考えにくい。

一方、中国側の見解だと、病気の第四〇軍兵士一人を病院につれていく途中で、日本兵に阻止されて言い争いとなり、発砲されたという(この時、中国兵一人と中国人人夫一人が死亡)。ずれの言い分が正しいか検証は困難であるが、第四〇軍第三師歩兵第七団の将兵約一二〇〇人のうち、一〇〇四人までが約二時間の間に捕虜となっており、日本側一〇人に対して一五〇余人もの死者を中国側が出していることから、中国軍にとってこの銃撃戦は突発事であり、計画的だったとは考えにくい。

大規模出兵を望んでいた強硬派の酒井隆少佐が打電したものを陸軍省が流したものといわれている。こうした情勢を背景に、現地の第六師団長は責任者の処刑や関係部隊の武装解除など五ヵ条の期限付要求を中国側に交付した。

予想しない事態に中国側は驚き、回答期限の延期を要求したが、日本軍側は、軍の威信上已むなく断然たる処置に出て要求を貫徹」すると通告したのち、八日早朝から済南城に対する大規模な攻撃を開始し、済南周辺を占領した。

このような日本側の強硬姿勢は、北伐軍の進攻を遅らせ、張作霖政権との間で懸案となっている中国東北地方における鉄道問題等の契約交渉の成立をも視野に入れたものといえよう。

これに対し、日本軍との決戦を回避した蒋介石は、中国軍を撤退させ迂回して北京へ向かい北上したため、交戦は短期間で終わった。そして外交交渉に移り、二九年三月に合意が漸く成立し、日本軍は撤兵する。（小池聖一）

01999年から始まったケイジの中国漫遊記「ケイジの中国ぶらり旅」HPにアップしてきた旅日記の2005年秋

10月17日から10日間の『恒夫ちゃんと李黎さんと回った旅日記』です。

この後、2006年に内モンゴルから南のアモイまで旅しました。その3年後に山西省（南昌）の旅を永留くんとの二人三脚までが長いぼくの中国の旅でした。

中国ぶらり旅（内モンゴル・山西省・北京・アモイ・客家）

2006年9月6日(水)～20日(水)(1

4日間)

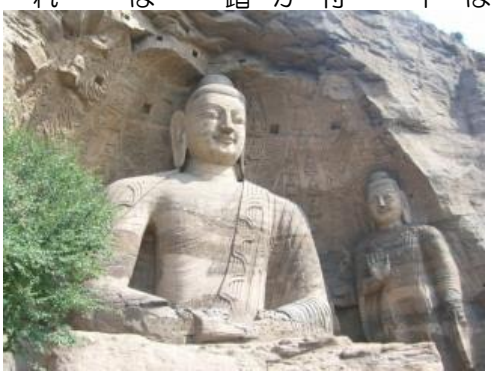
2

6・8・10　改訂

昨年登った泰山で五岳のうちの四岳を登った。残るは北岳恒山だけである。でもよく調べてみると恒山（2017ｍ）への登山はマイナーなようで、泰山や華山のような人気ルートはないという。

大同市の南東**恒山風景名勝区**の崖の上に張り付くように建っている有名な仏教寺院・**懸空寺**こそが恒山の中腹にあるので、そこに行くことで五岳を踏破したことにしようと思う。

また、今回訪ねる**雲崗石窟**で中国三大石窟（他は敦煌の莫高窟、洛陽の龍門石窟）もクリアする。**五台山**は中国仏教四大（山）聖地の1つに数えられている。



四川の蛾眉山、寧波の普陀山、は既に訪れたのでここを訪れるとあとは浙江省の九華山を残すだけである。

そういうわけで今回訪問予定の懸空寺・雲崗石窟・五台山の3か所はぼくの中国ぶらり旅の中の必見のカリキュラムなのである。

実は、今年の旅のコースは現地に行ってから変えてしまったのである。当初、五台山のあとは、そのまま南下して太原に行き、その後、世界遺産『平遥』を2日ほど、のんびり歩き回ろうと考えていた。

できれば折角だから黄河の「虎口瀑布」には行けないだろうか、とHPをあさって見たりした。

変わったのは旅も半分が過ぎた頃だった。

草原を馬で駆け、砂漠を駱駝で徘徊し、山上の寺を見て回っているうち、知人が日本語教師を務める福建の海岸地アモイのコロンス島が大きく目の前に広がってきた。

それに包頭から乗った大同行の硬寝台車の中で横に座った男の人が話しの中で『平遥』はつまらない所だ、と言ったのも影響した。

「大石さん、こちらは暑い夏ですよ、Tシャツで毎晩歩いてるよ。」と携帯電話の向うから上山先生数回のラブコール。（に聞こえる。）

よし、平遥はやめて北京に戻ってアモイに飛ぼう。アモイには美しい音楽の島・コロンス島もある。

近くには、いつかテレビで見た土楼「**客家**」の里があるはず、うまくいけば一日ツアーで行けるかも知れない。

そんな訳で、中国を北南へ駆ける14日間の旅が決まったのである。

終ってみれば今回もいろいろ思い出多い旅だった。

話を戻せば何故、内蒙古からスタートしたのかもいろいろ試行錯誤があったのである。

山西省が第一目的だったことは先に書いた。

大同へまず行くアクセスを調べると上海から大同へは現在飛行機は飛ばないらしい。

大同空港が改装中と、最新版の「地球の歩き方」に書いてある。

そうすると、まず　上海から北京へ飛ばなければならない。

北京から大同へは汽車で6時間とある。

長途バスもあるとはいうが6時間というのは実に無駄な時間なのである。

夜行を使うと夜中に着いてしまう。昼間行くと1日が無駄になる。

どうせ大同に飛べないなら、何も北京に寄らずにフフホトまで上海から飛んでそれから南下するというのはどうだろう。

早速、内蒙古出身の留学生・丁雪輝さんにいろいろ聞いてみた。

同時に、地球の歩き方』や、インターネットでフフホトを検索、いろいろな方の旅行記を読んでみた。

最大の目玉、「草原ツアー」の催行期限が9月上旬と書いてあった。

調べるうちにこれは雲崗石窟や懸空寺より内モンゴルの方が面白い。

ということになり旅のメインが変わってしまった。草原を駆けるわが姿を思い浮かべていた。

内モンゴル第二の都市「包頭」も調べてみるととても魅力的な都市だった。

僕の好きな「黄河」の最北端が見られる。

それに、砂漠もあれば、ジンギスカンの陵もあるという。ここにも行って見たくなった。

『何にも無いですよ～』という留学生の丁さんに、しつこく質問することが多くなった。

「大石さん、本当に行きたければ、包頭はわたしの故郷ですよ。、たくさんの友人や親戚の叔父さんも居ます。車で　案内してくれますよ。遠慮しないでいいですから。」と何度も言ってくれた。

ぼくは、旅は未知の人の世話をなるべく受けたくない、スケジュールを拘束されない、を中国の旅では特に信条にしている。

と言うのは中国の交通機関は本当に何時に、どこどこでと決めたら８０％が心臓を悪くする結果が待っているからである。

また、中国人の応対（接待）は生半可ではない。

徹底的に面倒をみてくれるのが多いことを経験している。

それは、とてもありがたいこと。実際、その間かかる経費まで全部、払ってくれる。至れり尽くせりである。

・・がしかし、「身をゆだねる旅」になる贅沢な不満が残ることがある。

《時の流れに身をまかせ》るのはたまには悪くはないが、《人に身を任す》のは男だからあまり好きではない。

ぼくはそのことを丁さんにも言った。

「大石さんの言うこと、よく分かります。心配しないでください。」

いろいろあったが結局、**フフホト2日、包頭2日**のスケジュールがきまった。

包頭での滞在中は丁さんの叔父さんの世話する車を使わせてもらうことにした。

こうして旅の上期（４日間）の詳細な計画がたった。

中期は大同・雲崗石窟と　懸空寺、それに文殊菩薩の五台山である。

こんどの旅では医学留学生の王宇清さんのアドバイス

「大石さん、仏像やお寺を見学する時は日本語ガイドを頼んだほうが良いと思います。」

「そうしないと案内書と見比べながらの面倒な見学になりますね。」　彼女のコトバに、はっとした。

そういえばここ何年かのひとり旅では運転手か、頼んだ中国旅行社の中国語ガイドの殆んど肝心なところは理解できない説明に「明白了」「是マ?」「好的」「真的マ?」と言って合いの手は打っても、何にも不明白了だったのだ。

要は一人でガイドを付けるなんて勿体ない。とけちっていたのである。

２００元が相場らしいので今回は初めからそのつもりでいた。（成功した。）

かくして、**9月6日（水）快晴の朝**、ぼくは準備万端整えて、妻の通代と一緒に鹿児島空港へむかった。

朝のニュースでは今朝、紀子様が男児をご出産された。と報じていた。

そういえば、昨年,発つときは小泉首相の靖国参拝のニュースだったっけ。

東方航空カウンターでフフホト便の変更チケットを受け取り上海へ向かった。

しかし出発時間が変更になったこの上海航空のフフホト便は翌日トラブルを起こ

し結局は飛び立たなかったのだ。
　最初の計画では7日朝、7時15分発のMU便を購入していた。
これだと、フフホト着がお昼頃になりネットで予約していたホテルにある「中国旅行社カウンター」で翌日の「草原ツアー」の予約が出来るつもりだった。
そのあと、郊外にある「昭君墓」は無理でもフフホト市内の観光地「大召」や「席力図召」「博物館の恐竜見学」また、夕方の市内ぶらぶらなど可能だろうとプランを立てていたのだ。

ドキュメント「何故、飛ばない?」

上海発　呼和浩特ゆき　　５：４５発　８：００着（予定）
BOMBARDIER CRJ-200(４６人乗り１２列　片側２人掛け)
５：４０　フフホト行　手続き開始。バスに乗って着いた、目の前の飛行機を見てビックリ。おもちゃのように小さなボロ飛行機である。機体が汚れている。
　一応、４８席はあるにはあるがシートも狭ければ、通路も極めて狭い。
年配の女服務員が行ったり来たりせわしない。
　何だか、墜落しそうな予感が飛行機を利用して以来４０数年、初めて感じた。
蒙古の砂漠の砂に消える。今から旅の始まりだというのに冗談じゃない。
そういえば、さっき待合室にいるとき、アモイの上山氏と中国の飛行機事情について語り合ったばかりだ。
　６：２５分（機内に３０分ほど居たことになる)、ぼくは今,飛んでいる機内にいるのではなく、搭乗手続きを待つ虹橋空港の待合室に座っている。
そして、ひまなので、この顛末（まだ進行中）をメモしている。

実は私たちは**回来了**。　　つまり、空港に戻ってきたのである。
　飛行機はエンジン音高らかに正に離陸寸前から又音が小さくなりオーバーラン寸前で止まってしまった。
「なんじゃ、どしたんじゃ！」
「飛び上がったら墜落しとったんじゃねーか！」
『早く、もとに戻って別なのを飛ばせ！」
とまあ、そんなことでも叫んでいるのだろう。年増の空中小姐（スチュワデス　　のこと）と乗客の間で喧嘩が始まった。
　内容が分からないので、帰ってから田くんに訳してもらおうと、ポケットに入れておいたICレコーダーの録音スイッチを入れた。（帰ってから聞いたら雑音で聞き取れなかった。）
機長の説明がスピーカーから流れると急に皆が静かになった。
　最初の搭乗待合室に戻ったのが**6時25分**、それから　われわれには2つの選択があった。
1つは、やがて修理が終る筈のCRJ－200でフフホトに飛び立つか、あるいは次の定時便9：45分まで待つかを決めてくれ、と言う。
　ぼくはホテルのことが気になったけど、あの飛行機には乗りたくないので後便を選ぶことにした。
　説明する担当会社の服務員の言葉がさっぱり分からなかった。
横にいた親切そうな女性に要点だけを逃さないよう質問し、答えを聞きいった。
まあ、大筋は上のような感じだった。
　赤いカードを貰って、幸い、その女の人も後発を選んだようで、一緒に最初の搭乗手続き以前に逆戻りした。
　良く分からないが荷物検査やパスポート検査以前の状態へである。

親切女が僕を手招く、弁当の配布だと言う。
　余り食べたくない、鶏のごてとかぼちゃの煮付けに漬物、あとちいさなりんごが2つ。
いろいろあって今、**午後8時**（最初の故障機から3時間が過ぎていた。）
ボーイング737に最初に乗った全員が乗っている。
われわれが乗った時はもう前のメンバー（修理待ち）は既に乗っていた。左右に三人づつ6席が30列ある180人乗りの大型機である。
　あの「命拾い機」とは雲泥の差だ。
8：10　エンｊンの音が上った。「今度はお願いします737さま」
　8：14　大丈夫、空の上です。
　上海航空と東方航空が協力して特別機を出したのだろうか。
　そういえばぼくが最初に買ったチケットではMU5651K　7：15発だったけど
　変更後の夕方発の便は何航空かよく見なかった。
　まあそういうことはどうでもいいけど気になるのは、このままいけばフフホト着は間違いなく11時は過ぎているだろう。
　このことはかなり心配なことなのだ。
　機内放送によると、フフホトの気温はひとけたの4℃という。　格好をつけてぼくの服装はTシャツだ。

それでは最初の訪問地フフホトへ御案内しましょ
フフホトは内蒙古自治区の首府である。人口213万人。
モンゴル語で「青い城」と言う意味である。内蒙古にはホトという語句の地名が多い。
ホトとはモンゴル語で〈港〉という意味だと金トンさんに聞いた。
トルコ近辺の西域には・・後ろにスタン（アフガニスタン）という語句がついた地名が多いのと同じである。
　市内には20万もの蒙古人が住んでいるという。16世紀の中頃、明の万暦帝のとき、建設された。
　1915年にモンゴル・ロシア・中国との間で交わされたキャフタ条約で、内モンゴルと外モンゴルに分割。
日中戦争時は、日本が内モンゴルの一部を支配した。
　市内の看板にはモンゴル文字が併記されている。
　ウルムチやトルファンの看板にウイグル文字が併記されているのと同じである。
ここは元は別の国だったのか、と思い知らされる光景である。

はじめての内モンゴル

　ポツポツと街の灯かりが視界に入ってきた。時計の針は10時をとっくに回っていた。
　まもなく着陸だろう。
機内は真っ暗で何も見えない。
高度が下がっているのは身体へかかる気圧の具合で分かるのだが乗客は皆静かで、着陸前のいつもの雰囲気は見られない。
　と突然、目の中にキラキラ光るものが見え始めた、と思ったら雨に濡れた滑走路が目の前に迫っていた。
　「ガクン！」という音と共に機は着地した。
アナウンスは勿論、ベルト着用のサインも付かなかった（見逃したのかも知れない）
　上海航空737機は、フフホト白塔空港へ無事に着陸した。現在時刻は午後10時28分
　2時間10分の飛行時間ということになる。（感想・・・やれやれ。である）
　いまいちばん心配なことはホテルに、何時に着くか、と言うことだった。
　最初の計画ではリムジンバスに乗るつもりでいた。
今回の旅はいかにタクシーを利用しないようにするか、ということだった。
『地球の歩き方』によると、市中心部までの距離は15k、エアポートバスで40

分、料金は5元とあった。ちなみにタクシー代は30元と書いてあった。

荷物を受け取り、外に出るまでの時間を早く見ても30分とすれば11時にタクシーに乗っても11時30分にホテル着ということになる。

（ホテルに電話をしなくて大丈夫だろうか？）

いろいろな雑念が頭をよぎる（我繁了）

もう15分も待っているのに荷物の乗るはずのターンベルトは動く気配すら無い。

「やはり機内持ち込みをするんだった。」その為にわざわざ小さなスーツケースを娘に借りてきたのだったのに。と又、

小さな後悔。

中国旅行に「後悔」はつきもののようだ（読んでくれている中国人朋友へ　真対不起）

ぼく個人の問題なので誤解しないように。

今回も3つの**大きな後悔**をしてしまった。

今、書いてしまうと面白くないのでその都度、書くことにする。

スーツケースの中からたった一枚だけ持ってきていた長袖トレーナーを引っぱり出し、Tシャツの上からはおる。

、空港ターミナルを出た。

この瞬間の凍えるような寒さ（冷たさ）を文章でどう表現していいのだろうか。

出発前日に丁さんから電話があった。

「フフホトはとても寒いですよ。明日は最低気温が4℃だって金トンさんから電話が来たよ。ぜったいセーターか防寒衣必要と思います。」

「我慢、我慢、そこだけのためにそんなのスーツケースに入らないよ。」

「だったら、中国で買ったらどうですか、安いでしょう。」

そんな会話がよぎったが、あの時は寒さに対する感覚が麻痺していた。

又、**小さな後悔。**

目をすぼめながらあたりを見回すけど、バスらしき姿はその辺には見当らない。

よく見ると50mぐらい先にタクシーが並んでいるのが見えた。

そして、かけて行く乗客たちの姿が目に入った。

『まずい、乗り損なったら大変なことになる。」焦りが走った。

冷静に考えたら中国で乗客がいるのにタクシーが無いということはラッシュ時の上海、北京ならいざしらず、ありえないことだ。

多分、順番通りなのか？女のドライバーが待っていた。

「もう連絡バスはいません。遅いから帰ってしまったよ。」　そう聞いてやっと分かった。

乗ってきた737は故障機の代替機ではなく、要は予定とおりの最終便だったのだ。

そういえば乗るとき、機内には結構たくさんの乗客が座っていた。

言葉が分からないと、細かい事情は想像の域を出ないということである。

深夜だから50元だという。どのタクシーも申し合わせだから一緒だ、と（司机）は言う。

もう、交渉などしている余裕はなかった。

「騙されてるかもしれないけど300円のことで万一、おいてきぼりにでもなったら大変なことだ。」ぼくは急いでOK！と言い、スーツケースを後部トランクに納めホテルへ向けてスタートした。

「どこから来たのか？台湾人ですか？」と運転手は言う。この時期、台湾からの旅行者が多いのだという。

「昨日から、急に気温が下がったので草原は雪が積もってるかもしれません。」と言う。

「旅行社に任しているけど本当は四子王旗か輝勝錫？が良いと聞いて来たんだけど。」

と言うと、

「この時期はどこも余り草はよくない。多分、シラムレンあたりがかえって綺麗か

も知れません。この頃はたいていのツアーがシラムレンだと聞いてます。」との返事。

「あなたがもし希望のところに行きたかったら、アタシが連れて行ってもよい。」と言う。

・・・誰もいない草原にひとりで馬に乗り、パオに震えながら泊る様子が目に浮かんだ。

「もう予約済みだから、いいよ。」と答えた。

夜の道路は殆んど他に車はなく、なんと２０分そこそこで「昭君大酒店」に着いた。

１１時３０分（日本時間の午前０時半）だった。

明日の「草原ツアー」の予約を確認して何のこともなくチェックインを済ませ部屋へ。

エアコンの効いた暖かい部屋がうれしかった。（写真下）

かくして、とてもとても長い（２日目）が終った。明日はいよいよ「草原」が待っている。

ジンギス汗が草原を駆けたあのモンゴル馬で草原を駆けるのだ。

９月８日（金）

朝、６時４０分、７時半に呼早（モーニングコール）を頼んでおいたが１時間も早く目が覚めてしまった。実は、又、朝からハプニングが起きてしまったのだ。

二階ホールで朝食を、まさに食べようとしていた時、携帯が鳴った。（写真１０）

この時間なら丁さんか、アモイの上山氏かと思っていたら突然、聞きなれない中国語である。」

てっきり丁さんの紹介してくれた金トンさんかと思った。あとで判ったのだが、今日のツアーの運転手だったのだが。

いつもの習慣で中国ツアーの場合、連絡は最初、女性ガイドから来るものと思っていたのでこれは金トンさんだとばかり早トチリしてしまった。

「あなたは丁さんの友人の金トンさんですか?」

「そうです。」

「私は丁さんの知人で日本から来ました大石ともうします。」

「・・・・・・・・・・」

「今、昭君ホテルで朝食をとっています。あなたは今、どこにおられますか?」

「わたしは今このホテルにいますよ。」

「えっ,何ですって！　昭君ホテルにいるんですか?」

「対了。」

「ぼくは8時半からシラムレンに行くことにしてます。明日、午後には包頭に行きますね」

「9時ですよね。?:?:?:?:出発は?:?:?:?:」

「ご挨拶をしたいので食堂までこられませんか?」

「2階ですね?」

「対ヤ。我等二」　これぼくです。お待ちしています。のつもり。二はあなたの意味です。

かくして、私たちは全然人違いをしたまま、食堂の入口で、すれ違いの会話が数分続いたのです。

そして、お互いの名刺交換で,初めて人違いに気づいたのである。

（草原ツアー?:?:有限公司　・金福星）・・・・・

名刺にはそう書かれていた。

「あ、不好意思、我弄錯了！」　（スミマセン、人違いでした。）彼は相変わらずニコニコしていた。

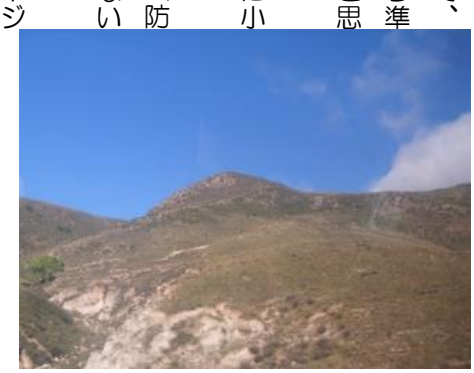
そして、ぼくは朝飯もそこそこに出発準備のため部屋に戻った。

結局、シラムレン行の面包車（マイクロ）に乗ったのはぼくの他は一人の欧米人と二人の東洋人（多分、中国人）の四人だった。

あとで、話をしたら、彼は上海に企業派遣されているオランダ人だと言った。

（馬に乗っている外人がその人）写真を送ろうと思うけど交歓した名刺が行方不明。
運転手の話だと、シラムレンまでの距離は１７０ｋｍと言う。
市街地を抜けると舗装されていないガタガタ道が続く、空腹の胃が踊っている。
道路の脇を見ると、なんと水なしの川底を車は走っていた。
しばらくすると山の中を車は走る。
そして又、綺麗な舗装道路があらわれる。車は陰山山脈に入ったのだろうか。
車窓からみえる景色に緑は少ない。
日本だと緯度的には紅葉が続いて見える筈、秋の日本の自然のすばらしさをふと思い出す。
このあたりも大昔は原生林だったと聞いている。
中国北部の砂漠化のことも頭をよぎる。
やがて、この山を越えると、いよいよどこまでも続くあの大草原が待っているのだろうか。
とつぜん運転手兼ガイドの金さんから説明が始まった。
「車が着いたら１つのセレモニーがありますよ。
みなさん車を降りたら回りに歌を唄いながらモンゴルの若者たちが待っています。
歓迎のお酒を飲ませます。」
「まず、左手で杯を受けます。すると、お酒（馬乳酒）をついでくれます。」
右手の人差し指で軽く酒にふれ、その指を自分の胸に当てます。
又、指を少し酒をふれ（つけ）、今度はその指を天に指します。
そしてから、そのお酒を一気に飲み干して終わりです。」　とうぜん、ぼくはよく意味がわからない。要点だけは何となく分かった。　ほどなく車は村の入口に着くと、予定通りの賑やかな儀式は終った。
写真は残念ながら撮りそこなった。というより、ぼくはその時、デジカメを撮影モードに切り替えていたのだ。

歌も入るのならこれは絶対、ムービー設定にして、帰ってから家族に見せよう。と車が到着する前から準備していた。　もし、このＨＰ上で再生出来たらと思って挑戦してみたが難しかった。
とにかく大気は寒い。時折、吹雪のように横殴りに小雪が舞う。まあ、最悪の天候といっていいだろう。
小さな包に連れて行かれるとそこは売店だった。「防寒衣は要らないか?」と言う。もう絶対これを着ないで馬には乗れない。
早速、軍手と一緒に借りた。６０元の借り賃にヤージンが１４０元だという。（１５番目の写真）
さっそく４人のグループで乗馬初挑戦である。
とにかく寒いのだ。（爽快）（のどか）（颯爽）（高揚）などといった初めての草原疾走へのときめきはゼロといっていい状態である。
ぼくにあたった馬はぼく好みの黒褐色。鐙（あぶみ）も銀色でとても気に入った。



チンギス汗とモンゴル馬

さて、ここでモンゴル馬についてちょっと書いてみたい。
十三世紀に現れたチンギス汗は、広大なユーラシア大陸に空前絶後の世界帝国を築いたが、その最大の秘密は、兵器としての馬をモンゴル馬という小型馬にこだわったことである。
チンギス汗は愛馬を持たなかったという。
この小さな馬をチンギス汗は兵器とわりきり、疲れた馬は補充の馬につぎつぎに乗り換えていった
青草しか食べないモンゴル馬と穀物をいっぱい食べている大型馬（サラブレットなど）とではスピードも持久力も大型馬にはかなわない。
モンゴル軍は青草だけで耐える小型馬を一人で数頭つれ、乗っていた馬が疲れれば、

補充の馬に乗り換え、疲れた馬を休ませ、その繰り返しで遠征を繰り返したという。意識的に改良しようとしなかったモンゴル馬は,小さいばかりか,見栄えもしない。

頭が不格好に大きく,首もふとい。たてがみが多く、尻尾も異様に多く長い。眼が小さくて、耳もみじかく,厚い。もちろん背も低く、足はからだにくらべて太く、スマートさはないし速そうな感じもしない。

おまけに　馬は小さい馬ほど性格的にあつかいにくいところがあるらしい。

自己主張が強く、頑固で、気も荒く、人を乗せたがらないのだと。

だが、彼等はたくみに調整して、これらの気性を逆にがまん強く、勇敢な馬に仕立て上げたのである。　チンギス汗の兵士についてマルコポーロは書いている。

「彼等は遠征のとき、雨を防ぐための小さなテント以外、道具は何も持ってゆかない。　食事もとらず、連続十日も騎行する。

そんな時は馬の血だけで飢えをしのぐ。まず血管を切り開き、血を自分の口にほとばしらせ、満腹するまで飲んで、血止めをしておく」

チンギスの率いる軍団が優秀だったのは、ヨーロッパにおいてもっとも進んだ馬といわれるような大きな馬に乗り換えるチャンスが多かったにも関わらず,食指を動かさなかったことである。

また馬種を改良しようとしなかったことである。

乗ってみて,味の良さやスピードには感心しただろうが、遊牧には適さず、したがって、長距離の遠征にも適さないと判断したに違いない。

モンゴル軍の成功の秘密は長距離遠征を可能にしたモンゴル馬だったのである。

今、乗ろうとしている馬は確かにモンゴル馬に違いないが、ロバに乗ろうとしているとは正直、思わなかった。鐙に足をかけ、そのまま馬の背に乗れるぐらいの高さだから小さい馬には違いないのだろうが。

実は馬に乗るのは初めての経験だ。

かって、志布志の馬場で有料の馬に乗ったことがある。

でも、轡（くつわ）を係りの人が持って引いて歩く（コースを回る）だけだった。

今日は一人で何時間も乗り回すという。

正直のところ、少しドキドキしていた。まさか落ちはしないだろうが。

ＨＰを読むと、そのうちお尻や内股が痛くなり、尻を浮かさないと耐えられなくなると書いてあったのもあった。

さあ、それらのすべてを自分で今から体験するとしょう。

・・・とまあ、そんなことを考えるまもなく、先導馬のモンゴルおじさんが駆け出して行った。

それにつられぼくらの馬も続く。

鞍に付いたまるい金具を両手で持つのか、それとも、とても貧弱な紐の手綱を持つのか、ラクダのときは確か、金具だったと思う。思い出した。去年、済南（jinann）の黄河の横の記念植物公園で馬に乗ったときは手綱しかなかったはず。

四人を乗せた馬はどうやら１つのしつけられた行動をとっているのが段々分かってきた。

先頭を走る馬が必ずしもモンゴルおじさん＜年齢は３０代かも＞とは限らない。

だけど歩く時、駆け足のとき、そしてかなり全力疾走（体感は競馬のレースもどきである）実際、このときは武豊もどきに尻を浮かせ前傾姿勢をとってしまう。もう、帽子も吹っ飛びそうだった。

そして、約１０分以上は全力疾走する。

（ほんとう）この時は、手綱と金具と両方を掴みたくなる。

そして、突然、いっせいに駆け足状態にもどる。これが不思議だったが、やがてわかった。

モンゴルおじさんの唄う歌に馬は反応していたのだ。

道理でへたな歌を大声で唄いながら乗っていると思っていた。

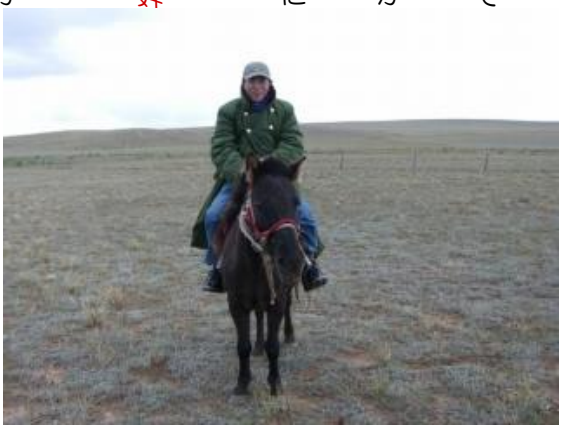
一時間ほど駆けて行くと数本の木が立っているところで馬達は止まった。

５０メートルほど先にきたないトタンの壁板があった。大きな字でＷＣとかいてある。

横　には包が建っていて休憩が出来るようになっている。

蒙古流のお茶とお茶菓子を振舞われる。

珍しいので片っ端から味見してみる。（很好吃）



戻りは、他の騎馬集団と合流してしまった。

４人で走っていたときとはまた全然気持ちが違う。まさに中原を駆ける曹操軍の気持ちだ。

疾走がはじまると皆が一斉に大声を発する。その言葉が中国語だけに大迫力である。

自分も１８００年前の『三国志』の世界にタイムスリップしたかのようだった。

もうこの体感だけでぼくはここに来てよかったと思うことだった。

草原の緑が少ないとか、天気が悪いとか、そんな行楽気分で馬に乗るより、この迫力は何だろう。ほんに数時間でぼくはもうモンゴル馬のベテラン騎手に変わっていた。

包に戻る頃は身体もけっこう温まっていたけど内股やお尻よりぼくの場合は足のすね辺りがとても痛かった。

知らずのうちに両足で馬の腹を締め付けていたのかもしれない。

お昼の食事を取るため食堂包（と言うのかどうか?正式名は我不知道）に入る。

そこで京都から来た日本人に会う。もう全く彼が日本人には見えなかった。

中国もどこか南方人と言った感じだった。でも、中国語なまりの日本語をしゃべった。

京男がああいう場所で日本語を喋ると中国人がなれない日本語をゆっくり話しているように聞こえた。

もっとも彼、佐藤くんは同じイントネーションで中国普通語もしゃべる。

翌日、偶然にも又フフホトの「蒙古博物館」で彼に逢った。

今夜、１１時の北京行硬座で帰るそうだ。「それまでぶらぶらします。」と言う。

「じゃあ、ぼくと一緒に回りませんか?」「ありがたいです。」

というわけで一緒にフフホトを回ることになった。

半日以上、行動を共にしたとき聞いた話によると、彼は中国語の歌を唄うのが得意なそうで（自分で言っていたから本当だろう）。

北京のカラオケで歌ったら、一人の中国人が「おまえさん、今度、北京ＴＶのからおけ大会にでたらいい」と本気で勧められたらしい。

後日、佐藤くんから一緒にフフホト観光地めぐりをした御礼のメールが届いた。

そして、あの日、あの後、かれは寒いシラムレン草原の包に泊った。と、あのあとの報告を告げてくれた。おかげでぼくはとても深い、ふかい**大後悔**に落ちこんでしまったのだ。

そして、彼の送ってくれた数枚の写真とメッセージはかれへの**羨慕**（*xian mu*）を駆り立左の影（シルエット）は彼自身。自動シャッターでしょう。

話が前後したり早送りされたりで読者には申し訳ないが。

実は、今、翌日（９日）の午後3時である。

フフホト市の繁華大街にいる。

包頭（バオトウ）に今から出発する。メンバーは四人。ぼく以外は金トンさんと、

あとは丁さんの叔父さん・劉恩情氏の会社の方である。
昨日はシラムレンには泊らなかった。包を覗いているとき、鹿児島の丁さんから国際携帯が入った。
「オオイシさん。今、何してますか?」
「おお、丁さん、今、草原（ツァオユェンと中国語では言います。）にいる。すげぇ寒いよもしかしたらここには泊らないかも知れない。」
「そうですか?もし、今日、午後フフホトに帰るなら私に言ってください。叔父さんが一緒に食事をしたい。と言ってます。ホテルも叔父さんの知ってるところで半額で泊れるそうです。もし、そこに泊らないなら私に電話ください。」
一旦、電話を切ったあと、僕のあたまの中にはシラムレンの夜中の３６０度の星空や朝の日の出の美しさなどすっかり消えてしまっていた。
「ぼくはここの包に泊ります。」と言う彼が気の毒にすら思っていた。
「昨夜は包の中は案外寒くなかったです。よく眠れました。ぼくはどこでも大丈夫ですから。そうそう、夜中に包の窓のところに馬が来て中を覗いてました。目が覚めたので外に出たら　星がいっぱいでした。
明日の朝は晴れる、朝日が拝めると、楽しみに寝ました。
だけど、朝起きてみたら霧雨というか、けぶっていて水平線に上る太陽ははっきり見えませんでした。じつは楽しみにしていたんですけどね。」
丁さんからほどなく電話が這入った。帰ることにしました。早かったら、帰ってから「内蒙古博物館」でも行くつもりでいた。　丁さんが言った。
「大石さんはホテルに戻っていてください。金トンさんがホテルに迎えに行きます。」
「そして、新しいホテルに案内します。夕方、迎えに来ますから、一緒に皆で晩餐会をしましょう。と叔父さんが言ってます。わかりましたか?」
一度は叔父さんにもお会いたかったし、明日からお世話になる包頭のツアーのお礼や持ってきたほんの気持ちばかりのプレゼントも渡すいい機会だったので,丁さんのこころ配りに甘えることにした。

…それらしき二枚の写真は、上が内モンゴルの大富豪・劉恩情氏とのスナップ。下下の写真は真ん中が金トンさんと会社の同僚。手前の人は確か陳さん（上海人）で、金トンさんとこのあとずっと一緒の行動をしました。
フフホトの観光地では行きたいところが３つあった。
ひとり歩きを予定していたので郊外にある『昭君墓』は無理だろうと思っていた。
『地球の歩き方』には（見どころ・・・）というページがあって★マークでランク付けがしてある。
実は「内蒙古博物館」はいちばん気になっていた場所だった。
★１つだったけどここは数年前内モンゴルで発掘された巨大恐竜の化石があることで知っていた。
館内左の入口を入るとすぐのところに巨大なマンモスの模型があった。その奥を突き当たり右折した奥にめざす恐竜の化石模型はあった。
朝、早いのに地元の小学生の団体が先生に引率されて課外学習に来ていた。
写真を撮ろうと、こども達をかわして前に出たところで見覚えのある男が立っていた。
ほんの一瞬だが自分がツアーで回っているのか?と錯覚をおぼえた。
昨日、「草原ツアー」で出会った日本人・佐藤くんだった。　中国旅行ではこういうことはよくあることで思いがけない偶然のひとコマだった。
金トンさんがお寺に行く前に『昭君墓』に行きましょう、と言った。市内から８キロほど離れたところにその場所はあった。
ウイークデーだったせいか『昭君墓』公園は観光客も少なく、広い整備された公園はのどかな秋の日差しを浴びて、とても心地よい気分だった。（金トンさんのおかげ

です。謝謝多分独りでは訪れなかった場所だったと思う。）

王昭君と言っても失礼だが知らない方も多いと思う。実はぼくも中国の旅をするから少しは知っているものの詳しくは知らない。

折角、彼女（王昭君は女性です。）の墓まで参ったのだから逸話（正史は殆んど無いらしい）を書いてフフホト日記の終わりにしたい。

●王昭君物語

王昭君は楊貴妃,西施、ちょう蝉（セン）と並び古代中国の四大美人といわれている。

当時の時代背景

紀元前５１年,前漢の宣帝（元帝の父）の時、てこずっていた北の匈奴が和睦を乞うてきた。匈奴が内部紛争で分裂、弱体化して、漢に対抗できなくなってきた。

匈奴の王、呼韓邪単于は長安に赴き、臣下の礼をとった。

これにより漢の北方の脅威が除かれた。特に匈奴の領地に近い集落の人々は毎年、冬になると匈奴の略奪を受け悩まされていただけに喜びも大きかったという。

宣帝は単于に皇族と同等の地位を与え、金銀財宝なども贈るという最高の処遇をした。

２年後、宣帝が没し、皇太子が跡を継いだ。元帝である。

元帝は宣帝ほど優れた才は持ち合わせていなかったが、宣帝のおかげで何事もなく治世が続いた。

紀元前３６年、分裂していたもう１つの匈奴が漢軍に滅ぼされた。そしてその匈奴の大将（単于）の首が長安にさらされた。

「漢に背いた蛮族は皆このようになるのだ。」

この事件は漢に服す他の民族を震え上がらせ、とりわけ同じ匈奴である呼韓邪単于は大いに危機を感じた。

なにしろ宣帝の時代に和を乞うてから１３年、一度も長安に参内していなかったからだ。こうして呼韓邪単于は自ら長安へ上ることを決心したのである。

後宮でもっとも醜い女

王昭君は王氏（現在の湖北省沙市（長江沿い）という豪族の娘として生まれた。

若くしてその美貌は世間で噂されるほどに美しく、その噂は王宮にも届き、１８歳のとき後宮入りをはたした。

当時、元帝は三千人といわれる美女を後宮に住まわせていた。

元帝はあまりに多すぎるので係りの絵描きに似顔絵を描かせて、気に入った女を寝室に呼ぶと言う具合であった。

後宮の女たちは皇帝の寵愛をうるためには自分をより美しく描いてもらおうと画工の前に金品をつんだりした。

その有様を冷たい目線で傍観する女がいた。王昭君である。

王昭君は画工（毛延寿という）に決して賄賂を贈ろうとしなかった。

実際、彼女は自分の美貌に自信があり、周りの女たちも一目おく存在であった。

女たちにちやほやされて有頂天の毛延寿は自分を見下したような王昭君が気に入らなかった。

『あの女、わしを軽んじおって,いくら美しかろうがわしの気分次第だということを思い知らせてやる。」

こうして、画工に嫌われた王昭君は、似ても似つかぬほど醜く描かれてしまったのである。

これでは皇帝からお呼びがかかることはなかった。

単于（君主）の願い

紀元前３３年、呼韓邪単于（こかんやぜんう）は長安で元帝に謁見した。

属国でありながら１６年間も一度も参内しなかったことに対する申し開きをし、匈奴が漢に恭順していることを示そうとしたのである。

「臣はこの十数年、常々入朝したく願っておりましたが、ご存知のとおり、わが匈奴は長きに亘って内部紛争が続き土地を離れることが出来ずにいました。
この度、漢帝が別の匈奴を討伐してくださり、やっと参代がかないました。
ここに、改めて和を結び、漢と匈奴の安寧のために尽くす所存です」
「うむ！」
単于の心配とは裏腹に元帝の機嫌はすこぶるよかった。
長年の北西の脅威が払われたことに対し感銘に浸っていたのである。
「天子に申し上げたきことが・・・・・」
呼韓邪単于は女たちが騒ぎ、音楽で賑わう宴の場で静かに口を開いた。

醜女選出

「何？！漢と婚姻を結びたいと？」
「はい、漢室の女性をぜひわが国の皇后に迎えたいのです。」
元帝は考えた。匈奴と親戚関係にあることは、今後の外交上、漢にとっても有益なことである。元帝は快く承諾し、吉日を選んでふさわしい女性を与えることを約束した。
漢室の女と言えば皇后が王姓であることから元帝は例の似顔絵の中から王姓の女だけを選出させた。一枚を取り出し軽い驚きを覚えた。
「なんと・・・このような醜い女が後宮にいるのか、よくぞ入れたものだ。よし、単于にこの女を与えよう。」
じつは元帝は自分の美女たちをやるのが惜しくなっていたのだった。っそこで、後宮内の醜い女を嫁がせようとおもったのだ。いうまでもなく王昭君が選ばれた。
当然、呼韓邪単于（こかんやぜんう）のよろこびは大そうなものだった。呼韓邪単于が匈奴に帰国することになり、挨拶のために元帝に謁見した。
・・・・・

パオトウ駅側に成吉思汗草原生態園という巨大公園がある。

占有面積 770 公頃。南北 4k せまくて長い。東西 2.2k 海抜 1034m(1周すると10kを越える)

全国城市中最大的天然草原園である。街中からここに足を踏み入れ、しばらくすると自分が別の世界に突如入り込んだような錯覚におちいる。

9月9日(土)午後。金トンさん運転のブルーメタリックのビュイックに乗っている。

いまから目指すパオトウまではおよそ2時間のドライブである。

パオトウ旅遊のいちばんの楽しみは砂漠を見る(楽しむ)ことではあったけど、」実は『黄河』見学にもかなりこだわっていた。

かってNHKの「大黄河」というTV番組を見て以来、中国二大河川のひとつである黄河は宋次郎の奏でるオカリナの音色と共にぼくを魅了してやまない存在だった。

黄河上流の蘭州では黄河第一橋から黄河を眺め、羊の皮袋で出来たいかだで実際に黄河を1キロほど下った経験がある。 2004年5月、鄭州市の北部にある黄河風景区で黄河中流のとてつもなく広い河川敷をホバークラフトに乗って快走した。

昨年の11月、済南市の北を流れる黄河下流にかかる浮橋を歩いて渡りながらとうとうと流れる大黄河を眺めてきた。

パオトウを流れる大黄河は、嘗て、匈奴が、そしてチンギス汗が率いる大蒙古軍が氷結し、大地に化した黄河を馬で渡ったところである。

大草原を蒙古馬で駆けたついでに、パオトウの黄河の流れを実際、自分の目で眺めてみたい、触れてみたいという気持ちがつのっていた。

ぼくは、何気ないフリをしてハンドルを握っている金トンさんに声をかけていた。

「金さん、 包頭 有 黄河(ホン ファ) マ ?」 すぐ返事が返ってきた。

「有 有 (ヨゥ ヨゥ) 要看?」 (ありますよ、見たいですか?)

「我很想看」(とても見たいですね。)ところで、黄河の上流、中流下流とはどのへんをさすのだろうか?

上流は水源(青海省)からオルドスの河口鎮(托克托)のあたり、地図上ではフフホトと包頭を結んだやや南までをいい。

上流は全体としては流れがはやく、細いけど、標高が高いので、あちこち場所によって凍結する。上流の流域面積は38.6万平方キロメートルで、全河流面積の実に51%を占めている。

、そこから河南省の鄭州にほど近い桃花谷までを**中流**としている。

そして、開封から渤海にいたるあたりを**下流**といっている。

中流(包頭から南下して鄭州付近まで)は46%、下流はわずか3%に過ぎない。

黄河は中流で大きくこぶのように蛇行(北上)していて、そのあたりの標高差は激しくで冬は凍結する。

落差の大きい滝もあれば、極端に狭い川幅の場所も有る。

黄河全体の公式の長さは5464キロあり、そのうち洪水の被害のもっとも大きいところが標高差の少ない下流なのである。

凍結をもっと具体的にあげると、凍結し始めるのは12月のはじめで、解氷しだすのは平均で三月の下旬であるという。

氷の厚さは、40~90センチといわれ、凍結している期間は3~4ヶ月間だけど、実際に、河を渡れるのは氷結し始めてから1ヶ月近くを要するといわれる。

もっとも、昔はもっと、凍結期間も、氷の厚さも大きかったらしい。だから、チンギス汗の活躍した時代は少なくとも半年ちかくは、馬が黄河を渡ってオルドスの地を駆け回ったのだろう。

黄河と長江、このふたつの巨大な河川は、４０００年の中国歴史を語る上で、はずすことのできない存在である。もっとも、土砂の少ない南の長江流域（上、中流）は宋の時代までは未開の地域のように言われていた。

しかし、１９４８年以降に四川省の成都市郊外で遺跡（三星堆）発掘された。その時期が紀元前１６世紀と言うことがわかり、　そこにあらわれた黄河文明とはちがう、全く別の古代都市の出現に人々は驚いたのだった。

謎の都市の解明はまだあきらかにされていないが、文明と河川の関係の奥の深さを改めて知らされた。

ところで長江（６３８０ｍ）と黄河（５４６４ｍ）の違いはいろいろある。

まず、①凍結する、しない。

②標高差大，小。

③蛇行の差などの外に

④水のにごり方がある。しかし、なんといっても

⑤**水量が違いすぎることである。**

長江の総流水量の１６分の１、流域に供給できる水量は２０分の１にすぎないのである。

黄河流域つまり黄土は昔から農耕に適した土質といわれている。

人口も、前漢時代には４８００万人に達し、当時の中国総人口の８０％を占めていた。

その後人口は減り続け、唐の時代には６０％になり、そして、宋の時代から経済の中心が南に移り始めると３０％となり、現在は全人口の１５％ほどまでに減っている。

こうした減少傾向にはいろいろな原因もあるのだろうが自然現象としての**ひでり**が水量の減少を引き起こし、（降雨量の低下）が『砂漠化』を一層すすめていくことになる。

そういう自然現象に輪をかけるように、最近では近辺の地区の工業化が進み黄河流域の水を使う量が供給を上回ってきていると言われる。

それに伴い工業汚染が問題化しているのも事実である。

最近ではオホーツクへ流れる松花江周辺にある化学工場からの汚染漏れ事件はまだ記憶に新しいところである。

外交問題（ロシア）になり明るみに出たけれど、中国国内だけならまだ多くの汚染漏れがないとは言えない。

「そのうち黄河は黒河に名前を変えなければ」なんてことだけは避けなければならない。

この二つの巨大河川への取り組みこそが未来へ向けた中国の盛衰（命運）がかかっていると言って過言ではない。

ぼくは黄河を眺める度に、チンギス汗の駆けた、あの時代の黄河が甦ってくるよう願ってる。

黄河の河川敷に出る道を途中で間違えてしまいスピードウエィを逆走しながら、ようやく念願の黄河に到着した。

黄河の水に触れ、思い切り小石をなげたり、しばらく遊んだ後ぼくらは包頭をめざしＵターンした。

クルマがパオトウの市街地に着いたのは夕方の６時をすでに過ぎた頃だった。

車窓から射し込む陽の光はまだ真昼のようにまぶしく、昨日の寒さがうそのような陽気だった。

「わたしたちの会社に行って見ませんか?」

という金トンさんの声に「ぜひ。」と二つ返事をした。

というのは、留学生の丁さんが

『叔父さんは信心深い人ですよ。工場に大きな仏様の像を作りましたよ』

と言った言葉を思い出したからである。ぜひ見てみたいと思っていた。

予約してもらったホテル・シド大酒店（写真７．８）は新しく出来たばかりの包頭一の高級ホテルだった。

来年（２００７年）にはこの近くにアジア地域では最高級のホテルチェーンである『シャングリラホテル』が開館を目指して既に建物の全貌を見せていた。

包頭の街は他の中国の城市の再開発とは違い、あたらしい地域に新しい道路をつくり、そこにあたらしい工場、企業を誘致していく街づくりを展開している。

近い将来、（もしかしたら既に幾つかはそうなっているのかもしれないが）包頭市は内モンゴルの行政・観光・工場・そして文化の拠点になるのでは、とそんな空気を感じた。

翌朝、ホテルの朝餐で若い団体客に出会った。

聞けば、広州から飛行機で観光に来たんだと言う。広州の会社の社員旅行（総勢５０名）で来たらしい。

昨日、『響沙湾』と『チンギス汗草原生態園』で遊び今日は広州に帰るんだと言う。

広州～包頭間の航空路が新しく（？）開設されたから来たんだと言っていた。

「砂漠遊び」と「草原」というコースは地理的には新疆（シルクロード）や青海（草原）方面よりかなり身近に行ける魅力的な観光コースと言えるのではないだろうか。

ぼくの知っているかぎりでは、中国人は、眺める観光より、参加、体験型の観光を好むように思う。馬に乗ったり、ラクダに乗ったり、砂漠をオートバイや戦車で駆け巡ったりするのは、かれらの最もよろこぶ遊びなのだ。

その夜は包頭の（おそらく）高級飯店で金トンご一家（奥様と息子）、奥様や金トンさんたちのお友達の女社長・宋さん、それに劉さんの会社の若い男性・陳さんあと一人の男性を交え賑やかな晩餐会によばれた。

珍しいモンゴル料理を説明を受けながら戴いた。

特に、豆腐料理はとても美味しく、日本の豆腐とそっくりだったし、ゆば料理もたしか読み方まで同じ名前、ユバで通じたような気がした。おから料理に到っては京都で食べているようだった。

どちらかと言うと「食道楽」ではないので食べ物は美味しいか、まずいかしか意見が言えないので食事の時は、話題不足で、いつも招待してくれる中国人には申し訳ない思いである。

したがっていつも「ジェ　是　シェンモ？」「ナ　是　しぇんも？」の繰り返しで会話が繋がっていかないのが我ながら情けない。

酒は白酒が有名のようだ。長沙の白酒ほど強くはない（３８度ぐらい）が後口が幾分、甘い感じがして美味しかった。

写真は金トンさんご一家と、食事をしたレストラン。

今日は包頭二日目の朝である。

包頭の街は空は青く高い。

聞いていたようなほこりっぽさなどまったく無かった。

いまの季節が、日本の秋と同じく、いちばん良い季節なのかもしれないけど、少し空気が乾いているかな、と思う程度で中国の他の街の空気より好きだった。

道路幅も広く、殆んどが直線路である。パオトウは工場の町で、何も無いところだと聞いていたが、そんな灰色のイメージなどまったく無く、あたらしい近代都市というイメージを持った。

７：３０　運転手の金トンさんの運転するビュイックがホテルの玄関に着いた。

午前中は折角来たのだからと、包頭市街から北東へ７０ｋｍ、陰山山脈の五当溝にある内モンゴル最大のチベット仏教寺院　『五当召』へ案内してくれるという。

五当召は１７世紀後半に創建され、五当とはモンゴル語で柳の意味なんだそうだ。

山の麓から斜面に沿って数多くの堂が階段状に建っている。

小ポタラ宮と言われているらしい。召とは廟の意味らしく、それぞれの堂はそれぞれに貴重な特色があるのだろうが、そっち方面の知識に乏しいぼくにとっては、その宝

物や経典の価値はわからなかった。
ただ、最上段まで見てみようと各仏堂を数字を追いながら上へ上へと見て回った。
金トンさんは知っているのかも知れないが日本語で聞いても判らないのに中国語で説明を受けたってさっぱりだと思い聞かなかった。
明日は最大の目的地大同市に向かうことになっている。
今日の教訓を生かして明後日の『雲崗石窟』と『懸空寺』の見学には絶対に日　本語ガイドを頼もうと決心を新たにした。
それにしても五当召への往復の道中はひどかった。
ビュイックは例によって乾いた河底を走っていく。車体はもう土灰をかぶり真っ白だった。
包頭に戻ってから洗車に15分もかかってしまった。

左の丘の中腹では大掛りな道路建設が現在進行中だった。
（中国は工事に関しては予定が未定だが）近い?将来「五当召」への時間が半分に短縮されるかもしれない。
一旦、包頭市にもどり昼食を食べ終えたぼくらは、本日の本命である砂漠『響沙湾』へと向かった。
寧夏回族自治区から流れてきた黄河は、内モンゴルの中西部に入って北へ向きを変える。
陰山山脈にぶつかった黄河はこんどは東から南へと馬蹄形を描いて流れる。
この黄河に囲まれた地帯がオルドス高原で、砂漠草原となっている。
黄河南岸のクブチ砂漠には鳴き砂現象で知られる砂丘があり、そこが『響沙湾』とよばれている。
到着すると、そこには何所から集まったのだろうと思うほどの大勢の観光客がリフトの順番を待っていた。

二人乗りのリフトに乗り響沙湾レジャーランド?（正式名称は分からない。）に渡ると、まず、砂が靴に入らないように布袋を膝までつける（有料10元）。長沙からの団体客があり、そのなかに紛れ込んだおかげで無料で借りた。（写真あり）
キントンさんたちは靴をぬいで裸足になっていた。
丁さんが「風が強いと、眼が開けられません。出来たら、海水メガネが必要です。」とのアドバイスがあり、大判のマスクとゴーグルをポケットに忍ばせていた。
二つとも快晴、無風の天候のため無用の長物となってしまったが、他のツアー客たちは顔が見えないくらいの大きなマスクにサングラスをかけてラクダに乗っていた。
ぼくたちは金トンさんの勧めでラクダ乗りから体験することにした。
何年か前、兄達と新疆シルクロードのツアーに参加したとき、敦煌・鳴沙山で700メートルほどの距離をラクダに乗ったことがあったが今日は1時間の砂漠の行軍である。
もしかして、ラクダが走りだしたらどうしよう、それこそ映画「アラビアのロレンス」を体験できるかもしれない、とひそかに期待をしたが、その通りにいかなかった。
それでも広大な砂漠を上ったり下ったりと移動して、お尻が痛くなるほど乗りまわった。
途中、駱駝引きの男が「しばらく休憩する。」というので皆（8名ぐらいのグループ）はてっきりラクダから下りるのとばかり思っていた。
ところが、乗ったままでラクダだけが立ち休憩をするのだという。
「何で下ろさないのか?お前が休憩してるだけじゃないか?」
と乗ったままの客たちは一斉にブーブー抗議したけど、駱駝引きは知らんふりを決め込んでいた。
ラクダを下りる頃はもうお尻が我慢できないほど痛くなっていた。

こんどは沙すべりに挑戦することになった。これも「鳴沙山」で経験済みだったけ

ど下に下りないと帰りのリフトに乗れないように仕組まれていた。

この砂すべりのせいで、翌日の懸空寺ではカメラが使えなくなるという、大変なパニックが起きてしまったのだ。

答えを明かすとこの時砂糖のような極細の砂がジーンズのポケットの中に入り込んでいて、ポケットに入れたデジカメのレンズ部分にその砂が入って故障してしまったのである。

こうして朝 7:30 からスタートした包頭（パオトウ）でのイベントは終った。

内モンゴルの旅は本当に「何から何まで」という一見、意味不明な日本語ではないが、金トンさんたちのお世話になり放しだった。

はじめは乗物だけ使わせてもらおうかな?と思って甘えたのだったが、これほど世話になるとは考えてもいなかったのである

おかげでとても楽しい思い出に残る旅が出来たことを感謝したい。

実は、この日はまだ後が続いていた。

最後の晩餐をしょうと言う。そして、成吉思汗草原生態園をドライブしながら案内してくれるという。

かくして、いちばん最初に書いたように、もう時間も遅く殆んど閉園間近になっていた公園を無理に頼んでの外周ドライブとなった。

しばらくは、ラクダの大群を見たり、造られた草原を、「スケールの大きいものを造ったものだ、と眺めていた。

走っている時間の長さと延々と続く外の景観がいま公園の中を走っているという通常の感覚をはるかにオーバーしてきていた。

入るときは、確か、街中から入口があったはずなのに。

そのうち本当に自分が今、何所を走っているのか、もしかしたらパオトウを離れ、郊外を走っているのではないか、と本気で思うようになり始めた。

やがて、あたりが暗くなり，そこここに動物達が歩いている。全く狐につままれた思考の中に自分がいた。

どれ位の時間がたったのだろうか、やっと出口に出て我に返った。

下の写真はパオトウ市の市街地の半分近くを占める成吉思汗草原生態園

帰ってから、そのことを丁さんに話すと、「そうですか、そう言えば金トンさんが言っていましたよ。シラムレンなんか行かなくてもここの草原で馬に乗っていくらでも走れるし、包もちゃんとあるのにね。」と。

次の訪問地「大同・雲崗石窟」へ

雲崗石窟は、山西省最北部の都市、大同市の西、武周山の南麓にある。

３９８年、鮮卑族の拓跋氏（タクバツシ）がここを北魏王朝の都とした。

４６０年，文成帝は雲崗石窟の造営に着手した。

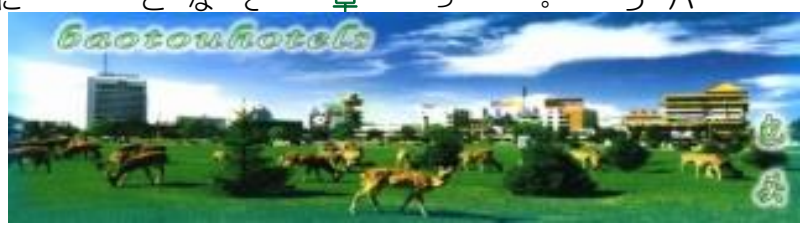
４９４年に北魏が都を洛陽に移した後も造営は続けられた。２００１年には世界文化遺産に登録され世界中の人々がここを訪れるようになった。

雲崗石窟は、山西省最北部の都市、大同市の西、武周山の南麓にある。

３９８年、鮮卑族の拓跋氏（タクバツシ）がここを北魏王朝の都とした。

４６０年，文成帝は雲崗石窟の造営に着手した。

４９４年に北魏が都を洛陽に移した後も造営は続けられた。２００１年には世界文化遺産に登録され世界中の人々がここを訪れるようになった。



今朝８時３０分に金トンさんと陳さんがホテルまで迎えに来てくれた。
「プレゼントがあります」と言いながら、紙袋と長い筒箱を車からとり出した。
「これは劉思情さんからです。」と金トンさんはぼくに向かって筒のほうを差し出しながら言った。
「なにもお構いができませんでしたが楽しい旅が出来ましたか?」 と言ってましたよ。
「それから、これは家内からです。」（下金トンさんの奥さんと長男） と、ちょっとはにかんだように言いながら黒いしゃれたデザインの紙袋を差し出した。中には二つの箱が入っていた。
実はすぐあることがピーンときた。中身の品物についてである。。丁さんに来る前に何気なく訊いたことがあった。
「丁さん、パオトウはカシミヤが特産品なんだってね。金トンさんは安いお店を知ってるだろうか?」
「大石さん、安物は勧めませんネ。いくらでも安いものはあります。でも、いいものを買うほうが良いと思います。ブランド品があります。もし、大石さんが欲しかったら 金トンさんにブランド品の工場を案内させましょうか?」
と、丁さんが言ってたのを思い出したのだ。その時は、

「いいよ、いいよ工場見学なんかしなくても時間が勿体ないから。」と答えたのを憶えている。
この袋の中は「もしかして・・いや、きっと」と、大変な気を遣わせてしまったことを後悔した。
でもこれからの旅に紙袋をさげて移動するのは大変だった。
折角の立派な包装を金トンさんには悪かったけど、大同のホテルに着いたらすぐ、戴いた二個の箱を開いてみた。
中には予想したとおりの素敵な男女物のマフラーが入っていた。
それは、もちろん、ブランド品に違いない柔らかな肌触りのマフラーだった。
戴いたもう一方の「掛軸」にも実は、またあらたなエピソードが発生したのだが、こちらはもっと先の方でお話ししなければならない。
さて、話を戻す。
ぼくの乗った**火車**（汽車のこと）は９：１５発のニンポー（寧波）行きの硬座寝台である。
学生時代利用したあのなつかしい急行「きりしま」二等寝台と同じ型である。
大同市までの乗車時間は６時間と時間表に出ていた。
この汽車の始発駅が何処からなのか分からなかったけど乗客も少なくあたりには人のけはいもなかった。
まもなく着くフフホト駅では、たくさんの乗客できっと車両が埋まるのだろう。
上段に男性が一人眠っているようだ。寧波まで行くのだろうか、いったいどれ位の時間がかかるのだろう。
大同までが６時間とすると、地図でみたところ８倍くらいの距離である。北京、上海を過ぎて寧波に着くのに２昼夜、４８時間はかかるに違いない。
しかし考えてみるとぼくらも学生のころは鹿児島駅を夕方発った急行「きりしま」は４８時間つまり２昼夜かかって翌々日、東京有楽町駅に着いたのだった。
当時の旅はそれが普通だった。思えば、もう４０数年昔のことである。
やがて新幹線が出来て時間は短縮されたけど、たいていの人は飛行機を利用するようになった。人々の所得が増え、航空運賃がそれほど負担にならなくなったことも由来しているのだろう。
それでも夜行寝台が姿を消したのはそれほど昔のことではない。
中国も空のインフラは日本と変わらないぐらい発達してきている。
それこそ片手で数えられる時間があれば中国全土を行き来することが出来る。
ただ一般の市民がそれを簡単に利用出来るまで所得水準が達していないというだけである。
「中国人の一般市民はたいへんだなぁ」といくらかの差別意識がはたらくのも過去

のことになる日がそう遠くないのかも知れない。

話は汽車の中にもどる。今、11:30、ということは3時間が過ぎたことになる。

豊鎮というところを過ぎると「万里の長城」を越える。長城は北京から、ここ大同を越えオルドスの砂漠の南際にそって銀川市を過ぎたあたりで一旦消える。多分、壊れて現存していないのかもしれない。

秦の始皇帝（前２４６年）が天下を統一したあと、本格的に長城をつくりはじめてから、明の大規模な工事により我々が眼にする万里の長城になるまで、じつに１８００年を経ている。

この間、ほとんどの王朝が長城を造り替えたり、直したりしてきた。

中国が始皇帝により統一されるまでは各諸侯国は自国の周囲に城壁をつくっていた。

特に北方の各諸侯国はお互い同士だけではなく、北の移民族からの襲撃を防ぐという別の大きな目的があった。

天下を統一した秦は、万里の長城として活かせる北の城壁以外はすべて土地の民を動員して取り壊したといわれている。

中国の歴史を眺めてみると、匈奴を筆頭に、いろんな異民族が、中国に侵攻し、略奪、殺戮をくりかえしてきた。

侵攻されたばかりでなく、五胡十六国時代（304～439）五代十国時代（907～960）金（1115～1234）の時代のように北から長城を越えて漢に入りそのまま住み着いてしまった多数の異民族による国も築かれた。

かって強力な騎馬軍団を擁していた異民族（匈奴、鮮卑、契丹、突厥など）も、中国内に定住するうち、騎馬の力がおとろえてきて今度は新たな遊牧民族の侵攻にそれまであった長城を補修したり、増築したりして、騎馬の侵攻に備えるようになった。

ぼくは走っている列車の左車窓から遠くに、しかしはっきりと見える、のろし台が等間隔で現れては消え、また現れては去っていくのをぼんやりと眺めていた。

今からはるか１５００年～１６００年も昔（、日本だと卑弥呼の古墳時代である）、の様子を想像していた。

何千、何万の騎馬軍団が突如、あの山の向うから津波のように押し寄せてくる姿を、そして、おおあわてで、のろしに火をつける見張り番の兵の姿が浮かんで消えた。

その遠くに見えていた山並みが段々と列車に近く見えてくるようになった。

数分おきに山の頂にのろし台が見えていた。

横にいる（最初に上段で眠っていた）中国人が「もうすぐすると変わった形の山がある」と言う。それよりぼくがいちばん訊きたかったのは万里の長城はいつ見えるのか?ということだった。

「あぁ、もうすぐ見えるよ。でも、汽車の中からは土塁だけだよ。」と、そっけない答えが返ってきた。

写真下が念願の「大同の長城」である。この長城をまたぐ間、ぼくのデジカメは撮影モードに切り替えてあった。のろし台からこの朽ち果てて土塁と化した長城を延々と、と言っても5分ほどだけど撮り続けた。（お見せできないのが残念。）

男は太原に行くらしい。おしゃべり男で、この路線をいつも仕事で使っているという。

変わった山の名前は『臥仏山』と言って格好が仏が横向きに臥しているように見えるのだそうだ。どうしても、その姿をぼくに見せたいらしい。

正直、あまり興味はないのだが、「楽しみですね、どんな山か。」と答えておいた。

左手に湖が見えてきた「湖ですか?池ですか?」と尋ねたら、「この沼は大きいけれど魚はいないんだ」と言う。「沼の底は全部砂だから魚のエサがないんだ」。との答えだった。

（車中の話がつづく）、

この後大同駅が近づくまで、とてもおしゃべりな車掌が話しに割り込んできたのだ。
　どういうきっかけだったかは憶えていないが、とにかく横に座り込んできて太原の男と三人でのおしゃべりタイムとなった。
もっともしゃべりの比率は４対４対２と言ったところだろうか。
おもな話題は、今から行く雲崗石窟と懸空寺を見学したあとのぼくの行程について
だ。
余計なお世話でもあるが実はぼくも迷っていたところだったので真剣に討議に加わ
ることにした。
、五台山からの先のコースについてであった。
五台山から次に何処に行くか、そのいちばん理想
的な交通手段についてのふたりの意見がいつまで
も一致しないのだ。
　ただ、唯一、同意見だったのが「平遥は面白く
ない」「あんなところはわざわざ行く所ではない」
「五台山は2日いてもいい」という。
「平遥」～「太原」～「五台山」～「懸空寺」～
「大同」（雲崗石窟）～「北京」の今と逆のコース
が一番いいんだそうだ。だけど、もうすぐ大同に
着くじゃな　いか、何もこのまま太原まで行く
こともあるまい。
　つまり、平遥なんかに行くよりも折角、五台山
に行くのなら、ゆっくり2日　ぐらいかけて五台山にいるのがいいというのが二
人の意見のようだった。
　ここにきて世界遺産「**平遥**」が遠くに去り、かわって福建省の世界遺産「土
楼・**客家**」が目の前にグーンと近づいた。
　大同のホテルに着いたら早速アモイの上山さんに電話をすることにした。
目的地（大同駅）に着いたのはもう4時がとっくに過ぎていた。
　昨夜「地球の歩き方」に書いてあった「雲崗賓館」に電話して今日の泊りの予約を
していた。その時の電話では、どうも本に書いてあった通り名とフロントの告げた通
り名が違っていたようだった。
　雲崗賓館には中国国際旅行社があって、そこでは日本語ガイドが３００元、
　車のチャーターが1日４００元～と書いてあっ
た。
今回の大同の石窟と寺の観光は『日本語ガイドに
説明してもらうこと。』を旅の第一のキーワードに
していた。
　ホテル内でゆっくり相談できると思いこのホテ
ルを選んだのに住所が違うというのはどういうこ
となんだろう。でも、これ以上のことはぼくの中
国語では解明できない。
とにかく、明日からの行程をガイドの件をふくめ
て早く決めたかった。
　本には大同駅前にも中国国際旅行社があるよう
に書いてあった。
うるさくつきまとって来た客引きタクシーの一人に「この辺に旅行社があるか?」と
尋ねてみたがそんな旅行社はないという。
仕方がないので「雲崗賓館」と字を書いて見せるとＯＫ，ＯＫ「乗れ」とドアを開け
た。
　わずか5分ほどでホテルに着いた。ホテルの名前は「雲崗国際酒店」と書いてあっ
た。
　しかし、電話番号は『地球の歩き方』の「雲崗賓館」と同じ、（0352）58638888
なのだ。?:?:?
　あとで、ここのホテルで紹介された**日本語ガイド・任麗英さん**にそのことを訊いて
みた。
答えは、「雲崗賓館」はもうありません。
　「雲崗国際酒店」に変わりました。と聞いてはじめて納得した。
時計の針は６時を指していた。

早く明日の段取りを決めないと、とチェックインもそこそこにフロントで聞いた旅行社を尋ねることにした。
そこはホテルから眼と鼻の先にあった。
中国国際旅行社ではなく「大同和平国際旅行社」と看板に書いてあった。
旅行社にしては一般の住居のような小さな建物でドアを開けると子供が2人遊んでいた。
でも対応に出た女性の感じがとてもよく、人柄も信用出来そうだったので、とりあえず明日のガイドをお願いすることにした。
「明日の朝8時に、日本語ガイドがホテルに迎えに来ます。」という。
「男性ですか?それとも小姐?」と尋ねてみた。どう思ったのか知らないが
「女性ですよ。」とにこっと笑った。(笑いの意思是我不懂)
1日200元だと言う。ぼくの携帯番号をおしえて旅行社を出た。ホテルの前に着くと陽が沈もうとしていた。
予定では、出来れば夕食前に市内の名所を1～2箇所回りたかった。
ホテルのフロントで華厳寺はどこか?と聞いたらここから5分ぐらい。との返事が返ってきたので急いで行って見ることにした。
残念なことにもうお寺はとっくに閉門になっていた。
写真だけを2，3枚撮り、(写真) 名物の刀削麺を食べに市街地に向かった。

9月12日（火） 朝
ホテルに迎えに来た任さんは流暢な日本語を話す和平旅行社の専任ガイドである。
年齢は32歳。「12になる男の子がいます。」 にこっと笑った顔が可愛かった。
「雲崗石窟はむかし武周石窟とよばれていました。」
「雲崗石窟は敦煌莫高窟、洛陽龍門石窟、天水麦積山石窟とともに中国四大石窟のひとつに数えられています。」
「雲崗石窟の主要な造像は三世仏です。三世仏は過去仏、現在仏、未来仏を本尊にしています。」
・・・・・・・・・雲崗石窟に着くまでの30分あまりの車のなかで任さんの雲崗石窟の解説が始まった。
はじめからぼくの予備知識とはちがう説明だった。
「そのバクセキサン石窟ってどこにあるんですか?」すぐ、四川の楽山か大足あたりが頭に浮かんだ。でも返ってきた答えは違っていた。
「麦積山石窟は甘粛省にあります。194 の石窟があって塑像で有名です。粘土です。
莫高窟は壁画が有名です
。雲崗石窟は石彫（セキボリ）です。そして龍門石窟は雲崗石窟の兄弟です。」
「時代はどうなっていますか?」と訊くと、
「南北朝時代（5世紀）からはじまって宋（13世紀）まで続きました。三尊阿弥陀仏です。」
そうか、知らなかったな。三大とばかり思っていたら四大か?また、行く所がひとつ増えてしまった。帰ったらHPで見つけてみよう。(調べて見ました。)

・・・ところで
ぼくの実際の雲崗石窟の見学ルートは右手の東部石窟群である第3窟から始まった。
帰ってからHPに説明入りの写真を載せようとおもいIPレコーダー（マッチ型の録音機）とCASIOのEXILIMを携えての見学だった。
帰ってから任さんの解説を何度も聞き返し、各窟の解説も書けるようになったけれど果たしてそれが面白いか?と考えてみたら、　　実際、あの大迫力の石

仏群を写真で説明した所でどうなんだろう。　目の前で聞いてはじめて感動もある。そう思って個々の解説はやめることにした。

ただ、以下の『曇曜五窟』だけは少し説明をしたいと思い載せる　ことにした。

・・・・そういうわけでここからの内容は見学順序と関係のないドキュメントです。

「雲崗石窟でいちばん有名なのは**第２０窟**です。」

「露座の大仏と一般に言われています。この石窟は北魏の開祖である**道武帝**を模して造られたとされています。三世仏です。

前の壁が崩壊しました。その時、左側にあった像も壊れました。遼の時代です。」

（ケイジの解説）

鮮卑（内モンゴル）の拓跋部は華北の地の農耕地帯を支配すると急速に国力を強めてゆき、都を平城（今の大同市）に遷し帝位につき国号を魏と定めた。

３８６年に拓跋珪（タクバツケイ）つまり**道武帝**が魏王の位についた。

国号を北魏とし、それまであった部族制度を解散して、族長たちを貴族にして武民達を漢族と同じ戸籍に編入した。また、有能な漢人を高官に取り立てた。

「雲崗石窟のなかでいちばん最初に造られたのが**第１９窟**です。曇曜五窟のなかではいちばん大きな大仏で石窟全体でも2番目に大きいです。高さは１６.８ｍです。

４６０年に曇曜が雲崗石窟を第４代の文成帝の命で造り始めて、最初の石仏です。

2代目皇帝の明元帝を模して作られたと言われてます。」

「**第１８窟**も１９窟とほぼ同じに彫られた石仏です。**第３代皇帝の太武帝**（423～452）を　模した石仏と言われていますが実は言われているだけでその証拠はありません。学者　のあてずっぽです。どこにも書かれた文字は残っていないのです。」

「他の石仏もおなじです。みなの想像です。」

「袈裟を羽織っています。左手ほ胸の前に置いています。そして、袈裟には小さな仏像がいっぱい彫り込まれています。「千仏袈裟」です。」

（ケイジの解説）

道武帝を継いだ明元帝は江南に成立していた宋を攻め、一時は黄河以南にまで領土を拡大していった。そして、明元帝の子として帝位についたのが太武帝である。

父の代に回復され強固になった権力基盤を背景に崔浩（さいこう）ら漢族の知識人の助言をえて政治、軍事両面の体制を一段と整備し、五胡の国々をつぎつぎに滅ぼして、ついに、華北の統一を完成した（４３９）

中国風王朝の建設をめざし、道士の冠謙之（368～448）を信任し、道教を採用、太平真君７年（446）廃仏毀釈の令をだして仏教を弾圧した。中国史上『三武一宗の法難』といわれ仏教の四大弾圧の最初となった。（崔浩も仏教嫌いだった）

北魏仏教は打撃をうけたが太武帝の長子、皇太子晃はかげで仏教を庇護し、そのため仏教教団は命脈を保つ事ができたといわれる。その晃を祭った窟が**第１７窟**である。

景穆（ボク）帝といい 15.6ｍの交脚弥勒菩薩像である。　景穆（ボク）帝・晃は 451 年に突然、病死し、そのまた翌年に太武帝が宦官によって殺された。（４５２）

晃の長男だった文成帝が即位（第４代皇帝）し、亡父の遺志をついで仏教の興隆に努めた。**第１６窟**の本尊・釈迦仏立像である。

胸の前で結んだ帯が下に長く垂れている。像の下半分は破壊されているが、像の前に立って仰ぎ見ると、仏像を仰ぐというより、皇帝の前にひれ伏して

いる感じである。

（ケイジの解説）

雲崗石窟はこの若き第四代皇帝・文成帝（13歳で即位）が和平元年（４６０）曇曜を召しだし当時の仏教界の最高位である沙門統に任じ、雲崗石窟の開窟をはじめた。

この事業は第の代の孝文帝まで続けられ、彼の遷都・洛陽の『龍門石窟』へと引継がれていった。

日本語ガイドの任莉英さんの説明の中からいくつか記憶にある話を思い出して書いてみたいとおもう。

● 石仏についている無数の穴の正体は？

「あれはくさびのの痕です。彫ったあと粘土で衣服を作りました。いろいろな装飾品も付　けました。粘土がすぐ落ちてしまいます。そこで、石に木でくさびを打ち込みました。粘土がとても付き易いです。

でも、長い年月がたちます。木が腐りました。粘土が剥げ落ちてしまいました。痕に穴だけが残りました。」

● どうして立像は下の土を掘っているのですか？

「雲崗石窟、石仏、まず頭から掘り始めました。どんどん彫っていくうち脚が残りました。

土彫るしかありませんでした。これで、雲崗石窟、まず上から彫り始めたことがわかりま　す。

● 本当は曇曜五窟の中心窟は第19窟です。20窟が外壁があったらここに立って眺めたら19窟が扇の要の所に位置します。今、２０窟、外壁ありません。だから皆、中心と思っています。

● 曇曜五窟の胸には龍が彫ってあります。（分からなかった）、人民は石仏、拝みます。　つまり、皇帝を拝んでいます。

以上：任さん語録より。

今度の旅の二つ目の目的だった『雲崗石窟』の見学はこうして終った。　このあと、三つ目の目標点・『懸空寺』へ向かう。

一度、大同にもどり昼食をとってから向かう『懸空寺』は約2時間の行程です。と任莉英さんが言った。ここに到る過程で、

ぼくは明日の『五台山』観光も任莉英さんにガイドをお願いしょう。という気持ちになっていた。

足になるクルマもワーゲン・パサートのなかなかフットワークの良い乗用車である。

何よりも大同から五台山まで定期のバスは出ていない、と彼女は言う。

３０００メートルの高地へ向かう天空ルートはやはり快適な乗物を選びたい。

仮に、何とか行ったとしても観光案内から宿泊と、考えると大変である。

彼女は言う。

「大石さんは一番良いのは、このまま懸空寺見学したのあと、そのまま五台山に私たちと行きます。

懸空寺は大同市と五台山の中間です。

あと4時間、山を登ると五台山に着きます。

もう、夕方です。泊って、明日、一日、五台山、見学します。

午後、大同市に戻ります。

途中、**木塔**、（下）見学します。大同、夜に着きます。

もう一日、ホテルに泊まって北京行く、どうですか？いちばん良い行程です。」

ぼくは同感だった。

旅行社との料金交渉とホテルにあさって泊まるから旅行ケースを預かってもらう交渉などを済ますのに1時間、昼食に1時間ほど要し『懸空寺』へ向かった。

懸空寺はこちら→

懸空寺は、北岳恒山の山中、西の翠塀峰の絶壁に張り付くように建っている。断崖の穴を開け支柱を差し込んで土台にして山腹に楼閣を建て、それぞれの楼閣は桟道でつないである。楼閣や回廊は下から見ると宙に浮いて見える。建てられたのは北魏の末期・491年にさかのぼる。

いつも中国旅行で使うメモ帳はスーパーに売っている「工作手帳」である。150×100の80枚、なにより使い易いのは全体が自由にくねくね(変な表現だが)していて一度、携帯したらやめられない東西（しろもの）である。

中国に行く友人たちに「みやげはいらないからこんな手帳（安いものです）買ってきて」 と言って見せるのだけど、同じ物を買ってきてもらったことがない。

「もうそんな商品は売ってないよ」と店の子に言われたというけど、ぼくが行くとちゃんと見つけられる。（メモ好きな方は一度試されたら,いかが。一冊3元くらいかな。）

さてさて、又、クルマの中から始まります。 時刻は、**9月12日のご4：00**です実は今、記憶をたぐっているところなのです。大同市の有名なお寺、『華厳寺』は『懸空寺』に行く前に行ったのだったか、五台山の帰りだったのか?

まあ、メモ帳に沿って書いていくことにする。

懸空寺は一度、テレビで紹介されたとき妻が「そこにはいっぺん行ってみたいとこだよね」と言っていた寺である。「すごいとこらしいよ、高所恐怖症には駄目みたいだよ。ぼくが行ってよく見てくるからね、動画もとってくるよ」と答えたところだ。

懸空寺に着いたのが午後3時、ちょうど1時間の見学だった。

これから五台山まで約3時間半のドライブ登山である。

任莉英さんのはなし

「大同～五台山は今の季節は定期観光バスはありません。観光客のピークはすぎてしまいました。だから「一日ツアー」のバスはでません。朝、1回、大同から長距離バス出ます。不便です」と言う。

ようこそ和平旅行社で2日間ツアーに組んでよかったと思った。

1日700元だから2日だと1400元、結構高いと思うけど時間のことを考えると仕方がない。

もし、2～3人で来ていたら一人1日4～5，000円というところだ。

ここまでのところ、今回のぼくの旅は志に反して、専用車を使っての贅沢な旅の感を呈している。

でも、弁解するわけではないけどこれから向かう五台山は、どっちにしろ又、日本語ガイドの世話にならなければあの膨大な数の寺院をどうやって回っていいかわからない。

仮に、持ってきた旅行本を頼るだけでは時間がいくらあっても無理なことはわかっていた。そうそう、懸空寺のはなしを忘れていた。1時間、時計の針を戻すことにする。 じつは着きそうそう、頭の中か真っ白になる出来事が起きた。（大袈裟な表現ではない）

雲崗石窟のときから、「チョット変だな」と思っていたことだった。デジカメの具合がどうもおかしかったのである。スイッチをいれてもレンズが出てこないのだ。

目の前に展開する、あの写真やテレビで見ていた異様な光景を眺めながらスイッチが反応しないもどかしさ。

普通なら2,3枚撮影すると、目の前の光景にしばし見とれる時間があるのだけど、これはどうしたことかカメラに写せないという心の動揺は、すばらしい光景を前にした感動すら無にしてしまうのだろうか。

「家に帰って家内にこのすばらしい光景を見せることが出来ないぞ。」

「この背景をバックにぼくが写っているHPもつくれない。それよりなにより明日

からの五台山はどうしょう?・?・?・」

たのしみ半減・・・そういうことが頭の中を交錯した。

なんべん、いじりまわしてもエクスリーム５００のスイッチは作動しない。どうしてこうなったのだろうなどと考える余裕すらなかった。再生スイッチの方は作動する。そうこうするうち時折ジーッといってレンズが出てくる時がある。

液晶画面に山の景色が映る、（パッと心がはれる。奇跡か！）でも、それは一瞬のこと、すぐレンズが引っ込むのである。そしてまた無画面にもどる。　　とうとうぼくは諦めた。

と同時に懸空寺の興味も萎えてきていた。任さんの説明もカメラのことが気になってあまり集中出来ない。

第三楼ぐらいまで上り始めた頃だろうか、一瞬ある事がひらめいたのである。後で考えると諦める前にすぐ考えつく筈のことだったが

「写るんデスは売ってないだろうか?」任さんが「そうですね、売ってるかも知れませんね」

という。幸運にも、　２分ほど登ると小さな売店があった。

２４枚撮りの弁当箱のようなちゃちな簡易カメラが売っていた。天の助けとはこのことだった。きれいに写らないことは分かっていた。でも、ないよりましである。

明日からの旅はバカちょん（愛称）カメラを買い足し買い足しの旅になりそうだ。

ぼくはこのとき１つの教訓を得た。

これから日本を発つときは念のために１個か２個の日本製インスタントカメラをスーツケースに入れてくることだ。こちらでカメラの修理など考えられないことだからだ。

何といっても日本製は３６枚撮り、型も小さくてベストである。

懸空寺の写真はバカちょんカメラのため見ずらいと思います。

五台山は、峨眉山、普陀山、九華山とともに、仏教四大名山のひとつで、文殊菩薩の道場とされてきた。山頂が平らかな５峰から形成されているため五台山といわれるが、別名を清涼山という。最高峰の北台頂は標高３０５８ｍ,夏でも涼しいことから、こうよばれたのである。

他の三山と異なり経典に名前があるため、四大仏教聖地のなかの第一の聖地とうたわれる。雲崗石窟と同じ、北魏の時代に創建された寺院が多いが、南北朝時代には２００余、最盛期の唐代には３６０余の寺院があったといわれる。

文殊の聖地五台山は仏教者のあこがれで、インド,朝鮮、日本からも巡礼者が絶えなかった。（引用：『週間中国悠遊紀行』１４より）

・・・五つの峰の内側は台内と呼ばれている。代表的な寺は菩薩寺,顕通寺、塔院寺などでそれらの集まるところを台懐鎮寺廟群とよばれている。

←

ところで、たべものの話を少ししたいと思う。

山西省の料理はとても美味い。ぼく好みの味です。大同市で２回、五台山で２回、ガイドの任さんと一緒に食事をした。

ご当地の評判の店に連れて行ってもらったせいもあるのだろうが名物の刀削麺などは気に入って食事の度に食べた。　（下左はタレを麺にかける食べ方。その逆で日本のざるそば式もある。）

他にも「これは山西省の名物料理です。」とか「これは大同の特産菜です。」とか、そんな類の料理がとても多い。そして、そのすべてが**真好吃（本当においしい）**のである。

米飯（ミーハンという）も、内モンゴルでは粒がちいさくポロポロしていたけど当地のそれは日本の（：ひかり）並み?だった。

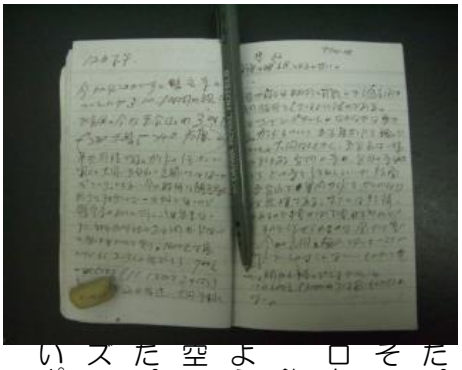
五台山名物の「粟の団子」も大同料理の「ぶたの耳」も印象に残る名物料理だった。

とくに五台山は水が良いのだそうだ。世界に名高い「北京料理」の原点は山西料理にある、といわれているのもうなずける。

大同で昼食で、いつものようにぼくがビールを飲んでいた際の会話。

「白さん（運転手）あなたは　昼は飲めないから今夜、夕食のときにでも一杯や

りませんか?」と誘い、そのあと当地の酒の話になった。
『ところで山西省の酒は何ですか?」と尋ねると彼は
「山西省は黒酢が有名ですが、もっと有名なのがあります。それは汾酒です。」
とすかさず返答した。
「それは白酒ですか?」と、さらに訊くと　「そうです、汾酒はとても美味しい酒です白酒の本家といわれています」という。
「では、今夜は汾酒（フェンジウ）で乾杯しましょう。」ということになった。
男性が白さん（３２歳）そして、右が汾（フェン）酒いくつかの峠を越えて目的地「五台山」に着いたのはすっかり暗くなってからだった。
左手に川をみながらクルマは売店の並んだ街を通りすぎさらに１０分ぐらいは走ったところに目指すホテルはあった。
クルマから外に出ると思わず身震いしそうな寒さだった。
「ここは五台山では大きい方のホテルです。」と任さんは言うけれど部屋に入ってみるとやはり市内のホテルとは違う。
３年前、家族で安徽省の黄山に行ったとき、山頂ホテル（青海飯店）に泊ったが、部屋に入った瞬間、そのときの記憶がよみがえってきた。
部屋から受ける感じがそっくりなのである。暖房は効くそうなので『フフホトの草原の包』よりはまだ、ましかなと思った。
夕食は９時を過ぎていた。ホテルの食堂ももうほとんど片付けられていたのを任さんが支配人に無理に頼んで料理を作ってもらったようだ。メイドの小姐たちもいかにも不機嫌そうだった。
そりゃそうだろう片づけが終る頃にまた客なんだから、とおもいながらイスにかけるとまだ１５,６才の子供のような小姐が二人、ビニールのテーブルクロスをかけに来た。
「謝々」（ありがとうね）というと、無理に笑ったようにみえた。
（酒でも飲んで、売上に協力してあげなきゃ、）と思い何本かのうち高そうなのを注文した。



白さんが自慢していた汾酒は確かにおいしかった。３０度、４０度、５０度と度数があるらしい、その時飲んだのが何度だったか忘れてしまったけど口あたりのいい甘くてまろやかな味だった。
飲み干したぼくの顔を「どうでしたか?」というような顔をして白さんが見ているので　だまって、空いてる手で親指一本のＶサインをつきだして見せた。　中国人がとても満足したときによくやるポーズで一度やってみたいポーズだった。
３００ｍｌほどの小瓶を白さんと空け、すっかり出来上がってしまった。
暖房のきいた部屋に戻った時は１０時半頃だった。蒲団?はうすく、クリーニングはしてあるようだがシーツは湿り気があり、かすかにカビの匂いがした。
こんな時のために用意してきたトレーナーを着て、顔には掛フトンとの間に　両面起毛のタオルをかけ眠りの態勢にはいった。でも寝心地はこうして書いているほどいやではなかった。

２００６年９月１３日（水）

五台山での朝、　雲ひとつない中国ではめずらしいぐらい空は青く、高かった。
朝食の時間は８時半までと言われたのでもう昨夜のうちに朝飯抜きをきめていた。昨夜の汾酒が効いたのか８時ごろまで目は覚めなかった。
外に出て念のためにもう一度デジカメを操作してみたら、何と、液晶画面にホテルの玄関がくっきりと写っていた。

今日は売店で、昨日よりはましなインスタントカメラを買おうと思っていたところだった。
カメラも疲れていたのだろうか。
　あとで分かったのだけど、包頭で砂スベリをしたとき、ジーンズの右ポケットにデジカメを入れていたのが原因だった（推測）。というより、ジーンズのポケットの底ににあのきめの細かい砂が入ってしまったのだろう。全身、砂だらけになったけど,その後、何枚かは撮影出来た、後からレンズの出入りが変なのに気付いてはいたが。
そういえば、敦煌の鳴砂山でも買ったばかりのサイバーショットで同じ経験をしたことがあーる。そんなときに限って、いつもはしているケースを忘れている。それにしてもこれほどうれしい出来事はなかった。（おもわずバンザイ！）
結局、妻がいちばん楽しみにしていた懸空寺でのショットだけが一枚もないのが残念。
インスタントカメラで撮った分がどれほど写っているか、これもまた楽しみでもある。
　まあ、３０％ぐらいの確率でピンボケ写真にちがいない。
「わたしたちはまず菩薩頂から見学します」と任さんが言う。　実は五台山に来たものぼくは仏教にそれほど詳しくない。

その割にはなんと多くの中国の仏教寺院、道教、ラマ教、回教寺院を巡って来たことだろう。
菩薩頂は廟群（台懐鎮）の中ではいちばん高い所に位置している。
顕通寺から１０８段の石段を登りきったところにある。任さんはいう。
「わたしたちはクルマで石段、あがりました。下から歩いて上ると、とても急です、とても疲れます。」

　菩薩頂は五台山にもっともゆかりのある文殊菩薩の居所と考えられている寺である。
　しかし清の順治帝以降、ラマ教に変えられ２５あるラマ教の寺院の代表する寺院になっている。
　中国四大聖山のことは先に書いた。それぞれ信仰する菩薩のことも書いたが、なかでも文殊は舎衛国のバラモンの子で仏（釈迦）がなくなった後の実在の人物と言われている。
　普賢菩薩（四川省・峨眉山）とともに釈迦の脇侍菩薩でもある。「三人よれば文殊の知恵」といわれるように智をつかさどる菩薩といわれているがそれは学問ではなく参謀としての知恵とか判断力に優れていたと言われている。

　昔から伝えられている**『五台山の伝説』**というのがあるので書いてみる。
・・・・むかしむかし、五台山は五峰山とよばれていた。ここの気候は悪く、冬は水が凍り、春は嵐が吹き荒れ、夏は耐え難い暑さにみまわれる。作物は出来ず、人々は困っていた。　そこに文殊菩薩が伝教にやって来た。
　文殊菩薩は助けてあげよう、そうだ、ここの気候を変えてあげようと思った。東海の竜王のところにある大石があって、それは乾燥した空気を湿す力があるという。
　そこで菩薩は老いた和尚に姿を変えその石を手に入れるべく東海に向かった。
　文殊菩薩は竜王に会っていきさつを語り、どうしても人々を助ける為にこの石が欲しいと願い出た。すると竜王は申しわけなさそうに
「他のものなら何なりと差上げますがあの石だけはだめです。あれは、私たちが何百年もの月日をかけて海の底から持ってきたものです。もし、あの石を渡してしまえば、竜の子たちが休む場所がなくなってしまいます。」と断った。
　文殊菩薩は自分が五峰山の和尚で人々を苦しみから救うために助けを求めて

来たことを繰り返した。
竜王はこれ以上正面から菩薩の願いを断り難くなってきた。そこで、この老いた和尚一人であの石を運ぶことは出来まい、と思い言った。
「あの石はとても重い、もし、あなたが人の助けなしで石をお持ちになれるなら差上げます。」と答えた。
菩薩は礼を言って石に近づいた。その石に近づき呪文を唱えると巨大な石はあっというまに小さな石ころに変わってしまった。
文殊はその石ころを懐に入れ飄然と去っていった。
帰って来た文殊菩薩がその石を谷間に置くと、急に奇跡が起った。
長年の日照りで乾き切った大地は一瞬のうちに涼しい天然の牧場に化した。
こうしてこの谷間は「清涼谷」と命名され、人々はここに寺を建て、そこを清涼寺と名づけ、五峰山も名を清涼山と変えた。いまも五台山の別名として人々に呼ばれている。仏教の経典にでてくる【文殊菩薩像】は獅子にまたがり、右手に剣、左手に経典を持つのが一般的とされています。
経典は知恵の象徴、剣はその知恵が研ぎ澄まされている様を、獅子はその知恵の勢いが盛んであることを表現している
と言われています。
髪は1つ、または五つ、六つ、八つのまげを結っています。呪文の文字数と文殊菩薩のまげの数が唱え方により一致するのだそうです。
「菩薩頂は清代には歴代皇帝の五台山参拝の時の宿所でした。」
「康熙帝が4回、乾隆帝が3回訪れています。」
１０８の石段を下りるとそこは五台山寺廟中最大規模をほこる**顕通寺**がある。
顕通寺はまた五台山の中で最初に、というより中国に仏教が伝来して最初に建てられた洛陽の【白馬寺】より少し遅れた後漢の永平年間（58～75）に建造された。

「顕通寺は五台山の青廟の代表寺院です。」
「任さん、青廟って何ですか?」
というぼくの問いかけに、任さんの説明がつづく
「和尚さんの袈裟は青（灰）色です。そして、ラマ僧の衣服　黄色です。ラマ寺院のこと
黄廟といいます。黄廟の代表寺　菩薩頂です。五台山に９９の青廟あります。」
顕通寺はさすがに広い、ある本には敷地面積8万平方ｍとあり、又別の本には4万平方ｍとある。洛陽の【白馬寺】もとてつもなく広い、巨大公園のように感じたったがここ建通寺も負けてはいない。
白馬寺のときは運転手ガイドのチャオさんを駐車場に待たせての独り見学だったので中の殿堂も飛ばしながら、ちょっと覗いては出る、といった按配だった。ここはそうはいかない。任さんにとっては一つ一つコースの説明が身についたリズムになっているのだろうから。
ときには「ここは大石さん、拝んだ方がいいです。」
といって、中国式の手のひらを目上にかざしてはひざまずく、これを3回くりかえし式礼拝をやらされる。（任さんはしない）。またあるところではラマ式のマヤ車を回させられる。
説明を受ける。中に入る。そのくりかえしで建通寺は正直、疲れてしまいました。
まだ続くのか、と思っていたら次の殿堂、たしか【無量殿】に来たとき
「あれっ、鍵がかかって中に入れません」という、そういえば周りに参拝（観光）客がいっぱい立ったり、座ったり、写真を撮ったりしている。
坊さんたちのお昼時間だそうだ。時計はたしかに正午をさしていた。
やがて横の通路を大食堂に向かうのだろう、手に椀を持った坊さんの大行列が通る場面に遭遇した。貴重な体験だった。このときも、ぼくのデジカメは撮影モードになっていた。
デジカメの解説書を見ていたらムービーの項目のところにムービーカットと

いうのがあった。
動画の1シーンを静止画にカット出来るという。さっそく試した画像が下です。
というわけで顕通寺の殿堂巡りを途中でやめてぼくたちはすぐ下にある【塔院寺】へと
向かった。
【塔院寺】はもともとは独立した寺院ではなく、顕通寺の一部でした。と任さんはいう。
「あの白塔は五台山のシンボルです。高さは５６メートルです。正式の塔の名前は釈迦牟尼舎利塔といいます。唐の時代に日本の円仁和尚がここに来て詠った詩があります。
・・・・・・・・遠く台頂を望めば、円く高くして樹木を見ず
地に伏して遥かに礼し　覚えず涙を雨ふらす。
もともとチベット仏教式の塔ですが、下の部分は仏教式です。釈迦の他に、観世音、普賢、地蔵、文殊の四菩薩を安置しています。」
すぐ近くにある万仏閣を見終わったら1時をすこし過ぎていた。「今から昼食をたべて五台山をあとにします。途中、木塔に寄って大同に帰りましょう。」と任さんが言った。
ぼくは、実は、もう一ヶ所、どうしても行きたいところがあった。
寺の名前も、由来も関係はなかった。ただそこに上って白塔を眺めて見たかっただけである。そこから台懐鎮を写真に収めたかったのである。
任さんに言ってみた。「昼ごはんは簡単に刀削麺だけでもいいですから、あの何とか山に登ってみたいですね。リフトで上り下りすれば３０分もあれば大丈夫じゃないですか?」
「いいですよ」と任さんが言うので急いで食事をすることになった。
ところで中国人の食堂での注文の仕方だが昼夜関係なく注文する皿数が多いように思う。これは日本人のランチ、ディナーの感覚とは違うようだ。
「簡単に済ませて観光に廻りましょう」などという気持ちは日本人ならとる料理の数を少なくと思うのだが彼らの場合は急いで食べること、と解釈するように思える。
この日も次々と注文して8品は注文したかもしれない。例によって山西省特有の黒酢が小皿に入れて出る。（感想：うまかった。1時間はついやした。）
黛螺頂はしばらく歩いたところからリフトを利用して４００ｍを上る。別にハイキングコースと階段コース（1080段）があるらしい。　ぼくたちは躊躇なくリフト３０元を選んだ。
一段が３０センチと聞いてびびってしまった。
黛螺頂　の頂にある寺には五体の文殊菩薩像があることで有名なんだそうだ。五台山の五つの峰のそれぞれの文殊を象徴しているといわれる。
時間が気になって本当のところは寺の中は記憶から消えてしまっている。
それより、帰りは楽しいことがあった。
下りもリフトで下りるつもりだったが途中で男達が声を掛けてくるなにやら
「チーマ、チーマ」と言っているようだった。横の看板で、その意味がわかった。
「騎　馬（チーマ）馬に乗らないか?」と言ってるのだ。途端にぼくの心が動いた。
「任さん、馬で降りようか?」「いや、わたしは嫌です。」と身体を引いた。
ぼくはもうそのときは決心していた。この３０度はある４００ｍの山の上から馬に乗って駆け下りる快感に酔いしれていた。しぶる任さんを無理やり説得してぼくたちは騎乗の人になった。
馬は以外に大きい馬だった。フフホトの草原で乗った馬からすると３０センチは高かったように思う。
石を踏み台にして乗った馬の上からの眺めは正直言って「こりゃ、落ちたら大変なこ

とになるぞ。」そんな気持ちだった。
　馬上から写真でも撮るなんてことはとても無理なことだ。
幅13 ぐらいの小石をイレギュラーに敷きつめた山道を馬はひずめを石の上にしっかり安定しているか確認しながら下りていく、落馬より馬の方が先にこけるんじゃないか、その方が心配になってくる。
　周囲を眺めながらパカパカ下りるなんてものではなかった。それでも、ときおり、土道になると、さすがに気分爽快だった。
　料金はリフトより5元安い25元（４００円ぐらい）だった。
　あとで白さんに聞いた話だが、下り終ってから近くの馬場を駆けるオプションをすると別に１００元ぐらい請求されるらしいので気をつけなければいけないそうだ。
　ちょうど白さんが馬を下りるところにクルマを置いていたらしく彼はぼくが預けておいたインスタントカメラで写真を撮ってくれていた。ちょっとピンボケは仕方ないですが貴重。

た。
　時間は5時。今から大同までは1時間ぐらいかかります、と任さんが後ろを振りかえり「夕食はわたしが美味しいところに案内します」とニコリと笑って言った。　ハイウエイの両脇に白い幹に緑の葉の繁る新疆ポプラ並木がどこまでも続いていた。
　二日間ぼくの足代わりを果たしてくれたパサートは暗闇のハイウェイを大同へ向けてひた走った。
　北京は今回の旅行では当初、通過都市ぐらいに考えていた。
　出来れば王府井近くに宿をとって北京オリンピックに向けて一部取り壊されつつある胡同（フートン）めぐりをするか、故宮の城壁にでも上ってみたいと思っていた。
じつは北京はぼくの生まれ故郷で、４,～5歳ごろまで育った街だった。
　おぼろげではあるが当時2歳年上だった兄と石壁にのぼって遊んだ思い出がある。
　子供の頃、そこが万里の長城だと信じていたが大人になって考えると、長城はとても遠すぎて遊びに行けるような場所ではないのが分かった。
　そこでもしかしたら故宮の城壁だったのではないかと思ったからだ。
　両親が他界するまでは自分の頭の中に、小さい頃のことや、その頃過ごした北京の街のことなどまったく関心がなかった。
　それでも当時の家の中での出来事や近所の様子などはときどき家族で話すことはあったが。
　かんじんの我が家が地図の上でどの辺だったかなどは聞いたことはなかった。
　そもそも中国自体に関心がなく、まさか今のような状態など想像だにしなかった。
　さて話を15日の朝の大同市にもどすことにする。
　「混んでるからここで降りてくれ」、とタクシー運転手がぼくを下ろした場所はなんと白タクのいっぱいいる駐車場の前だった。フロントガラスには行き先の書いた紙が貼ってある。
五台山を充分に満喫したぼくらは、前の日に上って来た道より西側の方へ山を下った。
目指すは**【応県木塔】**である。時計の針は2時４０分を指していた。
　「造られたのは遼の時代、西暦１０５６年です。中国では最も古い、そして最も高い木塔といわれています。　形は八角形で外見は五層だけど内側は9階建てになっています。」
　任さんの案内で中に入り、上にあがってみた。
まったく灯かりはなく、真っ暗で、階段は急だった。
ぼくは　いつか行った信州松本城の天守閣へのぼる階段を思いだした。
　「おととしまでは5階まで行けましたが昨年は４階までになりました。
でも今は3階でストップです。
上には上がれません。塔が傾いてきましたから危なくなりました。」
　と、いく重にも板木で補修された柱を、任さんは指差しながら言った。
　もうすっかり暗くなった木塔をバックに写真をとり、ぼくらは【木塔】を後にし

「何処まで行くのか?北京なら１５０元でいいよ」と数人の白タクの客引きが言い寄って来た。

汽車で行っても硬寝台で１０３元かかる。硬座だと５３元だけど硬座列車で６時間乗るのはきついナ、と思っていた。１５０元で、タクシーで北京市内まで４時間で行くというのは魅力だと思った。

汽車の出発は８：５０分、北京駅着が３時、それからホテルまでまたタクシーだ。

一方、白タクだと昼過ぎには北京に着いてしまう。

北京での宿は昨夜のうちに任さんが勧めてくれた『台湾飯店』を予約しておいた。台湾飯店は王府井にあるので、もしかしたら故宮や胡同なら今日の内に廻れるかもしれない。

またぼくの脳は、（楽な方へ、楽な方へ）と計算が駆け巡る。

そして結局、「時は金なり」に半分以上傾きかけていた。

とそこへ又、別の客引き女が割り込んできた。

「アナタ、マイクロバス　乗らないか?一人欠員があるので９０元でいいよ」

と言う。ナニ!汽車より安いじゃないか。

みるとなかなか車体も悪くない。でも、むかし寧波（ニンポー）で普陀山に行ったとき乗ったマイクロ面包車は舗装したハイウエーを走っていたにもかかわらず、がたがたがお尻を刺激して苦痛の時間を過ごしたことを思い出した。

サスペッションとタイヤを確認したらまだ新しいようだ。　所要時間もタクシーと一緒だと言う。

ということで結局、ぼくはマイクロバスに乗って北京を目指すことになったのである。

ところで大同を発つ前にひとつ気になることがあった。

それは五台山に行く前に劉氏に戴いた掛軸を部屋に忘れて来てしまったのである。

途中、気づいてホテルに電話をして捜してもらったのだが見当らないという返事だった。

夕べ遅くホテルに着いたので早速マネージャーに訊いて見たがやはり見つからなかったという。

せっかく下さった劉さんには本当に申し訳ないことをしたものだ。

さて、マイクロ（面包）車は快調に飛ばし北京近くに着いたのはまだ正午前だった。

ところがここにきて交通事情のことで任さんが言っていたことが現実になった。

片側２車線（３車線だったかもしれない）のハイウエーの右車線に動かない大型トラックの列が何キロも続いているのだ。

それはもう（何処までも続く）の表現がぴったりの状態だった。

眺めると、車から外に出て数人でトランプをしている人たち、タイヤ交換をしている人もいた。

さいわいにマイクロや乗用車は左側車線を走れた（多分車線分けをしているのだろう）けどそれでも、北京の市街地まで１時間はゆうにかかった。

結局、北京市街地にマイクロが着いたのは２時は過ぎていたと思う。

めざす『台湾飯店』は地下鉄１号線王府井駅を降り、王府井の繁華街を抜け一番目の道を右に折れ、１５０ｍも歩けば左側にあった。通り名は、わかりやすく「金魚胡同」という。

もうかなり古く見えるホテルである。

三ツ星ホテルで料金は８００元ぐらいの中級ホテルであるがショッピングや市内観光にはすこぶる便利なホテルだと思う。

一階のロビー横には日本料理店『江戸川』があり。多分、日本人観光客が多いのだろう。

ほんのすぐ近くに「王府井百貨大楼」や「新東安市場」があるにもかかわらず細い路地に入ると昔の小さな店や住居があって落ちついた庶民の町、そんな感じがした。

台湾飯店の隣には『和平賓館』があり、斜め向かいにもかなり大きいホテル『王府飯店』が建っている。

金魚胡同はそんな通りである。

ホテル内でする事がいっぱいあった。

愛想のよさそうな女服務員がインフォメーションコーナー（つまり交通チケットの斡旋や団体ツアーの斡旋紹介 etc・・・）に座っていた。さて、今からすることは、

○　あさって行くアモイまでの航空券の手配。

○　明日何処へ行くか相談と申込。

○　胡同にはどうすればいけるのか？の相談。

etc・・などである。

まず、アモイ行きの航空券を購入しなければならない。

●北京～アモイの所要時間が2～3時間。上山さんが4時前後着なら迎えに来れるというので、それに甘えるとしたら何時に北京を発てばいいかを計算してみた。遅くとも正午より前の便になる。

余裕をみたら11時発かなと計算した。北京空港までタクシーで1時間半とみて、ホテル発を9時半。朝ご飯を食べてちょうどいいかな。

ということで服務員に航空便を調べてもらったら8時半の便の後は12：05発だという。まさかホテル発を6時半というのはないだろう。12時5分発で丁度いいだろうと、それを予約した。

●つぎに明日の現地ツアーをどこにするか？コーナーの横にあるスタンド看板に張り紙がしてあるのが目に入った。上から、八達嶺長城ツアー、司馬台長城ツアー、頤和園ツアー、市内ツアーなどが料金と共に書いてあった。

「頤和園」はいちばん行きたかったけど、妻が北京の観光地が出るテレビを見るたびに「頤和園だけは私も行ってみたい」と言っていたので、そこだけははずすことにした。

服務員の早い中国語での説明はまだぼくには無理が多い。

しかも彼女は、ぼくの苦手な北京語の発音で喋る。語尾がアール化していて、話の内容が聞き取りずらいのである。

来る前にグローバルの深栖さんと司馬台長城について話したことがあった。

「八達嶺に較べるとやはり長城に来た、と言う感じがしますよね。ちょっと遠すぎますけどね。」

と深栖さんは言っていた。じゃ「司馬台長城」にしてみよう。そう思ってよくみると決行の曜日がとびとびになっている。

行かない日もあるんだ、と思いながら見るとちょうど明日が決行日になっている。

そこにきめる事にして280元の参加費を服務員に差し出した。

それでも彼女がなにやら例の北京語で話しかけてくる。

早口と「はひふへほ言葉」でさっぱり内容が理解しにくい。仕方なしに相手の言うことが分からないときにぼくがよく使う「明白了」（わかりました）と返答しておいた。本来なら「不明白」だが、どちらでもいいと思ったとき

や不利な結末にならない時などは面倒なので、ついて言ってしまう。

「ホテル前に、朝8時半にバスが迎えに来ます。」

というところだけはよく分かった。

30分ほど、この『旅遊コーナー』で時間を費やし故宮を目指した。

もう4時が近かったけど和平飯店まで歩いてわずか5分で来た。そして天安門広場に10分ほどで到着した。なるほど台湾飯店は便利な場所である。

まだまだ世界中からの観光客で天安門付近はいっぱいだった。

急いで午門をくぐると、すぐ右の方に「城壁登り口」があった。以前、ツアーで来

たときは目に入らなかった。入場料が15元?ぐらいだった。
城壁の上から周囲を眺めてみたが幼いころの記憶は甦ってこない。ここではなかったのだろう。やはり遊んだのは別な所だっのか?永遠の?である。
今の故宮は改修中の建物ばかりである。大和殿、中和殿、乾清宮などほとんどの宮殿が改修のため幕で覆われている。撮ってもしょうがないと思って撮らなかった。
（一枚ぐらい載せたかったけどその時は思いつかなかった。残念）
『珍妃の井戸』を見てみたかったので乾清宮から→の案内板を頼りに右折した。
『珍妃の井戸』は以前、浅田次郎の小説で読んでいた。ここでは定説としての珍妃の話を載せておくことにする。浅田次郎の小説は定説とは違います。
時に清帝国の末期、出世欲と権力欲に取り付かれた儒教官僚と宦官の退廃政治。自らの手を血に汚す事で最高独裁権力者にのし上がった西太后。
彼女によって幼時より名ばかりの皇帝に擁立されながら ついに康有為を中心とする革新官僚とともに政治維新に立ち上がったものの あえなくも失敗、幽閉の身となった光緒帝。
光緒帝とともに維新の夢を追い捕らわれた皇帝最愛の側室・美貌の珍妃。

義和団事件を口実に牙をむいて北京に攻め入る帝国主義列強8ヶ国連合。
西太后は青衣に身をやつし、囚われの光緒帝、珍妃、側近ともども北京城脱出を決意する。
西太后の命に反抗する珍妃。“皇帝陛下は北京にとどまり洋鬼子と和議にあたられるべきでありましょう”
西太后は激怒する“即刻そこなる井戸にぶち込むが良い！”
実際に見た井戸はあまりにも小さかった。
四角いつるべの付いた日本の井戸を想像しているとビックリ仰天ものである。
ある説では（あとで造り替えた）又ある説では（身体をばらばらにして投げた）とかいわれている。西洋でも有名なのか欧米人の見学者が多い。

中を覗いて見たが一応、暗かった。
ちいさな石ころ（その辺にありそうだった）を投げ込んで見たい、ふと、そんな気がおこった。
もしかしたら実際にそんなやからがいるかもしれないと思った。
横のちいさな建物に珍妃の写真が祭ってある。（写真右）
トの光はフラッシュの跡。
敷地（畳10畳ぐらい）全体の写真は左にある。
ここはもう裏門の近くである。門を出て左に300mぐらい歩くと裏門『神武門』がある。（左写真）
つぎに行く『景山公園』入口（写真左）は『神武門』と景山前街を挟んである。
景山は高さ43mで頂のある「万春亭」から故宮や周辺の景色が一望できるというので絶対行って眺めて見たいと思っていた。
ところが残念至極とはこのことである。左写真の通り緑の塀で囲われ中には入れなかったのである。仕方がないのでHPで「景山からの眺め」で探した画像を載せる。
左写真は工事の壁と壁の間から写した「万春亭」とそこから見えるはずだった景色。（右2枚）
ここまで来たのだからついでに『景山公園』の西側に広がる有名な『北海公園』を訪ねることにした。まだ時間は5時前である。入口付近で大勢の客引きがいて胡同に行かないか、と言ってた。
あとで後悔したのだが、あのとき『北海公園』をやめて胡同めぐりをすればよかった、と。
ここが胡同めぐりの場所とは知らなかったのである。

さて、北海公園の説明をしよう。HPより引用して載せる。あまり面白くないかもしれないが。

北海公園は北京の中心部に位置し、最も長い歴史をもち、最も完全な形で残る皇室庭園の１つ。千年近い歴史がある。

北海公園は、庭園の歴史のなかで芸術的な傑作だと言える。面積は 69 ヘクタール（うち水面が 39 ヘクタール）。?華島は樹木に覆われ、宮殿や仏閣が並び、亭や楼閣が交錯して趣がある。

中央に聳える白塔はまさに、北海公園のシンボル的存在。湖岸をめぐる垂れ下がった柳が湖に映して美しい。

霧が立つと、島の上にある楼閣が見え隠れして、まるで仙境のようです。

中国古代の神話には、海上に三つの仙人が住む山があり、その島に不老不死の薬剤があるという言われがあります。

冬になるとここの池は氷結してしまう。

小さいころ氷の上で母や兄と遊んだ記憶がよみがえる。

多分ここ北海公園の池だったのかもしれない。

今は美しいピンクの蓮の花がいっぱい（写真左）の池を眺めながら北海公園をあとにしたのだった。

北長街から南長街をぬけ天安門広場にさしかかると丁度、国旗降納の時間前なのだろう、いっぱいの見物人が集まって旗を見上げているところだった。

和平飯店の近くまで来て、西の方を見ると沈みかけた太陽が彼方にぼんやりと小さく見えた。

時にはビルの間に信じがたい巨大な夕日を見るときもあれば、このように遠くに小さく見えるときもある。????.なぜ。

１７日の朝　８時前に食事を終えて下のフロントにおりたので近所を散歩してみることにした。

ときおり、通勤の人を見るぐらいで小道には人はいなかった。小道の間に、まだ小さい小道がある。小型車がなんとか片方だけ通れそうな路地である。

左にぬけるとあの王府井が、右には東単の大通りに挟まれた区域と思えない静かな街がそこにはあった。

やっぱり、すんなり行かないものである。迎えに来た面包車の導遊（ダオヤオ）つまりガイドさんに行き先を確認したら八達嶺ツアーだという。

『司馬台ツアー』は現在は土曜と日曜だけのツアーなんだという。

昨日の服務員の説明はそうだったのか。普通なら、その程度の説明なら理解出来るのだけど「はひふへほ中国語」にやられてしまった。

「没ばん法」（しかたがない）

カラフルなマイクロバスが迎えに来た。

このホテルからあと２人参加するらしい。

すでに黒い外人が４人、アジア系が２人それにぼくの９人グループのようだ。陽気な外人４名の国籍はブラジル人２人、メキシコ人２人である。メキシコ人のカップル（多分夫妻だろう）は共に、巨体である。

八達嶺に着いて「滑車」なる乗物に乗るとき断られるのじゃないかと順番待ちの間中心配していた。　マイクロバスでも二人分のイスをひとりで座っていたから。　歩く時の格好は小錦にそっくりである。

一人乗りジェットコースターのような『滑車』から降り、細い階段を上がると長城の途中に出るようになっている。

わずか５０段もない、でもかなり急な石段を上り終わった彼・小錦くんはアリ

のようにはるか連なる人の群れを眺めていたが急に足を止めて両手をかるく広げて見せた。

軽く首をかしげて言った

「オーゴッド！」

結局、彼と連れの女性はその辺で記念写真を撮りあっていたが又来た階段を降り滑車で戻って行った。

７年前に長城に来たときバスで着いた広場がはるか下に見えた。　上の方にリフトのような索道（スーダオ）のようなものが見える途中に砦が二ヶ所ある。

せっかく来たのだから、と次の砦まででもと思い登りはじめた。

ここでの自由時間が１００分だった。

降り口で待合せることになっていたけど９人（ガイド含め）のメンバーはそこには誰もいなかった。

１５分ははやく来たつもりなのに誰もいないということはもう滑車で下におりてしまったのだろうか。

どうすればいいのか迷う。

下りの半券は渡されているので問題ないが、そう思いながら降り口に並んだ。

ガイドの携帯番号を聞いておくのだった。

いつもは必ずそうすることにしているのに、と後悔していたらはるか下の方にホテルから一緒だったアモイから来ていた女性をみかけてホッと胸をなでおろした。

ちなみに往復の滑車代金は６０元（昼飯代が込みだったかもしれない）上り下りの待ち時間が合わせて４０分はかかった。週末だったらこの倍はかかるだろう大変だな、まあ日本でもディズニーを思えば同じか。

ぼくらは昼食をたべてそのレストランも巨大な宝石の友誼商店のなかにあった。

そのあと2箇所の友誼商店を廻ります、とガイドは言う。

なにしろガイドの収入は自分のツアー客が友誼商店で買い物をした売上の?%だけで、他に収入はないのだそうだ。そりゃ、たくさん連れて行きたいでしょう。

次は『茶館』に行きまーす、という。このあとの観光めぐりは「明の十三陵」に行くんだそうだ。

前に一度行ったところである。

出来ればこのまま北京に帰りたかったけど、チョット遠いかな。

お茶の友誼商店では、国々に合わせてその店の担当がつくという。それぞれ個室でお茶をたててもらい説明を受け、欲しければ買う、という中国旅行者なら必ず経験のあるパターンである。

ぼくはガイドに「説明不要」と言ったら、英語の組に入らされた。

例の４人のブラジル、メキシコ組だ。説明を受けて飲まされているうちにどうも小錦さんが買う気になったらしい。

どうやらダイエットに効くお茶だと言われたようだ。

一日?杯を一ヶ月続けたら?.キロ痩せるとでも言われたのだろう。まさかと思っていたがやおらポケットから１００元札を何枚か取り出し支払った。

「明の十三陵」を見終わると帰路に着く。

そろそろ3時が過ぎていた。北京にも近づいていた。聞くとあと一ヶ所、『西蔵薬草店』に寄るんだという。その手の店には四川省で何度も行ったことがある。

ぼくはそこに着いたときガイドに言った。「気分が悪くなったのでここからタクシーで帰る」と、　すると、アモイからのふたりが「あたしたちも一緒に乗せてください」「可以」とぼくは答えた。

車中、実はぼくは明日、アモイに行きます。と言ったらビックリしていた。

「アモイはとても美しい街です。」と観光地をいろいろ教えてくれた。やはり、コロンス島が一番です。それと、南普陀寺を勧めますとのことだった。

彼女は子供が天津の大学に入学が決まり、自分だけ帰りに北京の観光をして帰るんだと言っていた。

９月１６日（土）am9:05（上写真は金魚飯店）

しばらく雑談が続く、移動の度に同じようなことを書いているような気がする。

タイトルが「ぶらり旅」なので写真を見ながら一緒に旅の疑似体験をしてもらえればとそんな気持ちで書いている。

それにしても中国の航空事情はこまったものである。

地方ならともかく北京空港や上海浦東空港は世界でも有数の空港のはずである。

1時間も遅れて飛び立つのが当たり前では「おいおいどうなってるの?」と言いたくもなる。まさか国際便はそんなことはないと思うが。

到着便が遅れるから出発が遅れる、ということは定刻に出たくても飛行機が着いていないということなのか、さもなくば機内の清掃、機体の点検、整備がのんびりしているかのどちら以外に考えられない。

１２時０５分発のアモイ行きに乗る予定で少し早いと思ったけど9時半にはホテルを出発。

「スムーズにいけば４０分で着きます。」という服務員の言葉を信じると１０時１０分に空港到着の予定である。

少しぐらいの渋滞なら大丈夫、と思うような時に限って早く着いてしまう皮肉さ、１０時には空港に着いてしまった。

中に入って電光掲示板の時刻表を見みるとアモイ行きは、

「なんと!!」

１２：４０にすでに訂正されている。３５分遅れの出発ということはここで2時間半時間をつぶすことになる。

「参った、参った」

新しくなって初めての北京空港をブラブラすることにした。

まずは搭乗手続きをしてスーツケースを預け、身軽になっておみやげでも買うことにしよう。

さて、ここでちょっと余談だ、

ひとりで搭乗手続きをする時のお話をひとつ。

チケットを差し出して搭乗票（券）を受け取る時、服務員から受ける質問は大体、２つぐらいしかない。なかでも一番分かりにくいのを覚えておこう。

「靠窗的位置　或者　靠走道的位置?」　あるいは「窗戸的座位、通道的?

読み方はカオ　チュアン　ダ　ウェィズ　フジャ　（又はハィシィ）カオ　ズォダォ　ダ　ウェィズ

日本語の意味は:「席は窓側にしますか?それとも通路側にしますか?」　と訊いている。

こたえは3つある。まず、①　窓側（チュアーンフchuang）か、②　通道（トンダォ）か

もうひとつが③　「どちらでもいいです」になる。でも、③はまだ言ったことはない。

想像だが「**ウ　ソゥ　ウェイ**」日本語訳:どちらでもいいよ。か、もしくは「**隋便**　スイビェン」日本語訳:おまかせです。が頭に浮かんでくる。だけど、こういう場合に使っていいのかどうかよくわからない。

現地滞在の日本人の皆さんは良くご存知かもしれないのでぼくが知ったかぶって言うと恥をかきそうなのでやめておく。

「窓側はないけどどうしますか?」なんて聞き返しがきたらお手上げである。次のコトバは伝家の宝刀「ティンブトン」しか持ち合わせない。

もうひとつぐらい服務員が言うとすれば、荷物を預けるときに引き換え用のシール券をチケットに貼りつけながら言う

「この券を紛失しないように気をつけてください。」ぐらいである。

（読み方はjャ　ジャン　ジー　チン　ビエ　ディゥラ）

おそらく、マニュアル化された言葉だろうから強いて返事を待っているわけではないので、そんな時には、軽くうなずいておけばいいだろう。

なまじ伝家の宝刀「ティンブトン」などいうと、ややっこしいことになりかねないので気をつけよう。

横道にそれたついでに機内サービスのときのぼくの経験談を2つ、3つ書いてみる。

飲物でいえばコーラを注文したとき、何か聞いてくることがある、それは「**氷を入れますか?**」と言ってることが多い。そのときは日本語のハイか英語のイエスでこと足りる。もっと簡単なのはここでもうなづくだけでいい。

次に食事が回ってくるが、ほとんどの場合聞いてくるのは「鶏肉にしますか、それとも魚にしますか」である。

このときはすかさず日本語で『**次郎**』(ji rou)といえば鶏肉ランチをくれる。

自信がないのか日本人はついロの中でもごもごいう人が多いがはっきり言うことが肝心。

断っておくが大声で言いなさいといってるのではないのでくれぐれも気をつけよう。

問題は鳥肉が嫌いな場合である。魚という中国語の発音はとても難しい。

だから、どうしても答えなければならない場合は『**次郎ブハオ**』つまり、日本語訳は「わたしは鶏肉は苦手です。」(不好ブハオとはハンユィでは嫌いの意味ですから)というしかない。

しかし、心配いらない。(不胆心!ブ　ダンシンといいます。)

英語がある。Fish　フィッシュなら日本人なら誰でも言える。

中国人もだれでも知っている共通語である。

だから「次郎」も「チキン」でOKなのだ。

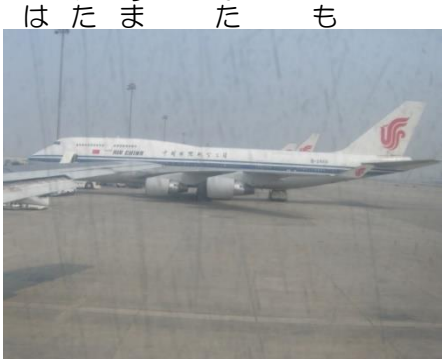
でも、せっかくだから**使ってみよう中国語。**

さて、おみやげの話にもどる。

北京空港で買わなければならない礼物(みやげもの)ものがあった。

上山氏の話では、今夜、どなたか彼の学校関係の方がたと会食会が予定されているらしい。

「意見交換会でもしましょう。」という話らしい。あまり窮屈な交流会は苦手ですと、上山氏には伝えておいたが一席設けてもらうときは何か手土産を差上げるのは「中国の常識」なのだ。



また明日は上山氏の懇意にしている事業家の方が運転手付きの乗用車を提供してくれるらしい、そのクルマで一日、土楼・客家(ハッカ)の住居を見学することになっている。

タイトル下の写真を拡大してみて頂くといい。『地球の歩き方』にも、まだ紹介ページがないが今回、アモイに行く目的のひとつが『客家』見学なのだ。

客家についてはあとで説明するが、そういうわけで何人かに「礼物」はかかせない。

しかし、日本からの手持ちは何も無いのである。北京空港売店でしかチャンスはない。

この際だから日本の友人や家族たちにも「ちょっとしたもの」を買わなければならない、「そのちょっとしたもの」にぼくはいつも悩まされるのである。

中国もたびたび来るとみやげ店などはのぞかなくなるものだ。

間違っても「友誼商店」などでは絶対買わない。

雲南地方や新疆などに行くと、それでも、安い少数民族の手作り品がまとめ買い出来て便利だけど都会地を廻っているとそれがない。ときどき老街などに出くわすが骨董とは名ばかりで大量生産の最近物骨董品がほとんどである。

たべもの、特に海鮮ものはいちばん困る、匂いがするからである。

お茶類が無難だけど、貰っても飲まない人が多い。

印鑑もいちどあげればそう何個もいらないだろう。

結局、ぼくはその土地のマークが入ったTシャツかトレーナーまたは帽子という

ことにしている。
毎回、1～2枚はCDも買う。
どうしても、買えなかった時は帰りにかならず寄る上海で夕方からでも『豫園』までクルマを飛ばすことにしている。
去年もそうだったが、今、北京オリンピックの公式グッズがいい。
すこし高いけど品質がいいし、なにより記念品としてはレアものである。
小物から衣類（Tシャツ、トレーナー、パーカー、キャップ）まで専用の売場が街中や空港に設けてある。
北京空港はご当地の割には品揃えが少ない印象がした。
昨年、青島市では一軒いい専用店があり息子と婿にTシャツを買った。
きのう**王府井**のデパートにでも行けばあったのだろうけど、みやげのことなど思いもつかなかった。
指定された搭乗口25Hである。航空会社別なのか、行き先別なのかわからないが階段を降りたところにあった。現在時刻は12：25分である。あと、20分でやっと乗れるか。じつはもう20分も前からイスに座って改札を待っていた。
勿論、左右のアモイ行きのぼくと同じチケットを持ってる客に「アモイ行はここですね」、と確認していた。確認はかならず若い小姐にすることにしている。なぜなら彼女らはまず外国人には親切だからだ。というより、年配者にやさしいという方が正しいのかな。

、と横の小姐が何やら指差して立ち上がった。ぼくはすぐに感に来た。100％間違いない、それは搭乗（中国では登机口）口の変更なのだ。25Hが25Aに変わったのである。25Aはすぐ隣で助かった。なにしろ登机口変更は中国ではめずらしいことではない。
空港待合室での鉄則、それは〇行き先の同じ中国人乗客の何名かをいつもマークしておくかなければならないこと。それも複数でないと、一人だと目的がわからない場合もあるので。
いつのことだったか、同じ机票をもっている小姐が慌ててカバンを持って立ち上がりきょろきょろしながら歩き出したのでこちらも慌ててついて行ったらトイレだったことがあった。
今は小姐がいたら訊くことにしているから心配いらない。それでも、日本だと「改札口が変わりました」と言ってくれるが、こちらではだまって行動する人が多いので気をつけよう。その辺の微妙なところは気にしないこと。親切さの温度差を理解するのはむずかしい。　さて、本当に疲れるぐらいいろいろあって今**1時20分**である。
やっと、B767中国国際航空機は北京空港を飛び立った。最初の出発予定時刻が0時5分だったから1時間15分のディレィ（遅れ）ということになる。

4時にアモイに到着します。と機内アナウンスがあった。およそ2時間半のフライトということになる。
当初の予定だと2時半ごろアモイに着くので半日はアモイ観光が出来る計算でいた。あわよくばコロンス島も今日のうちに行けるかも知れない。ともくろんでいた。　そんな予定が反古になったのである。やはりというべきか、中国旅行の場合、計画をつくるときに〇日は「空港＆移動」日と明記しておくべきかもしれない。
上山さんには飛び立つ前に電話をしておいた。そろそろ空港に行こうかと思っているところだったらしい事情を伝えると「かならず遅れるよ」と彼は平気で言った。
ということは彼は遅れを想定して行動しているのだろうか。
彼は電話口で
「4時なら4時半に出られればいいですけどね。本人は着いてるのに荷物が出てこないこと、多いんです。だから、急ぐ人は絶対、預けませんよ。」と。
今、夜9時、上山さんが日本語教師をしている『新干銭外語』という日本語学校の

職員室?
でこの文を書いている。上山先生の授業は9時30分に終る。
時計の針を5時間、後戻りしてみる。　航行時間も、降りてからの荷物の到着も、意外なほど正確、スピーディで、4時過ぎにはキリンになった上山さんと再会した。明日、僕らを客家に案内してくれる鄧（とう）小林運転手（20代）と二人で迎えてくれた。
鄧（とう）くんの運転するクルマは市街地を抜けず、わざわざ?アモイ島の海岸道路「環島路」（HUAN DAO RD）を走る。
海風が車のなかを吹き抜ける。
なつかしい潮の匂いが残り香のようにぼくの体にまとわる。
広々とした4車線のハイウエーの左右のフェニックス並木の先に、真っ青な海がいっぱいに広がる。
一ツ葉ハイウエー（宮崎）をドライブしているような錯覚を覚えながら、ぼくの『アモイ』の旅は始まった。（市街地までの時間はおおよそ30分）
アモイは正式には『厦門』と書いて中国人の間ではシャーメンと呼ばれる。

アモイと言う読みは「ミン南語」での言い方である。アモイのある福建省の略称は『ビン』である。　漢字は門構えに中に虫の字を入れる。
司馬遼太郎のシリーズ「街道をゆく」に『中国・ビンのみち』という作品があるので読んだ人も多いと思う。
中国本土とは二つの橋、海ソウ大橋と厦門大橋とで繋がれ、面積132k㎡のほぼ円形をした島である。車中、上山さんが言っていた。
「アモイはどんな凶悪犯罪もこの二ヶ所を塞げば犯人は必ず捕まります」と。

3日間のぼくの宿泊は上山さんの住むマンション（20階）の9階の部屋（1DK）である。ちなみに氏は7階、家具備え付けで1泊100元少々という安さである。ほとんど3星以上のホテルと変わらない。
10畳ぐらいのリビングにはソファ,電話冷蔵庫、テレビ、電子レンジが備わっている。
テーブルの上には茶器セットもある、もちろん電子ポット付だ。
冷蔵庫の中には水、ビール（5元）、ジュース類からインスタント食品などが近くのコンビニと同じ料金である。

大きなベランダには洗濯機も付いていて、洗面所のハブラシセット、タオル、バスタオルなどすべて毎日、新しいのと取替えに来てくれる。
もちろん、ベッドメーキングも専属の小姐たちが来てしてくれ、キッチンには入らなかったけど4畳半ぐらいの広さに近代的なオープンキッチンセット付である。
快適かつ安全なマンション団地で1日で100元チョットといえば言うことナシである。
近辺のホテルは1泊5～600元というから上山さんの住むアモイは居心地のいい中国といえる。
上山先生の今日の授業は9時30分に終るらしい。
先ほど9時に書いていると言ったが、実は今、『新干銭外語』学院の校長　**杜　峰**(du feng)さんと二人で会食して帰ったところである。
ぼくがかたくるしい晩餐会は出来たら遠慮したい、と言ったので上山氏が気を利かせてくれたらしい。謝謝！
およそ2時間近く、日本料理の店で海の幸や寿司を食べながら日中間の教育制度や学生気質その他、日中の事情などを語り合った。
杜　峰校長の夢や今後の交流の可能性についても1対1の会話ならではの内容の濃いものだった。

「今年で35歳になりました。」と杜　峰校長はいう。
7年前、28歳のとき学校を創ったのだそうだ。話が弾み青島ビールを二人で6本も飲んでしまった。よく考えてみれば今日は朝からこれといった食事をしていなかったのだ。
アモイの目抜き通り厦禾路（シャファロ）の金山大厦というビルの3階に杜　峰校長の日本語学校『新干銭外語』はある。日本人教師が7～8名いる。
日本語教師希望者の為、正式名称とアドレスを書く。

SKS『新干銭語言培訓中心』　杜峰　校長
厦門市厦禾路862号金山大厦3B　電話　0592-5882208　郵361004
E-mail: skscenter@163.com　http://www.sksjp.com

学校は昼働く人のためのここ金山大厦校と、もう一ヶ所、海岸線を走る環島路（HUAN DAO RD）に全寮制の全日制の学校がある。
ここ金山校は実践型の学校のため、自分の勤務時間、レベルに合わせて昼、夜の講座を選択する。生徒はとても熱心な成人男女で職場の関係で欠席せざるを得ない学生も多いらしいと上山先生は言ってた。休日にマンションで補習授業を希望する生徒もいるらしい。
さて、アモイの夜はトロピカルナイトである。どういう夜かというといつまでも店が開いていて人通りが絶えない。
というと大人の歓楽街を想像するかも知れないが、そういう店もあるにはあるが庶民レベルの店と普通の市民が夜おそくまで遊んでいるといった感じである。
実際、ぼくも2日間、足ツボ通いをしてマンション帰りはいつも夜中の2時ごろだった。
でも人通りも多く、食堂には結構な数の客がいた。
そんな訳で翌日の朝の出発を遅めの9時にして、永定県の洪坑村の**土楼民族文化村**（200年4月ユネスコの世界遺産への申請が受理された）を目指すことにした。
客家と書いてハッカと呼ぶけどこちら中国人はカージャという。あの奇妙な大きい丸い集合住宅を客家と言うのではなく、客家とはそこに住む人々、人種？のことをいう。あの建造物のことは土楼（ツロウ）と呼ぶのが正しい。
「客家」（ハッカ）はもともと黄河流域に住んでいた漢民族が戦争等を避け安住の地を求め南方に移住して来た人たちである。
移ってきた人たちは未開の丘陵地を開墾し住み着くようになった。
かれらは**既に周辺に住んでいた人たちからはよその人という意味合いを込め「客家」と呼ばれるようになった。**ちなみに客に対することば「主」だろうから土楼に住む福建の人々だけを客家というのではないのかもしれない。
すでに1000年の歳月を経過したということは宋の時代、当時の中国では、その土地によそから転入してきた人々のことをそう呼んだのだろう。
現在、客家の人たちは世界中に偏在している。孫文や鄧小平など有名人や経済界で活躍する華僑も客家出身者が多い。
正直なところ、いまから行く土楼がどの辺にあるのか、本に載っている世界遺産・永定文化村を目指しているのか、それともあと2箇所ある方に行くのかよくわからなかった。
ただ、あの丸い巨大バームクーヘンを目にすればいいと思っていた。
帰ってきて小学館の週間『悠遊紀行』のグラビアをみてはじめて、訪れた土楼の数々が「客家土楼王国」とよばれている場所で、その中でも「土楼王子」とよばれる**振成楼。**中国の1元

切手に描かれている【円楼の王様】**承啓楼**など約３０の土楼が立ち並び、多くの観光客が訪れる洪坑村の土楼民族文化村を見学したということが分かった。

承啓楼

【円楼の王様】と呼ばれる承啓楼は直径７３メートル、４階建、同心円状に建物がある。

中心は祖廟があり、中に住む数百人のための婚、葬、喜、慶事の場所もある。

１階は厨房と食堂、２階は農作物の倉庫、３~４階は居室である。

一家族の居住空間は縦に連なっている。といっても一家族の家の中仁階段がある他の中国の縦家とは違い、ここでは２階以上に設けられた回廊階内の移動を、上下の移動は２~４ヶ所に設けられた階段で行うのである。

外壁は土で作られているが、内側は木組構造である。外との堺である門は三カ所のみ。最盛期には８０戸６００人が居住していた。今は半分にも満たない。

振成楼

「土楼王子」とよばれる振成楼は１９１２年に完成した四階建て二重円楼。全体が８区画に分かれ、８カ所に階段、８カ所の井戸があり、八卦楼とも呼ばれている。

他の客家見学体験記のＨＰにもかいてあったけど洪坑村への道のりはロケーション、道路状況ともにいつまでも脳裏に残るシーンの連続といえた。

近くの林から遠くの森までどこまでも続くバ**ナナの畑**?というのか、バナナは南の島か東南アジアのジャングルとのイメージがぼくの頭の中で覆される光景だった。

あとで分かったのであるが、もし初めから洪坑村の土楼民族文化村を訪れるのであれば別なルートあったのだという。龍岩市回りでハイウエーにのると半分ぐらいの時間で来れるという。実際帰りは来た時の半分の2時間半ぐらいでアモイに帰った。

真相は分からないがこのルートを勧めたのはクルマと運転手を提供してくれた肖国平社長だという。永定は日帰りは無理があるのでアモイに近い「南靖土楼」を勧めたらしいが、情報によるとそこは八月の台風で壊滅して無い（倒壊）らしい。

それならということで永定へ延長したのだという。

おかげで**悪路の**体験もしたし、行く途中に幾つかの土楼も見学することが出来たのである。

土楼民族文化村に着くと中国国営放送（北京）の文字を側面に書いた放送用（取材）バスが１０台ぐらい中から出てくるのに出くわした。

あとで聞くと大々的な土楼紹介の全国放送が1時間半番組であったらしい。

翌々日、上海に帰ったとき李黎が

「ケイジさんが出てくるかと思ってジーッと見てたけどいなかったね」と言った。

土楼民族文化村（世界遺産への申請が受理された）に入ると大きな案内看板があり、なにやら神社?寺院みたいなところがある。客家が造ったのか、それとも近年エリアのシンボルとして造ったのかさだかでない。

一応、写真を下に付けておく。

ぼくたちはガイドもいなかったので何の説明も聞けないので足の向くまま土楼の中を宝探しのように巡り歩いた。

いろんな場所で客家の人達とでくわし、その都度「ニハオ!」を連発した。ほとんどがお年寄りと子供達だったがみな人なっっこく、顔を合わすと笑顔を返してくれる。ここの住人たちも世界文化遺産の一部なのだろうか。ふと、そんな気がした。

まだ慣れていないのか、他の同じような観光地のようにおみやげ店は数えるほどしかなく売り方もとても控えめで、あのうるさいほど賑やかな客への呼びかけはなかった。

しかし、すべてが共同財産といわれている客家においてはここでの儲けはそこの『・・・楼』の財産になるのだろう。

そうすると年々増えるであろう観光客からの儲けに味を占めた彼らが、これからどのように土楼の中を変えていくのだろうかと興味がわく。

1階は家畜が多く、特に豚小屋付近は臭かった。

上から全体写真を撮ろうと3階に上る。

そのまま廻ろうと思ったら2軒目で壁で行き止まりになっていた。

一度、1階に下りて中道を横断して、また上がりなおしたり。上ったり、降りたりと、最初の**承啓楼**では写真とりに時間を費やした。

土楼の中をお見せしよう。最初の画像が横向きになってしまった。

左側写真は土楼民族文化村の中を、気のむくままにスナップ撮影したものです

今日もアモイは快晴だった。聞くところによると日本は又、台風に見舞われているらしい。こちらにきてから最初の「草原の日」以外すべて太陽の下で過ごしている。

今、夜中の1時半、行きつけの足按摩が終って夜中の街をぶらぶら歩いてマンションに帰ってきた。

近辺の食堂では、道路に出したテーブルで陽気にお喋りながら食事をしている人たちであいかわらず賑わっている。

ぶらぶら歩いていると一見、風俗風の小姐たちに声をかけられたりして、アモイの夜は男達にとってもなかなか魅力タップリの街のようだ。

夜のアモイにくわしい肖社長が言っていた。

「アモイはカラオケ　とても多いです、賑やかで用心しないと2種類あります。唄うカラオケ、唄わないカラオケ　あります。注意、注意　そして按摩所も二つあります。してもらう按摩、してあげる按摩、看板みたらすぐ分かります。どちら選ぶ、お客さんの自由（ニヤリ）」

そんなこんなでアモイの夜はなかなか更けない。

上山氏の話だと、こちらの治安は全くと言っていいほど良いのだそうだ。（保証するとは言っていなかったけど）

ちなみに今回、ぼくは上山氏紹介の〇〇足壷按摩に毎晩通った。

これを病みつきというのだろう。

夕食が終えてここに来るとだいたい11時近くになっている。

ここの按摩は指名制になっている。彼女たちは胸につけたナンバーが名前代わりになっている。

案内されて部屋（といっても個室ではなくコンパートされているだけ）にはいり服務員の男性にお目当ての番号を告げると、その娘が空いている（指名がない）とやってくる。

ぼくがお願いした171番はあとの2日とも幸いに空いていた。（171さんはあまり指名がかからないのかもしれない）

おしゃべり屋で元気がよく、もちろん技術も申し分ない。171はとても気持ちの良い按摩をしてくれる。

施術時間は120分ということだがそれ以上してくれてるように思う。足按摩だから普通のイス式ソファなのだが、なぜか横に来て肩か

ら腰、太ももと、イスを引くと背中がフラットになりベッド状態でしてくれる。

足の前にこれが30分以上は続く。二人組んでなので彼女らと4人での中国語&日本語会話はたのしく、面白い。

フロア内にはお茶や点心（、果物もふんだんにある。）をサービスして廻る小姐たちがいてたびたび訪ねてくる。なかに一人、とてもかわいい娘がいた。

あまり可愛いので名前を訊いた。「Ni jiao shenme ming zi?」

ニ ジャオ シェンマ ミンズ? 『何という名前なの?』

彼女は16歳だと言った。もっとも暗やみの中だからどれほど美人か、分からないけど按摩のあいだ中なんども覗くたびに何か注文して（すべて無料）あげた。そのうち、ぼくの横の小さなテーブルは載せる場所がなくなった。

帰るときにその小姑娘（グーニャン）がそっと紙きれをぼくに手渡した。

その小さな紙切れには、ちいさな三つの文字がボールペンで書いてあった。

今、ＥＭを書きながら、もしかしたら、と思い手帳に書きとめていた名簿を繰って見たら書き写しがでてきた。　日月亭按摩所のアンマノサービス小姐名　**邱連香**

ほんのひとときの「ちいさな恋の物語」だった。

これだけ満足して料金は一人.65元、日本円で1，000円だから嬉しい。おまけに帰りにレジの前でサイコロを2個渡されゲームに当ると次回に、10元とか20元のサービス券がもらえる。というわけで3日通ったわけである。

按摩小姐たちは20代前半、よく訓練されていて皆、明るく.小銭（チップ）は受け取らない。アモイに行く機会があったら是非行って見られたら如何だろう。ちなみのお勧め小姐のNOは

33番、95番、171番。　　邱連香ちゃんの写真がないのが残念（ヘン遺憾）

下の写真は、今回のアモイの旅で最高にお世話になった上山さん。彼なくして今回のアモイノ旅はなかった。感謝！

プロローグで今年の旅は3つの後悔があった、と書いた。

最初のひとつはモンゴル草原の夜明けを体験することが出来なかったことである。

あの日に限って、草原にはみぞれが降ってた。

留学生の丁さんが言ってた通り「草原ツアーはやはり7～.8月がいちばん」なのだろうか。

二つめの後悔は北京の『司馬台長城』に行けなかったこと。

同じ観光地を2度訪れるほどぼくはこの大陸をまだ行き尽くしてはいない。

例えば故宮など、一度目に回りきれてないところ訪れるというのはわるくないけど、巨大観光地である**八達嶺など**、再訪の感慨は一度目に較べればはるかに劣る。

明代の姿をそのまま残していると言われる司馬台長城、

美しい湖によって東西を分けられ、橋でつながった長城に行く絶好のチャンスを逃がした悔いは大きかった。

日が悪かったのである。北京では『頤和園』にもまだ行っていない。少し足を延ばし『避暑山荘承徳』も訪ねたい地である。

そして、三つめの後悔が『コロンス島で一日のんびり過ごす』チャンスを逸したことである。

他人のせいにはしたくはないけど中国人のアドバイスは後で悔やむことが多い。ひとり旅というのはこういう時がいちばん困る。それは相談する相手がいないことだ。

今度の場合は、計画を変更するというのではなく、

「島は午後からでも充分、時間があるよ、午前中に私と石の芸術品を見に**泉州**に行きませんか?」

という肖社長の誘いに乗ってしまったことである。

「コロンス島に行くは、うちの社員、ひとりガイドにつけるよ。心配ないから」と言ってくれた。彼は自分の石工場を見せたかったのかも知れない。ぼくの方も一度、石の工場というのを見たかったし、近くにある石像をつくる現場にも興味があった。

点刻と言って写真を見ながら大理石や御影石に点（ドット）でコピーしていくアートをこの目で見たかったのである。

鹿児島市日中友好協会の海江田会長がいつも言っておられる

「私の在任中に辛亥革命の**黄興**の記念碑を南洲墓地に建てたいと思っています。」

その参考にもなるかもしれない。という気持ちもあった。

いろいろな理由から泉州行きは、むしろタイミングのよいお誘いだったのである。

実際、泉州から帰っての一日はぼくの体験のなかで要記録のマークのつく日であったことは事実である。

ただ、あとに予定していた（コロンス島見学の）時間が少なすぎたことだけである。

「遅くなってしまってゴメンナサイ。面白くなかったでしょう。」

肖社長のことばは同行した日本人バイヤーとの商談の為、ぼくに時間の無駄をさせたことに対しての言葉だったのだろう。

しかし社長からすれば、ぼくを泉州に連れてきたことの方が、むしろついでで、ぼくへの好意なのだから気にはしていない。

むしろ、世界を股に石の商売をしている上田市の柴田さんと、おそらくアモイでは有数であろう肖社長との会話はぼくにとってかなり刺激的な会話といえた。

ただし詳しい（会話の）内容をここで書くのは控えたい。

柴田さんは一年の三分の二は海外なのだそうだ。

今日もインドからアモイへ帰ったばかりで、明日は福州に向かわれるとのこと。

重いサンプル石を入れた鞄を肩にかけ旅をされているそうだ。

御影石の原石やかけらを研磨したサンプルを見てその磨かれた後の石の品質（つやとか輝きなど）を極め、取引をする。（この表現さえ正しいかどうか自信がない）

そういう会話を聞くのははじめてだった。

「これからはインドを恐れてはいけません。」と、柴田さんは言った。

「確かに技術は中国より上です。インド人はこう言ってます。（中国製は石が悪いのではなくて研磨が違うんだ）と。中国の石はは研磨のとき熱を加えるから、その時は輝いていてもあとで輝き消えてきます。」

また、

「5分間磨くの時間を2分長く、7分にするだけで10～20％の艶の差がでます。女も下地を磨けば上化粧なしで綺麗でしょう。」と。

肖社長の工場はアモイから2時間足らずの泉州の近くにある。着いたのは11時15分だった。

工場に入ると

「ここの機具は最新の機械ですね」と柴田さんは褒めていた。

「ここが古い機械を使った工場ならこんなことはいわないんですけどね」

といいながら柴田さんは肖さんに話しかける。

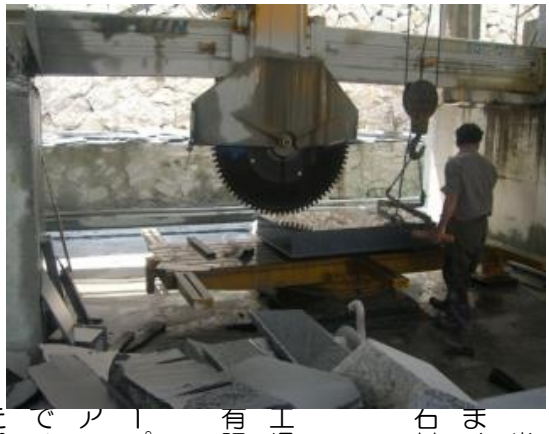
「工員にしつけることです。日本人が、いくら急いで製品をつくれと、言ってきても出来ないときは断る勇気を持つべきです。」

「品質の保証は出来ません」と言うくらいの勇気が必要です。

「メインのものだけは良い石で勝負しなさい。」と柴田さんは肖氏に言う。

ちなみに石の取引単位はM3 つまり一立方メートル、ドル建てで取引するんだそうだ。

肖社長らの工場での商談がおわり、昼食を済ませ、わたしたちが石の仏像や点刻製品を作る石材店に着いたのは1時過ぎだった。



工場で頂いた名刺には《アモイ定和園芸（貿易）有限公司　＊＊＊》と書いてあった。

そこは石を削る工場だからか屋根付きのオープン（駐車場のような）工場だった。

アモイまでの帰りのクルマの中では時計の針を見ることをやめた。

時の経過（今の時間）を正確に知るのが怖い時がある。

そういう時はぼくは時計を見ないようにしている。

それは現実からの逃避に違いないが、見て、あわててしまって平常心を失うよりましだと思うからである。

たとえば、空港に間に合うか否か、で無心に高速を運転している時。

また、夏の夜釣りで、一晩中、魚を釣り続け、まだ何も釣れなくて、東の空が明るくなりかける時などである。

「もう、何時！」：「未だ、何時！！」・・と、　時は本当に心臓にわるいものである。

だから針を見るのが心臓に悪いときは、ひたすら時を忘れるようにしている。

アモイ駅の近く、賑やかな繁華街の中にあるビルの8階に肖社長の本社事務所はあった。

事務所は広くはないが中が3階になっている。

社長や柴田さんの後をついて階段をあがるとそこは会議場になっていた。5,6名の社員が柴田氏の到来をまっていたらしく、早速、一人一人と紹介の挨拶が続いていく。

それから何やらと用が足されていき、ここでも時間だけがどんどん経過していった。

光陰矢の如し、一寸の光陰、軽んずべからず。（また、ぼくのつぶやきが・・・）

やっと、肖社長がぼくの方を向いて笑顔でひとりの男を紹介した。

残念ながら肖社長がぼくの案内役につけてくれた人は期待していた可愛い小姐ではなかった。

もっとも、その席にはそれらしき人は見当たらなかったのであきらめてはいたけど。

ガイド役の若者はぼくに手をさしのべ

「わたしの名前は偉（人偏ナシ）と申します。」

今年、結婚しました。」と、微笑を浮かべながら流暢な日本語で語った。

俳優の真田広之に似たアモイ大学出身の頭の良さそうな若者だった。あとで写真で見ると真田には全然似てなかった。不思議？？

コロンス島の船着場に着いたのは5時だった。アモイに着いたのが4時が過ぎていたからそのままコロンス島に直行していたらと思うと残念でしかたがなかったけどそうも言えなかった。

いまから島に渡って観光をする。頭の中が錯乱状態。

この時ほど**時よ、止まれ！**と言いたかったときはなかった。

知らず知らずのうちに口のなかでつぶやきが旋律にかわっていた。

時がぼくを追い越してゆ～く。

呼び戻すことができるな～ら～。

ぼく～は何を惜しむ～だ～ろ～。

この写真は船着場に着いた写真、と船が出た頃の辺りの様子である。

ところでアモイは島そのものが市であり、コロンス島は本島から４００ｍの近距離にある小島といえる。

船で６分、船賃は７元で、２階は１元プラスされる。行きも帰りも乗船客で一杯だった。

周りを見ていると８０％が住民のようだった。１元払って上のデッキに上る人の数が２割ぐらいしかいなかったからだ。

着いた時には太陽はもうすでに西の海に沈みかけていた。

テレビで見た『日光岩』の展望台から眼下にひろがる旧租界の街並みを眺めることも、対岸のアモイ島の遠景やそして、楽しみにしていた2キロの沖合いにある台湾の金門島を眺めることも、岩の上に立つ鄭成功の彫像を見上げること。

それらすべてがフイになってしまった。

せめて「海上の楽園」といわれる島の見所だけは暗やみのなかでも見たいと思い、偉クンに無理を言って電動カート（５０元）を借りることにした。

コロンス島は１９０２年に共同租界だった。アメリカ領事館を始め、オランダ、イギリス、日本の各領事館に列強諸国の商社や教会、学校など、それぞれの国のそれぞれの様式の建物が立ち並んでいる。

その後、中華民国の成立後には華僑が競って洋風の別荘を建て「万国建築博覧」とひとびとにいわれるようになったいろいろな様式の建物が今に残っている。

島の特徴はというとまずクルマがいない街なのだ。ここにはガソリンを使用する車は消防自動車だけで、あとは電動カートだけしかない。そうそう、何故か自転車も禁止されてるそうなのである。

ぼくの知ってる限りではこんな街は世界中でここだけである。

また、音楽の島とよばれるほど島民のピアノ保有率が高く、子供達へのピアノ教育が盛んなのだそうだ。多くの有名なピアニストが育ったという。

ぼくもカートで細い石畳の道を登ったり降ったりしてる間中、聞き耳を立てていたが、残念ながらどこからもピアノの音は聞こえてこなかった。

ところで**鄭成功**を語らずしてコロンス島を、そして、アモイを終えるわけにはいかない。

以下、フリー百科事典『ウィキペディア』より転載させてもらい鄭成功のプロフィールを紹介しよう。

鄭 成功（Zheng Chenggong;てい せいこう）

日本の平戸で父鄭芝竜と日本人の母田川松の間に生まれた。幼名を福松と言い、幼い頃は平戸で過ごすが、七歳のときに父の故郷福建につれてこられる。鄭芝竜の一族はこの辺りのアモイなどの島を根拠に密貿易を行っており、政府軍や商売敵との抗争のために武力を持っていた。

父により隆武帝に引き合わされ、眉目秀麗でいかにも頼れそうな鄭森は大いに気に入られ「朕に娘がいれば娶わせるのだが残念ながらいない。その代わりに国姓の朱を与えよう。」と言われたが、恐れ多いと国姓は使わずに鄭成功と名乗る。これ以降鄭成功は**国姓爺**（爺は老人の意味ではなく、旦那と言う程の意味）と呼ばれるようになった。

ちなみに、同時代に活躍した日本の歌舞伎・浄瑠璃劇作家である近松門左衛門の人

形浄瑠璃作品である『国性爺合戦』は、鄭成功をモデルとして作られたものである。

隆武帝軍は北伐を敢行したが大失敗に終わり、隆武帝は殺され、鄭芝竜はこの軍に将来無しと見て清に降った。父が投降するのを鄭成功は泣いて止めようとしたが、鄭芝竜は意思を変えず、父と子の道は別れることになった。

その後、広西にいた万暦帝の孫である朱由榔が永暦帝を名乗り、各地を転々としながら清と戦っていたのでこれを明の正統と奉じて、抵抗運動を続ける。そのためにまずアモイ島を奇襲し、従兄弟達を殺す事で鄭一族の武力を完全に掌握した。

鄭成功は17万5千の北伐軍を興す。意気揚々と進発した北伐軍だが途中で暴風雨に会い、300隻の内100隻が沈没した。鄭成功は温州で軍を再編成し、翌年の3月25日に再度進軍を始めた。

鄭成功軍は南京を目指し、途中の城を簡単に落としながら進むが、南京では大敗してしまった。

敗軍の鄭成功は勢力を立て直すために台湾へ向かい、ここを占拠していたオランダ人を追放し、ここを根拠とする。おそらくここを清への抵抗の拠点としたかったのだろうが、そのすぐ後に死去した。　以上『ウィキペディア』より。　後ろの席には二人の中国小姐、前にぼくらを乗せた電動カートは、右手に海岸線を、左手には丘いっぱいに広がる芝生のなかに建つ瀟洒なイギリス風の館を眺めながら、のろのろと上って行く。

まだ芝生のみどりと建物の赤い屋根の色が、かろうじて識別できる視界のなかをカートは走る。電動カートに乗っていた時間は４０分ぐらいはあったのだろうか、まだ日が沈んだあとの黄昏時がコロンス島の異国情緒を見せてくれるほんのつかのまの時間をぼくは目を凝らして眺めた。

やがて緩やかな丘をのぼる頃にはほとんど周りは闇に包まれ、足元の石畳の小道だけ１０ｍ間隔にちいさな灯かりで照らされている。

「こんなはずではなかった筈。」

ちいさなぼやきが口からもれる。

やがて海岸線に出てくると、急にライトで照らされた白い砂浜や美しい景観が浮かび上がって見えた。山中の闇がうそのような景色にぼくは、あわててカメラをだす。

せっかく憧れていたコロンス島にいながら証拠になる写真もないではここは（夢かまぼろしか？）になってしまうではないか。

シャッターを押す指にも思わず力がはいる。

ひとまわり（？）したのかさえもわからないコロンス島の闇の観光を終えて、見覚えのある桟橋にもどったのは午後８時２０分、もう立派な宵闇の真ん中にいた。

せっかく来たのだから、せめておみやげでも、と思いぼくらは近くの石畳の坂に連なるみやげ店を覗きながら歩いた。

坂を上ったり下がったりするうち、迷路にはまってしまい

ふたりして左だ右だ、「上に上ることはないだろう。海は下に決まっているから、」とガイドとはいっても偉くんもコロンスの闇の世界は苦手らしく、こうなると買い物どころではなく桟橋探しに時間を費やしたのだった。

船から眺める本島のライトアップされた建物は上海浦東とまではいかないまでもすばらしい夜景だった。中国政府がすぐ近くの台湾に対して威信をかけてアモイを発展させるという意気込みを感じさせる光景にみえた。

本島にもどった偉くんとぼくはアモイ島の繁華街である中山路（歩行街）でほんものの海鮮料理を食べることにした。

いろいろな都市の「歩行街」をぶらぶら歩く（中国語でぐぁん　ぐぁん　じぇという）のはたのしい時間である。

アモイの歩行街（中国語でぶ　しん　じぇという）は華やかさでは長沙や成都には劣るようだけど海に近いせいかわれわれ日本人には懐かしさを感じる香りがする。

どこの街にでもあるケンタッキーとマクドナルドの大きな看板をながめながら、やはり多い海鮮料理店の中から1軒をえらんで中に入った。

水槽に元気よく泳いでいるアジとタイを選んで料理法を告げる。でも、塩焼きとから揚げをオーダーするのにとても手を焼いた。中国には塩焼きの習慣がない。

今度、日本に帰ったら留学生に魚の日本式料理法の中国語をぜったい学ぶべきだと痛感。

こうしてアモイの最後の夜は終るはずだったがこの夜もこりずにお気に入り日月亭按摩所の足マッサージに足が向くのである。

日月亭按摩の可愛いお茶酌み小姐・小連香ちゃんとのアモイの夜のときめきのシーンは果たして再現するか・・・。

目と目を合わせ、微笑を交わすだけのとても淡くて純?なシーンが展開するだけなのに、

でも、なぜだろう、このぼくの胸騒ぎは?

彼女は前世で会った妖怪おんなだろうか?

むかしの本を読んでいて、開いた頁に挟まれた薄黄色な押し葉に、ふいに出会ったような、忘れていた　遠い昔の自分に引き戻される懐かしさ。

記憶を喪失した中年男によりそう16歳の小連香との『シェルブールの雨傘』（仏映画）のベンチ（ベッドではありませんぞ）のシーンをアモイの夜の足マッサージ屋で思いだす。

・・・・・・と、勝手に訳の分からない理由をつけて今夜もアモイの夜は更けない。

さて、ぼくのひいきの171番は右手にトンカチを持って待っているだろうか。

そして、茶を注いで廻る小連香とのバーチャルな相(eye)恋の結末はいかに・・・・。

ぼくは五木寛之風にいえば『年甲斐のない生き方』を続けていきたいと思う。

「年をとると何でも衰えてくるね。」

そういう人に限って、何もしたがらない億劫な人間が多い。使わない脳が退化していくのは当たり前で遠い昔の錆付いた鍵のかかった記憶だけが残っている。

億劫な年寄りは、脳のシワが消え、顔のシワだけが増え続けていることを知らない。

むかし赤い表紙の英語の単語帳があった。『旺文社のまめたん』と言ってた。

赤尾好男という人（社長?）が表紙の裏に写真入りでコメントが書いてあった。

「人間は忘れる動物である。だから忘れる以上に覚えることです。」

と活字ではなく自筆?のペン書きで印刷されていたようにおぼえている。

ぼくは一生懸命暗記しょうと努力をしたが1頁目のアバンダン、アビリティからなかなかページを繰るところまで覚え切れなかった。けれど、このことばだけはしっかり脳に保存されている。

つまり人生にチャレンジし続ける人は体験を増すごとに脳のシワが増え続け衰えることを知らない。自然消去は老若に関係ないのだ。要は体験（英語でいえばアクション）を重ねていくことだ。

魅惑のアモイで寄り道してしまったようだ。旅にもどろう。

時間通りに書くと**今、19日朝10時**、アモイ空港のVIPルームに居る。
ピンクの制服を着た服務員にパスポートと飛机票（搭乗券）とスーツケースを預けるとあとは服務員が「席は何処がいいですか?」「窓側でおねがいします」
それだけで終りである。
昨日、肖社長が
「あした朝空港まで送りますよ。せんせいはVIPルーム使ってください。」
と、ニコニコしながらぼくに告げた。上山氏のお付き合いのお蔭だとは分かっていてもこれほど親切に世話をしていただくと恐縮してしまう。
「飛行機に乗るまでここでゆっくり寝てもいい、飲んでもいい、好きなように過ごしてください」
そういい残すと上山氏とふたりで帰って行った。　下:帰るまえに肖社長と二人で写したスナップ

10:25分
服務員と話をしたり、置いてあるパソコンを借りて久し振りに協会のHPをのぞいたりしていた。そこへ服務員がやってきた。
「あなたの乗る予定の飛行機、すこし遅れます」という
「どれくらいですか」と、いうと「わかりません」と、返事が返ってきた。
もう飛行機のデレイ（遅れ発）には驚かなくなった。
朝、上海の李黎に11時にこちらを発つから虹橋に迎えに来てと電話をした時も、大体1時間ぐらいは遅れるかもしれないよ、と伝えておいた。
やれやれと思っているところにまた、可愛い服務員がやってきて
「12：00に出発します。」
と告げる。
何とまた1時間の遅れである。きょうは心配ない。いつもだと刻々変わる情報に目は電照看板と乗客の動きに神経をとがらさなければならないけどなにせ特別室にいるのだ。
ここにはぼくを除いたら美しい制服を着た美人の服務員数名がいるだけなのだから。
退屈になったのでみやげものでも探そうと一般搭乗口のあるビルへ行ってみることにした。
なんと、遠い遠いのである。
この空港、こんなに長いのか?往復に15分ぐらいかかりそうだ。着いてみたら広い割には売店が少ない。これといったものもないのでまたVIPに引き返す。
11:35分
服務員がやって来た。
『これから飛行機へ案内します』
と笑顔が言う。
一人なのに、一般と同じ身体検査を受ける。ピーと鳴ったので、笑いながら服務員が身体を上からなぞる。ピンクの服務員がぼくのカバンを持ってくれる。出口から機まではピンク美人が歩いて先導だ。チョットいい気分である。
多分、機にはまだ誰も乗っていないと思って中にはいったら、何と、もう全乗客が座っていた。この調子だと飛行機の出発は0：00定刻通りにちがいない。明るい南海の日差しがまぶしい。
11:50分
まもなく離陸、という時、突然、ぼくの手机が鳴った。
普段なら電源を切るのに、忘れていた。仕方ないので分からないように繋いだら李黎からの電話だった。
「太太（奥さん）の十二支はナンデスカ?」と言う。
十二支が12時に聞こえた、しかも今離陸前の、掛けてはいけない状態なので慌てていた。
ぼくは出発時間の確認と早合点をして
「そうだよ、定刻通り、十二時に飛ぶようだよ。今、飛行機の中だ」
と、中国語で答えると、
「ちがうよちがうよ」
と李黎は日本語で答える。

そのあと、ようやく彼女がぼくの家内の干支を聞いていることを理解するまで下を向き、ヒソヒソ声の会話が3分は続いた。もう切ってしまおうかと何度も思った。

実をいうと、　ゆうべ、ここで土産を買おうと思っていたが、見つけに行く時間がなかったので急遽、李黎に電話して、瑪瑙の印鑑を何個か、李黎の知り合いの店に注文するよう頼んでおいたのを思い出した。

その中に家内の分も頼んでおいたら李黎が家内の分だけ干支を入れてあげようと気を利かせてくれたのだった。（不好意思！　実在対不起！！）

うして今年のぼくの『中国ぶらり旅』はおわった。

ぼくの旅とは、一体、なんだろう?

なぜ、ひとは旅に出たがるのだろう?非日常世界との体験という人も多い。でも、見知らぬ土地で、見知らぬ人の、解からない会話の中で、その人たちとの日常生活を共有し体験するたのしさは大きい。

それを実現するためにおおきな努力はいらない。

少しの時間と、そこそこのお金と、歩けるだけの健康に、あとは、少しばかりの勇気さえあれば、少なくとも中国の**今の**旅は実現する。

ぼくの生まれるすこし前から10年ほどの間、自分の同胞達がこの国のひとびとに行った残虐な行為のかずかずに、おなじDNAをもつ一人の人間として、心の中でいつも詫びながら、ぼくの『中国ぶらり旅』は続く。

そしてー

訪れた多くの寺院やすばらしい風景、歴史をかたる史跡のかずかずは映像や雑誌でまた再見する機会があると思うけど、そのとき、ぼくがふれあった多くの知人や、その時だけ、触れ合った名も聞かなかった人たちとの一期一会の出会いを忘れない為に、

この紀行文を書き続けたい。

左の人たちはこんどの旅で知合った人々。これ以外に語り合い、笑いあった旅の途中で出会った人の中で、うっかり写真を撮るのを忘れていた多くのひとがいました。

ここまでお付き合いいただき感謝！

２０１６年８月６日（土）改訂　終わる。

再々改訂編集しました。２０１９年３月２０日（水）ラヴィにて。

付録　書き忘れていた『中国ぶらり旅いろいろ編』

私の中国５の１　烏鎮・蘇州編

２００３年１０月２５日～１１月１日（７日間）

①烏鎮　②蘇州　③周庄　④西塘　⑤街ぶらぶら（新天地・魯迅公園他）

江南水郷めぐりのバスはここ上海体育館前からスタート

２００３年の中国は新型肺炎（sars）に見舞われ大変な年でありました。春の計画、秋の計画とことごとく駄目になり、諦めかけていましたが、やはり、どこやらの虫が騒ぎ出し、１０月２５日から１週間。上海にいずっぱりのまま、毎日、近郊の水郷巡りの１日バス旅行を楽しんで来新今回の中国旅行は、開発の進む上海近郊で昔が手付かずに残っている近郊の水郷地区を訪ねて見たい、と言う気持ちと、今までの旅で、いつも欲求不満であった幾つかをクリアしたい、というもう一つの目的がありました。

その第一は、自分で計画を立てて行動すること、従って、その行動は臨機応変に変更が可能なこと。

つまり、①　明日の予定と今日の予定とを変更またはキャンセルが可能なこと。

②　つとめて、街中の市民が利用する交通機関を利用すること。

③　日本の旅行会社やインターネットに掲載されていないホテルに泊ること。

④　行き帰りを除いて飛行機は利用しないこと。

・・・

ナイトクルージングと言うから、船の上での豪華なディナーかな、なんて想像していたけど、違ったらしい。
６時ごろか？　海龍海鮮舫とか？川に面した大きな海鮮レストランに案内された。
・・・階段を上がっていくと、　突然、目の前で、花嫁花婿に迎えられた。
結婚披露宴会場に招待された客と一般の食事客とが、一緒の入り口になっていたのだ。　一瞬、キラキラ輝く、七色のライトをあびてびっくりしてしまった。

黄浦江に浮かぶ遊覧船から眺めた外灘（ワイタン）の景色も、ライトが新しく変わったテレビ塔、そして上海一高い金茂大厦ビルやシャングリラホテルも、確かに綺麗ではあったがもう何度も見た光景のせいか、初めて東方明珠塔を見た時ほどの感動はなかった。
しかし、帰ってから見た写真のかずかずはやはりとても素晴らしく、特に同行の若い友人の撮った写真は是非、皆さんに見て頂きたくなった。実は今回の旅のもう１つの楽しみは、僕の伊妹ル（メル友）女朋友である**李黎（リリィ）との再会であった。**　昨年末、11月の黄山紀行のとき　知り合った21歳の小姐である。ホームページ上で彼女からの沢山のメールを紹介してきた。僕の中国語文章能力の上達に多大な貢献をしてくれた女性である。
今回の旅も明日の**烏鎮水郷**めぐりをはじめ、後半の**周庄・西塘**古鎮観光バスツアーと会社を３日間休んで付き合ってくれた。
さて、１日目の夜が来て、上海の夜景も満喫した二人はここで、ガイドの◎◎さんに別れを告げいよいよ上海でのまず二人旅がスタートした。
ここで、このプロローグは終わりとなり、この後は上のそれぞれのフォルダからお好きな所を訪問していただきたい。　順番としては、
①烏鎮　②蘇州　③周庄　④西塘　⑤街ぶらぶら（新天地・魯迅公園他）天地物語

バス26日正好是星期天,我可以陪二メン去烏鎮,去旅游地点的車票慶二先生不用担心。
因為在我家附近也就是,中土大厦附近就有一个可以預定車票的商店,很方便的
那?26日早上，我7：30在上海賓館的大厅等二メン好??我会准時到的！

祝：出入平安　　李黎　　10月23日

中国語フォントのないところはカタカナもしくは充て漢字でごまか。しています
李黎からのメールがきた。
「　26日は丁度運良く、日曜日です。わたしも二人と一緒に烏鎮に行けますよ。」
「大石さん、きっぷの心配は要りません。」
「アタシの家の近所の　そう、**中土大厦附近**に長距離観光バスツアーの予約券を売ってるところがあります。　　だから、便利ですよ。
「　じゃあ、私たち、26日の朝、7：30分に上海賓館のロビーで会いましょう！」

李黎と会うのは一年ぶりだった。
昨年は黄山ツアーの帰りの杭州での一日旅行に随行カメラマンとして我々に付き合っていた。
おりしも、その日・２００２年１１月２６日は、僕の誕生日だった。
その日のことは「新天地物語」でくわしく書くことにする。
・・・・実を言うと、いまこの文章を書いている今、２００３年１１月２６日です。

思えば、1年前の今日、ということになる。

そして、今日の、昼頃、上海の李黎から手紙と贈り物が届いた。小銭亀の飾りと、藍色の中国結（ジェ）だった。

慶二さん：　見信快楽！

この封書を開ける頃、わたしが思うに、あなたは家の人と一緒に誕生日を祝っているかも知れません。

李黎も慶二さんに「誕生日オメデトウ！健康であってください！」　とお祝いをします。

慶二さん、この小亀、可愛いでしょう！　烏亀は一種、非常に古くからの動物です。

百年も、千年も生きると言い伝えられています。だから、中国では長寿と健康のお守りとして可愛がられています。

慶二さんも、きっとこの小烏亀を気に入ってくれると思います。

そして、すこしはやいけれどクリスマスのプレゼントを送ります。

この藍色の中国結はじつはわたし達があの新天地に行った時に、一緒に見て、あなたがトテモ欲しがっていたのとほとんど（差不多）、同じですよ。

わたしは、むしろ、こっちの方が好きです。　慶二さんがクリスマスツリーを飾る時にこの中国結も一緒に吊り下げたら如何でしょう？

烏鎮水郷紀行がまたまた横道にそれてしまいました。

李黎が上海賓館ノロビーに現れるところに話を戻します。

1年ぶりの再会になんという挨拶をしようか？

日本語だろうか？中国語だろうか？

何年か前西安のホテルで陳さんのご両親にロビーで最初にお会いした時のことが頭に浮かんだ。

・・・・・・・「きっと、李黎も勉強してきた日本語を喋りたいにちがいない。だから、最初の話しだしは李黎のほうにさせよう。」・・・・・そう決めた。

李黎は約束の時間7時半が過ぎても来なかった。8時が過ぎ、ちょっと不安になりかけた頃　　李黎は　急ぎ足で入ってきた。

ほとんど一年前と変わっていなかった。背の高さも、スタイルも申し分ない僕好みの上海小姐が、済まなさそうな笑顔で立った。

「スミマセーン！ワタシ、オソクナリマシタ。」

・・・こういうときの応えのコトバは幾つか知ってはいたけど口に出た言葉は

「ダイジョウブ、ダイジョウブ」だった。

上海賓館から観光バスの出る八万人体育館横の上海旅遊集散中心までは地下鉄で三駅目だけど、今日は李黎が来るのが少し遅かったので、用心してタクシーで行くことにした。

徐家匯を通り、30分足らずで上海旅遊集散中心（バス出発）に着いた。

バスは左のようなグリーンのまあまあの観光バスといったところです。

全席、指定になっていて、この日は問題はなかったけど、李黎と二人で行った周庄の時は結構トラブった。

ふたりづつのペアで切符を販売しないので、続き番号でも前後ろになってしまう。ある組がそれを無視して相席で座ると、もうめちゃくちゃになってしまい、喧嘩こそしないものの、それぞれが主張しあい、終始がつかなくなってしまったのである。

正直に、ここで白状しますと、実は、行く前から、「もそかしたら・・」と、思っていたのですが、やはり、そうなってしまいました。

というのが、今回、さいしょの　**烏鎮**から始まって、翌日の**蘇州**の水路、一日置いて、**魯迅の公園**、そして**周庄**、次の日は**西塘**と五日間が水郷めぐりだったのですから、何処がどこか分らなくなってしまったのです。

写真は一応、順番に撮ってはいるのですが、これにはまいっています。

烏鎮で食べたお昼のメニューがなかなかみつかりませんでした。
やっと、みつかりましたので紹介します。名物の肉料理でとても美味しかったです。
右の写真はフグだと思います。イヤ間違いなくフグです。気味が悪くてトテモ食べるきにはなりません。　フグが何故？川にいるのか？
よく考えてみるとフグは**河豚**とかきますよね。
何処の食堂にも、小さな水槽が店の前にあって、川エビや川魚が泳いでいます。すると川幅が広いように思えます。

三箇所の比較を大雑把にすると、周庄がやはり一番人出が多く、観光地的な感じがします。露店にしても、買いたくなる品ぞろえが上手です。
西塘はとても小さな水郷です。なにか、ひっそりとした感じです。夕方が似合うところかもしれません。
僕は、この日（西塘）は残念なことに、猛烈にお腹の調子が悪く、行き返りのバスはもう苦難の連続でした。
烏鎮のご案内は写真をタップリみてもらうことでおわりにします。
この後は李黎の招待で湖南料理を食べて、その後、真介君とマッサージに行きました。そして，翌日はふたりで蘇州。
蘇州は特に何処を見たいという目的はなかった。
庭園も寺も公園も、中国を旅すると、必ず訪れるから、特に、蘇州はこれからも来ると思うのでその時にとっておいてもいいか、そんな気持ちで訪れた。
それより、鉄道を個人で利用してみたい。という気持ちのほうが強く、鉄道で、日帰りが出来るところなら何処でも今回はよかった。
最初は杭州に行こうかと計画したけど、片道3時間から3時間半かかるというので、止めた。鹿児島から福岡に行くようなものである。
出来れば、個人旅行で杭州～紹興～寧波を旅したいのだが、ホテルが上海に固定されているので、やはり，勿体無くて、日帰りコースになってしまう。

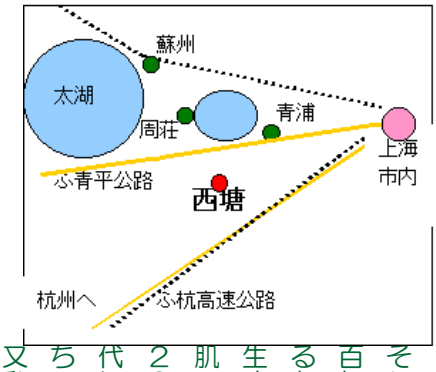
・・・というわけで、残ったのが、無錫と蘇州だったわけだ。
無錫までが1時間半、蘇州が５０分（特快を利用して）ということだから、まず、無錫まで行って、午後から蘇州の戻り、観光してのち汽車で上海に帰る，のはどうだろうか？と深栖コンダクターに聞いてみたところ「無理！無理！やめたほうがいいですよ！」と、一蹴されてしまった。
というわけで、２７日は朝、上海賓館から地下鉄「静安寺駅」に行き、上海駅まで人民広場駅で乗り換えて行った。
初めてみる上海駅、というより駅前広場の風景に、しばし、感慨深いものがあった。
いつか、必ず、ここから一人で行動するんだ！という思いが実現しようとしている。駅前の巨大なホテル群、雑踏する人々、そのすべてが自分の想像のフイルムに焼きついていた。現実との一体感にふける瞬間だった。
さすがに駅の切符売り場は大混雑だった。　請給我二張去蘇州的軟票。
・・・蘇州まで一等席を二枚ください。　・・・・いくらですか？
軟座の列車内はなかなか快適だった。
ただ、あちこちの客が携帯電話で大声でわめくように、喋っているのがうるさかった。　一度に5人ぐらいの客がそれぞれ大声ではなしているとパニック状態になる。
行きは軟座。帰りは硬座だったけど、待合の大混雑の差を除くと、中はさほど変わっているようではなかった。
もう少し、頭の中では、硬座のほうはるつぼって感じをもっていたが、蘇州～上海間は都会の通勤電車（山の手線か中央線）のイメージだった。
蘇州の駅の客引き（観光案内）はすさまじかった。
トイレに行きたくて、聞いたおばちゃんが親切にもトイレの傍まで案内して、出てきたらなんと、待っていた。ニコニコわらって、
「１２０元でいいから案内するヨ。」という。

「イイヨ。　歩いて回るから・・・」というと、
「冗談イワナイデ、イチニチ　カカルヨ。」と目をまるくする。結局、小型のマイクロのお世話になる事になった。マイクロの運転手気温が３０度以上あり、クルマの中のクーラーがあり難かった。どの寺や庭園を回ったのかよく分らなかった。
寒山寺と水路めぐりだけはコースにいれてあったので、それだけは伝えていた。「ＯＫ！」あとは、帰ってから調べてみたら、あまり、名のあるところは見学していなかったようだ。もちろん、**拙政園・獅子林・留園・虎丘・西園**・・・・といった。
ツアーでははずせない名所・旧跡はどこも外れていたらしい。でも別に不満でもなかった。ここは誰でも知っている
寒山寺。というのは、彼等が、一生懸命に中国語で説明してくれるから会話の楽しみは結構あった。途中、昼ごはんを食べたくて、「どこか、おいしいウドン屋はないか?」と聞くと、「ある、ある!!」と親指を力強く立てた。案内された街の中の食堂の「皿ウドン」はなかなかのものだった。

私の中国５の２　江南水郷を旅する。

２００３年１０月３０日　周庄　zhou huang

１０月３１日　西塘　xi tang



私達は人間として地上に生まれたというおおきな運命を受けている。

そして、どんなにながくとも百年前後でこの世から退場するという運命をあたえられて生まれた。アジア人としての肌の色と体質をあたえられ、２０世紀から２１世紀への時代に生きている。それは私たちの運命である。

又私達はある家族の下に、特定の血液型因子と個性を与えられ生まれたそれは宿命である。私達はそれを否定することができない。

運命を大きな河の流れ、宿命をその流れに浮かぶ自分の船として、そこから出発するしかないのだ。　五木寛之「人生の目的」より。

周庄は実は「どうしょうか?」と迷ったところだった。

ウルムチの馬さんは薦めてくれたけど人気過ぎて、まして、もし烏鎮に行くのなら行かない方がいいのでは・・・と言う意見が多かったところである。

ぼくは李黎に言った。

「周庄をやめて、朱家角にしょうか?」と・・・李黎が困ったような顔で言った。

「アタシ、周庄に今度行くよ」と言ったら、友達が、「じゃあ、あそこに売っているオルゴール人形を買ってきてよ」と頼まれたらしい。

周庄へは本当は３１日に行く予定であった。シータンのページで書いてあるのでここでは書かないけれど。バスの中の出来事はまるで覚えていない。たぶん、ふたりで、中国語と日本語の相互勉強をしてたのかも知れない。　周庄に着いて、とても大きいのにびっくりした。

さすが世界遺産である。

雲南の麗江とまではいかないけど観光客の受入れ体制は先の二ヶ所に較べてさすが訓練されている感じがした。

あした行くシータンとは、どんな感じだろうか?

観光バスのターミナルも大きく、ツアーバスも含めかなりの台数が来てい

た。
この感じでは中は混みあいそうな予感がする。
バスを降りしばらく大きな通りを過ぎると長い周庄大橋を渡る。右手に八層位ある塔が見えてくる。
雲海塔（②）というらしい。　さらに１０分ぐらい、ぞろぞろと人の流れが続く。大きな広場にでて、巨大な門が現れる。
新牌楼（①）というらしい。いわゆる、ここが周庄の入り口らしい？　そして又しばらく商店が続く、ものすごい数の**輪タク**③が客引き合戦をくりひろげている。・・・・なぜか、周庄編が最後になってしまった。
記憶を蘇えらすエピソードが乏しかったというのが偽らざる事実ではあった。

西塘　xi tang は拙江省の嘉善県にある。

２００３・１０．３１

春秋戦国時代に呉越が争ったところで、元代の西塘は水に依り市となり、賑やかな街を形成していた。また明・清時代は手工業と商業が栄えた。西塘は川がいたるところにある。
　９本の川が町を８区画に分け。多くの橋が架けられている。　１０４の橋は明清時代に造られた。
家屋は川に沿って並んでいる。「門の前に街道、家の後ろに川、おくには長い路地が１００本あまりある。」
　１２２本の路地は幅も長さもそれぞれ異なる。唯一変わらないのは、足元の石坂である。
１００年の風説を経て磨かれ、奥深い光を反射し、灰色の壁と黒い瓦に映して古い町の移ろいを伝える。
実は、**西塘**には３０日に行く予定だった。
今回の旅のハイライトが近づいていた。**西塘**は見えない糸でつながっているかのようだった。
　朝、７時半に李黎がホテル（**中土大厦**）に迎えに来た。
中土大厦は思っていたよりはるかにいいホテルだった。李黎からメールで初めて聞いたときは、薄汚い、古びた建物を想像したけど、どうして、どうして上海賓館に決して引けを取らないばかりか、部屋に関しては、こちらの方が数段ましだった。部屋の大きさ、ベッドの豪華さ、調度品、バスルームも申し分なかった。
新しく出来たという近くのレストラン（**永和大王**）で二人は早飯をとった。
皮蛋瘦肉粥・油揚条・小ロン包・水桶豆腐というメニューだった。
特に粥は美味しかった。帰って来てから店の林琳に写真を見せたら油揚条はとても有名な朝の食べ物だそうで、琳も大好きだそうである。僕の朝の食事のイメージ（昔、西安の路地裏で食べたような）をくすぐえす朝飯だった。　もっとも李黎がぼくのために選んでくれたのだろうが。
　・・・・そういえば、この前の**王宝和大酒店**での李黎との待合せ場所取り違え事件のことをまだ話していなかった。・・・・・それは、こうだった。
三日目（２７日）の晩のことでした。慎介くんと蘇州の帰りに李黎とお姉さんの阿静（アジン）を蟹料理に招待する約束をしていた。王宝和は二ヶ所あって、一方はホテルでその?階かにレストランはあり、もう一ヶ所が昔から有名な上海蟹の専門レストランなのである。
　この二ヶ所は歩いて５分ぐらいのところにあるのだけど、僕らは、ホテルで待ち合

わそう、と言ったのを、李黎たちは、レストランで待っていたらしい。
　もっとも、間違っていたのは僕たちの方だというのが、あとで、メモをみて分ったのだが、実に、1時間30分、お互い、待ちぼうけをくった。
ホテルのウエイトレスにレストランの場所を聞いて、3回ほど、行ったけど、場所を見つけることは出来なかった。
「もう一軒の王宝和は何処ですか?」いう、僕の中国語が、なかなか通じなかったのには参った。自信をなくしてしまった。
　さて、話をもどそう・・・・・・
　・・上海駅まで市バスで行こうとしたのだけれど来るバス、来るバスが超満員で、とても乗れそうになかった。
度は李黎の背中を押してやっと乗れそうになったけど、もう一歩のところで、ステップが上がれずあきらめた。
諦めてタクシーで駅まで行くことにした。
そんなこんなで、地下鉄を乗り継いで**上海体育館**に着いたのは8時40分を過ぎていた。
急いで李黎がチケットを買いに行ったけど、眉をひそめながら戻ってきた。
　「西塘ハ、モウ出てしまったソウデス。9：00発ノバスは、ジャリ（暇日）ダケ運行シテルソウデス」と言った。周庄はまだ乗れるとのことだった。
・・・つまり、西塘行きは土日だけの運行なのである。
というわけで**30日は**9時5分発の**周庄観光**に変更なった次第である。
・・・・・・・周庄は充分、たのしいツアーだった。
　周庄から戻ったのはもう夕方だった。時間にするとまだ、5時半なのだけど、気分的には7時ごろのような気がした。　なにか日本との一時間の時差が気になる。昔、日本であったサマータイムを思い出す。
　晩飯は中華にしょうと**淮海路**へタクシーで行った。30分ほど散歩して、「そうだ！　こちらのパソコンを見るんだった。」ということを思い出した。
　出来ればインターネットカフェに行って、李黎が僕のメールを受けているパソコンの実態を調べてみたいと思っている。近くの伊勢丹や、その他のデパートを覗いてみた。2,3軒まわったけどパソコンの売場は　どこにもなかった。
もちろん、電気店らしきものもない。
李黎が「**徐家匯(シュジャフィ)**ニアルカモシレナイ。」と言ったので、行ってみることにした。
地下鉄に乗って五つ目での駅である。乗り換えはない。上海の地下鉄はとても便利である。　すぐ傍に入り口があって、着いたら、そこは目的地だから、タクシーに乗ったような利便性がある。
徐家匯は一度、行ってみたいところだった。パソコン云々に関係なく、**徐家匯**自体が行きたいところだった。夕食を**徐家匯**でしてもいい?と思った。
　又、ちがう街に来たようだった。上海の大きさを感じた。
　開発されているのは浦東地区ばかりかと思っていたが地下鉄を出て周りの空間と巨大ビル（デパート群）に圧倒された。
太平洋デパートの電気専門デパートに入った。各階、電化製品の山である。広さは余りない。
　五階にあるノートパソコン売場を覗いたが、日本のディスプレーと異なり、触れない、看れない、しかも、ラップがはってある。あきらめて出た。近くの有名（と李黎が言った。）中華飯店で夕食をとった。いつものことで、半分は残した。
李黎も残す事に無関心のようだ、いつも残すのを見ているからオーダーは控えめでよさそうだが、いつも、5皿ぐらい注文する。
オーダーも食事の楽しみ（料理を見る）ひとつなのかもしれない。食後、二度目の「**新天地**」散歩（**グアンヴァンジェ**）にタクシーで行く（戻る?）。

このあとの新天地での話は「新天地ストーリー」に詳しく書いてある。
李黎に買ってあげた記念の逸飛新作のプラスチック花瓶の値段は正式には１６０元だった。
もしかしたら、ストーリーでは高く書いたかもしれない？
実は、長々と前日から書いているのは、このあと、お腹の調子が急変していくからである。
晩飯の中華が当たったのか？カプチーノ（これが一番怪しい）が原因か？
　このこともストーリーで書いたつもりだ。李黎にはだまっていた。
李黎とは１１時にホテル前で別れた。
このころはもう、お腹に異常事態発生の気配を感じていた。
そんなことで、風呂には入りたくなく、シャワーだけを浴びることにした。
　去年、杭州で泊った五つ星ホテル**ラディソン**にも引けを取らない立派な設備がこの三つ星（**中土大廈**）には備わっている。
これで、一泊３５０元（５５００円）なら上等である。
李黎との朝のロビーでの待合い時間は朝７：００にした。
　もし、起きれなかったら、と、自分の携帯でんわのアラームを６：１５にセットした。じつは、フロントにモーニングコールを６：３０に頼んではいたのに・・・
朝、アラームが鳴ったので目が覚めた。なんと、まだ、夜中の五時過ぎではないか？

　時計は一時間、中国時差に合わせたのだけど、携帯時間は日本のままだったのである。
６時ごろ東の空があかるくなった。　相変わらずお腹の方はグルグルと鳴っている**今日は一番のハイライト西塘紀行である。**
バスの中で催したらどうしょう！　在中国では昼間の大だけは極力、避けたいと思っている。
　ウルムチでハニウリを食べた時の「**直行**」を思い出した。
持参の特効薬ミヤリサン FM を二錠飲む。朝の粥はやめとこう！！

案の定！西塘への一日は苦難の日であった。
地下鉄「陝西南路」駅に着く前に、あやうく失神しそうになったのである。
眩暈がしてだんだん気が遠くなりそうになった。いつか、店で、仕事中にこんな気分になりかけてことがある。
・・・こんなところで、こんな時、・・・「どうしょう、早く、次の駅に着かないか！」
李黎は気付いていなかったようだ。ぼくは李黎の背中を抱えるようにホームに下りた。かろうじて、長ベンチに腰掛け、　しばし、じ～っとしていた。
・・・・・・・・・・　「**タイジョウブ？**」
日本語のボカブュラリーの少ない李黎はこんな時、どうしていいのか分らず。といって中国語でも声かけられず困惑していたに違いない。
・・・・・・・・・くちびるがカラカラだった。
　もう、とても、次の電車に乗れるような余力は残っていなかった。
・・・・・・・「タクシーで行こう！」
　李黎をせきたて、地下鉄のホームを出た。
　もう、眩暈は収まっていた。・・が、お腹は鳴動を続けていた。
僕の心は逡巡をくりかえしていた。「やめようか」「お腹が痛い」「途中でいきたくなったらどうしょう。」
　正直なところ、自分一人だったら、行く先が**西塘**でなかったら、**ストップ！**
間違いなし、の状態にあった。
バスの発車時間があと３０分に迫っていた。タクシーの運転手は１５分で着くと言った。
・・・このへんの内容は苦痛で好く覚えていない。多分、李黎が一番、辛かっただろう。つまり、この事態を、どう自分で判断し、それを、どう伝えたらいいのか？が・・・
　李黎がバスの切符を買ってきた。ときどき、腹痛が来るが、なししろ軽い脱水症状が出ていて、くちびるがカラカラなのである。　といって、持っているウーロン茶をがぶ飲みは出来ない。朝、トイレでほとんどのものは出してしまっているので、お腹は空っぽ状態なのだ。
・・・・・・そういう悪情況のなか、・・・・・ともかく、バスは出発した。

お腹は相変わらず、大回転をしていた。時折、しぼるような苦痛がくる。
もう、最悪！！！
普通なら、こんな状態の場合、バスの中だろうと、生理現象としては、無条件反射的に履行されそうなはずなのに・・・幸か！不幸か？
バスガイドの甲高い上海弁がなにか遠くで聞こえるような気がするほど、お腹のなかの回転運動に神経が集中していた。
前の席（僕たちの席は前から3番目）のおばさんグループがそれは賑やかで、そのことも僕のナーバスな神経を刺激した。
突然、蜜柑か柿か落ちたらしく、僕に足を上げろといいう（・・・ってるらしい）僕は顔からパーカーをすっぽりかぶったまま、しかたなしに両足をあげる。
あいかわらあずくちびるが渇く、でも、持ってきたウーロン茶は口に含む程度にした。脱水症状と下し（シェ）の二者択一を迫られていた。
すこしお腹が落ちついたころだった。　1時間すぎたころだったか・・・
李黎が言った「慶ニサン　フネニノル（船に乗る）デスイイデスカ？」
２０名ぐらいのツアー客はバスから降りた。一人だけ欧米人がいる。

１０分ほど田舎道を歩くと水路が目の前に広がった。船着きばから１００メートル位先にトイレとおぼしき建物が見える。
李黎に言った。「僕、トイレニ　イコウ（行きたい）　カナ。」・・・と。

李黎が上海小姐ガイドに聞いてくれた。しばらく、ふたりで会話をしていた。いい結論がでそうにないみたいだ。僕の勘では、舟が着いたところにトイレと休憩所があるからそこまで行ってからでは、との話のようだ。
実際のところ、僕としては、この小舟での観光は止めて舟が戻ってくるまでゆっくりひとりトイレに座っていたかったのだが、もちろん、そんな会話は不可以である。

それに、よく聞いて見るとわたし達はここには「不回来！」戻って来ない。
つまり、バスは舟の着く先に先回りするらしい。・・・・・・結局、李黎と僕は皆が乗ってしまった最後に舟に乗った。
「あの二人、なにやってんダ！！」という顔をしていたかも知れないけど、幸い、僕には、そんな他人の顔色を見る余裕なんてものはなかった。
でも、少し、回転運動は鎮まっていた。お尻の筋肉を意識しておけば、着くまではなんとか我慢出来る状態ではあった。
それより、可哀相なのは李黎であった。きっと、皆の視線を感じていたことだろう。
それに、他のペアやグループはこの舟オプションに結構、興奮して、ワイワイ騒いでいるのに、僕らはほとんど会話が無い。おまけに僕は李黎の顔をよく見る余裕すらなかったのだ李黎はどんな顔で僕を見ていたのだろうか？
きっと、僕の顔だけがこの中で苦痛の顔だったに違いない。
今夜の予定は李黎との今回の旅の最後の夜。浦東のサントリービルの最上階で西洋料理のフルコースでも、ロマンチックな上海の夜景でも眺めながら・・・・・と思っている。　李黎もそれを楽しみにしている。
でも・・どうしょう・・・・
西塘古鎮はぼくの期待を裏切らなかった。

ゆったりと、時が止まったような・・・そんな感じだった。
李黎とふたりで乗った貸切りの小舟は８０元と、少し、高いかな?と、思ったけど・・・

それは、多分、いや間違いなく、李黎が今回のKとの旅の思い出の中で一番、記念になる一枚だったはずだからだ。

その夜は2回目の新天地だった。徐家匯（Ｘｕｊｉａｈｕｉ）で中華料理を食べ，２人でお茶と散歩に出かけて来た。タクシーだったか、地下鉄だったかは覚えていない。

一番奥にあるムービーシアターまで行き、昨日、見ようと思ってあちこちの映画館をさがし廻った「天地英雄（中井貴一主演）」を見つけ、残念がり、Ｕターンして、今度は屋台の飾りを眺めたりして、適当なカフェテラスをさがしていた。陳　逸　飛（チェンイーフェイ）のデザインショップＬａｙｅｆｅ　Ｈｏｍｅの前のカフェが空きが多かったのでそこでカプチーノをたのんだ。

目の前の座った李黎の様子が急に変わった。Ｋにヘンなサインをする。何か李黎の斜め後ろに座っている人物のことを言ってるらしい。

「アソコニ　スワッテイル　ヒトハ　、ココノ　オーナーノ　チェン　イーフェイ　デス。」

在那儿坐着的人陳　逸　飛。

「一緒に写真を撮ったら?・・・・記念に・・・・」

「ダメ　ダメ　トテモデキナイ　ハズカシイ　」

不行　不行　真的不行

Ｋたちのなりゆきを見ていたそこの男女の従業員が手をつかって、イイヨ　イイヨ。　タノミナサイヨ。

と合図をしてくれる。・・・２，３分のしゅんじゅうのあと、Ｋはボーイにデジカメを渡した。

李黎　「一緒に写真撮らせてもらえませんか?」

陳逸飛「あぁ、いいですヨ。」

とてもやさしそうな笑顔の素敵な中年男性である。Ｋは一瞬、友人のヨシ・トーヤ氏を思い出した。

手招きされてＫも入った。真ん中に　陳逸飛を挟んで、感激の一枚のシャッターが押された。フラッシュがつなかったのがちょっと気になった。

Ｋ「日本から来ました。」　我是日本来的！

Ｋは一応、中国語で挨拶した。

李黎の満足そうな顔が美しかった。

「李黎！　なにか記念のグッズでも買わない?そして、それにサイン　でもしてもらったら?」二人でいろいろ店内をさがし廻った。

そして、高さ２５ｃｍぐらいの青い景徳鎮のようなデザインの筒型の花刺し（花瓶）をプレゼントした。

、買い物紙袋にサインをしてもらっている嬉しそうな李黎の写真だけが、このストーリーがフィクションではないことを証明する唯一の証拠になってしまった。

慎介に借りたカシオの名刺型のデジカメはなかなかの優れものである。

でも、だんだん残りのフィルム枚数が少なくなっていた。

自分のサイバーショット（sony）なら、この一枚は間違いなくプロテクト（消せないように写真にロックをかけるのだが）借り物でよく分らなかった。

それと、近くを２，３枚無駄写真を撮っていたのが災いした。左の二枚と問題の照片（フィルム）以外は削除しよう。と何故か、決めてしまった。

一度だけ３人の写真を李黎も見た。「アレッ！写ってる??」確かに、写真は暗くはあったけど、ぼけてなかったので画像処理で綺麗になると、思った。

李黎はいたずらっぽく言った「シャオリン（小林さん）はヘン、イーハンね。」とても残念がるよね！まさか自分が残念がることになるとは考えてもいなかった。

旅の途中でＫは気がついた。「ウソッ！！」と思ったけど、不要と思って消したその時も覚えていた。知らないうちに消えていた、なんてウソは言うまい。

消す写真を間違えたのは紛れもない事実だった。もちろん李黎には言わなかった。言えなかった分だけ苦しかった。

陳逸飛にメールをだそうか、と真剣に思った。この悔やみが、もしかしたら、なにか新しい変化、発展につながるかもしれない。

今なら、あの時のシーンを彼も覚えているかもしれない。でも、それでどうなるのか、と思いとどまった。

李黎にはメールを出した。

李黎:ニ好!

11月2日,3日両天特別忙,

暫時,這没有充裕的時間,?浸在"上海之旅"愉快的回記中。剛剛?我想起了和李黎在一起一个星期的愉快時間。想起了我肚子疼,在地?上中途下?。

写真はまだ現像していません。でも、よくよく見てみましたら、とても残念なことにあの一番たいせつな(李黎の楽しみにしていた)一枚がとても暗く、はっきりと分らないようです。

・・・・本当のことをKは言えなかった。

・・・一年前、一枚の写真のことから李黎との交信が始まったことを　kは思い出していた。

・・・・・・・・昨年の11月26日、その日はKの誕生日だった。

上海の浦東、対岸に外灘の美しい夜景が見える海浜レストランにいた。

食事も半ばから終わりに近づく頃だった。

突然、ウエイターが花火のようなパチパチと音のする大きな皿をささげるように持って来た。

ミンクのストールの制服を身に着けた美しいウエートレスが数名、あとに続いてきた

"バースデーケーキ"だ!

いやだな、と恥ずかしさがKを襲った。でも、もう後の祭りだった。

Kの前で彼等は満面の微笑みでローソクに火を点ける

と大きな声で歌い出した。

。ハッピバスデー　ツーユー、Happy-Birthday Dear K

san・・・・・・

生まれて始めての経験だった。

何度か、若者たちの、そういう場面に遭遇したことはあったけど、そうそう、昨年は、孫娘の誕生日も天保山のイタリアンレストランで、お店の店員さんたちに大きな声で"ハッピ　バースデー　みうちゃん"と唄われ、恥ずかしそうにしていたみうを思い出していた。そのとき、ソウ,照れながらローソクの火を消す瞬間、カメラを向けた李黎が目にはいった。

鹿児島に帰ってほどなく李黎からメールが届いた。

K先生:

ニン好!来信已收到,謝謝ニン的照片。上海近几天很冷,

公司也不忙,所以天天在家休息!收到ニン?的来信我非常的高興!

ハイ有一件事我必須跟ニン説声:"対不起"!

因為上次ニン在上海過生日時

的底片无法冲印。希望以后能再次為ニン拍照!

祝:事事順

心!

李黎

・・・・・ゴメンナサイ!この前、上海での誕生日に私が写した写真はキズが付いていて現像できなかったのです。この次、来た時又写させてください!・・・・・

・・・・・・2004年はどんな写真のまつわるドラマが又展開されるのだろうか?

今年のKの誕生日に李黎から一個のプレゼントが届いた。

それは、あの日Kが新天地で欲しがっていた景徳鎮の焼き物風の中国結だった。

李黎和K新天地物語以后伊妹儿交信

慶二先生：

見信佳！

次的旅行很辛苦?，回到鹿儿島后身体好了ｍ?:快楽上的時光?是過得很快，慶二先生在上海的一周一?眼就過去了，不知道此次旅行中，使慶二先生最快楽的是什?事情。現在，我又開始一辺学習日語，一辺等慶二先生的再次到来。

今天，我回到公司上班，前几天的工作都集在一起等我，我忙了整整一天。?二先生?几天也会很忙的?，一定要注意休息?一?才我去商店拿手机，是我?都喜?的那一个，很漂亮，价格是２５８０元。

回家后，我要整理?二先生送?我的日??料，准?再一次的好好学?，?一次跟?二先生交?的?候太困?了，很?憾。希望下一次能有??一:好了，就?到?里，不打??二先生了。?注意休息！

祝　身体健康！！

李黎　　１１月１日

この度の旅行お疲れさまでした。鹿児島に帰ってからお身体の調子はどんなですか?:楽しかった時も過ぎ去って、慶二さんとの上海での時も過去のことになってしまいました。

慶二さんの一番楽しかったことはどんなことだったのでしょう?

いま、わたしは又日本語の勉強を開始しました。

慶二さんがまたこちらに来た時の為にです。今日、会社に戻りました。こないだからの溜まっていた仕事が一度に待っていて、一日中、その整理に忙しかったです。慶二さんも同じようじゃなかったでしょうか?:休憩が必要ですよ。　ついさっき、店に携帯電話を取りに行ってきました。

わたし達が気に入っていたあの携帯です。トテモ綺麗です。値段は２５８０元です。

家に帰ってから、ケイジさんがわたしに呉れた日本語の資料をせいりしかたです。

もう一度最初から勉強のし直しです。こんどは慶二さんと話をする時とても困りました。とても、くやしかったです。この次はもっと進歩して、慶二さんがびっくりするように・・・・

慶二先生:

?信好!　?来?慶二先生回信,?原?因?我的上网??了.

不知道慶二先生?几天的工作有没有?松一点,希望慶二先生又回到了正常的生活?律中,也希望慶二先生的身体和李黎的一?棒!?真的,我?次看到慶二先生,我感?和去年一?一点都没有,?是那?精神抖?.不知道在?二先生看来,李黎是不是有一些?化??

如果?在我的?一年里,慶二先生来上海是最快?的事情,和姐姐?矛盾是最?心的事情,那?在前?天我遇到了?一年里最倒?的事情,因?我的包居然?了.里面有很多重要的?西,我的所有?件!?,一些工作?料,?有一些我很喜?的?西和能???我小小愿望的?西都没有了,我?在几乎是一个一无所有的人,甚至?身??都没有了,?将?我的工作和生活?来一些麻?.?憾的是我?没来得及告??二先生新的手机号?.

从慶二先生??上海以后,?里的气温下降了２０度到?呈?一派冬天的景象,?漫?又寒冷的季?又来了.

祝:好?相随!!!

李黎　　１１月１２日

この前の慶二さんからのメール、どこか消えたようです。このところ慶二さんの仕事が忙しいのか暇なのか分りません。　早く、元の正常な状態に戻る事を、さらに、慶二さんと李黎の体調が素晴らしくあることを望みます。本当のことを言うと、今回、慶二さんを見て、去年と全然変わっていないと思いましたよ。すごく気力旺盛に見えました。慶二さんから見て、李黎はどんな風に見えましたか?

若し、ワタシのこの一年を振り返ってみると、慶二さんが上海に来てくれた事が最高楽しかったことで、姐とのトラブルが一番辛い，いやな事でした。

ところで、実は、二日前に、今年最大とも言えるとんでもない事件に遭遇したんです。

それは、**ワタシのバッグをとられてしまったのです。**

中には、重要なものばかり入っていたのです。

証券、カード　、仕事の資料、その他、ワタシが一番大事にしているいろいろな物全てです。ワタシは今何にも無くなりました。自分を証明する身分証明書までなくなりまいた。これから、しばらくはこのことで仕事も生活も忙しくなりそうです。特に残念なことは、慶二さんに新しい携帯番号を教えていなかったことです。

慶二さんが上海を離れてから、こちらの気温は急に寒くなりました。20 度ぐらいです。　あちこちに冬の景色に変わってきました。

アァ!又、長い，さむい季節が来るのかなぁ・・・・・

2003 年 11 月 12 日　19：31　　李黎

慶二先生:

?信好!

今天很高?,因?我收到了慶二先生寄?我的照片!看到?些照片,又?我想起了和慶二先生一起游玩?的点点滴滴,?当回想到一些快?的?景我?会情不自禁的笑,呵呵!?段美好的??将一直陪伴我!

我去一家工厂,回来?我乘地?,正好是下班的高峰期,那天我很累,等到我下??包就没有了(黑色的包),真是?人生气?!不?事情都已??生了,就?它?去?,而且,中国有句俗?叫做"去?免?",意思是?失去一点?物不要?,只要可以避免??的?生就可以了.

?外,我想?,比起 2 万日元来,我更希望看到慶二先生写?我的信?!因??可以自口?,但是信不能自口写?自口?.当然,李黎在?里?是要感?慶二先生?我的?心!

天气?凉?慶二先生注意保重身体!

祝:生活愉快!

李黎

11 月 17 日

今日はとても嬉しい日です。というのは、慶二さんからわたしの写真が届きました。

これらの写真を眺めていると、慶二さんと一緒に遊びに行ったいろいろなところを思い出して来ます。（点々滴滴】。

楽しかった場面を思い起こすたびにわたしはひとり笑いをしてしまっていますよ。

ところで、

・・・この前の盗難続きですが、わたしはあの日、ある工場を訪ねての帰りでした。

帰りは地下鉄に乗ったのです。時間はまさに会社帰りの一番多いラッシュ時でした。

その日はわたし、とても疲れていたんです。降りる時にはもうバッグはありませんでした。（黒い色のバッグです。）ほんとうに、腹が立ちます！

しかし、起きてしまったことです。かばんは返ってきません。

中国のコトワザにあります。（財は去って，災を免れる。）その意味は、金や財産が無くなってもかまわないさ、きっと、その代わり災難も忌避できるに違いない。

ところで、わたしの思いを言います。わたしは慶二さんから届いたどんなお金よりも慶二さんがわたしに書いてくれた手紙の方が更に嬉しいのです。

なぜなら、お金は自分の力で稼ぐ事が出来ます。でも、手紙を自分で書くことは出来ないからです。もちろん、李黎は今回の、慶二さんのわたしに対する心遣いに対しては、とても感謝しています。

・・・天気がだんだん寒くなってきました。慶二さん、身体には充分、気をつけてくださいね。

2003 年 11 月 17 日　　19：23

李黎

慶二先生:

?信快?!!

生日?得很?心?!希望我送??的生日礼物能?及?送到,我看到慶二先生收集了很多

的中国?,??什?那?喜?中国??,希望我??挑?的中国??也喜?,李白的???太太能喜?我很高?!

上次我?手机的?候?便?了??号?,但?没来得及告?慶二先生新的号?,手机就?了,所以我?在任然用原来的??号?09,再?几天我会去?新手机,但是我想?次我不会?手机号??了,如果有?我一定会告?慶二先生的.

我?才看到慶二先生的网站上新添加的内容.

想念慶二先生!　祝:年年有今日!　??有今朝!!

李黎　11月25日

慶二さん:

メール拝見しました、嬉しかったよ!!

誕生日、おめでとう!!願わくば!わたしからの誕生日プレゼントが26日に間に合ってくれれば、と思います。

わたしは見ましたよ、慶二さんは随分たくさん中国結を集めているんですね。

あなたはなぜ、そんなに中国結が好きなんですか?

わたしが選んだ中国結も気に入ってくれるといいけどナ。

李白の詩軸（下の写真参照）も奥様がトテモ喜んで、気に入ってくれたそうで、わたし嬉しいです。

この前わたしは新しい携帯を買った時、ついでに、携帯番号も変えたのですが、　新しい番号を慶二さんに教えないうちに携帯を無くしてしまいました。

だから、わたしは今、前に使っていた電話とその番号を使っています。

だけど、今度変えたとしても番号は変えないつもりです。もし、携帯を換えたら慶二さんにすぐ教えます。

わたしは、ついさっき、慶二さんの新しく内容を加えたホームページを見ましたよ。

2003年11月25日　19:09

李黎

李黎:こんにちは!!

さっき、誕生日プレゼントが届きました!。

わたしたちが新天地で見て、ぼくが買おうかと言ったら、李黎が「高いよ。」と、言ったあの藍色の中国結と、同じものでしたね。いや、あれより綺麗ですよ。

貴方は、よく覚えていてくれましたね。**小烏亀**もかわいいですねぇ。

日本でも同じように**「ぜにがめ」**といいます。二つともとても大好きです。

ところで、ぼくが僕のホームページで使っている日本語文字、そちらで読めますか?

もし読めないようでしたら、コピーして僕に送ってください。中国語に直して送ります。

また李黎が日常会話の際によく使う口語の語彙を、メールで送ってくれませんか?

慶二さん:

ニハオ!　プレゼントが誕生日に届いたんですって最高、嬉しいです。

わたしの送った中国結が刑事さんのコレクションに無いことを願っています。

慶二さの家にはとても多い中国結と掛軸などが一杯で、まるで、中国雰囲気が家の中は一杯なんでしょうね。慶二さんはまた、中国茶もお好きなんでしょう。

暇なときには家の人やお友達と一緒にお茶を楽しんだり、お喋りを楽しんだりしてるのでしょうね。

今日、わたし、新しい携帯を買いに行きまし

た。番号はしばらく変えないことにしました。
失くしてしまった証券類はほとんど申請し直しました。ほっとしました。

だけど、一番、重要な身分証明書は未だです。実家での申請が必要なのです。とても厄介なんです。だから、李黎はいまのところ、身分不明の人間ですよ、アアア！この次メールするときに、よく使う日本語を書いて慶二さんにあげます。

2003年11月29日　　李黎

―僕の中国ぶらり旅（1999年～2012年）の軌跡―

西暦2000年に母校玉龍の仲間たちと結成した『玉龍八期会』だが、その還暦の年に『還暦記念旅行―アメリカ西海岸の旅1週間』を催行した。
あれから20年目の傘寿記念を迎えることになった。「時間過的全快ァ」である。この20年間の八期の集まり、同時に20回以上行ってきた八期仲間との旅行と、僕のプライベートな『中国ぶらり旅』は重なってくる。
1999年（平成11年兎年）に兄たちと中国ツアー（近畿日本）に行ったのが初めての中国だった。
還暦旅行（60歳）アメリカ西海岸の旅と、初めての中国の旅が重なる。そして、10年といくらかを中国をほぼ一人でツアーにはあまり参加しないで旅をした。
就労ビザですごした2004年を除いて旅の期間はビザ無しで滞在できる14日間を越えない旅をした。
20回くらいの旅の日記はその都度、協会HPや（ブログも）への投稿を通して書き残してきたけど

仮タイトル　『留くんと巡った中国―江西省回憶（想い出）―』

2009年11月21日

長沙日本節 ジャパン ウィーク開催

1999年に初めて中国を旅してから2006年の内モンゴル（呼和浩特）からは始まりアモイ・泉州・そして土楼客家をたどった2週間の中国大陸（北から南まで）の旅までは『ケイジの中国ひとり旅』としてHPに文章（日記風なものだけど）記録を残してきた。
2009年に高校の同級生・永留弘之くんと巡った山西省の廬山や三清山そして、中国でいちばん美しい村といわれる『理抗』、陶器の街『景徳鎮』などの記録が文字として書き残せなかった。もちろん、たくさんの写真や動画を撮ったので、その記録は順に「ユーチューブ動画」として4作程にまとめてアップしてある。

このままではせっかく訪れた中国・江西省のビジュアルな記録とその時のふたりが目にした情景や感動などが失われてしまう気がする。
ほぼ10年の時が過ぎてしまったけどちょっと頑張って記憶とデータ（メモもぜんぜん書かなかったけど）をたどってみようと思い立った。

まずこの旅に至るまでの「いきさつ」みたいなものを書いておこうと思う。一つ目は・・・
そろそろ長沙の街が恋しくなってきていた頃だったけど鹿児島市の職員の柿の木さんが鹿児島市の交換交流員として1年8・程の契約で長沙市政府（外字弁公室）に勤務していた。

彼女が持ってきた膨大（少し大げさだけどかなりの資料ではあった）なファイルをタカプラの応接室で見せられ説明を受けた。それはこういうことだった。

　来年秋に長沙市で中国全土からの芸能（特に踊り）が集まり、日本全土からの国民的な芸能（なるべく若者が主役の）と交互にステージで芸能合戦（交互に出し物を披露する）をする。

もちろん芸能だけではなく各大学では相互学生、教授などによる学術交流会も開催。政治・経済をのぞくあらゆる分野の中日交流のイベントの開催―名称は『ジャパンウイーク（日本節）』―柿の木さんの説明ではもうすでに京都や高知の「よさこいグループ」などの参加が決まっている、「鹿児島は私が担当を任されて今帰国したばかりなので日中友好協会さんにも力になって欲しい」との相談だった。

　ぼくの頭にすぐ浮かんだのが鹿児島女子短大の『ヤングおはらグループ』だった。すぐその場で柿本さんにそのグループの素晴らしさを告げた。

ぼくの目には長沙市の黄興広場の舞台で舞う彼女らの姿と喝采する長沙市民の姿が目に浮かんだ。

（これは絶対受けるに違いない）と思った。と同時にこれは「ぼくが行くしかない」と思った。

学生たちのスケジュールや経費などの問題は柿の木さんが受けて彼女らの出演が決まった。後日談だけど、とても残念だったのは当日の開会式のステージにぼくは鹿児島の団体を代表して紹介される予定だったのに交通渋滞に巻き込まれてしまい間に合わなかったことである。

　いきさつの第2があつた。

長沙市のある湖南省と景徳鎮のある江西省は隣同士である。

昔から陶器のルーツ景徳鎮には一度訪れてみたいと思っていた。また、中国の景勝地として廬山はぼくが訪れていない最後の山だった。

このふたつを結び付けたのが景徳鎮陶器大学の日本語学科の胡さんの存在である。

　11月のジャパンウイークに長沙市を訪れること、そして、いいチャンスだから胡さんに1週間ほど江西省の景勝地や古い街（昔のままの景色）を案内してもらうこと

この二つがぼくの頭の中でプログラムされた。

さっそく胡さんとの間でメールの往返が始まった。

胡さんからこちらの希望を入れたいくつかの計画が送られてきた。

「1週間ほどの行程には私が一緒に随行させて戴きます」と書いてあった。

色々調べていくうちに訪問したいところがどんどん増えていった。

三清山のような鹿児島に来ている留学生などに尋ねても「初めて聞きました。」という崖に張り付いた細い道を渡る景勝地や中国で「いちばん美しい農村」と言われる理抗も訪問地に入れることに胡さんに頼んだ。

　もっともぼくは彼とは面識がなく、年齢もわからなかった。だから

初めて南昌のバス乗り場で会った時には彼が若者だったことにはおどろいた。

イメージでは大学の講師なら３０代から４０代の学者風の堅物を想像していた。

　このニつのいきさつ（プロローグ）があってから、そのころ孫の一人くんが付属小学校に入り付属小の先生をしていた高校の同期の永留くんをこの旅に誘ってみたいという思いが湧いてきた。その理由はよくわからなかったけど。

まぁ運命的な、とでも言っておこう。声をかけてみたその結果は二つ返事だった。

・・・こうして初めての相棒と一緒の「ふたり旅」が実現したのである。（相部屋仲間というのはあつたけど）

　思い返してみると、今までのほとんどの旅がひとり旅だったので、一日の終わりに（もらったパンフレットや入場チケットなどをたどりに）日記を書いていたのだけど、二人だと寝る間際までお喋りで一日が終わってしまった。

「そお、そお・・・今，ハッと思い出した」ことがある。

旅の初めに、留サン（永留氏）からこんな提案があったのだった。

「大石くん、今度の旅行は行く日と期間以外はぼくは何にも知らないよ、知っているのは中国に行くということだけだよ。行く場所も知らなければ何にいくらかかるのか、金銭的なことも全く分からない。

だから、ぼくは何の文句も言わないし、特別今の時点では希望もないので、大石くんが一人で判断してくれたものおそらく漢字が密集したメニューなどさっぱり分からないと思うから同じものを食べようと思っている。

支払いについては、すべて(割る2―半分負担―でオネガイシマス！」そういうことだった。

そんなわけで夜になると、ぼくはとても忙しい時を過ごすことになったのだ。領収書の貰えるところはいいけれど、中国は食べ物屋（食堂）では領収書はでないことが多い。使ったお金はメモしなければ忘れてしまう。

ぼくの1日の終わりの仕事は「何があったと」いう記録ではなく「何に、いくら使ったか?」という主婦の金銭出納簿チェックと同じ仕事だった。

もっとも、留さんはというと、ぼくに言われた金額だけ中国元で払うわけだからぼくの説明（あそこでいくらかかった）など聴いてはいなかったのではないかな。

はじめの頃は「大石くん、日本円で払ったらいけない??」と言うので、

「留さん、それだけはやめてよね！千元くらいは、百元札で持っててくれよな」。

ぼくは中国に来ると日本のお札は両替用に1万円札だけ持っていて、「あとの日本円はバッグにしまっておくことにしてるよ。」そうそう、5円玉だけは中国では珍しいので賽銭箱用に何個かポケットに入れていたけど。

・・・・とそんな会話をしたことを思い出した。

１０年前はまだまだ円高で日本円は強かった。留さんは「安いんだね！」といつもおどろいていた。

こうして書いてても毎夜、ポケットからメモを出してはニ人で使ったお金を計算するぼくの姿を思い出す。

留さんは夜はよく携帯電話をいじっていた。まだスマホなど登場していない。

何をしているのか訊いたら

「携帯で映した写真をともだちに送っている」のだという。器用な彼はぼくが中国で一度もしなかったことをさっそく試していた。

「へぇ！送れるの?ちょっとぼくの携帯にも今、送ってみて?」

数秒後、ぼくの携帯がなり写真が届いていた。「これはいいね！」ニ人は廬山や三清山の美しい景色を夜になると日本の友人家族に送った。

この話にはたいへんな後日談がある。

それは帰国後2か月目ころに届いたドコモからの請求書で起こってしまった。いつもの月の支払額の何倍かの金額がそこには書いてあった。金額は思い出したくないのでここには書かないけど。

南昌市から始まる今度の旅の本当のおたのしみツアーには一人の中国人の案内が付いた。

最初のプロローグ(旅の　いきさつ)で書いた通り、若い中国人青年の同行があった。ある時はガイドでもあり、またある時は相棒の一人として三人旅の感じでもあった。

「胡　一超」が彼の姓名である。（写真下右端）

胡さんは景徳鎮陶磁大学で日本語専門の先生である。さらに実をいうと胡さんとは日中友好協会のホームページを通して陶磁器大学への日本語教師派遣のことでスカイプ電話などを通して面識?というか知人関係にあった。

…下の４人の写真は景徳鎮陶器大学を訪問した際に写したもの（右から胡さん、留さん、大学の役員）

これも先に書いたけど今回の江西省の旅の企画もコースや日程などは彼がほとん

どしてくれた。
彼の実費（宿泊代と飲食代）はぼくたち二人で折半して払ってあげた。
彼も遠慮してか交通費はそれぞれ払ったような気がする。
タクシー代は二人で折半だったと思う。
後になっての話しだけど胡さんは留さんとすっかり仲良くなって景徳鎮陶器大学（中国唯一の陶芸専門の大学で有名）での日本語教師に招聘したいと大学訪問時に大学の役員と面接させられ九分九厘来年度からの日本語教師が決まりかけてしまった。
しかし、あること（多分、住居証明?）で年齢制限があり1年の年の差で破綻になったのだったが。

ずっと後の話しになるのだけど、2年ほど経ってから胡さんから連絡が入った。
「今、日本で大学に研修に来ています。名古屋の大学ですが終了したら鹿児島に行きたいと思う。二人に会いたい。そして、ひとりで屋久島に何日か滞在したい。鹿児島にも何日か過ごしたい。」と。

そしてそのことは実現した。留さんの家に泊まり、県内を案内してバイクを貸して彼は貨物船で屋久島にひとり旅
に出かけた。中国の言葉に「相互学習」というのがあるけどまさに「相互旅行」が実現した。
さてしばらく話を時系列に戻して旅を続けたいと思う。

２００９年１１月１９日午後３時　湖南省・長沙市に着く。

留さんとふたりは１９日の朝の鹿児島空港発の、中国東方航空の上海便に乗りお昼頃に上海浦東空港に着いた。
そのまま浦東空港で乗り換えたのか、あるいは虹橋国際空港まで行って長沙行きに乗ったのか???
夕方に長沙黄花空港に着くまでのアクセスについては記録の写真がないのでよく思い出せない。
写真の最初は長沙市内の・・・ホテルの様なので、おそらく空港にはいつものように朋友の範例先生が迎えに来てくれていたのだと思う。
予定では、その夜は範先生主催の晩さん会があることになっている。
留さんと範先生の初見の食事会でもあり、何といってもぼくと先生夫妻プラス旧友との懐旧の宴でもある。
思い出すのは２００４年３月（１５年も昔になってしまったけど）の初めて範先生と出会いの夜のぼくの日本語学校教師赴任歓迎パーティで白酒に酔いつぶれてしまい記憶を失ったまま宿に担がれてしまったことを。
さて、１９日の足跡だけど写真をじっくりと眺めてみると福島美利子さんのような姿が写っている。（上段の左）
そして、留さんと一緒にも誰だろうと思っていたら紛れもない福島君のお母様の美里子さんだ。

鹿児島空港から一緒だったのだろう。ということは福島顕二郎くんはこの時まだ長沙富士橋日本語学校の派遣日本語教師だったことになる。よくよく見ると歓迎パーティのスナップに福島くんが左に半分写っていた。
下段の写真はその晩、留さんとふたりで長沙でいちばん賑やかな歩行街（ブシンジェ）つまり歩行者天国である。

ご存知かどうか、黄興さんは長沙の偉人つまり鹿児島の『西郷さん』みたいな存在だ。

今度の旅の終りにぼくたちは黄興の育った家『黄興故居』尋ねることにしている。

黄興さんは維新を成し遂げた西郷さんを尊敬していた。

１９０９年に友人である宮崎滔天と共に鹿児島を訪れ南洲墓地を参詣した。

「湖南は必ず中国の薩摩になるべし。我は中国の西郷南洲たらん」と力説した黄興は生涯南洲に傾倒した。

鹿児島市日中友好協会では２００７年（平成１９年）９月２３日に長沙市との友好都市盟約２５周年記念として南洲墓地手前の広場（南洲公園）に黄興の碑を建てた。

その碑には『黄興先生南洲墓地参詣の碑』と書かれた。黄興が当地を訪れ南洲追討の詩を賦してほぼ１００年後のことであった。

ぼくは留さんとこの夜「黄興路」をおとずれ路の入り口に立つ黄興の像を眺めていた。

ふと2年前に南洲公園に「黄興の碑」を建てるためひとり陣頭に立って頑張っておられた海江田順三郎市日中友好協会会長の顔が浮かんできた。（2段目右端が海江田順三郎氏、左は協会顧問の谷川洋造氏）

２０日は富士橋日本語学校での留さんの授業があり、ぼくも一緒に学生たちとたのしい1日を過ごした。写真をどうぞ見てください。

２１日は今回の旅の第一の目的である『長沙節』―ジャパンウイークー

こちらもまずは画像をじっくり見ていただきたい。

ぼくが予想していた通り当日のステージで最高の称賛の嵐を浴びたのは鹿児島から参加した『ヤングおはら』でした。写真の上（ワイド）は『長沙富士橋日本語学校』の皆さんとの記念写真。その下は永留先生の授業風景。

下の写真は『長沙節ジャパンウイーク』のスナップとその夜の大晩さん会のショット。

日本節とその夜行われた晩さん会のことは特別今思い出すことはない。と言って忘れているわけではない。

あの時のワンシーンワンシーンは断片的にだけどむしろ鮮明に思い出すことが出来る。

昨日のことのようにといえば大げさに聞こえるかもしれないけど。

下の写真を見ていると写真の前後がムービーに　なって浮かんでくる。

朝の風景にしてもその時の空気やにおいまでも感じてしまうから不思議な気持ちだ。

留さんの授業ももちろん目の前に映し出されるのだが残念ながら「どんな話をして学生たちがどんな反応をしたか」までは思い出せない。

朝の風景です。
富士橋日本語学校